
The prince is a wizard

成澤 詩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The prince is a wizard

【Nコード】

N5103N

【作者名】

成澤 詩

【あらすじ】

『商人と職人の国』と評される大国エルズバーグに、高名な魔導師に武者修行と名目で長い間行方知れなかった第五王子・ロジオンが帰ってきて二年、頑なに人との接触を拒むロジオン王子に従者として付き添うことになったアデラ。

二年の間、全く魔法を見せない王子を王宮魔法使い達が「ボンクラ王子」と馬鹿にされている少年王子はどうして魔法を見せないのか？ どうして人との接触を拒むのか？理由を知ったアデラは共に戦う決意を。亡き師匠との対決終了

第一章完結。第二章進行中。

恋愛薄めです。

1 忠誠（1）

私はお前
お前は私

重なる宿命は時を繋げる軌跡

輪廻の輪を繋げよう――

王宮の広い敷地内も秋深く、地を隠すように落ちた色とりどりの落ち葉をアデラが踏むと、カサカサと乾燥した音を立てその形を崩していく。

王宮の奥深い森林の中を進む。

鬱蒼と茂るこの森も秋のこの季節には、はらはらと乾いた葉が枝から落ち、地面を紅い絨毯に染めていた。

この辺まで来ると、感謝祭の準備で騒がしい宮廷の喧騒は聞こえては来ない。

（今日こそ引つ張り出して、王宮に連れて行かないと）

彼女は気難しい表情を崩さず、キビキビした歩調で先を進んでい

た。

眉に皺を寄せ大股で歩く姿は猛々しく、年頃の乙女とはかけ離れた風情ではあるが、顔立ちは大変美しく、日差しを受けて輝く金髪とエメラルド色の大きな瞳は、見る者の視線を釘付けにする。

ただ残念なことに、この国で美女の三大要素の一つである乳白色の肌ではなく、祖母から譲り受けた小麦色の肌が、彼女の美しさを半減している、と憎まれ口を叩く者もいたが、当の本人は別段気にしている様子も無い。

宮廷仕官として働くアデラが向かう先は自分が従者として仕える事になった、第五王子ロジオンの住む離れ屋である。

つい最近、と、言っても一ヶ月前に任命されたのだが、初対面時に「付き人なんかいらない」

と、突き放され門前払いをくらった。

話し合いの余地もくれない頑なその態度に途方にくれ、王とロジオン王子の実母である第二王妃に相談をした所

「またか」

と溜息を付き、この、王子の育った特殊な環境を話して下さった。

*

もともと、王は子沢山で二人の王妃との間に王子六人、王女八人と合わせて十四人の子がいる。

それだけあれば跡目争いで宮内はいつも、暗殺と策略が暗躍しているだろうと思えばそうでもなく——この国は異民族が多く流れ住んでいて、文化、風習を運んで来る為か職業も多種多様。

そのせいか、跡継ぎの長男と補佐役を買って出た三男が政務に関わる以外、皆、好きに手に職を付けおのおの取り組んでいた。

加えて王の温厚でこだわらない性格が、しっかりと子供達に受け継がれているようで、自分がのし上ろうとは考えていないようだ。

第五王子のロジオンはそんな自由に生きている（？）兄弟達の中では異色な存在だ。

産まれて、祝いの為に出席していた高名な魔導師から

——この王子は申し子と言っても良いほど魔力が高い——

『いずれ、この私を超える魔導師になれる』
と言う魔導師に

『自分の意見が言える歳になるまで、職業の選択を狭める事はしない』

困ったように眉を下げ断る王と王妃。

是非、自分に預けて欲しいと懇願され、預ける、預けない、と暫く攻防戦が続いたが、とうとう根負けして、生後一年に満たない王子を魔導師に預ける事にした。

……それがいけなかった、と、第二王妃は深く長い溜息を付く。
その後、武者修行という名目で強引に連れて行かれ以後、十三年間音沙汰が掴めなくなってしまったのだ。

——しかし、それが二年前にひょっこり魔導師が連れて帰って来
のだ。

我等の子だという証を見、大喜びで再会を果たし魔法使いとして
成長した王子は、魔導師と共に離れ屋に住んだのだ。

だが昨年、魔導師が亡くなり、一人だと不便だし何かと淋しかろ
うと、給仕やボディガードを送ったりまた、宮殿に住むように勧め
ているのだが、「いらない」「行かない」の一点張り。

王や王妃が直談判をしても頭を縦に振らなかった。

そして今も懲りずに従者を送ったりしているのだが……。

「全て門前払いな訳なのですな？」

アデラの問いに両親である王と王妃は、深く溜息を付いた。

「姉のような方を付き人にすれば、もしかしたら態度が軟化するのではと……」

白羽の矢が立ったのが、後輩の面倒見が良いアデラだったのだ。

*

ここまで期待されては少々の事で辞退するわけには行かない。元々責任感が強く、世話好きの彼女——使命に燃えた。

（何よりあの王子……今日こそ何とかせねば！！）

アデラは眉間に寄せた皺を更に深く顔に刻みながら、つらつら考えているうちに、開けた原っぱに出た。

そのの、ほぼ中央にレンガで建てられた平屋があり、その平凡な平屋にピッタリと付けられている、温室のガラスが、日の光をうけサンサンと輝いていた。

そこがロジオン王子が住む離れだ。

元は以前仕えていた庭師家族の家だったが、離職し家族が出て行ってから十数年間空家になって廃れていたのを改築したという。

アデラは1つ咳払いをして、今一度きりつと表情を引き締め、徐々に扉を叩く。

程なくして、ゆっくりと扉が開いた。

出てきたのは、自分より拳1つ程背が低い少年。

アデラは一瞬、少年からの悪臭に眩暈がしたがどうにか耐え、その少年と向き合う。

——銀の髪だと言うそれはボサボサで艶を失い、垢まみれで本来の色を失っているし、着ているシャツも同様で、しかも所々に薬品だと思われる赤や緑の液が染みている。

ズボンも以下同文……。

「また君か……」

伸びきって顔の半分上を隠す前髪の間から、ブルーグレーの色素の薄い瞳を彼女に向け、少年は感情の籠もっていない声でアデラに話しかけた。

「……今日こそは、一緒に王宮まで来ていただきます、ロジオン王子」

ロジオン王子と呼ばれた少年は、ゆっくりとした口調で話し出す。
「行かなきゃならない理由が分からない。前……君が言っていた感謝祭の件は、此方に帰って来てからは……毎年出席してるじゃない」

「花火職人としてではなく、王子として出席して頂きたいと、陛下と御生母の第二王妃様、お二人のご希望でございます」

「……あれは趣味の一つであって……亡くなった師……共々、毎年楽しみに制作していたものだし……それに、大量の火薬を使うからね……取り扱いには僕にしかできない」

そう言い、扉を遮る様に立つ王子の、中に入らせない意思がひしひし感じた。

いや、これでも、初っ端よりかは大分ましな対応になったのだが……。

「今夜は、アラベラ王女様とイレイン王女様が、感謝祭の折に配る菓子の試食をして頂きたいと……。それを聞いたエアロン様が、一緒に自分が創作された料理を披露したいと申されて。——それならばと、身内だけで晩餐会を開くことと相成りました。ロジオン様にも兄弟のよしみでは非、出席してもらいたいとのご伝言でございます」

「……」

ロジオン王子は腕を組み、暫く扉の縁に寄りかかり黙りこんでいたが

「行かない」

と、はつきり首を横に振った。

「何故、それ程頑なに御父母様や御兄弟様の好意を拒否なさるのです？ 長い間離れ離れで、突然に親子、兄弟の中に入るのは大変だとは思いますが、皆、だからこそ氣にかけておいでなのです。特に王妃様は貴方様の態度に心を痛めておいでです。——どうか、ロジオ……」

「——だからだ」

「？」

「だから行かない、君も余計なお節介を焼くな——迷惑だ」

怒気も哀感も無い感情のこもっていない王子の言い方に、ご家族の動向に本当に関心が無いのだと感じたアデラは、とうとう自分の立場を忘れ怒りをぶつけた。

「だから行かないとはどう言うことですか？ はつきり言ってもらいましょう、お節介焼きな私に！——私に言いたくなければ、ご両親様の前で納得の行く説明をして頂きます……！！」

いつものように黙って扉を閉めようとする王子の左手を掴むと「失礼」と彼の脇腹にアデラの拳が入った。

かはつと吐くような呻き声を出すと、王子は脇腹を押さえてうずくまった。

「……ただの仕官が……こんな事を……して……」

搾り出すように声を出し、薄い色素の瞳をたぎらせ、怒りを露にする王子にアデラは

「今日こそはお連れすると誓ったのです——多少乱暴な手を使つて良いと、殿下からの許可も得ております」

そう言いながら、只今ただの『一般仕官』のアデラは隠し持っていた紐で王子の手足を手際よくがんじがらめに縛り、昨夜のうちに隠し用意しといった荷車に彼を担ぎ込むと、王宮に向けて引き始めた。

「……酷いなあ、荷物扱い？」

痛みが治まったようで荷台の上で横たわったまま、いつもの、のろろとした口調で王子はアデラに話しかけた。

アデラは王子を一瞥し、再び荷車を引きながら、今までの鬱憤を晴らすかのように応えた。

「大変無礼な事をしているついでに、更に無礼な事を申し上げます——ロジオン王子、最後に身体を清めたのはいつです？」

「……いつかな……？」

本人も覚えていない程以前らしい。

「……臭いんです……凄く、どうしようもなく、気を緩めると気絶しそうになる程に」

「そんなに臭いかなあ……」

「私も兵士なので、何度か野営の訓練で身体を清められない事を経験してますが、王子のは汗、体臭、埃と、それ以外の匂いが混ざっておりまして、更に強度を上げております。王宮まで私が担いで行くと、途中で悶死しそうなので対抗策を取らせてもらいました」

「はははっ！——ああ、多分薬品だね」

彼女の言い方が余程可笑しかったらしい。

からからと笑いだした王子の声を初めて聞いて、驚いたアデラは後ろを振り向くと、詰まるように息を呑んだ。

縛られてそこに居たはずの魔法使いの王子は忽然と消え、解かれた縄が荷車の上にあるだけで当の本人は、アデラに背を向け、自分の我が家に向けて走っていた。

瞬時に我に振り返り荷車を蹴り上げ、飛ぶようにアデラは走った。あつと言つ間に差が縮む。

「逃がすか——」

地を思いつき蹴り上げると、獲物を追い詰めた獣のように王子の背中に飛びつき倒した。

これに驚いたのはロジオンの方だった。

二人勢い余って何回転かした後に、アデラが上から押さえる形でようやく止まった。

「——驚いたなあ……。何て跳躍力だ」

ロジオンが感心したように呟いた。

「残念でしたな、私はこの跳躍と足の速さで仕官達の間では『女豹』と呼ばれているのです」

「大した物だ……。遺伝っぽいな……」

「遺……伝……？」

何ですか、それ？ と尋ねようとしたが、王子に飛びつき密着している間に、かなりの悪臭を吸い込んでしまったアデラは、眩暈と吐き気が凄い勢いで襲ってきて、そのまま、臭い彼の上で倒れ込んでしまい、意識を失った……。

2 忠誠（2）

目を開けると、いつもの自室の木目の天井が見えた。
ゆっくりと身体を起こし、辺りを見渡す。

（私……どうして此处に？）

確かロジオン王子を王宮に連れて行くために、荷台に乗せて、逃げられて、捕まえたけど、臭くて……気を失った……んだ。

アデラは着衣の乱れを正し、自分のベットから下りて自室を出た。
出てきた所で丁度、同僚のベルと会った。

「——アデラ！ もう良いの？」

心配そうに尋ねる同僚に「大丈夫」と、しつかりとした口調で返事を返す。

「吃驚したわよ！ 小汚い男が貴女をおぶさつて来て不審者かとり押さえたら、例の変わり者の王子なんだもの！」

「ロジオン様が！ ——では今、王宮に？」

「ええ。取り押さえられたついでに、そのまま風呂に連れて行かれて……大変だったみたいよ。何度もお湯を取り替えて、石鹸も何個も使っても匂いが取れないって、女中達が嘆いていたって」

「……」

アデラはあの悪臭を思い出し、こめかみを押さえた。

「そろそろ晩餐会が終わる頃じゃないかしら？」

「——もう、そんな時間なの！？」

ベルに礼を述べると、駆け足で宮廷へ向かったアデラにベルは「大変そうだけど頑張ってね」と励ましの言葉を投げた。

ロジオン王子が否定しても、自分は王と第二王妃に彼の従者に任

命されている。

とにかく、従者として晩餐会の場に行って控えていないと……。そう思いながら晩餐会の会場へ急いだ。

*

松明のみの暗い廊下を急ぎ気味で歩く。

昼間の日差しを受けて鮮やかな装飾を見せている廊下も、今は薄暗く、心なしか肌寒い。

夜の宮廷は何かこの世のものでは無いのが存在しそうで、1人で歩くのは苦手なアデラだが、今はそんな事を考えてビビッている場合では無い。

ようやく晩餐会の会場に着いた時、既にロジオンの他の兄弟達の従者等が廊下に控えていた。

丁度、終わる頃なのか——間に合った。

安堵し息を整えながら、アデラは一番端に他の従者達と同じく直立不動で待った。

「違っわよ、貴女」

「——えっ？」

隣の従者に声を掛けられ、何の事だか分からず首を傾げた。

「上から順に並んでいるのよ。貴女、新しい従者ね？ どのお方の方？」

「第五王子です」

それを口にした途端、他の従者達が一斉にアデラに振り返ってまじまじと彼女を見詰めた。

——値踏みされてるみたい——

アデラは従者達の好奇の視線と表情にムッとしたが、なるべく平静を装う。

「だったら、あそこよ」

一番最初に声を掛けてきた従者が、指を指すと真ん中にいた青年従者が「ここだよ」と手を上げた。

「そろそろ終わるからね、急いで」

「頑張れよ」

ような励ましに見送られ、意外に好感有る態度にアデラは顔を紅く染めながら、空けてくれた空間にすりりとする。

不必要に大きい扉がゆっくりと開くと並んでいる従者達が一斉に頭を垂れた。

中から、一番最初に王、次に第一王妃、第二王妃と順番に出てきた。

「アデラ」

不意に、第二王妃に声をかけられ、顔を上げた。

第二王妃は今までアデラが見たことの無いような、微笑みをかけ、「ありがとう」

と、一言延べ、従者と共に会場を後にした。

談笑をしながら、王子や王女達も自分の付き人や従者と共に自室に戻っていく。その様子をアデラは晴れやかな表情で見送った。

王妃からのねぎらいの言葉が、何よりの褒美だ――。

そう思い、あの、前髪がやたら長いロジオン王子が出てくるのを待つ。

（そう言えば、強制的に風呂に入れられて綺麗になったのだろうか？）

あの、ボサボサ髪を整髪したのだろうか？

（考えてみたら……私、ロジオン王子の顔、知らない……）

王と第二王妃のどちらに似ているのだろうか？

知ってるのは、王妃譲りの髪の色に瞳の色――それだけだ……。

アデラは思いついた。

——質の良い衣装を着た、見た事の無い顔の少年がロジオン王子だ、と。

彼の従者でありながら、腹に鉄拳を入れ、縛り上げた拳句、気を失って王子の身体の上に倒れたのだ。

もう、今更お叱りの事柄が増えても痛くも痒くも無かった。

彼女は、妙なところで肝が太い乙女であった。

「ロジオン兄様、今夜は旅のお話が聞けて楽しかったわ！ また、お話してくださいね！」

幼い子供特有の高い声が部屋から聞こえ、会場から軽やかな足取りで八番目のイレイン王女が出てきた。

ロジオン王子と同腹なせいか、銀の髪に色白な肌と、特徴が出ている。

余所行き用に作られたドレスを、両手でたくし上げ、跳ねるように自分の前を通り過ぎる王女の可愛らしさを微笑ましく見届け、自分の主が出てくるのを待った。

もう、出てこないのはロジオン王子一人だ。

（もう、見間違えないな）

人違いをするかも、と覚悟していたが、要らぬ心配になってホッとする。

最後にのろろと、疲れた様子で出てきた一人の少年がいた。

「——？ ロジオン王子……？」

その姿を見て、アデラはぽかんと口を開けた。

銀髪の髪はその本来の色と艶を取り戻し、薄暗い廊下をほんのりと輝かせて神秘的な輝きを放っている。

前髪は、邪魔にならない位に切り揃えられ、ブルーグレーの瞳が

真っ直ぐにアデラを捉えていた。

少年と青年の狭間を行き来しているその顔立ちは危うさを秘めているようで、何処となく妖艶さが見え隠れする端正さだ。

服も、いつものチュニツク型の作業服ではなく、王族らしく仕立ての良い物を着込んでいる。

ただ苦手なのか、フリルや刺繍は最小限の物を選んでおり、特にシャツは首元に巻くスカーフのみだ。だが、返ってそれが彼の持つ美しさを引き立てているように見えた。

——いや、それより驚いたのは……。

「……もう、良いの？」

「——はい……？」

「身体……、いきなり倒れたのは驚いた。——そんなに臭うとは思っていなかった……ごめん……」

ほんのり顔を赤らめて身体を真っ直ぐに向け、ロジオンが節目がちにアデラに謝ってきたのだ。

「——いつ、いえ、そんな……」

意外な態度にアデラも顔を赤らめ慌てる。

今まで感情のこもっていない話し方の王子が、本当に申し訳なさに、しかも、気恥ずかしそうに自分に話しかけるだけで、胸が痺れるように疼いた。

——可愛い——

王族兄弟の中で特に変わり者と囁かれても、恐れ多くも王子の立場のこの少年にそんな気持ちになって、しかも——

思わず抱きしめたくなった……なんて……。

気を引き締める為に、アデラは1つ咳払いをし、気持ちを落ち着かせる。

「……人との交流を絶つから、鈍感になるのです。——今度からは、毎日きちんと身体を御流しになって下さい」

母親のような付き人に、ふーと溜息を付いたロジオンは「なるべく気を付ける」とだけ言つて、宮廷の外に向かって歩いて行くのを、アデラは慌てて追いかけた。

「——何処へ？」

「離れに戻る」

「もう今夜は宮廷に御泊まり下さい。お部屋もご用意してあるはずです」

「——駄目だ。」

短いが、はつきりと意見を受け付けられない鋭い言葉に、アデラは一瞬、言葉を飲み込んだが、

「……では、馬か馬車を用意させます」

と渋々、承諾する。

「……馬が良い」

王子はいつもの平坦な口調に戻り、アデラに告げた。

3 忠誠（3）

「何故、君まで来るの？」

同じく馬に跨り、斜め後ろにぴたりと付いてくるアデラを燦しかなげに見るロジオンに

「貴方の従者ですから」

とアデラは飄々と答えた。

「……来ると困る」

「何に困るのです？ ——！！ もしや、女性との…逢引き……で？」

「そんな、婀娜めいたものじゃない——その方が、僕にとって随分楽だけだね」

即、答え、くるとアデラに顔を向けると

「……怖い思いする事になるかも知れないよ……」

と、声を潜めて言った。

が、その声の含みに楽しげな感じがあるのを、アデラは聞き逃さなかった。

「おからかいはお止めください。——とにかく、離れまでお送り致します」

そのまま黙ってしまった主に、付かず離れずアデラは付いて行った。

昼間の、うららかな天気から、想像しなかった強風が馬の鬣を大きく揺らす。

いつもは後ろに結ってあるアデラの金髪も、倒れた際にほつれたままで、鬱陶しく顔にかかった。

（髪止め……持ってくれば良かった）

今度は常備しとかないと と考えていると、いきなり、ロジオンが険しい顔で此方を振り返った。

「馬から下りて」

言うや、ロジオンはさつさと下馬をした。

「???」

「——早く下りるんだ」

戸惑うアデラに、ロジオンは脅すように低い声をかけた。

何が何だか分からないままに下馬をすると、いきなり肩を？まれ、2人地面に伏せた形になる。

「……今から、僕が良いと言うまで声を出さないように……」

緊迫した声に、これから何か、危険が迫っているのを理解したアデラは首を縦に振った。

ロジオンは、何か含むように呪文らしきものを唱え始めた。

——すると、放置された馬の上に人がボンヤリと見え始める。

「——!!」

自分と王子の姿が、馬にまたがり、何事も無かった様に離れ屋に向かっている……。

目の前の出来事に、ただ啞然とするアデラに、更に追い討ちをかけるように飛んできたもの——黒い影。

その黒い影は、標的を確認すると馬の周りをぐるぐると取り囲む。馬の嘶きがし、まるで気が触れたかのように馬が暴れだし始めた。その黒い影は、馬ごと包みこむように捕らえると信じられない速さで遙か向こうへ飛び去ってしまった……。

*

「——もう、良いよ」

ロジオンは、取り合えず危機は去ったと言う安堵の声で、アデラに話しかける。

「……。」

アデラは、言葉も出せずカタカタと身体を震わせたまま、固まっていた。

（あれは……あの方は……！）

「——君？」

ロジオンは、緊張と恐怖で固くなっているアデラの肩や腕や背中を柔らかに擦すった。

人の温もりで徐々に体温が上がり、緊張が解けていくのを感じる。

「……ロジオン王子……あの黒い影は……！」

動けるようになった身体を、弾けるようにロジオンの胸に預け、顔を覗くように視線を移し叫ぶ。

「あの黒い影にあった顔は……！」

「……見えたの？ ……夜目も利くようだね……」

やっぱり遺伝かねと呟き、のろのろと起き上がると、アデルの手を引いて立たせてやる。

「何故……？ 貴方の師であるコンラート魔導師が、あんな姿に？！ ——いえ……！ 確か、コンラート様は亡くなられた筈……！」

「だから、怖い思いする事になるかも……と、言ったのに……」
憂鬱そうに彼女を見ると、溜息を付いてアデラに言った。

「一緒においで……。話してあげるよ……」

*

一月通って、ようやくアデラは今夜、初めて離れ屋の中に通された。

あの、小汚い格好だった王子の住む部屋の中は、思いのほか片付

けられていた。

様々な実験器具がキッチンと生理整頓されていて、塵も埃も無い。

（なのに何故、格好は汚い……）

心の中でばやいた。

暫くして、ロジオンはチュニクとズボンと言うラフな格好で、お茶の用意を持ってきた。

後は私がやります、と言うのを制して、王子は良い香りのする茶をカップに注ぎアデラに渡す。

ロジオンは長椅子に座り、自分で入れた茶を飲みながら足を気だるそうに伸ばすと、彼女に「何処か、適当に座って」と促す。

アデラは側に置いてあった、作業用の丸椅子に腰掛けた。

口に含んだ緑の色の茶は、清々しい味がした。

「えーと……まず、あの黒い影の正体だね？——君の見たと

おりだよ、僕の師匠のコンラート」

「……。」

「昨年、不治の病に伏して倒れ、そのまま地に還られた——それも事実。」

問題が起こったのは、師匠が死する直前にだ……。師匠は自分の病を治そうと、新薬の開発に取り組んでいた——だが、間に合わなかった……。その事が確証になった時……止めるのも聞かずに、病に臥している人間だとは思えない力で僕を押し倒し、師匠は作業台の上に置かれていた開発途中の薬を、全て飲んでしまった……。あの時、師匠はすでに死の恐怖で頭がいかれていたのだと思う。毒薬も治療薬も、分析途中の液体も有る物全てを狂ったように飲み干した。……即効性の毒薬があったからね。瞬時に事切れたよ……」

それだけ一気に話すと黙り込み、カンカン……と暫くカップを叩

いていた。

アデラにはそれが適当な表現が見付からず、頭の中で整理しているように見受けられた。

カップを叩く音が止んで、主はようやく再び口を開いた。

「暴走による急死だったから、その場には僕しかいなかった……それが返って良かったんだろう……被害者が出なかったから」

「人以外、何か被害が……？」

王子は淡々と話を続けた。

「コンラート師の身体から、あの『黒い影』が出てきて僕に襲い掛かってきた……。——とっさに光聖魔法で……。君、『光聖魔法』って、分かる？」

問われ、アデラは頷きながら答えた。

「仕官の必修講義にありました……触りの部分で、入門のほんのかじり程度ですが。大まかに分類して、『攻撃』『支援』『防御』『封印』がありますが、『光聖』は分類すると魔法の中に入るか微妙な位置で、どちらかというところと悪魔や悪霊払いを職とする僧侶が行う事が多いと。しかしながら、戦いの場で、死霊使いや魔物召喚を行う者もいるので、魔法を使う者は大抵会得している……と。」

「うん……。そう……。それで、その光聖魔法で弾いたけど、暴れて部屋の中どころか離れ屋の周囲は滅茶苦茶になってね」

——そう言えば、コンラート師の死後、この離れ屋に修理屋と家具屋と庭師が入ったと聞いた——

だから、この離れ屋の周囲は木々が根ごと綺麗に伐採されて開けているだとアデラは納得した。

長い沈黙の後、アデラはそろそろと、でも、思い切ったように口ジョーンに尋ねた。

「コンラート師は……悪霊となったということですか……？」

「……死霊や死人を退散させる光聖魔法が効いてるようだから、そうとも言えなくはない……が、師匠は構わず飲んだ薬のせいで、

何か別の生き物になった気がする……身体から抜けて自由になった魂で、道徳も良心も理想も無く、ただ、死ぬ前の欲望を叶えるが為に、僕を襲う者に……」

「何故、貴方を襲うのです！？ ロジオン王子はコンラート様の弟子で、とても可愛がられていたと聞いております！」

「だからだろう……」

そう言つて、飲み干して、空になったカップを床に置く王子は酷く疲れているようでそのまま手を床にだらんと垂らし、うつらうつらし始めた。

「だからこそ、自分の全てを吸い取るように成長した、僕のまだ若い身体と力が羨ましい……僕の身体を乗っ取ればまだ生きていける……師匠のように人生を悟った方も、死が怖いということだろう……」

まるで、唸されているかのように、喋り続ける彼の床についた手を持ち、アデラは言う。

「ロジオン王子……お眠りになるのなら寝室へ……」

「君……名前は？」

知らなかったのか、と、啞然としながら「アデラ」と答える。

「……アデラ……気をつけて……僕の側に居たせいで……師匠の襲う対象になった……。だから……言つたのに、付き人はいらぬいと……宮廷には住まないと……放っておけば変わり者の王子と……それで……誰も……」

深い眠りに付いたのだろう、規則正しい寝息が聞こえてきた。

この方は――

そつと、手の甲に口付けをする。

王と王妃や、兄弟に接しなかったのも、相談しなかったのも、余計な心配をかけたくないのと、下手に側に居れば襲われる――恐怖に落とし入れたく無いが故……。

（お優しい方なのだ）

そして、今までずっと1人で戦ってきた強い御方。

何故、今夜、私を今までのように強く追い返さなかったのかは、目覚めてから聞くとしよう。

襲われる対象になろうとなかろうと、私の心は決まっている。

「お側に居ります、ロジオン王子。忠誠を……誓います……」

改めて、片膝を付き、ロジオンの手の甲に再び口付けをした。

4 予見

「どうして、まだ君が此処にいるの？」

朝、起きて開口一番に魔法使いの王子がアデラにはなつた言葉――
|。

「昨夜、あんな事が起きた後で、とても貴方様を残して帰る訳には行かないでしょう？」

勝手に使わせてもらいましたと、アデラは台所から茶とチーズ、カチカチのパン、そして、おそらく昨夜の晩餐会で出た焼き菓子が出所置いてあったので、それを、まだ寝起きでボンヤリしているロジオンの前に出した。

「食材が無さ過ぎです。まだ育ち盛りなのですから、きちんと栄養のある物を召し上がって下さい」

口煩い女仕官に、渋い顔をしながらも黙々と茶を飲むロジオン。

「……師はね一度襲えば気付くまで暫くは襲ってこないよ……不定間隔だけど。――その辺の能力は何も知らない赤ん坊並みに落ちてるようだ」

それよりアデラ、とカチカチのパンを茶に浸しながら座って一緒に食事を取るように勧める。

主の言葉に甘え、自分の分の茶を入れ王女が作ったという焼き菓子をかじる。

「アデラは従者になったのは、僕が初めて？」

ゆつくりとした、感情の籠らない口調でアデラに話しかける。

どうやら、今まで意図的にこんな口調で彼女に話しかけていた訳ではなく元々、こう言う喋り方らしい。

「はい」

「君の周りで、従者になった人は？」

「おりません」

「……だからか……でも……な、仕官の間で話題には上がるだろうしなあ？」

ぶつぶつと、平坦な口調で独り言のように呟くその王子の表情には、困惑の色が見られた。

「……何か……私、まずい事を仕出しましたか……？」

キョトンとした表情をして、こちらの様子を窺っているアデラが可笑しかったのか、ロジオンは目を細めクスクス笑い出した。

そして

「主人を部屋まで送り届けて、そのまま帰って来なかった——それで、戻ってきたのは次の日の朝か昼か……。周囲は送るついで、夜伽の相手もしてきたのだらうと、口さがなく言うだらうよ」

と、分かりましたか？ と、首をちょこんと傾げる仕草を取り、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「……」

アデラの口に菓子を運ぶ手が止まった。

呆然とこちらを見るアデラを見つめ返すロジオン。

「……」

「……」

思い切り長い沈黙の後、ようやく今の状況を理解したのか、みるみる小麦色の肌が夕日のように赤くなった。

「ひゃあああああああああ！！」

ガタンと激しい音がし、椅子から立ち上がって頭を両の手で押さえ、叫ぶアデラはかなり動揺しているようで、菓子を手に持っている事さえ忘れていたようだ。

「そつ、そつ、そつ、そんなー！ 私、何も——どっどっどっとして！ よよよよよとぎ……なんてー！」

「従者が異性だとね、よくあるんだよ？ 一晩一緒に居て何もなかったなんて……周りは誰も思わないね」

王子の言葉にアデラは力が抜けたようで、へなへなと、しゃがみ込んでしまった。

顔から湯気が出ているのでは？と、思うほど顔はますます燃え上がり、目が潤んでいる所を見ると、半泣き状態のようだ。

「……」

頬の赤味を冷ます様に手の平をあて、しゃがみ込んでいるアデラの前に、のろのろとやって来て同じくしゃがみ込むロジオンに

「……申し……訳……ありません」

と蚊の鳴くような声で、アデラはロジオンに謝まった。

「ん？」

「私の浅はかな行動で……王子の評判を更に落として…………しまいました……！」

「……更にね……」

ロジオンは、自分の評価がどれ程のものだったのか？ 聞きたい気がしたが、自分を追い込む気がしたのであえて聞くのは止めにした。

じーっと、顔を伏せて嘆いているアデルを黙って見つめる。

可愛いな と思う

初めて自分を訪ねて来た時、綺麗な人だとは思ったけど、男性的なイメージの方が強くてそれ以上の感情は湧かなかった。

彼女と親密になった昨日（殴られた上に、臭いと怒られ、仕舞いには気絶して、仕方ないからおんぶして王宮まで送って、化物になった師匠に目を付けられて）

それで、ほんの少し彼女の手柄を知って

——もつと話してみたい——

と思ったのだ。

こうして伽の事で顔を赤らめ、半泣き状態で何も知らない純朴な様子を見ると、とても自分より年上には見えない。

（まあ、僕が耳年増なだけだけど）

自分も年頃の男だし、異性の身体に興味が無いわけじゃなかったけど、いつも師匠か魔法の勉強優先の生活だった。

恥ずかしさで顔を覆っている手の甲が、彼女の真っ直ぐ流れる金髪から透けるように見え隠れしてまるで宝箱の宝石を、勿体なさげに自分に見せているようで。

……衝動的に抱きしめたくなる……。

ロジオンは、ゆっくり彼女の右手を掴む。

まだ菓子を指に摘んでいて、既に彼女の一部のように引っ付いていた。

余りの動揺に、指が硬直して離れないようだ。

それをぱくりとアデラの指ごと口に含んだ。

「——!」

今度はロジオンの行動に呆気にとられまた更に熱が上がり、アデラはボンヤリしてきてるようだ。

そんなアデラに

「あのね、貴族や王族なんて……そんなこと通常的でね……だから、僕のことは気にする事はない。ただ、君に恋人がいると、喧嘩の元になる……」

と、困ったような顔をアデラに向け、平気？と尋ねる。

「——いえ、私には、そんな男性はまだ……」

アデラは慌てて首を振る。

「……いないの？ 意外だなあ……」

どうして？ ロジオンは不思議そうに尋ね、アデラの顔を覗く。

「——どうしてつと言われましても……言葉に詰まります」

火照った顔を懸命に冷ますアデラは必要以上に顔を近づけ見つめる主の、端整で涼やかな顔立ちに動悸を抑えつつ答えた。

記憶が甦る——

仕官仲間に「お前、隙が無いよな」とぼやかれ、間髪入れずに

『女は少々ボンヤリしてた方が良さ』

など、しみじみ言い出した馬鹿たれがいた。

（兵士の私がぼやつとしてたら、死ぬだろうが）

何ぼざいているんだと心の中で叱咤した事を思い出した。

ようするに異性にとっては付け入る隙が無く、可愛げの無い女なのだろう——

つらつら思い出しているうちに、ロジオンはのろのろと起き上がり、テーブルに背に手を付く。

「——だったら良いか……。そう言う噂が立った方が、動きやすい」
さらにと他人事の用に言う。

「昨夜のことで、君は師のなれの果てに狙われる一人になったのはまず間違いが無いからね……。『夜伽』と称して、夜は此方に来て貰った方が良い。」

「——しつ、しかし！……第一、何故貴方様が私が標的にされたのだと見解を出したのか分かりません……」

『よとぎ』の三文字に、どうしても抵抗を感じるのか、こねるように意見を言うアデラ。

「君の幻影ごと、連れ去ったのを見たでしょ？……そう言うこと

を避ける為にも人の接触は、特に夜は必要以上しなかったんだけど……やはり僕の側に居るものは、全て奪い取るつもりだなあってしみじみ思ったよ。」

「……せめて陛下には真実を話された方が……」

王子は「駄目」と厳しい口調で告げる。

「あの人のことだ、やはりあの時に頑として預ける事を拒否してればと……悩むだろう？」

確かにあの、人の良い好々爺の王は悩み、後悔の涙を流すだろう。……それに、どんな経緯でも僕は師から魔法を習った事は感謝してる……出来るだけ、安らかな道を逝けるようにしてやりたい……」
ゆっくりと自分の言葉を噛み締めるように話しながら、ロジオンは真っ直ぐとアデラの緑の瞳を見つめる。

（この方は、この意思是決して曲げないだろう）

萎えていたら、この一年の間にとくに父である殿下に相談しているだろうし、味方を得ていただろう。

アデラは一つ大きな深呼吸をし、同じように真っ直ぐにロジオンのブルーグレーの瞳を見つめ返す。

「分かりました。私も覚悟を決めます……ただ……」

「ただ？」

「一つ……お尋ねしたいことが……」

アデラは悩ましげな表情をロジオンに見せた。

「……何？」

「昨夜、お送りしますと私も強引に付いて参りましたが、今までの貴方様なら私をもっと強く追い返されてました。でも、昨夜は直ぐに受け入れましたよね？——それは何故なのです？」

投げ出された疑問にロジオンは「ああ」と顎をさすり

「あの時、もの凄く疲れていてね……もう君とやり合う気力が無かったんだ。」

何のことは無いと飄々と応えた。

「……そうですか。」

自分が期待した答えでは無く、アデラはがっかりした。

あの化け物になったコンラート師を打破すべく、従者としてパートナーとして自分が最適だと判断されたのかと思ったのだが……。

——違う、そんな事は建前で本当はもっと、婀娜めいた応えを期待していたのだと……そちらの方が本心だと、ロジオンの答えを聞いて縮んだ心が証明していた。

（まだ少年の王子に、何を期待してるんだ！ 私は——！！）

恥ずかしさに気付き顔を赤らめ、アデラはふるい払うかのように首を振った。

汚い時と小奇麗な今と差がありすぎたことに衝撃を受け、心が揺さぶられただけかも知れない。

ゆつくりとした平坦で感情の籠もらない話し方の王子が、本当に申し訳なさそうに自分に謝ったことに、胸が疼いただけでも知らない——知らないだけで、この方を異性として見ているかどうか、自分でも全く分かりかねない……。

そんなアデラの心の動揺を悟るかのようにロジオンは、にやりと意地の悪い笑みを浮かべた。

「それとも噂で、陰口叩かれるの癪なら事実にする？ ——夜伽の件」

「——なっ！ 何をおっしゃいます！！」

せつかく冷めたアデラの顔が、また再沸騰した。

「何か、がっかりしてるようだったから」

「がっかりなんかしてません！！」

立ち上がりむきになって否定するアデラが可笑しくて、ロジオンは腹を抱え込み肩を震わせ笑いだした。

「面白いよねっ、君！ 思っていること素直に顔に出て。」

「うう……普段はもっと冷静に対処しております。」

「ああ？ ……本当に？ へえ……？」

自分を小馬鹿にしている態度の年下の主に、ますます顔を赤らめる。

——ほんつとに調子が狂う——

構わず笑い続ける主人を、アデラはどつくことができない恨みがまさで睨みつけた。

ヒィヒィと、目頭に溜まった涙を指で拭いながらロジオンは、自分の年上の従者に

「よろしく、アデラ。」

と、話しかけ、羞恥で赤く染まっている小麦色の頬に口付けをし、更に

「夜伽の件はいつでも受けるから……遠慮なく」

彼女の耳元で、余計な一言を付け加えた。

もちろんアデラは「結構です！」と怒りと羞恥で全身真っ赤にし答えた。

——昨夜は、もちろん疲れていたけど……。

彼女を追い返そうと思えばできたことだった。それをあえてしないで巻き込んだのは悪かったな……と、思う。

自分のは微々たる能力だが、この女仕官が今の状況を打破する何かを持っていると予見したのだ。

（まあ、僕の予見はあてにならないことが多いが）

正直な気持ち、この年上の従者をもう少し側に置いといて、人としてのなりを見たいと思った。

……独占欲に駆られたのだ。

自分以外の生命を守らなくてはならなくなったのに、大変だと落ち込むどころか気持ち弾むように軽くなったような感覚。

恋愛事に縁の無い人生を送ってきた、この魔法使いであり王子でもあるロジオン。

これが恋をする、と言う事なのか？ と、今までに味わったことの無い自分の感情にアデラとは違って素直に受け入れ、楽しむことにした彼は、まだ顔を赤く染め、自分にきつい眼差しを送っている従者を見、目を細めるのであった。

5 卑下と白パン (1) (前書き)

この話書いてる時、丁度ハイジの再放送見てたの思い出しました…。
うまそうだった記憶が…。

5 卑下と白パン（1）

王宮に一旦戻ったアデラを知っている周囲の目は、やはり何処か、からかいと驚きと――時々、刺す様な嫉妬と、憐れみの視線の集中砲火であつた。

『自室で仮眠を取っておいでよ。……それから日が沈む前にまた離れ屋に来て』

コンラート師は夜に動き出すのでこの一年、ロジオンも昼、夜逆転の生活を送っていたという。

（だから昼に訪問すると機嫌が悪かつたわけだ）

アデラは一人納得する。

さつとシャワーを浴びて別棟の仕官用宿舍の自室に戻ろうと、渡り廊下を歩いていると仕官仲間に声をかけられ、あつという間に囲まれた。

「噂になつてゐるわよアデラ！」

「――で？ どうなの？ あの『悪臭王子』と関係しちゃつたの？」

「変わり者王子」から「悪臭王子」に異名が変わっていた……。

――その方が動きやすい――

主人の意見に逆らうわけにもいかないし、此処で事実無根だと騒いでも、どこかこの状況を楽しんでいる仲間達には信じてもらえそうにも無い。

「……さつ、さあ……」

取り合えずはぐらかして場から逃ようとするが、がっちり捕まれて応えを聞くまで離さない勢いだ。

「一晩二人つきりでいて、何も無いなんて無しよあ。」

どうしても、何かあったと言わせたらしい……。

「そうそう！ 女性と二人つきりで、臭くても男で王子よ！ ところで、手エ出さずにいたなんてあり得ないわよオ——無いと『女に興味無い』なんて貴族や王族にとっては不名誉な評価がつくし、手エ出さない方が失礼になるもんよ」

「当然、自分の名誉の為に……ねえ？」

勝手に話を進めている……。

（なるほど……こうやって話が飛び火していくんだな）

嗜好きは女の性だと言うが……。同性とは言え、苦笑いするしかない。

「すまないけどまた、夕方に出掛けないとならないから」

「——王子の所に行くのね？」

キヤー！！ と、黄色い声を出す仕官仲間から剥がれるように自室へ飛び込む。

（……これは、何も無かったと説得する方が難しい……）

冷や汗を拭いながら、溜息を付くと肌着を取り替え寝台に横になった。

仮眠を取っておけと言われても——いきなり昼夜逆転の生活を強いられても急に寝れる訳が無い。

昨日からの出来事を、つらつら思い出しながら目をつむる。

臭い王子を捕獲して、気絶して（後で聞いたら、シャツに染み込んだ薬品の作用との事だ）驚くほど端整だった主の顔、そして可愛らしい面も小憎たらしい面もあると言う事。

『夜伽の件はいつでも受け付けるから』

思い出し、また顔を熱くする。

まだ少年の彼の顔立ちには、その時期特有の不安定さがあるとアデラは思う。時に、子供のようで、時には、大人のようで……。

——あの言葉を告げた時の顔はもう一人前の大人の顔だった。

その時の挨拶代わりのキスも、耳元への囁きも、女性の心を掴んで離さない類のだ。

（あゝもう！　ますます眠れなくなつたじゃないか！！）

ばかばかばか！！　と羊を数える代わりにばかを数えるアデラだった……。

*

「——寝過ごした割りには、色々持つて来たんだね……」

ロジオンは相変わらずの口調で遅刻したアデラに話しかけながら、バスケットの中の食べ物を物色する。

「……申し訳ありません……」

仕官となつてからの初めての遅刻に、アデラは素直に反省の意を示す。

いつに間にか寝ていたアデラをベルが夕飯の時刻だと起こしに来てくれて、寝台から跳ね起きた。

制服に着替えながら窓の外を見ると、もう日が沈みかけ東の空には星が瞬いていた。

（まずい！！）

焦る気持ちを抑えながら、制服のボタンをかけ終わると部屋から飛び出ると——　夕飯の良い匂いが廊下いっぱいに立ち込めていた。朝に焼き菓子を少し口に入れただけで何も食べていない事に気が付き、途端に腹が鳴る……。

王子もろくな物を食べていないことは、朝に台所を漁ってみて分かっていた。

——だったら、遅れたついでだ……と、食堂を管理している者に

事情を話して仕官用の食事と食材を分けてもらったのだ。

「……暫くは、君に食べ物を持つてきてもらうか……」

王子が食すると言う事で、氣を利かせたのか滅多に食べられない白パンが入っていて、ロジオンはそれを真っ先にかぶり付きながら、葡萄酒の栓を開ける。

台所に食材を置いてきて、戻ってきたアデラに言った。

「今度から遅れないで。もし城の中や此方に向かっている途中で襲われたら、どんなに僕が急いでも間に合わない」

ゆっくりながら厳しい口調で、小麦色の肌のこの女従者を諫める。

「——はい、心に留めておきます」

凜とした態度で頭を下げるアデラに、ロジオンは食事を取るようにと葡萄酒をグラスに注いで差し出す。

仕官にあてがわれる葡萄酒は質が悪い。そのままに飲めるものは、大変少なく貴重で、殆どは貴族に寄与されてしまうのだ。

残念だが葡萄酒までは、手が回らなかったのだろう。

備え付けの蜂蜜を葡萄酒に入れながら、神妙な趣で主を見つめ、

問う。

「……王子、今夜は現れるのでしょうか？」

長い放浪生活でそんな葡萄酒にも慣れている王子は、文句も言わずそれに口を付けながら

「分からない……、氣配を感じたら君にすぐ教えるよ」

と、チラリとアデラを見、いつもの、のんびりとした口調で答えた。

アデラに今日の朝のような、どこか穏やかな雰囲気は無い。

これから来るかも知れない恐怖に対抗すべく、心身共に引き締めている。

彼女の場合は昨夜が初体験な故に緊張もひとしおなようで、開戦前の兵士のように瞳に闘志の光を宿していた。

「……アデラ、君、何処の生まれ？」

場を和ませようとしているのか、ロジオンが徐に話を切り出す。

「私ですか？——もちろん、このエルズバーグ国ですが……」

「……先祖代々ずっと？」

「あつ……いえ、祖母の代に此処に……」

アデラは少し、言葉を濁らせた。

闘志の光が鈍った。

自由貿易を奨励しているこのエルズバーグは、『商人と職人の国』と評価される程、多くの国から商売や事業を行う為に人が入ってくる。

そして、商売を促進する為に人種など関係なく才能があれば取り立て、職人を募り育てていく。

故に、職業や文化、風習、その他に言葉や宗教も入り混じり、多種多様の多国籍国家である。

「……お祖母様は、何処から来たかは知ってる？」

「……中東の方からとしか……。既に亡くなりましたからよくは分かりませんが……もう、無い国だとしか聞いておりませぬ」

そう言うアデラの食事をする手が止まっている。

「……尋問じゃないよ。——ただ、君のその身体能力の事をきちんと知りたいだけだ。それに、君のお祖母様には先々代もこの国も大変お世話になっている。感謝すればこそで、中傷する気はない」

「その事は……陛下から？」

「……晩餐会で聞いた」

「……あんな場で……」

アデラは深く溜息を付き、手で顔を覆う。

「さすがにそうつとだよ……自分の従者の履歴を知るのは主人として当然じゃない？」

「王子はそれを聞いてどう思われたのです？」

「……良いと思ったから……従者として受け入れた——じゃあ、い

や？」

小首を傾げて、自分に尋ねる主人の表情は、どこか楽しげである。

「朝、私にお話下さった理由と全く違います！」

「そうだったけ？」と悪びれた様子もなく、ロジオンは完全に気分を害しているアデラに気を使うこともしないで話を続けた。

「……アサシンだったお祖母様からは…何も教わらなかった……

？ 訳じゃ無いよね……？」

6 卑下と白パン（2）

わざと声を潜め、低めのしかし、どこかはぐらかす事を許さない脅しのような口調に、アデラは硬直し目を伏せた。

ロジオンは、顎に手を付け、緊張しているアデラに話を続けた。

「海洋資源も鉱山資源も豊富なこの国は経済力がある……商業や文化それに伴って技術や芸術は発達して、他の国より、高い教育水準だ……が、その分軍事力は並以下だった……。——当然、隣国はこの国を自分の国の物にしようと目論む……。困った当時の王は奇策を立てた……。——中東から流れてきた暗殺集団を見つけ出し、市民権と引き換えに国の専属とした。国が亡くなり、放浪生活しながら暗殺の請負をしていた者達だ……市民権と言う永住を提示した事、自分達の最も得意な事が王の名の下にこなせる事に飛び付かない訳は無い……。当時、女性部隊の長をしていた君のお祖母様は、それを受け入れた……。遅れながらも軍事に力を入れて蓄えている間、アサシン達は他国の情報を収集し、王に報告……。危険な国だと決定すれば、エルズバーク国の仕業だと思われる様工作をして、他の国に目を向けさせる……あるいは首謀者の息の根を止める……」

「……」

「……わが国の、機密中の機密だね……」

今、この空間に自分とこの女従者しか居ないのを知ってか、その機密を声を潜める事も無く話すロジオンに「もう少し、声を低めにと、叱る従者のアデラ。」

そんな彼女に、特に気にする様子も無く、ロジオンは平坦な口調でゆっくり話す。

「……奇策とは言っても、どこの国でもやってるんだよ……ただ、君のお祖母様と、お祖母様の仲間は余程優秀だったのさ……」

「……確かに私は、祖母に色々と手ほどきは受けています——が、祖母のように優秀では無いと確信しています。祖母のようになんかせ

と言われても……私には無理な事です……」

アデラの緑の瞳が風に揺れる草葉のように波打った。

「君……自分を卑下し過ぎるんじゃないかな……？」

そうロジオンは言うものの、自分のすぐ側に皆に認められ、王に感謝される程の実力を持つ者が居て、その者に手ほどきを受け……越えるどころか、足元にも及ばないと知らしめられたら、やはり自分もそう思うだろうな——実際に僕も……と、考えながらアデラを見つめる。

コンラート・オーケルベリ

四大元素 地・水・火・風のうちの一つ、『水』の称号を持つ魔導師。

それぞれの精霊の王に戦いを挑み、認められた者にしか与えられない栄誉ある名号。

この名号を与えられると、それぞれの精霊王の助けが得られると同時に、同じ属性の精霊に無条件で力を借りられる。

一人の精霊王につき、一人の人間にしか与えられる事ができず魔法使いから、それから昇格した魔導師達の憧れの名号——

その一つを持つ亡くなった自分の師匠……。

師匠に、旅先で、そんな師匠を超える者になる——と言われ続け育った自分。

そんな環境に驕ることもなく、ここまでできたのは自分が師匠を超えられる等と考えられないが故だ。

超える

と言うことはどう言うこと？

『魔力』？ 『技術』？ 『称号』を沢山持つ人になるということ？ 魔法を扱う者達に従わせる権限者『魔承師』になれるって

こと？

抽象的な褒め言葉に、混乱して何時ぞや師匠に尋ねたことがある。

——今は、魔法に精進しなさい——

静かに低く、そして何処か物悲しく答えた師匠……。

どうして師匠はそんな悲しい顔をするの？

僕は何か変なことを言った？

どうして、みんなは僕が師匠を超えるなんて言うの？

そんなの分からないじゃない。

あんな凄い人を

僕が師匠を超えるなんて考えられない……。

ぽつりと呟く。

「王子……？」

「偉大な師を持つとどうしても卑屈になるね……今だに分からないことが多いよ……何を根拠に僕が『師匠を超える者』と……同じ魔法を扱う者たちにもてはやされたのか……。僕には師匠みたいな魔法を繰り出せないし……魔力だって師匠の方が強い……それなのに……。だよ。——師匠は……。僕ぐらいの歳にはもう、魔法の中で得意な分野を築いていた……。僕は何が得意なのか……。さっぱりだ」

長めの前髪がブルーグレーの瞳を隠す。

真正面ではあるが、アデラの方からは主の表情は見る事ができなかった。

王子が、高名な魔法使い『水のコンラート』を超える者となる——その話は聞いていた。

帰って来た時点では、王宮に仕える数多くの魔法使いや魔導師達

は、その評価を仲間達の間で大分前から聞き及んでいたので、コンラート師と同様に上げ膳据え膳に扱っていたらしい。

魔法を扱う者達の間には、男女間や身分の差別など無い。

あるのは魔力の差、魔法を扱う力の巨大さ——故に、王子の身分など関係無い。

前評判の良かったロジオン王子が攻撃魔法のほとんどを知らず、防御魔法を駆使することに念頭を置いていた、と言うコンラートの言葉の確証を得るほど魔法を披露することを国に帰ってから無かったことで、王子の魔法使いとしての実力は

『眉唾ものだ』

と、実しやかに囁かれているのをアデラは知っていた。

魔法の世界から抜ければ、まかりなりにも王子の立場なので噂に乗せる位で終わるが、魔法使いや魔導師達の中では、あからさまに王子を凡暗ぼんくらと叱咤する者もいるくらいだ。

そんな、自分の評価も王子の耳に届いているだろうに……。

王宮の魔法使いや魔導師達と、一緒にいる姿を見たことが無いのはそのせいかと、アデラは思い胸が痛くなった。

「……まあ、君のお祖母様の事は話でしか知らないし……お祖母様のようにやれとは言わない……君は君が出来る事を、僕にして下さい。——出来ることを自信が無いからと出来ないと言うのは無しでね」

自分を卑下する者の癖をズバリと言い、ロジオンは自分の食べていた白パンをちぎり、むくれた顔をしているアデラの口に入れた。

「……」
何か、慰められている子供のようだ——白パンを口の前に出されて「口開けて」と言う仕草で口をパクパクされて……多分

『……君の気持ちも分からない訳じゃないから……』
あんなことを話したのも、能力のことで悩んでいるのは何も私だけ

では無い、と、言いたかったのだろうか。年下に慰められるほどに、私は酷い顔をしていたのだろうか。

主より年上なのに、そうとは全く思っていないなと分かる様子の態度に腹立だしい反面、今まで面倒見のよい姉という評価でやってきた自分がそんな扱いをくすぐったいながら、嬉しく感じる事が恥ずかしくて、むくれた顔で誤魔化す。

断れずに口に含んだ白パンは、ほんのり甘かった――。

7 策（1）

結局、その夜はコンラートは現れなかった――。

馬上で何度も欠伸を噛み殺しながら、宿舎へと戻ったアデラはズルズルと足を引きずるようにして自室へ戻った。

同僚達は朝の訓練で、誰一人宿舎に残っておらず黄色い声に囲まれずに済んで、ホツとした。

取り合えず、一寝入りしてから身体を清める事にしよう……。

それから、王立図書館の閲覧禁止の書をそつと持ち出して――出来るだろうか？

『魔法に関する古代文書があつた筈なんだ……もの凄くぼろぼろだから……すぐに分かる。それを持ってきて……。ぼろ過ぎて閲覧禁止になったやつだからそんな怖いものじゃないから平気』

とにもかくにも……寝よう……。

*

ノックの音に目が覚める。

時計はまだ昼……また、噂好きの同僚だろうと居留守を使つことにした。

「アデラ、居るんだろ？」

男の声に、まだよく覚醒しない頭でのっそりと寝台から身体を起こすと、門を外す。

「――ロジオン王……！？――エイルマー？」

むすりとした顔を此方に向ける同僚の男性仕官のエイルマーが、顔と同じこつい身体付きを扉を塞ぐようにアデラに向けていた。

偉丈夫の彼に目の前に立ち塞がられるようにされ圧迫感を感じながらも、同僚の気安さで夜着のままでも構わず対応する。

「悪臭王子じゃなくて悪かったな」

ふざけた言い方であるが、明らかに機嫌が悪そうだ。

「私の主だ。私の前で他の同僚のように悪態をつかんでくれ」

エイルマーの出現ですっかり目が覚めたアデラは、いつもの張りのある澄んだ声で厳しく諫める。

「――何が主だか……従者ではなく愛人じゃないか」

（それを聞きに来たのか……）

「……エイルマー、悪いが疲れているんだ……。休ませてくれ」

偉丈夫のエイルマーを外に追い出し、扉を閉めようとすると彼に止められた。

「お前、それで良いのか？ 愛人なんか、そんなの仕官の仕事じゃないだろ？！ しかも、剣や身体の鍛錬にも出てこないで……！！」

「この生活に慣れたら、仕官として鍛錬もきちんに行うつもりだ」

（とにかく眠いんだ……！！）

エイルマーの顔を見つめ睨んだ。こいつは悪い奴ではないのだが、どうも空気を読む事が出来ない。

女は少々ぼんやりしてる方が可愛いとか、女兵士の前で平気ではざくし。

これだけ陰悪な態度を出しても分かっておらず、仕官としての心構えを淡々と説いてるし。

「――聞いているのか？」

エイルマーの問いに、アデラはやけ気味に「ああ」と応える。

本当は全く聞いていないのだが、聞く振りしてさっさと帰って貰おうと目論んでいた――が、

「そうか！！ 俺の気持ちを受け入れてくれる決意をしてくれたか！！」

と、いきなり抱きつかれた。

——えっ？

あせってエイルマーから身体を引き離そうと身を振るが、「恥ずかしがるなよ」とますます強く抱きしめる。

「てっ手加減を知らないのか?! お前は!! 痛いだらが!!」
本気で痛がるアデラにお構いなしのエイルマーはそのまま扉を閉めると、アデラをベットへ押し倒した。

何が何だか分からぬまま、だが、貞操の危機だと本能で感じたアデラは枕元に隠してある短剣で鞘を外さぬまま、エイルマーの後頭部を殴打する。

呻き声を出し後頭部を押さえた彼の間を見てするりと離れると、投げといった仕官服を拾い自室から飛び出し、ベルの部屋へ逃げた。

驚いたのはベルの方だ。

乱れた夜着で血相を抱えて逃げ込むアデラ頭を押さえながら追いかけるエイルマー。

焦りながらも素早く状況を察したベルは、エイルマーが部屋に入るぎりぎりですいきり扉を閉め、門をかける。

「なっ、何? 今度はアデラなの?? あの勘違い男?」

叩き続け、しなる扉を押さえながらアデラに聞くベル。

エイルマーは仕官の中では有名な勘違い野郎で、好かれていると勝手に思い妄想を広げ、標的の女性を追い掛け回すという、コンラートとは別な意味での化け物野郎だった――。

兵士としての実力があるだけに、空気の読めなさや女性に関する勘違いが、彼の出世を妨げると評判であった。

二人で必死に扉を押さえっていると、この騒ぎに誰か王宮憲兵に通報してくれたのだらう。

「何だ?! 貴様等!!」

「女子寮で騒ぐな!」

「取り合えず、話は向こうで聞くから！」

扉の向こうの喧騒が聞こえる。

「アデラー……！ 何故だ……！！！」

エイルマーの悲痛な叫びが廊下に木霊していた……。

アデラとベルは、力尽きたようにその場に座り込んでしまった。

脱力感が襲い、二人扉に背もたれボンヤリする。

「……何人目だっけ？ あいつ……」

長い沈黙の後、先に口を開いたのはベルだった。

「……知らないよ……。おかげで目が覚めたけど……」

アデルはそう答えると、肌蹴た夜着を整えながら立ち上がった。

「ごめん、ベル。迷惑かけちゃって」

「私に迷惑かけたのは、エイルマーだし」

ベルは肩を竦め、笑ってアデラを見た。

「……あつ……！」

自分を見つめるベルを見て、思い出したように彼女に問いかけた。

「——ベル、確か貴女の恋人って……」

*

「これが、王子所望の古文書だと思う」

ベルの恋人の司書であるボリスが、労わる様にアデラに渡した一冊の本は酷い有様だった。

羊皮紙が所々虫食いと色あせており、しかも、紐が腐食して今にも解けそうである。

「本を修復するか、新しく写し直すかまだ、修史官と相談中なんだ。内容を訳できる人もいないから、これがどれ程の価値のある書物なのか分からないので、放りっぱなしだったから……ロジオン王子は

訳できるのかい？」

「さあ……？ 私はただ、持ってくるように言われたただだから……」

齒切れの悪い返事を返すアデラは、今にも崩れそうな書物を至極大事に手に持ちながら、ボリスとベル礼を述べて図書館の裏口からそっと出た。

勿論、この事は秘密にしてもらって……。

（持つべき友は、多い方がよい——ついでに口が堅い方が尚更良い）

1人頷きながら、夕日を背に走るアデラだった。

*

「——っん、これ……」

アデラから受けとった書物を見て、はっきり「酷いな」と露骨に顔をしかめて言った。

「前に見た時より酷い……ほっぽり投げてた……感じ？」

「ほっぽり投げていたと言っより、どうするか相談中でそのままだったそうです……」

「相談中？ そのまま？ だった？ ……そうです？ ……持つてくるのに協力者がいたの？」

「——っっ……！」

怪訝そうに眉を顰めるロジオンに、アデラはグッと喉を詰まらせる。

「……」

「……」

「……申し訳ありません」

たっぷり沈黙の後、恐る恐る主に事の次第を告げた。

「……そっと持ってきて……って言うのはね、内緒で持ってきてと

言う意味だっただけど……？」

「はい…… たまたま知り合いが司書にいたものですから…… つい……」

（私が一番口が軽いのかも……）

王子にもベルにも彼女の恋人のボリスにも、心の中でたつぷり謝りながら呟くアデラだった。

ロジオンは肩が揺れるくらいに大げさに溜息を付くと、作業台に本を置いてそつとページを開きながら、いつもの平坦な口調で尋ねた。

「その司書、僕が訳せるか？ と聞いてこなかった？」

「そう言えば…… 聞いてましたね……」

「何て、答えたの？」

「ただ、持って来るように言われたただだと……」

「…… 後で詰め寄られそう……」

珍しく嫌悪の様子が分かる口調だった。

「…… 訳せるから、持って来いと言ったのですよね？」

ロジオンは黙って頷くとそのまま、本にのめり込んでしまった。

時々、本棚にしまつてある本を開いては読んで、たまにペンを持つて自分のノートに写し取ったり。

日はとつぷり暮れ、遠くで梟が鳴いている。

今夜は現れるのだろうか？

ちらりと主であるロジオンを見る。

彼は一心不乱に書物を読み解いていて、こちらの視線には気付いていない。

そう言えばと——アデラは思い出したように奥の台所に入り、持ってきた夕飯を皿に盛り付けそつと、ロジオンの脇に置いた。

「お食事です」

「……」

アデラに声を掛けられたことも、側に食事が置かれた事にも気付かないようだ。

——いや、気付いていても返事をする余裕が無いのかも知れない。その集中力に必死な気配が読みとれるようで、アデラは一抹の不安がよぎる。

（今夜辺り……来るのか……？）

夜の住人ではないアデラは闇から逃れるように、そっと窓から外を眺めた。

外は漆黒の闇……。

遠くにかすかな王宮の灯火が瞬くだけ。

8 策（2）

カタン……と、椅子を引く音がして、ハッとアデラは顔を上げる。うつかりうたた寝してしまった。

こちらを見つめながら近寄るロジオンの表情は、芳しくなかった。アデラは主に長椅子を譲って、温めなおしたスープをカップに注ぎ彼に渡す。

「……使えないね……あれ……」

ロジオンは独り言のようにポツリと呟く。

「羊皮紙の腐食が激しすぎ……シミで見えないは虫食いで千切れているは……何か使えそうな呪文があればと思ったけど……」

そう言いつと、サイドテーブルに置かれた皿からパンを抜き取ると、スープに浸しながら口に詰め出した。

「……今夜辺り、現れそうなのですか？」

「……来るかな……予感はあるんだけど……」

僕の予見は余り当てにならないからと、付け足す。

「もし来たら……？」

ロジオンは忙しくスープを飲み干すと、次に骨付き肉にかぶりつきながらアデラが注いでくれたお茶を受け取り話を続ける。

「取り合えずその場で捕らえるか、何処か誘導するかなんだけど……」

「それを一年ずつとお試しになったわけですね」

ロジオンは両手でムシヤムシヤと肉をかじりながら、肩を窄める。アデラの言いたいことが分かる故の仕草だ。

「上手いかなかったのは、承知の通り……上手いかなくて当たり前なんだ……。僕の魔法は全て師匠から教えてもらったもの……いくら師匠の思考が赤子並みに落ちていても、潜在意識の中に覚えているのだろう……全て弾かれるか、消されるか……だもの」

「それで古代魔法……」

「……古代魔法書なんてものは、その時代に生きてきた魔法使いの日記みたいなものでさ……自分が開発した魔法を記しといたりするもんなんだ……。大抵、弟子がいればその人に渡される……。いなければ自分の命が尽きる前に処分するか、こんな風にどこかに紛れて発見されるか……」

そう言ってロジオンは肉の骨で作業台の上にある書を指し示す。

「……知りませんでした……。皆が皆、同じ呪文で同じ魔法を唱えているのかと……」

アデラは感服したようにロジオンを見つめ、大きく息を吐く。

「土台は一緒だよ……。それは古代から変わらないんだ……。問題は土台を習って、それからどう自分の魔法を作り上げていくか……。それができるか否かが魔法使いとして生きて、いずれ『魔導師』になれるかどうかの分かれ道になる……」

「ロジオン様は……？」

アデラの問いにロジオンは答えず、指に付いたソース懸命に舐め取る事に集中していた。

アデラは無言で台所からフィンガーボールを持ってきて、ロジオンの前に差し出す。

「こんなのいらぬのに……」

言っと、アデラに睨まれ渋々手を洗う。

そうそう、さっきの話と、上着のチュニックで手を拭うロジオンをしかめ顔で見るアデラに話しかける。

「……僕は取り合えず、一人立ち出来る位だ……。まだ、自分で魔法なんか創れないよ。魔法日記は持つてるけど……。普通に日誌代わりに使ってるだけ……。だから、過去の産物に頼ろうかなっと思ったわけ……」

腹を満たした彼は、ゴロンと長椅子にだらしなく寝転がる。

徒労に終わった翻訳で目が疲れたらしく、目をしばたきながら時々、目頭を指で押さえている。

「他の——例えば、コンラート様が懇意になさっていた同業者に、

コンラート様の知らない術の指南をして頂くわけにはいかないのですか？」

「アデラの意見はもつともだと思う……でも、できない……」

瞬間、彼は悲痛な表情を浮かべたが、変わったかどうか分からない程の一瞬で、すぐにいつもの緊迫感の無い顔に戻った。

アデラはそれを見逃さなかった。

「何か不都合な事がありますになるのですか？」

「……頭を痛める事が増える。」

「何故です？ それが一番の近道ではないですか？」

例えば『水』を吸収する『地』の称号を持つ方に協力を仰ぐとか

……」

「……今はできない……知らないの？ アデラは王宮仕官でしょ？ 師匠が亡くなった時、緘口令を敷いたじゃない」

「——あつ！ ……すいません、今まで魔法に縁が無い生活を送っていたので……」

思わず口を塞ぐアデラに向けてロジオンは困ったように笑う。

魔法の世界だけではなく、一般的にも高名なコンラートが亡くなったことは特に魔法を扱う同業者達に混乱を招く……。

しかも、戦いではなく病気で発狂した上に誤飲で亡くなったことは、亡き本人の恥を晒すだけではない。

『水』の称号が宙に浮いた状態にあると言うこと。

称号の跡目争いで、巻き込まれるのは

——ロジオン王子——

「僕はおるか、このエルズバークの国全体が巻き込まれる恐れがあるからね……。魔導術統率協会に水の王から直接連絡があつて……王宮内の秘密にするように……僕と父上に伝達が来た。」

「魔導術統率協会から……」

魔導術統率協会——魔法を扱う者達が世界中に増え、魔導師や魔法使いを語り犯罪や人を惑わす行いが激増した為、魔法の発案創生者マルティンが個人の財産を投げ打って作った組織である。

マルティンの考えに同意し賛同した者達や、その子孫達が魔法を扱う者達に規律や戒律又、援助を行ってきた。

魔承師と呼ばれる魔法使いを中心に、強力な魔法を使う魔導師が多く在籍しており、普段は世界各国に散らばっているが協会の指示が出ると動く。

各国に仕えてはいるが、魔法を扱う者達は自分の大本の主は協会という観念を持っており各国の指導者達も協会に政治的介入はできない。

魔法が世界中に浸透している今、何処の国も魔法を扱う者達の存在は必須だ。

協会側からは国が魔法を扱う者達をどう使おうと、物言いは来ない。

が、魔法に関すること、魔法を扱う者に何か重大な事柄が起きると、協会側から何かしらの形で介入があるのだ。

しかし、それでさえ稀だ。

——同じ世界に存在しながら、別の世界の組織のよう——

人々はそう囁く。

そのせいか、アデラには協会の存在も、その内容に現実味が無くピン、とこなかった。

しかし、この後のロジオンの台詞に急に現実味を帯びて、沸々と怒りが湧いてきた。

「だからと言って王宮内に勤めている者に口止めしたとは言え、風の噂で国中に伝わっているでしょう？」

「だから魔導術統率協会も水の王も…噂を流すおしゃべりな『風』の属性を持つ魔物や精霊にも緘口令を敷いたんだ……だから、王宮

の外や他国にいる高名な魔導師達には頼めない」

「……それは、王子一人で何とかしろということでしょうか？」

「……ってこと」

「何とかできなかったら……？」

「ただ…魔導術統率協会から派遣された同業者達が師匠を何とかしにくる……」

それまで僕の手で師匠を安らかに眠らせたいと思うんだけどねと、溜息を付く。

そうしてアデラの視線をそらす様にじっと、天井を見つめ再び口を開いた。

「僕が師匠を光聖魔法で退けた後に…水の王が現れたんだ…魔導術統率協会から、僕に滅す又は封印を執行するよう指示があったんだ…。僕は…自分の師匠だから…弟子の僕が何とかするのは当たり前だと思ったから……」

「……承諾なさったのですね」

「……でも、今の状況見れば分かると思うけど…なかなかね…緘口令を引いてるから…懇意だった他の元素の称号を持つ魔導師達に助言を請えないし……」

「話したら、他の魔法を扱う者たちにあつという間に広がり…コンラート様以外の悩み事が増える…てことですか……」

深く溜息を付いた。何が何でも王子一人の力でやらなければならぬない状況なんだ。

——待つて？

「王子、王宮に仕える魔法使い達にはお力を貸して頂けないのですか？」

「……無理だ」

今度はロジオンが深く溜息を付く。

「僕は、同業者には嫌われているらしい……却下されました……」
と、肩を竦めた。

——あの噂は本当だったのか……。

期待が大きかっただけに、本人を見たときの王宮に仕える魔法使い達には落胆は大きかっただろうが、露骨に馬鹿にし、非難する者が居ると言うのだから、恐らく高みの見物と洒落込んでるつもりなのだろう。

「別に人が居れば居るほど良い、って言う訳じゃないからね……師匠相手じゃ……烏合の衆になる可能性のほうが高いもの」

だから、それは気にしない、僕は元々期待はしていないし、と即、
答え

「——取り合えず、さしあたって今夜、襲撃に来たらどうしよう——
——って事、考えよう」
と、話を逸らす。

寂しくは無かったのか——？

この一年間、一人で難問と向き合うことに。

まだ成年の儀を迎えない少年の王子に一人に任せるとは

（魔導術統率協会は一体何を考えているのだ！ 王宮に仕える魔法使い達も！！）

怒りと共に、王子への慕情が募る。

長椅子の前にしゃがみそつと、ロジオンの手を両手で包むように触れる。

「……アデラ？」

「王子……私は貴方様に忠誠を誓っております。何なりと行ってください。私は、何があるうと王子の味方です」

強いアデラの口調とは別に、彼女の瞳は揺れていた。

ジッとロジオンはそんなアデラの潤む緑の瞳を眺めた。

「何時…… 忠誠を誓ったの？」

「初めてコンラート様に襲われた夜です」

ふーん、と、表情も変えず首を傾け、そして、

「……何なりと言って言い訳？　じゃ、夜伽……」

「——王子——！」

顔を真っ赤にして、離れるアデラに冗談だよ、と笑うロジオンにまたからかわれたとムツとしたアデラだったが、

「ありがとう……。君に言われると元気が出るよ……」

ニコリと落ち着いた微笑は少なくとも自分の言葉が、ロジオンにはなかなかの栄養剤だったらしいことの証明でアデラは内心ほっとした。

——ある案を話してみることにした。

「それで…… いかかでしょう？　ロジオン様の術が効かぬと言うのなら、私の祖母から教えてもらった術を試してみてはと——」

「——術って……？！」

だらしなく長椅子に寝転がっていた主が飛び起きた。

まだ短い付き合いだが、こんなに反応の早い彼を見るのは初めてで、かえってアデラの方がしどろもどろになる。

「あつ、あの……！　どちらかと言えば、お守りに近い感じなのですが——」

「良いよ、教えて」

間髪入れずにロジオンは答える。

「……はっ、はい……では」

アデラはそう言うと、食事を入れてたバスケットの中から青い色のインクと筆、正方形に切りそろえられた羊皮紙を取り出した。

「……？」

その小道具を見てロジオンは不思議そうに小首を傾げた……。

9 策 (3)

深夜の林の中、遠くで梟の鳴き声が微かに届く。

此処に佇んでから、そんなに時間など過ぎていないが、あまり暗闇が好きでないアデラには途方もない長い時間に思える。

此処にいるように主の魔法使いに言われ、怯えた表情を見せたアデラを見て

「平気、君を酷い目には合わせないから……」

一人でコンラートの襲撃を待つのが怖いのか、ロジオンは珍しく優しい口調で諭す。

「……いえ……そうではなく……」

落ち着かなく目をキョロキョロさせ、周囲を見渡しているアデラを見て、ピン！ ……ときたらしい。

「暗闇……苦手……？」

ずばりロジオンに当てられ、言葉に詰まりながら頷く。

「……それなのによく仕官になって、一昨日僕の帰りを送る気になったね……」

呆れたように自分の女従者のアデラに問う。

「何かに意識が集中している時は平気なんです……ただ、手持ちぶたさでこうやって一人で待てと言われると……」

そう言つと、泣きそうな笑っているような複雑な顔を主に向ける。

「……ふうん……」

眉を寄せてアデラを見つめたが、仕方ない、代わっても良いけど君は術をかけられないでしょ？ ……いつもの、感情の籠もらない口調で言い放つ。

「覚悟を決めてよ」

と、諫められて黙って頷く。

自分で自分を抱きしめるように佇み、カンテラを持つ主を見送る彼女を見て、ロジオンは困ったように笑った。

——あの、別の生き物になった師匠より暗闇が怖いか……——

（本当に面白いお姉さんだ……）

*

コンラートを待つのはきつと、そんなに長い時間ではないだろう。祖母から聞いた術の説明を聞いて、忙しく準備を始め、ほとんど駆け足でこの場所まで来たのだから……。

「アデラ——!!」

自分の呼ぶ声が木霊し、主が手にしていたカンテラが左右に揺れている。

刹那、アデラはそのカンテラに向けて全速力で走り出した。

「来てる——!!」

黒い影のコンラートの速さは化け物と呼ぶに相応しい。

前のように大分前にロジオンが感づいても、ぎりぎりだった。

ロジオンの場所までほんの数メートルのはずだが、後ろから闇より濃い闇が迫ってきて、背中に走る電流のような悪寒に、あつと言う間に距離を縮めているのが分かる。

——早く、早く！

ロジオンの焦る声が耳につんざく。

「——!!」

自分の後ろ毛が、逆立つのが分かった。

つかまる

ロジオンが居るその陣まで間に合わない――

手が届かないのを承知に思わず、主のロジオンに向け手を伸ばす。
髪のを捕まれた――そんな感触を感じた瞬間

「――?!」

自分の身体が光った。

いや、まだ、光り続けている。

それと同時に、自分の走る速度が急速に上がった気がする。

「アデラ！ 飛べ！」

ロジオンが両手を自分に向け、広げているのが分かった。

アデラは力強く地を蹴り上げる。

「――うわ?!」

自分でも思いもしない程の跳躍にアデラは、声を上げた。

そしてまさしく、飛び込むようにロジオンの腕の中に。

ロジオンは倒れながらも、彼女をしっかりと受け止め、強く抱きしめた。

二人、言葉を掛け合う暇も無く、抱きあいながら闇からの来訪者を向かい入れた。

そう、 陣の中に――

*

闇より暗い漆黒の衣のような身体に、陶磁器のように生気の無い顔色。

しかし、表情は虫を追う幼児のように楽しげで……。

『身体から抜けて自由になった魂で道徳も良心も理想も無く』

アデラはロジオンの言葉を思い出す。

老いと病で、身動きの取りにくくなった身体から抜け、その身軽さを満喫するかのように。

風のように自分の弟子に襲い掛かろうとしたその時――。

「伏せて!!」

ロジオンはアデラの上に覆い被さる様に屈む。

輪を作る様にぶら下げていた、羊皮紙から青い光線が放たれた。

怖々アデラは顔を上げると、息を呑んだ。

『この羊皮紙に青い目を描くんです。』

アデラは不思議そうに覗くロジオンの前で、筆に青いインクを付け、羊皮紙に1つ目を描く。

『《邪眼》……と言うそうです。元々、悪しき者を呼び寄せるまじないだったそうですが……、今は悪しき者で悪しき者を追い払うお守りみたいな物だ……と、祖母が話していました』

『ふーん』

アデラが見本で描いた紙を手に取り、食い入るように見つめる。

『……確かにまじらないみたいない感じがする……信仰心に左右される類のものかな……？ お祖母様は亡くなるまで亡国の宗教を信仰していた？』

アデラはちよつと考え、そうですね、よく、太陽に向かって祈りを奉げていましたから、と答えた。

『……使えないですかね……』

残念そうにアデラは主である魔法使いの王子に尋ねた。

『……いや……亡国の……使えるね……』

ロジオンは含みのある笑いを浮かべ、アデラを見つめる。

『信仰を……魔法に組み替える……』

そう言つと、薬品棚から小瓶を1つ取り出し、蓋を開ける。

『こちらの青い塗料を使おう……』

『——これは……？』

アデラは小瓶を手に取り、覗き込んだ。

ランプの光に、反射して微かにキラキラと光っているように見える。

『どう使おうか、考えていたものだ……これなら有効に使えそうだよ……』

——女従者に対する予見……

（久しぶりに当たりそうだ）

策をアデラに説明しながら、そう、思ったロジオンだった。

青い目を描いた羊皮紙をなるべくびつちりと、輪になるように囲み、なるだけ中央に誘った。

——コンラートは見事はまり、あらかじめ呪文を詠唱をし、待機していた所に発動。

青い目から一斉に青い光線がコンラートを捕らえた。

まるで蛇のように黒いコンラートの身体に巻きついていく。

コンラートは甲高い声を上げて、次々と巻きついていく青い光線から、激しく身体をくねらせ、逃れようとしている。

「——ロジオン様、捕らえる事ができそうですね！」

嬉しそうに顔を綻ばせながら、ロジオンに話しかける。

「……いや、これは無理だね……」

見て、と、ロジオンは指をさす。

「——あつ」

コンラートを縛りつけた青い光線が、元の液体に戻り光を放ちながら点々と地面にこぼれ、化け物の道筋をつけていた。

「昼間……日が昇っているうちは出てこないのは分かってる……その間に師匠の隠れ場を見つけない」

「それで……？」

「それから考えるよ……師匠がどういう質の物に変化しているのか……はつきり見極めない」と

「……では、何か別な策なり、術なりを見つけておいた方が良いでしょうね？」

「お祖母様の人脈をあてにしたい……アデラに頼んで良いかな？」
頷くアデラ。

「——とにかく、朝から行動だ……一旦離れ屋に戻って仮眠を取る」

「そう言えば……。捕まるかと思った途端に急に駆ける自分の足が速くなって——何かしたんですか？」

「ちよつとした支援をね……」

謎かけるロジオンの顔をまともに見ると、もの凄い近い距離にあるのを知り、アデラは慌てて彼から離れた。

自分は今の今まで主であるロジオンの胸の中にいた事にようやく気付き、顔を赤らめる。

「——申し訳ありません!!」

しゃがみながら、後ずさり主に頭を垂らす。

ロジオンは、ゆっくりと立ち上がると服に付いた土を払いながらアデラを見る。

口角が上がっているのが、カンテラの儚い灯りでも分かる。

そして

「……君の胸……硬いね……筋肉？」

と問いかけた。

「――防具服です!!」

「冗談だよ……」

くすくす笑いながら、取り合えず紙を取っちゃおうと言うロジオンを沸騰した顔で睨みつけるアデラは

（また、遊ばれてた……）

と、火照った顔を両の手で冷ましながら撤去作業に取り掛かった。

10 二人（1）

（眩しい……）

アデラは目を瞑っても瞼を通して入ってくる、刺すような日の光にゆっくりと目を開けた。

夜中、離れ屋に戻った二人は日が昇るまで仮眠を取る事にしたのだが、寝室のベットをどちらが使うか言い合いになった。

私は長椅子で寝ますと言うのに、ロジオン王子は君が使えと聞かない。

押し問答の末、ロジオンが

『じゃあ、一緒に寝台使う？』

と、悪戯な笑みを浮かべた時、終了となった。

結局、お言葉に甘え使わせてもらう事にした……。

主の少年は何だ、と、平坦な口調ながら残念そうに言うと、棚から毛布を取り出し隣の部屋にさっさと引っ込んでしまった。

——私がうん、と、頷けば一緒に寝るつもりだったのだろうか？

二人どころか、ゆうにその倍の人数は横になれそうな寝台を見て、アデラは頬を染める。

何処までが本気で何処までが冗談なのか……主の口調や表情からは読みにくい。

本気だったら本気だったらで困るくせに——。

少年である主に惹かれているのは確かだ……でも、それ以上どうしようとか何か行動を起こす気にならないのも本心……。

あちらは年下でしかも王子。

こんな事、考えるのもおこがましい——アデラはブーツと上着を

脱ぐと髪留めを外し、剣を枕の横に添えておく。
そしてベットに滑りこんだのだが……。

（日が昇ってどの位たったのだ？）

明け方に起きるつもりが結構日が昇っているのに焦りを感じ、プ
ーツを履いて手ぐしで髪を梳かしながらロジオンが寝ている、隣の
居間兼作業室へ顔を出す。

しかし、そこに置いてある長椅子には既に主のロジオンの姿は無
く、整然と整頓された部屋を日の光が照らしていた。

（まずい）

まさか一人、コンラートの形跡を追いに行っただろうか？

慌てて外に出ようとするアデラを、後ろからロジオンが声をかけ
た。

振り向くと、主が生乾きの髪を布でがしがしと拭いながら、温室
から出てきた所だった。

「あつ……、いらっしたのですね」

アデラは安堵の息を吐き、主にうやうやしく挨拶をする。

ロジオンはのんびりと長椅子に腰掛けると

「温室の奥を右に曲がれば温泉があるから……僕の後で良ければど
うぞ」

と勧めた。

「——えっ?! 温泉が湧いているのですか?」

その事実にあデラは驚いた。

確かに南の方の鉱山資源の豊富な地域では、温泉が湧くと聞いて
いたが、この辺で温泉が出たなど聞いた事が無いからだ。

「うん……。一年前、師匠が別の生き物になった際に、この離れ屋
中心に暴れたと話したよね……? その時、師匠が深い穴を開けて
ね……掘り当てた……。」

意図的ではないだろう偶然なのだろうかと、付け足し、

「まあ、東の国の資料と公共浴場を基に、自分なりに工夫して造っ

てみました……」

と、ちよつと気恥ずかしげに咳払いを一つした。

*

風呂に入るとアデラは、その造りに歓声を上げた。

広さは一人から二人分入る程の広さの湯船。

大理石の洗い場もきちんと造られている。

腰を掛けられるほどの台に籠を乗せると服を脱ぎ、その中に入れ、湯船に浸かる。

『ぬるかったら、向かって右の栓を抜いて』

試しに抜いてみると、湯気を立ててお湯が流れてきた。おそろおそろ触れると、確かにそのままでは使えない程に熱い。

「向かって左が水か……」

一人心地に喋る。

『出る時には湯船の下の栓を抜いてきて。』

——なる程、この栓を抜くと湯船の湯が排出されるんだな。

（あのお方は、こんな物までご自分でお造りになるのか）

まだ、少年の自分の主の知識の広さと、手の器用さに感心してしまふ。

自分でお茶も入れてしまふし、部屋の生理整頓もきちんとやる。

自分の事は自分でこなしてしまふし、身の回りの物はこうして造ってしまわれる。

コンラートの事があつて、従者や小間使いはいらないと言つものの、確かに必要ないだろうと感じる。

（それなのに……）

何故、自分自身の清潔さに無頓着なのだろう？

湯船に浸かり、その気持ち良さに浸りながら、ゆるゆると考える。

ふと、近い距離で外からロジオンの声と、もう一人、聞き覚えのある男の声が耳に届いた。

珍しくロジオンが困っている声音が聞こえる。

「何かあったのか？」

アデラは聞き耳を立てた

「すまない、急に都合が悪くなって……今日は本当に駄目なんだ」

「しかしロジオン様、今日花火師達と花火の打ち上げの設置場所を決めて、打ち上げの手順等の確認をせにやあ予備の花火の確認ができませんぞ。——ぎりぎりですぞ。」

ああ、この声は庭師棟梁のサム爺だ。

初老の男で日焼けした逞しい肉体はとても老いゆく身体とは思えぬ程だが、よく自分の事を爺、と呼ぶのでそう呼ばれるようになった。

「設置場所は例年と一緒だと聞いているし……花火の数も昨年と同じだろ？ ……後は、僕の造った花火がそこに付け足すだけだし……」

「——大きさは？」

「昨年と同じ……」

「——安全性は？ 昨年はコンラート様がお造りになって、貴方様が手伝った。今年は貴方様一人だ……試験用の花火で確かめねえとこちらとて命を預けられねえ」

（そう言えば、王宮内で上げる開幕の花火……花火師と王宮庭師が協力して上げるんだっけ）

「……僕の腕が信用に足らないのは仕方ないが……今日はこれから出掛けないといけない。……試験用の花火も造ってある。五日後の本番までに間に合うようにするよ」

本当に困っているロジオンを見てサム爺は、溜息を付きハンチング帽をかぶり直した。

「……いくらコンラート様が毎年楽しみに制作していたからと言っ

てもな……王子の身分の貴方様が引き継ぐ必要無いじゃありませんか？ 花火は花火師にまかせて、王子は王子の役割を果たした方が良いつてもんですぞ。中途半端に手え出すと周りが迷惑こうむります。趣味でお気楽にやられたら現職の花火師達に失礼ですぞ」

（言い過ぎだサム爺！！）

飛び出して言ってやりたかったが、風呂に入っている状態じゃあままならず、アデラは齒を食いしばる。

「……うちの兄弟達にも痛い言葉だな……。——頼むよ……。今年だけは我が儘を聞いてくれ……。来年は花火師に任せるから……」

ロジオンの力の無い弱々しい声音が聞こえた。

暫く沈黙が続いた後、しょうがねえとサム爺が言った後、王子に諦めた口調で話す。

「——試験用の花火が上手く行かなかつたら、本番用の花火はもう、手直しの時間がねえ……。そんな時は貴方様の花火は中止にします——それで良いですか？ 明日だ。明日の夜に試験用花火の打ち上げを延期しますぞ。これがギリギリですからな」

「……仕方ないでしょうね……」

ロジオンも異存はないようだ。

それでは……と、その場を去るサム爺。

暫くして、ゆっくりとその場を去る足音がした……。

11 二人（2）

「お湯……ありがとうございました」

すっかり身体を清めて風呂から出てきたアデラを見て、ロジオンはよっころと長椅子から起き上がる。

「じゃあ……行こうか……」

「……はい」

フード付きの尻ほど隠れる短めのマントを羽織ると、アデラを促し外へ出た。

昨夜の陣を張った場所へと向かう。

のんびりとした動作が多いこの主。

しかし、昨夜と良い今日と良い、普通の少年のそれと変わらないしつかりとした歩調が続く。

——いや、普通より早足だろう。

普段、背筋を伸ばしきびきびと歩くアデラにとっては、この歩調の方がうっかり主の足を踏まなくて良いのだが。

陣の場所から、青く光る液体を辿って歩いていく。

「時間がたてばたつほどに輝きが消えていくからね……早いとこ居場所を突き止めないと……」

口調は相変わらず緩慢だが、焦りの音が聞き取れる。

そうだろう。

コンラートの居場所は近いのか、それとも遥かに遠いのか見当がつかないのだから——。

居場所までコンラートをぐるぐるに巻きつけたこの青い液体の量が持ったかどうか分からない。

——これは賭けだった——

ロジオンの予想だと、魂のみで形を作って動き回るコンラートには、肉体のように魂を入れておく形代が無い。

その場合、昼間の輝きは耐え切れないのだという。

だとしたら

昼間はどこか暗い場所に潜んでいるか

最悪、誰かの肉体を形代に使っているか　だと言う。

「……師匠は僕の身体を欲しがって、その欲望のままにいるから、誰かの肉体に移っている可能性は少ないけどね……」

「では……どこかに寝所があると」

ロジオンは頷く。

「居場所を見つけて……できるなら観察して、師匠を見極めたい……安らかに眠らせる事が出来るのか否かを……。まだ、僕は力不足だから……後者だろうけど……」

最後の方は聞き取るのが困難な程、小さい声だった。

少年の主の背中をアデラは見つめながら付いていく……。

成長過程の身体は、上背などを見ると筋肉が薄いようで頼りなげに見える。

——まだ、十五なのだよな……。

王子と言う身分の重圧

高名な魔導師の弟子という職種の重圧

そして、化け物化した師匠の魔導師をどうにかしたいが、力不足の自分に対する憤り。

自分にも祖母からアサシンとしての能力を見込まれ、教えられ、結局祖母の期待に応えられなかった経験がある……。

『……アデラ、貴女には——が足りない。』

頂垂れる祖母

蚊の飛ぶ音より弱々しいその声は、失望で頂垂れる祖母の姿に衝

撃を受けている中、少女で経験不足のアデラに届く声ではなかった。今、こうして従者としてロジオンの後ろに付いているのは、何かの巡り合わせなのだろうか？

——あの時の少女だった自分。

自分に対する憤り

空しさ

悲しみでどうして良いか分からず、唇から血が滲むほど噛み締め、地面に這いつくばって泣いた。

王子は……？

私と同じような思いをしている……？

「——!？」

ロジオンは驚いて身を強張らせた。

後ろから自分を抱きしめる柔らかくて温かい良い匂いがする女の体躯……。

「……アデラ……？」

顔だけ後ろに傾ける。

自分の方が若干背が低いが、大して差が無いのですぐ側にアデラの頬が自分の唇を掠め、慌てて顔を背ける。

アデラは気付いているのかいないのか、いつもは恥ずかしがってすぐに離れるのに、まるで子を抱きしめる母のように自分を抱き、髪を撫でた。

「……誘う場所には適した森だけど……アデラ……今はその気になつてる場合じゃないし……君から誘ってくれるのは有り難いけどね……」

冗談ではぐらかそうとしたが、アデラは自分から離れず更にきつく抱きしめた。

「花火……私にも手伝わせて下さい」

と、耳元で囁いた。

「……ああ、聞いてたね……」

アデラの態度に納得したのか、ロジオンはいつものようにのんびりと言った。

「いやらしいね……盗み聞きなんて……」

と言いながらも特に嫌悪の声でもなく、淡々と喋る。

「……聞こえたのです。サム爺は声が大きいですからね」

「……内緒話には向かない人だよ……」

もう、離してとアデラの腕をつかんで押し戻す。

「すみません……やりすぎでした」

しゅんと肩を落とすアデラにロジオンは

「……こんな時じゃあなかったら……押し倒すところだよ……僕は大人じゃあないからね……」

と悪戯っぽく笑いかけ、アデラの手を握って言った。

「暫く手を握って歩いて良いかな？」

「……はい。」

とアデラは気恥ずかしげに頷くと主の堅く、しっかりとした感触の手を握り返した。

*

青く光る液体が、紆余曲折に続いているその後を辿る二人。

雑木林や森の中をあの手でぶつからず、上手に飛び回っているらしく、折れている枝や幹などは見付からないし荒れている雑草や背の低い木々も無い。

「この液体が無かったら、分からなかった」

と、ロジオンはアデラに話した。

宮廷の敷地内だが、限りなく広いので、宮廷からかなり離れたこの場所まで来ると時々鹿や狐に出くわすくらいで、人と言えば王子

であり魔法使いである

ロジオンとその従者であるアデラだけだった。

横一列に二人並んで手をつないで歩く。

後ろに歩かれると繋ぎにくいと、ロジオンが物言いをつけた為だ。別に此処まで来れば、この様子を見て在らぬ噂も立つことも無かるうと、アデラも言うがままに隣に並び、手を繋ぐ。

「僕は、二年前に師匠と共にこのエルズバーグに来るまで……自分がこの国の王子だなんて……知らなかったんだ」

「——えっ?!」

この告白には、驚かずにはいらなかった。

「コンラート様に、自分の出生の事、聞かされなかったのですか?」

「あの人ね……そう言う俗世間に繋がる様な事……あまり話さない人だったんだ」

「だからと言って……ご自分で聞いた事は無かったです?」

「あるよ、何度か……『僕のお父さんとお母さんはどうしたの?』って感じで……そしたら……」

「そしたら?」

ロジオンは、人差し指を空に向けて言った。

「『あの、空の向こう』って師匠が……。何度か聞いてもそう言う答えてさ……。あの頃まだ僕は幼かったから『ああ、この世にいないんだ』って思っ……師匠も話すのが辛いのか? と一人納得して聞くのを止めたんだ。……この国は平和だけど……外に出たら国と国の間では戦は絶えずあるし……国に入っても平和に見えても内紛や、領主内の紛争、飢饉、病……。安心した暮らしが出来る国は僅かだ……。親を亡くして、寄り添って生きている子供達を沢山見えた……。僕もその内の一人なんだと思っ……いたんだ……。運よく、師匠に才を見出されて、弟子にしてくれたんだって……」

「……」

「——二人であちらこちら……。貴族のパトロンになったり、国の食客になったり……。師匠は1つの処に留まるのが苦手な人だね……。ま

あ、性格もあるけど……手も早かったからね……」

「手が早い？」

「お・ん・な」

ロジオンはアデラの顔を覗きながら、目を細めて、人差し指を自分の口にあてる。

「えーーーーー……?!」

この告白にも更に驚く。

「……いつも、凜とした風情でえ……落ち着いた眼差しと口調でえ……高名な魔導師でえ……。——でも……女性関係は俗まみれ……ねえ……」

少々放心気味のアデラを、引っ張るように青い液体を辿るロジオンは苦笑いをしながら、話を続ける。

「師匠の言葉を借りれば、『女性は神秘の宝庫、探求し続けても分からない事が増えてくる』だって……。今、思えば女性と縁を切る為の言い訳だよねえ……」

「——本当ですよ!! 全く!!」

放心から覚めたアデラは、生前のコンラートに過大評価があったと憤慨しているようだ。

「……で、その師匠が、『もう放浪生活は終わりにしよう』と……入った国が、この、エルズバーグだったんだ。……入って驚いた……何か……街の中、吃驚箱……」

その表現に間違いはないな、とアデラは笑った。

異国の商品が惜しげもなく並び、異民族の衣装を色んな肌の国民が好きな風に着込んで、異国訛りの言葉が街を飛び交う『商人と職人』の国。

街を造る建物も市や地域によってその風情が変わる。

概観もあるので、その辺はまとめる様に指導があったのだから、観光に来た者達には、1つ市を股いだら……別世界で肝を潰した……なんて話もよく聞く。

「王宮に通されて……この王の下に仕えるのか……何て考えて謁見したら、突然『ロジオン、この方達がお前の両親だ』なんて師匠が言うんだもの……」

「……さぞ、驚かれたでしょうね……」

「驚いたも何も……」

その時の事を思い出したのか、ロジオンは大きく肩を揺らし溜息を付く。

「父上と母上は、師匠が王宮を訪ねて、謁見した時点で僕が何者なのか分かったらしいけど……」

アデラはそうだろうと頷く。

ロジオンは銀髪にブルーグレイの瞳、そしてその端正な顔立ちは、第二王妃のそれとよく似てる。

王妃の若かり日——そのままだったのだろう。

「師匠が王の子の証だという、産まれた時に贈られる、植物や虫が入った琥珀のブローチを見せてさ……そんなの持っていたのか……師匠？ ……って眩暈がしたよ」

「……そうでしょうね……」

その様子を想像してアデラは苦笑する。

「よく思い出したら、師匠が指さしていた方角はエルズバーグの方向なんだよね……。ああ……もっと追求すれば良かったなんて、つらつら思っていたら……両親には泣きつかれるし、あれやこれやと王子らしい格好をと着飾られるし、いきなり兄妹ができて、ずっと一緒に過ごして来た様に振舞うし、帝王学だの貴族の作法だの毎日目まぐるしくて」

「……」

「——こちらは、今だに自分が王子と言う事に実感が持てないのに……。王子らしく振舞えとか……王子としての仕事をこなせとか——僕は王子である前に魔法使いとして育ったんだ……今更どうすれば良いんだ！」

激しい口調になった自分にロジオンはハツとして口を塞ぎ、すまない、と、アデラに謝る。

いつの間にか、つないでいた手が離れていた……。

相変わらず、先を急ごうと歩く早い足捌きの後ろをアデラは付いていく。

「目まぐるい毎日を過ごしていたら……師匠の異変に気付くの……遅くなってしまった……」

「……不治の病だと聞いています……。早く気付いても、同じだったのでは……と……」

「……師匠は当に気付いていたのだろう……。だから、この国に留まって、異国から流れてくる沢山の薬品を研究して、治す薬を……。僕が早く気付けば、手伝えた……。間に合ったかも知れない」

長い沈黙が二人を包む。

地を踏みしめる音と、時々響く鳥の鳴き声が耳に入るだけの静けさ……。

そんな寂しい情景の中、ロジオンの押し殺したような声だけが淡々とアデラの耳に届く。

「例え……間に合わなくても……。自分の身体からこぼれる様に消える命の灯火を、一人で耐えて行かなくてはならない恐ろしさを……。軽くできたかも知れない……。僕が僕の事だけに精一杯だった為に、ずっと側にいてくれた師匠を狂わせた……」

泣いているのだろうか……？

先程よりずっと、歩き方が早い。

まるで、追いつくな、僕の顔を見るな、と言ってるかのように……

…。

（ロジオン様、私の足が俊足な事をお忘れですか？）

アデラは微笑んで、そう呟くと、再び主の手を掴み握る。

「触らないでよ……」

手を払おうとするロジオンの手の甲を、アデラは握り締める。

「——だったら、私は間に合ったのですね……」

「？ ……」

ロジオンは立ち止まり、充血した瞳をしばたきながら、不思議そうに自分の従者を見つめた。

「貴方様が師の事で後悔し、悩み、悲しみ、この世の者ではなくなつた師を一人で何とかしないとならない恐ろしさで、壊れる前に……」

ロジオンの瞳が大きく開き、湖畔のさざ波のように大きく揺れた。「私は、ロジオン様のお役に立てますよね？ ——っうん、役立たせてください。一人より二人の方が、きっと、道が開けます……ねっ……」

返事の代わりに、主の抱擁がアデラを包む。

「……王子と呼ばないで……」

「はい、ロジオン様で良いですか？」

「『様』も貴族みたいで……嫌だな……」

「ロジオン様は貴族ではなく、王族ですよ」

「——意地悪だな……」

ちよつと拗ねた風に喋るロジオンに、思わず吹き出す。

——今まで自分がやってきた事が、全て非難されてるようで嫌気が差していたのだろう——

「そのままが良いですよ……魔法使いのロジオン様で。無理矢理こなすと捻じ曲がりますもの。ゆっくり、溶けるように馴染んで行けば……。御両親様にも、御兄妹様にも、王宮に仕える者達にも……自分の出生にも……。——私がいつもお側にお仕え致します。……コンラート様のようにには行かないかも知れませんが、私は私なりに誠心誠意を持って貴方様にお仕え致しますから……」

「……そう言うこと言うと……アデラのこと、絶対に手放せなくなるよ……？ 知らないよ……？」

相変わらずのんびりだが拗ねたような風で喋り、抱擁するこの主がアデラは愛おしくて、癖のある銀の髪を優しく撫でた。

11 二人 (2) (後書き)

家庭の事情でしばらく更新をお休みします。
9/18〜19に再開を予定しています。

12 魔導術統率協会からの派遣者（1）

「……？ この先は、王家の領地と違うのかい？」

ロジオンが燦しかげにアデラに尋ねた。

「いえ、王家の領地ですが……それが何か？」

「見て」

ロジオンが指差した先。

コンラートを巻きつけた光る青の液体が、弧を描くように半回転している。

「……どう言うことですか？」

「此処から向こう側には、強力な結界が張られてるってこと」

——しかも、この半回転した液体を見て注意深く探らないと、僕でも気付かない程の巧妙な結界。

じいっと、結界の先の領地を見詰めるロジオンを見てアデラは

「以前はこの先に、王領伯のお屋敷があっただんですよね……。お

世継ぎに恵まれなく、伯が没後、王家に返還された土地なんです」

と、事も無げに言う。

「……まだ、当時の屋敷は残ってるの？」

「はい、そのはずです」

「そこに誰か住んでることって、有り得る？ ——よね？ 誰か管理してるわけじゃないんでしょう？」

「普通は、扉や窓は厳重に鎖を掛けますから……普通は無理でしょう」

「普通はね……」

そう、ロジオンは言うと言ったかのように、ゆっくり結界の向こうに片足を入れた。

何か弾ける様な音が、結界に踏み入れたロジオンの足の方から聞こえ、アデラは仰天する。

「ロジオン様!？」

「……あ……うっ……」

ロジオンは自分の足に纏わり付くように走る、雷のような痛みに耐えながら何か呪文を唱えていた。

「L? h t e ? (去れ)」

呼応するように響くロジオンの声にアデラは、固まった。

大気に反響させ、幅広い地域に魔法効果を行き渡らせる『音波魔法』

身体の芯に響く声の筋にアデラは歯軋りをし、堪える。

突然、緊張の糸が切れたかのように止まり、詠唱が終わったのだと彼女はほっと安堵した。

「気持ち悪かった？」

ロジオンが苦笑いを浮かべアデラに尋ねた。

「……申し訳ございません。初めて聞いたものですから」

「これ（音波魔法）が苦手な人は結構いるよ。硝子を引かく音に似てるんだよね」

もう、大丈夫と彼はずかずかと結界が解けた先を進む。

——少なくとも——

ぼんくらじゃない。魔法に関しては。

アデラはロジオンの後姿を追いながら、そう呟いた。

*

「ロジオン様。コンラート様は追わないのですか？」

「追っよ」

「しかし……」

進んでいく先は、方向から言って今は無き王領伯のお屋敷。

コンラートが付けた青い光は、ぐるっと迂回して違う方角に付いていた。

「……誰かその屋敷に住んでるんじゃないかな？」

「聞いたことはありませんが……王家の所有になってる屋敷ですから、許可無くても使えそうな王家筋の方が利用しているかも知れませんね」

「だけど、それが何か気になるのか？ 疑問詞が浮かんでいるアデラに、ロジオンは

「あれだけ強力な結界を張っていたことを考えれば、僕と同等か、それ以上に師匠の襲撃を受けていた者がいる可能性が高い。勿論、ただの用心かも知れないけど。師匠を跳ね返す結界を張れるんだ——誰なのか知りたと思わない？」

悪戯な瞳を見せる。

ブルーグレーの瞳を輝かせて同意を求められては、アデラは何も言えない。

それに——

上手くその者に出会え、交渉次第では助力を得られるかも知れない。

感謝祭も近い。早いところ何とかしないとならない。

のんびりとした風情のロジオンだが、やはり気が急いでるのだろう。

「……へえ……」

手入れの行き届いていない、雑木林を抜けると急に視界が開けた。そこには、短く刈った芝に深まる秋の光景に彩りを乗せる草花達と、白い石を切り揃えて、配列させ、積み上げて完成させた背の低い小さな古城。

やはり使われているようで、窓や扉には鎖が掛かっていなかった。

「御伽噺に出てきそう」

ロジオンは、楽しそうにアデラに同意を求めた。

「ええ、本当に。 女性が好む形容ですね」

「いるのは女性かな？ 美人だと良いなあ、アデラみたいな」

「——ロ、ロジオン様、そ、そんな私は！ びっ美人と言う風貌ではありません！」

突然口説くような、台詞をあっけらかんと言われアデラは顔を赤らめ必死に否定した。

この人は、魔法使いの職に就かなかつたら何になっていたのだらう？

何となく他の職が分かる気がしたアデラだった。

「こんにちは」

事も無げに、扉のカリヨンを鳴らし中の住人が出てくるのを待つ。暫く待ってみたが、何の応答も無い。

「いないみたいですネ……」

アデラが何回か鳴らしてみるが、一向に出る気配が無い。

「使用人くらい出てきても良いのに…… 無断で利用して出て来れないのでしょうか？」

じいつと城を見ていたロジオンは、首をちょこんと傾け目を伏せていたがアデラに返ろう、と促し元の道を引き返す。

小走りで主人の後を付いて行ったアデラは、近付き

「宮廷に戻ったらこの今の城の住人に付いて尋ねてみます」と話した。

「……うん……でも、僕が直接聞いたほうが良いかな……」

「——？ 何故ですか？」

尋ねるも、そう告げた本人もどうやら釈然としない様子だ。

「……何かこう……僕の……知り合いみたいな感じが……」

「そうなんですか？」

「それがよく分からない……」

うーんと唸りながらよそに神経が集中しているせいか、途中、石につまづくロジオンを見てアデラはやっぱり盆暗かも、と思った。

*

湖の周りは、吸い込まれるように木々や草花達が集まる。当然、木々や草花になる実や、蜜を頼りに鳥や虫達が寄ってくる。

止めどなく湧き出る泉は、冷たく透き通っていて、水の中に生息している水草達が流れに乗って絶え間なく揺れていた。

飲料に使える水は、透度があり過ぎて微生物が住めない——当然、それを主食にする魚は住めない。

その透明度は、長い時間歩いてきた二人の喉の渴きを潤すよう、誘っているように見える。

しかし、ロジオンは首を横に振り、アデラが背負って来た皮袋から瓶に入れてきた水を飲むようにアデラに告げる。

代わる代わる瓶の中の水を飲む二人。

「……まさか、この池の中に居るのではないですよ……？」

そう言っアデラは池を覗き込む。

しかし、見えるのは水草のみだった。

「居ない事を祈るよ……さすがにこの季節に水浴びは避けたいもの……」

おとぼけて言うが、顔は至極真剣だ。

——近い——

この湖の周囲に居る……。

懐かしくも恐ろしいこの気配……。

青く光る液体は既に底について、池の手前で終わっていた。

此処まで来れば、気配で探れる、と、ロジオンは神経を研ぎ澄ませて周囲を散策する。アデラはその後ろを黙って、付いていく。

暫く歩くと、湧き水の出所にたどり着く。

「池の中から湧いている訳じゃないんだ……」

一人心地に眩き、身体を起こすと目の前の岩山に目を向ける。

草木が岩から生え出ている、一見こんもりした小さな山をつくっていた。

水はこの岩山の底から湧いているようで、かがんでよく確認してみればやはり幾つもある小さな切れ目から水が流れ出ている。

無言で歩くロジオンの顔が段々と険しくなっていくのにアデラは不安を感じ始めていた。

何かある

何か問題が発生している――

「ロジオン様……?」

「これほど澄み切った池なのに……精霊の応答が無い……。念頭すべきだった……」

ロジオンの無念に満ちた呻きに答えるように水面が揺れた。

「コンラート師がこの池の精霊を襲ったと……?」

「取り代わった……と言うべきかな」

探るようにゆっくりと歩み始めたロジオンの後をアデラは付いていく。

「『水』の精霊王に戦いを挑み、認められた師匠だもの……。知能は落ちても力はそのまま。関与しやすい上に普通の水の属性の精霊じゃあ……敵う訳が無い……」

「――では、コンラート師は!」

「……うん、実質、この池の精霊……。すぐには無いけど、この池の姿もゆっくりと変わっていくだろう……。支配する精霊に見合った形に……」

命の保護を求めるように池の周辺に寄せ集まる草木が今は暗い物に見えた。

*

「いかがしますか？」

「聞いてみたいな……水の精霊王に……」

さらりと言うロジオンにアデラはあんぐりと口を開けて見つめた。

「そんなに驚くこと？」

と笑いながら相変わらずの平坦な口調で首を傾ける。

「そ、そんな簡単に会ってくれるものなんですか？」

「んー。師匠が存命の時には、ちよくちよく会ってたけど……あの禁令から何度か呼んだんだけど姿を表してくれてないよ……。力不足なんだよね、ようするに……『あんたにや十年早い』なんて暗に言われてるようなものだよ」

ロジオンは力が抜けそうな溜め息をすると肩を落としながら自分の荷物を下ろす。

「——でもさ……。そう言うわけにも行かないでしょ……ちよっと僕、切れぎみだし……是が非でも聞かないと……」

ロジオンの唇がきつく閉じられ、じつと池を見つめる。

より一層の焦りの色が見て取れ、アデラはただ黙って頷くしかなかった。

当たり前だ。

コンラート師は弟子のロジオン様の身体に執着して乗っ取ろうとしていた——その赤子並みに落ちた思考で。

だから、他の人間に乗っ取ろうなんて思わないだろうと——そう考えていたのに……。

精霊を乗っ取るなんて……。

「では……」

ロジオンは徐に両手を軽く前にかがけ詠唱を始めた。

凄まじい『気』——びりびりと身体に響くのにアデラは驚いて自分で自分の身体を抱き締めた。

ロジオンを見ると彼の足元が明るく光だし円を描き徐々に広がっていく。

下から柔らかく風が靡いているのだろうか——ロジオンの長めの前髪と丈の短いマントが上に向かってはためいていた。

「ロジオン様……」

反響する場所ではないのに、響く声。

光と風に包まれているような中にいる自分の主がそのものが召喚されてきた者に思える。、別の世界の住人の様に神々しい……。

綺麗だ——。

アデラの率直な感想だ。

アデラ自身魔法は使えないが定期的に行われる実演訓練で王宮に仕えている魔法使いや魔導師達と共に参加する。

魔法使いや魔導師達も二手に別れ攻撃・防御・支援を行うので実際見たことはあるが、召喚系はこの目で見たのは初めてだった。

ただ、呆然と魅入っているアデラの後ろから肩を叩くものが居て、ギョツと振り向く。

そこには怜悯な眼差しをアデラに向ける背の高い男がいた——。

12 魔導術統率協会からの派遣者(1)(後書き)

今日から9/22まで毎日更新予定です！

13 魔導術統率協会からの派遣者（2）

「――何者！」

アデラは反射的に飛び距離を取り相手を見つめる。剣の柄を掴み、臨戦態勢に入った。

「凄い跳躍ですね。まるで猫のようだ、驚きました」

そう男は言うが、口調といい、表情といい、驚いているように見えない。

――この男……只者じゃない。

瞬時に悟った。

生前のコンラートに似ている雰囲気はあるが、油断できない何かを持っている。

じりじりと迫る男の間合いを取る為、剣を抜き、横に反れる。

「――ああ、その剣の構え方、中東から東の方ですね。でも、短いか細い剣向きの持ち方ですよ――緊張が極度になると一番馴れた形を人は取りたがりますからね……気持ちに分かりますが」

「もう一度聞く。何者だ？」

男の瞳が細くなる。

僅かに口角が上がった所を見るとアデラに向かって微笑んだらしかった。

男はアデラの問いが聞こえなかったように、詠唱を続けている口ジオンの方に視線を向けた。

そしてロジオンのいつもの口調に似た、ゆったりとした平坦な口調で

「駄目だな……あれでは水の王は招かれん」

と呟いた。

男は黒いマントを翻し、ロジオンに近付こうと歩き始めた。
先程と打って代わり、マントの留め金の部分がカチャカチャと音をたてる。

「止まれ！ これ以上主に近付くな」

アデラは横から抜いた剣を男の喉元に突きつける。
かなり背の高い男だ。

アデラもエルズバーグの女性の平均より高めの方だが、その彼女が顎を上げるほどだ。

男と目が合う。

——瞬間、珍しい紅玉色の瞳がアデラの視線を釘付けにし、目が離せなくなってしまった。

「——！？」

意思とは関係なく手から剣が離れ、落葉した枯葉の上へと落ちる。
青年は僅かに口角を上げアデラに笑って見せ、彼女の腰に手を回した。

（動けない！）

自分の意思など無関係に青年の腕の中に包まれ、自ら寄り添った。

（なっ……！ 私に何を！）

青年の瞳から目をそらせないことにアデラは恐怖を覚えた。

「魔法を使う相手の目を真っ直ぐに見てはいけませんよ。教えてもらわなかったのですか？」

自分の頬を撫でる男の手に背筋がぞわりとする。
整った顔立ちの青年のこの男の手のしぐさが、見かけの年齢に見合っていないように思えて余計に恐ろしい。

——なのに、身体も視線も男から離れることを拒絶している——

「僕の従者をからかうの、止めてくれないかな？」

*

ロジオンの声に青年は振り向き、自分より背の低いまだ少年の彼を見つめた。

「おや？ 水の王を呼び出すのは止めたのですか？」

「これでは呼び出せないと……貴方が言ったのが聞こえましたから……無駄な魔力は使いません……貴方のことだから、もう事前に水の王から話は聞いてるでしょう？」

「聞きたい？」

男の意地悪な声音にロジオンはいつもの調子を崩すことなく、彼の腕の中で硬直しているアデラの目の前で紋様を描くように指を動かす。

「——はあっ！」

身体に更迭の糸を巻き付けられていたような感覚が抜け、アデラは息を吐いた。

そして魔法を扱う者達への注意事項を忘れて、それにまんまと掛かってしまったことに、憤りと恐ろしさを同時に味わった。

『敵の魔法使い及び魔導師と目を合わせてはいけない』

——魔力の強い者になると身体だけではなく、心まで縛られ、生

きる人形となる――

（こう言うことなんだ）

まるで海の底に沈められたような冷たい感覚にアデラは呆然とした。

――ふいに背中を擦る温かい感触に気付き、それが自分の主の手だと分かり彼を見た。

「大丈夫？ 彼の意識支配は強烈だから……」

長めの前髪から心配そうに自分を見つめるロジオンの瞳は、冴えたブルーグレイの色でもこの背の高い、血を思わせる色の瞳よりも温かだ。

「申し訳ありません。油断しておりました」

「緘口令を引いてる今、同業者が来るとは思わないしね……」

そつだ緘口令――

はつとアデラは背の高い男を見上げる。

王宮内でしかコンラートの死は知られていない。

王宮内にいる魔導師や魔法使いには見かけない顔だ。

なのに、何故王宮の直轄地に魔法を使える者が――？

そんな疑問がアデラの顔に出ていたのだろう。

ロジオンが坦々と、それでいて、さもやる気なさそうに男を紹介した。

「魔導術統率協会から派遣された魔導師・ドレイク……さん。魔承師の補佐をしている人……」

*

「この場所から離れることの無いように結界を張りましょう」
魔導術統率協会派遣されてきた者は

魔導師で魔承師補佐の地位にいるドレイク。

そして本部直属の魔導師で『土』の称号を持つルーカス。
魔法使いのエマの三人であつた。

話しぶりからして、この三人はロジオンとは昔からの知り合いの
ようで、魔法使いであるエマなどは

「きゃー！ ロジオン！ おっきくなつたわー！」

と女性特有の黄色い声を出し、その大きく実つた胸をロジオンの顔
に押し付け抱き締めていた。

アデラにはムツとする場面であつたが、抱き締められたロジオン
本人が、迷惑そうに顔をそらしていたので、機嫌を取り戻し従者ら
しく彼の後ろに控えた。

「ドレイクさん、私の属性を使って結界を張つときますか？」

ルーカスと言う魔導師が池を指しながらドレイクに尋ねる。

「『土』を使って結界を張ると、周囲の生態系に影響が出る可能性
がある……。『聖光』を使いましょう。——エマ」

ドレイクの呼び掛けにエマは「はい」と歯切れ良く返事を返し指
示された位置に着く。

「結界印は表音でいきます。——良いですね、ロジオン」

「それが師匠には一番破りにくいでしょうね……」

そうロジオンを同意する。

ドレイクが詠唱を始めた。

先程ロジオンが両手を前に出し平を合わせるような形とは少し違う形で。

右手を下に上を左手に合わせて。

中からロジオンとは比較にならない強い光が光線のように周囲を照らす。

眩しさにアデラは目を細めた。

「あれが……聖光結界の土台だよ……」

ロジオンは慣れているのか、平然とその様子を眺めていた。

「あれが……」

息を飲む。

「その土台にルーカスが結界紋様を描く」

ドレイクの手の手平から放たれた光が、池の中に入り全体が光出す。刹那、ルーカスがドレイクと違う語音で唱えていた詠唱のせいかなのか、池を輝かせていた光が輪に形作られていく。

輪の中に文字らしき紋様が規則正しく並べられていく。

「下級や普通の冥府の者なら土台だけで十分なんだけど……相手は師匠だからね……何人かの魔法で重ねた方が複雑化するし……解きにくくなる」

ロジオンの説明が終わる丁度、エマの詠唱が止まる。

同時、何かの意味を表す巨大な文字が水面に浮かんだと思ったら、先に刻まれた紋様に溶けていった。

全てが済んだ後の池は、さざ波さえも起こらず、以前と変わらない見事な透明度を保ったままそこにあった。

14 魔導術統率協会からの派遣者(3) (前書き)

丁度良い区切りが見つからなくて短いです。

14 魔導術統率協会からの派遣者（3）

—— 凄い……。

王宮にいる魔導師や魔法使い達と比較しようがない。

この結界の魔法だけを見るにも、エマと言う魔法使いさえ魔導師と名乗っても、おかしくはない腕前ではないか？

事の成り行きをただ呆然と見ているしかなかったアデラだったが、はたと主であるロジオンのことが気になり、そうつと彼の顔を見る。

ロジオンはこの結界を張ることに参加出来なかった。

『僕の魔法は全て師匠から教わったもの』

ロジオンから聞かされていた話を思い起こせば、無理らしからぬこと。

ここで参加してしまえば、ロジオンが施行した魔法から結界が崩れてしまう可能性が高い。

魔法に縁が無いアデラにも、そのくらいは理解できた。

ロジオンは最初に出会った頃のように表情が全く無く、ただずっと池の様子を見続けていた。

「ロジオン」

ドレイクが近付きすれ違い様にロジオンの肩を叩く。

「君には失望しましたよ……。一年にも経とうと言うのに、一時的に封じ込めることも出来ない上に、ここに来てようやく居場所を掴めるだけだなんてね」

すみません——ロジオンの口に含んだ謝罪の言葉がアデラの胸に
痛く響く。

謝罪の言葉にドレイクは振り返り薄笑いを浮かべ、ロジオンに告
げた。

「途中、小さな城があったでしょう？ 私達は今、そこを寝倉とし
てエルズバーグ国王陛下からお借りしています。貴方もしばらくは
そこで暮らさない」

*

「ロジオン、行くわよ。聞きたいこと沢山あるんでしょ？」

と、エマが微動だにしなかったロジオンの腕を掴み引つ張っていく。

「僕等も聞きたいことがあるんだ——えっと……君いは？」

ルーカスと呼ばれていた男がアデラの方を振り向く。

「アデラと申します。ロジオン様の従者を任されております」

恭しく頭を垂らす。

あーと、ルーカスは今さら気付いたように糸のように細い目を広
げて頷いた。

「そうだった。一国の王子だったんだよな、ロジオンは。付き人が
いて当たり前だった。忘れてたよ」

どう返答して良いやら——アデラは苦笑いをする。

その時

「彼女も化け物化した師匠に狙われている……部外者じゃ無いから
……」

と、ロジオンが答えた。

「そっか……。側に仕えた故に飛んだとばかりだな」

「そんなことは——」

とぼつちりだなんて思っていない。

アデラは首を横に振りルーカスの台詞を撤回してもらおうとしたが
「彼女も来て頂きなさい」

と、言うドレイクの有無言わせない言葉にかき消されてしまい、アデラは何も言えず彼等の後に付いていった。

*

「何年ぶりですかね、ロジオン？　こうやって君と顔を合わすのは……」

「二年ぶりです……エルズバークに着く前だったから」

マントを脱いで椅子に座るロジオンは、心持ち緊張しているようにアデラは見えた。

のんびりな口調は相変わらずだが、表情は引き続き無いままで室内に入ったせいもあるだろうが、顔色も悪く見える。

いつもだらしなく座る主が、背筋を伸ばしてしゃんとしている姿もアデラは初めて見た。

「男の子は、これから一番変わる時期ね。ロジオンは王妃様に似てるから将来は美男子に決定！　楽しみ」

「……お前、それは王が酷い顔と言ってるようなもんだぞ……」

お茶を注ぎながらはしゃいでいるエマが漏らした台詞に焦るルーカス。

エマとルーカスは何気に、この雰囲気と和ませようと気を使っているのだろう。

それほどロジオンは張り詰めた。

扉の側で控えていたアデラは、そんな様子の主の横顔を眉を下げで見守っていた。

従者の自分にも茶を煎れ持ってきてくれたエマに礼を言いながら受ける。

「——やんなっちゃうな、ドレイク」

ぼそりと言ったエマの言葉が気になった。

喉を潤し、一息付いたドレイクは背もたれに身体を預け足を組んでロジオンを見つめた。

(……似てきてる、あのお方に)

光に当たると、白く輝く穏やかな波の色に似た銀色の髪。

長めの前髪に見え隠れしているブルーグレイの瞳の濃淡具合。

鼻の形

口の締まり方——疑い始めると、こと細かい顔の要素や仕草まで気になり、似ていない部分を探そうとする自分がいる。

そんな自分に溜息が出る。

(それはいずれ考えよう)

今は魔承師様のお心のままに——そう決めたではないか。

ドレイクは成長した目の前の少年魔法使いに話しかけた。

「今回、張った結界はまあ、感謝祭後まで保つでしょう。それから滅する方向でいくつもりです」

ロジオンの瞼が閉じた。

うすうす彼の決断を分かっていたかのような、ロジオンの反応であった。

「——でないと、取り込まれた精霊が自由になれません。分かりま

すね？ ロジオン」

「何時から……師匠はあの池の精霊に？」

「三ヶ月ほど前だそうです。水の王が何をしても応えなくなった頃だそうで正確だと思いますね」

「僕の召喚に応えてくれたことはないから……分からなかった……」

「当たり前でしょう。君の創る召喚陣は全てコンラートが創り君に教えたもの。精霊は得てして疑り深い。君の魔力で発動されてもコンラートの息がかかった召喚魔法じゃ、疑心暗鬼して現れるわけがない」

ロジオンの瞳がうつすらと開き、じつと冷めた紅茶をとらえていた。

「この事が意味するのは……？ ロジオン」

「相手に知恵が付いてきている……」

「そう、この世のどれにも属さない物に生まれ変わったコンラートは、本当の意味で赤子同然だった。本能のままに君の身体だけを欲した。すぐに滅するか封するか出来たら話は早かった。——でも、君は一人でやると承諾をしてしまいました。その時点で間違いを犯してしまっただけですよ」

ロジオンの隣に座っていたルーカスが、

「ロジオン、我々は君一人では無理だと最初から分かっていた。待っていたんだ、君から手を貸して欲しいと言ってくるまで」

そう初めて優しく口を挟む。

「すみません……緘口令が頭に引っ掛かっていて……王宮内で事を済ませないとずっとそう考えていました……」

「そうだとすると、王宮に仕える魔導師や魔法使いから助力を貰えたはずですよ？ 王宮筆頭魔導師のハインに話は通してありますからね」

何故、助けを求めなかった？ ドレイクの厳しい口調の詰問が続く。

自分一人でやれると言うロジオンの自惚れだと思っている呆れと怒りの混じった声音であるのは、誰の耳にも明らかであった。

「――却下されました……」

ロジオンの以外な言葉にドレイク・ルーカス・エマ三人とも顔を見合わせる。

その視線は一斉にアデラに向けられる。

驚いたアデラではあったが

「そう伺っております」

と努めて平静に答えた。

ドレイクは再びロジオンに向き直す。

「それはいつの話です？」

「半年程前です……」私達が動く陛下が知ることになります。それはお嫌でしょう？』と……それはその通りだったから……」

「……」

暫し、沈黙が続いた。

その間、魔導術統率協会の派遣者達は眉を潜め見つめ合い

ロジオンは無表情のままに冷めた紅茶を見つめ

アデラはそんなロジオンの横顔を見つめていた

15 魔導術統率協会からの派遣者（4）

『何にせよ、コンラートが君をまだ執拗に追いかけて回してるのは事実だ。おびき寄せる『餌』として君にはここにいてもらいますよ、ロジオン』

ドレイクの言い放った言葉。

その後、ドレイクを含むルーカス、エマの魔導術統率協会からの派遣者三人は固まってひそひそ話。

*

（感じ悪……）

アデラは仕官服の上着を脱ぎ、備え付けの前掛けを着、厨房のテーブルで発酵した生地を切り分けていた。

暫くここに滞在することが否応なしに決定したが、最小人数で行動することが前提なので自分のことは自分でやる。

料理はアデラ自ら申し出た。

この小城の中で一番役に立っていないと言うのは自他共に認めていたからだ。

野戦演習で早く簡単に出来る料理だって教わっていて作れる。

切り分けした生地を手のひらを使い弧を描きながら伸ばしていく。一人二〜三枚で良いだろう。

（だけど）

次々に作りながらアデラは考えに耽る。

あのドレイクと言う魔導師——何故、ロジオン様にあんな言い方をするのだろうか？

どうしても悪意があるとは思えない。

確かにドレイクの言い方だと、ロジオン様の固くなな態度が招いた結果だと取れる

だが、その後、王宮に仕えている魔導師や魔法使い達に助力を願って断られているのだから——。

そつと溜め息を付く。

部屋に閉じ籠ってしまったロジオンが気に掛かった。

与えられた部屋に付き添い、力無く長椅子に座り込むロジオンはアデラと決して顔を合わすことをしなかった。

『暫く一人にしておいて……』

絞り出したような声で一言そう告げると、俯いたままブーツを脱ぎ出した。

——湯を持ってきましようか？

——元氣をお出してください

——助力を得ることが出来てようございました。

声を掛ける言葉は頭に沢山浮かぶが、どれもこれも今の彼には適当ではないように思えて、アデラは主であるロジオンに頭を垂らし、その場を去った。

扉を閉める時、肘掛けに両腕を掛け屈した内腕に顔を埋める主の姿が見えた……。

（放つといて良かったのだろうか？）

だが、余計な慰めの言葉や、無理に元気づけようとするのは逆効果ではないかと思った。

（でも、まだ成人前の少年王子だし……）

大人の男相手のような気遣いより、抱き締めてあげた方が良かったのか――。

「何作ってるの？」

ひょいとエマに後ろから覗かれてアデラは縮み上がった。

（また気付かなかった……）

自分の周囲の気配を感じとる能力が落ちていることに目の当たりにし、再度へこむ。

それに気にすることなくエマは、アデラが伸ばした生地をまじまじと見つめている。

「これ、もしかしてチャパティ？」

「あつ、はい」

途端エマの目が輝いた。

「私チャパティ大好きなの！ 作れるんだ〜すごい！」

「意外と簡単なんですよ。フライパンで焼く分パンより早く作れるし」

「へえ〜知らなかったあ……。さすが女の子ね」

（――ん？）

――今、会話として不適合な言い回しがあった気がし、アデラはジッとエマを見つめた。

卵形の小さな顔、薔薇色の頬。

眉毛も睫毛も綺麗に揃い、小さな鼻に見あった小さなふつくらとしたサクランボのような唇。

たつぷりと空気を含み、フワフワ、クルクルの赤毛は艶々と手入れ良く背中に流れている。

腰にかけては盛り上がるスカートの形で上向きで形良さそうな尻のラインが浮き彫りにされ、惚れ惚れする。

それに――何と言っても、華奢な腰に見合わないそのボリュームある胸。

同性のアデラさえ思わず魅入ってしまう大きさだが、垂れずに保っているところが素晴らしい。

声だつて無理に出しているような黄色い声じゃない。

多少、意識して可愛い振りしているのは感じているが……。

「ねえ、私にも教えて。お菓子作りは得意なんだけど、他は苦手なのよ」

「はい。じゃあ多めに作りましょう」

（気のせいね）

アデラは快く承諾して、チャパティの種から作り始める。

「全粒粉に適量の塩を入れ、水を少しずつ足しながら捏ねます。それだけでも良いんですが人によってはオイルも入れるようです」

二人捏ねていきながら、楕円形にまとめていく。

「これで二十分程時間をおいて発酵させるんです」

「これだけ？」

「はい。発酵したら適量に切り分け、伸ばして熱したフライパンで両面を焼くだけです」

アデラは説明しながら先に伸ばした生地をフライパンで焼いて見

せた。

瞬く間に芳ばしい香りが厨房に広がる。

「こんなに簡単なんだ〜！ クッキーなんてもつと手間が掛かるのに」

やらせて、とエマは楽しそうにチャパティを焼き出した。

菓子作りの経験があるだけに二〜三枚焼いたらコツを掴んだらしく、次々と焼いていく。

アデラは横でハムを切り始めた。

「——ねえ、アデラ……」

「はい？」

「貴女、ぶっちゃけロジオンの女？」

「うわっ！〜！」

唐突すぎて、ハムを辞書並みの厚切りにしてしまった。

「っやつ！ 私は本当にただの従者！ 従者なんです！ろ、ロロロロ
ジオン様とはそれ以上でもそれ以下でも無いんです！ 誤解が生じているんですが、それは事情があつて——」

「包丁！ ほうちょー！」

手に持つ包丁をエマの前で振り回すアデラにギョツとしたエマは、フライパンを盾にして彼女に落ち着くように促した。

沸騰して顔が真っ赤なアデラを見てエマは大きな声を上げて笑い出す。

「やだ、ごめーん！ そんなに恥ずかしがるとは思わなかったわ〜。アデラって純情なのねえ」

「……」

湯が沸いたヤカンの顔のまま無言で再びハムを切り出すアデラの背中をエマはポンポンと叩いた。

*

夕食に集まったのはアデラ、ルーカス、エマの三人のみであった。
「ドレイクは魔承師様に経過報告するから室内で頂くそうだと、ルーカス。」

ロジオンに至っては、門を掛けただけではなく魔法を掛け開けられないようにしてあったとエマがブータレで戻ってきた。

「後で持っていくます」

アデラがエマに告げて、食事となった。

「ロジオンって、あの師匠を見てきてるから小さい頃からおませちゃんできー。出来てるかと思ったのよ。ごめんね」

「コンラート師は、そんなにたらし——いえ、ご婦人にご興味が？」

「あゝ、たらしで良い、たらしで。魔法を扱う人間ってさ、人付き合い苦手だし研究欲に、引きこもり、その割には向上心有りでたまゝに出世欲に向いちゃうのがお決まりなんだけど、その中じゃあコンラート師は変わってたわ。色欲バリバリの魔導師って、そうそういなかったから」

「……はあ」

「いつか子供連れてくるんじゃない？　なんて噂してたら、まだ一歳の赤ん坊抱いて本部に来たから、当時大騒ぎだったわよ」

「……それがロジオン様」

頷くエマ。

「大騒ぎしていたのはお前だけだったぞ」

「そう？　魔承師様もビックリしてたわよ？」

ルーカスの言葉にエマはけんもほろろに返す。

「では、ロジオン様はもしかしたら暫く魔導術統率協会でお過ごしに？」

「そう。まだ、おしめも取れていないから一人じゃ育てきれないって」

アデラのこめかみは大いに痛んだ。

「あの……その辺りは陛下と王妃様に多少話は伺っておりますが、コンラート師が連れてきた赤子については深く追求しなかったわけでしょうか？」

「世俗に疎いのが多いからなあ……。『赤ん坊！ 珍しい！』なんて珍獣見るみたいに一時期寄って集ってただけ」

なあ？ とエマに同意を求めるルーカスの頭をエマは叩いた。

「あんたも世俗に疎い一人だよ！ 勿論、追求した人もいたわよ。」

——特に魔承師とドレイク。コンラート師とちつとも似てない赤子だし、そこまで常識を外れているとは思わないけど拐ってきた子だったら大変だつて」

「……常識を凌駕していたんだよな……」

ルーカスが大きく溜め息を付く。

『自分の子なのか』『誰の子なのか』『何処の国の子なのか』——
問い詰めたけどコンラート師は

『自分の子なのか』↓『地上の子はみんなの子です』

『誰の子なのか』↓『私の子でもあり地上に住む全ての者の子である』

『何処の国の子なのか』↓『あつち』

半年ほど、特にドレイクと押し問答があつたが

エルズバーグから問い合わせの書簡が届き、ロジオンがその国の王子だと分かった。

血相抱える魔承師とドレイク。

問い詰め、事の真相を確認しようとしたら——。

「本部からドロ——ってわけ」

話を聞き終わったアデラは、脱力しきってテーブルに肘をついて顔を臥した。

「『一応は、預ける——と許可はしたが、黙って連れて国を出ると言う行為は如何なものか?』『魔法に関して関与はしないのは国と協会の古からの条約だが、国は才能があるからと人拐いをして良いなどと言うことは認めていない』とか——かなり責められてたもんな……魔承師様もお可哀想だった……」

当時の出来事を思い出し噛み締めながら、しみじみとルーカスは語る。

「それから魔承師は私達やドレイクにコンラート追尾の命を出してね。兎に角ロジオンをエルズバークに返すよう説得させたわけ。」

「だけどさ、言うこと聞くわけがないのよ、あのたらし」

「イタチゴツコだもん……見付かる前にドロ。見付かったらならりくらりで拒否。無理矢理連れて帰そうなんてしたら、ロジオンを使うし……」

「……えっ?」

アデラは顔を上げ、二人を見つめた。

ルーカスとエマの視線が絡む。

ルーカスはその細い瞳と同じように細い眉を下げ、エマは

「言つといた方が良いんじゃないかな。私達だって、腑に落ちない所があるじゃない? ロジオンがどこまで知ってるか分からないけど。それもあってドレイクはロジオンに対してあんな冷たいのよ」

と、淡々と言った。

うん、と悩むルーカスにアデラは確信についた台詞を告げた。

「……もしかしたら逃げるのにロジオン様を利用したのではないのですか？」

16 魔導術統率協会からの派遣者（5）

「ロジオン様、お食事をお持ちしました」

扉を叩きながら扉の向こう側にいる主に呼び掛けるが、何の返答もない。

扉に手を掛けてみるが当然開かない。

ふう……アデラは軽い溜め息をつく。

「起きていらつしゃいますか？ お話があるのです」
少しばかりの間が空きロジオンから返答があった。

「……明日にしてくれない？」

「今夜、お話ししなければならぬことなんです」

「そこで話してくれ……」

部屋に入れる気はないようだ。

最初の頃に戻ったようだ——まあ、それよりはましかな。アデラは思う。

「私、明日からお休みを頂きたいのです」

ガタン

激しい音が室内で響いたかと思いきや

「アデラ！」

「——ぶっ！」

バネが付いているのかと言う程の勢いで扉が開き、手に持っているお盆の上の食事がこぼれることを恐れ、先に脇に避難させたアデラだった。

——残念なことに彼女の鼻が被害にあった。

激しくぶつかった鼻を押さえ、涙目のアデラにロジオンは詰め寄る。

「どう言うこと？ 誠心誠意仕えるって言ったよね？ 今回の事で僕の側にいるのが嫌になったの？」

「ふぁい……いひました」

鼻痛い——この衝撃で鼻血が出なかったのは奇跡だわ、とアデラは思いながら返事をする。

「今日、言ってもう覆すんだ。そうなら、簡単に忠誠とかしないでくれない？」

何か怒ってる？

そう思うほどロジオンの瞳は、いつもの十倍は光りつり上がっているように見える。

アデラは鼻を押さえながら首をかしげた。

「しかし、お休みが頂けないとロジオン様に頼まりました亡国の呪術とか祈りとか、話を聞きにいけないのです。皆、引退して城から出てるものですから」

今度はロジオンが首を傾げる番だった。

「……えっ？ 暫くお休みって辞めるって意味じゃないの……？」

「いいえ、言葉のまんまです」

答えるアデラ。

「僕……『暫くお暇』とか『暫くお休み』とかって……半永久的に持続させたい無期限のお休みで、ようは辞めること——って教わったけど……？」

「高い階級を頂いた士官ではなく一般兵の仕官なので、そんな奥ゆかしい作法は無縁ですよ」

「……ややこしい……」

がくりと力が抜けたのか、ロジオンは壁に背を当て前髪を後ろに流す。

「王宮つて細かいしきたりがあって……面倒。アデラだつてそんな言い回しするから……」

ぼそぼそと放った言い訳には、八つ当たり半分に気恥ずかしさ半分—そんな混じりがあった。

自分を笑顔で見つめるアデラの視線から、拗ねたように顔を反らすロジオンだった。

*

「これ作つたの、アデラ？」

ハムやチーズ、野菜を巻いたチャパティに食らいつくロジオンに「はい」と頷き茶を渡すアデラは、食べ物に口を入れるロジオンにひと安心していた。

「ソースが凄く美味しい……」

「それは光栄です」

指に付いたソースをペロペロと舐める行為は、今回は多目に見よう。

「ソース……勿体無い。アデラが作ってくれた物だもの」

と、こつともニコニコされたらきつと誰も何も言えない——アデラはそう思う。

さすがに皿に溢れたソースを舐めようとしたのは諫めたが。

茶を飲みながらロジオンはアデラに告げた。

「良いよ、行かなくて」と。

「何故ですか？ コンラート師が知らない新しい魔法が作れるかもしれないですよ？」

気安い相手しかいないせいか、素足を投げごろりと長椅子に寛ぐ主にアデラはさも驚いた振りをして尋ねた。
わざとらしい態度に目を細め彼女を睨む。

派遣者が、それも魔導術統率協会の中で腕よりの者達がやってきて自分は茅の外となってしまうこと。

自分の魔法が役に立たないことに、投げやりになっているなことを見抜いている。

「……僕は『餌』ですから……どうせ」

ドレイクの台詞を思い出したのか、また表情を失い宙を見つめる。
「それぐらいしか役に立たない……」

急にアデラの顔が目の前に近付きロジオンは、そのブルーグレーの瞳を思いつきり開いた。

「しっかりして下さい！ コンラート師を自分の手で安らかに逝かせて上げると決めたのはロジオン様ですよ！ それは今まで魔法を教えて貰って、支えてくれたご恩でもあるのでしょうか？ それを魔導術統率協会からきた派遣者達にとられるのを、みすみす指を加えて見ているつもりですか！」

「……だけど……僕の魔法では……」

「だから！ 私もお手伝いします。私など、この中では一番役立たずなんですよ？ それでも、何としてでも……ロジオン様のコンラート師に対する思いを叶えて差し上げたいのです」

「出来ないよ……僕は、期待されるほどの使い手じゃあ無い……」

「出来ることを出来ないと言つのは無しです」

「……」

以前アデラに言ったことを言い返され、ロジオンは気まずく視線をそらした。

「それに……私は信じております。ロジオン様は必ずやり遂げると」

長い沈黙

長い見つめ合い

お互いまっすぐに

お互いの瞳を見つめた

「アデラ……」

「はい……」

「今……唇同士が触れそうに近いつて知ってる？」

一気に顔を赤くし、凄い勢いで離れたアデラは

「もっもっもっ申し訳ありません！」

と、腰で見事な直角を作り主に頭を下げた。

「良いけどさ……。魔法を使う者の目をしげしげと見ちゃいけないよ……視線は口元とか首にずらして。相手がどれほど強い魔力を持つてるか分からないんだから」

「すいません」

「邪な魔法の使い手だったら……好きに悪戯されちゃうよ？」

「うう……」

返す言葉もない。

「——まっ、それだけ信用されてるってことかな……？」

そうして短い息を吐くと、上半身を起こし長椅子に座り直す。
その表情は先程とは打って変わって明るかった。

「ドレイクの魔力にケチヨンケチヨンにされてへこんだみたいだ……
あの一言も効いたしね……」

「ロジオン様……」

「でも、アデラの言葉の方がよっぽど力がある。……効いたよ。そもそも……魔法は自分の実力を試す為のものじゃない……万人の為のだ。僕は師匠を自分の魔法で救いたかったんだよね」

「はい！」

ようやく二人、顔を合わせ微笑み合った。

「頼める？アデラのお祖母様の……亡国の。急かして悪いんだけど、今から行って欲しい。出来るだけ早く資料集めて戻ってきて貰いたい」

そう言ってからあつ、と気付いてロジオンはアデラに尋ねた。

「夜……一人で戻るかい？ 僕が送ってあげれば良いんだけど……」

「ドレイクが許さないとと思うから……過去に色々あったからね」

「どんな悪戯をしたのです？」

ロジオンは肩を竦めた。

「悪戯で済む問題じゃなかったみたいで……それは後で話すよ」

大体の内容は、エマとルーカスが教えてくれたので分かっている。
――が。

『ロジオンがコンラート師からどう紆余曲折して話を受け取っているか、話を聞いていないんだ』

これはこれで別な問題で、長い話し合いになりそうだし、後でゆっくり話を聞こう――アデラはそう思った。

（陛下や王妃様も交えて話さねばならないだろうし……）

「分かりました。では、ドレイク殿に挨拶をして早速参ります」

「あっ……待った」

思い立ったのか、部屋から出ようと扉に手をかけたアデラをロジオンは引き留めた。

「ついでに持ってきて欲しい物がある」

「何でしょう？」

「師匠と僕の魔法日記……」

16 魔導術統率協会からの派遣者(5)(後書き)

次の更新は一日空けて9/24です。

17 魔導術統率協会からの派遣者（6）

この人苦手だ……。

目の前で手持ちぶたさなのかペラペラと本を捲る男——ドレイクの返事を待つ。

自分が、化け物と化したコンラートの標的となっている立場。それを考えれば、いくら結界を作り動きを制限したからと言って、目の届くところにいてくれた方が守りが容易いのは理解できる。『感謝祭に家族と過ごせそうもないので、今のうちに帰省したい』と彼に告げた。

（実家に戻るのは嘘じゃないし）

自分の要望を受け入れるべきか考え込んでいるようだ。意味もなく本を捲ってはパラパラと流す。

その様子は受け入れられない要望で不機嫌に見えるが、眉一つ動かさない無表情さではアデラには見当がつかなかった。

何気に本を捲る彼の指を見つめる。

長く形良い指先だ。

だが首の太さや繋がる肩に上着から見える鎖骨のライン見るにひ弱な体格ではないと見て取れた。

黒で統一された服に沿うように黒髪が肩に流れている。顔の造形も非の打ち所がない。

——何より

その珍しき赤い瞳——

うつ向き、黒い睫毛に見え隠れするその瞳は、闇に生る赤い果樹のようだ。

こんな男が王宮に仕えたら、さぞかし女達が色めき立つだろう。

（どうにも自分は苦手だが）

平坦な口調にあまり変化の無い冷たい表情。

主である以前のロジオンのそれとよく似かよっているが……。

意識支配された時に頬に触れた手。

生理的に受け付け無かった。

何か奇妙な違和感があった。

（状況が普通じゃなかったからそう感じたのか？）

——ロジオン様の方が絶対可愛い！——

本人が前にいたら茹で蛸に変わってしまう思いだ。

パタン
本を閉じる音にアデラはドレイクの顔に視線を向けた——視線は瞳をずらして。

「良いでしょう。ただし、明日の日が隠れるまでにこちらに戻るよ
うに」

「ありがとうございます」
ドレイクに礼を述べ頭を下げるアデラだが、内心は困った。

頼まれた魔法日記は帰りに取りに行くとして、ここからまず王宮
に向かうにしても徒歩だと結構時間がかかる。

取り合えず夜中に王宮の自分の寄宿舎に戻り、朝早く城を出るつもりでいた。

王宮から自分の実家までもなかなかの距離で徒歩だと一刻ほどかかる。

それから伝を辿り祖母の縁の者を訪ねて……。

——日じゃ無理！——

自然、冷や汗が出る。

取り合えず、まだ親交のある人達を時間ギリギリまで訪ねて……
アデラが一人脳内で日程を練っている時、ドレイクから声をかけられた。

見ると、あの黒いマントを羽織り金具を止めている。

「お送りしますよ」

以外な申し出にアデラは面食らった。

「——いえ！　そこまでして貰わなくても私は平気ですので。どうぞ構わずに」

「いくら王家直轄領域だとしても夜は危険です。狼や熊が出るかも知れません。特に熊は冬眠前に満腹になろうと昼夜構わずに餌を求めていきますから」

「回避の術は持ち合わせておりますから。ご心配には及びません」

アデラはエルズバーグでは既に成人である。

仕官として働き、社会人として働いても結構長い。

当然、社会に関わり対人関係を円滑に進めるべく『大人のかかわり合い』も身に付いている。

ここは紳士的な行動のドレイクの申し出を受けるべきなのだが、彼に苦手意識を持ってしまったアデラは

（気まずいから！　絶対気まずい雰囲気流れる！）

と言う本音がつい漏出してしまふ。

「早く実家に戻りたいのでしょうか。——だから送りますよ、と申しているんです」

「……送ると言うのは実家に……ですか？」

訝しげに尋ねるアデラにドレイクは

「そうです」

と、涼しげに答えた。

*

『無理ですよ！ 王家直轄領は夜間と遠園地には結界を張るんです。もし破ったら王家直属の魔導師や魔法使い達が兵を率いてやってきます』

ドレイクはそう諭すアデラの肩を抱いて

『結界にも人によって癖があります。抜け道は分かりますよ、ご心配無く』

彼は忽々とそう答えると、アデラの左手を握る。

『二人で 跳ぶ には貴女の気も必要です。 負 の気の左手をお借りしますよ』

（跳ぶ——って、空間移動のことなのか！）

足が地につく度に移り変わる景色が目まぐるしく、軽い錯乱が起くる。

足が付く地には魔法陣が光り、中に描かれた矢印が時計のように向かう方角を瞬時に示す。

空間移動——又は方陣移動と言われる高度な魔法だ。

高い魔力が無いと施行できないこの移動方法。

事前に自分が陣を作り、いざという時にそこへ移動できるようにしておく。

自分が移動する為にあらかじめそこへ出向き、陣を作らなくてはならないデメリットがある。

——だが、高名な魔導師あたりになると他人が作った陣に介入できる力を持つ者がいる——

（さすがに魔承師の補佐を務めるだけある——と言うわけか）

この方陣移動も慣れてくると面白い。

足が地に着いた瞬間に方向を示した方陣が現れ、離れたと同時に闇の草地と同化する。

アデラはこの苦手な魔導師に貴婦人並みの扱いで抱き寄せられ、身体が密着している状態にいることも忘れ、次々に出てくる方陣の振り子のような矢印に魅入っていた。

「面白いですか？」

「はい！ 地に着いた瞬間に矢印が行く方向に向いて——」

顔を上げてアデラは、すぐ側にドレイクの顔があることに驚いて彼の瞳を見つめてしまう。

横に主であるロジオンがいるかと錯覚してしまい、つい、いつものように応対してしまった。

——しかも、禁為の魔法を扱う者の瞳を見つめて。

『好きに悪戯されちゃうよ？』

ロジオンの言葉を思いだし、咄嗟にドレイクから顔を逸らし、彼の身体を押し出そうとしたが、身体を戻された。

屈強な兵士並みの力だ――。

華奢な体軀では無いが、鍛えているように見えない彼のどこにそんな力があるのか。

「魔法の施行中に戯れは止めてください。今、私から離れると何処に飛ばされるか分かりませんよ？」

「す、すまない……」

良かった――自分の意思で喋れる。

アデラはひやりとした。

「ご心配無く。やたらと意識支配などしませんよ。あの時は大変失礼をしました」

淡々としているが謝っているらしい。

「貴女が大変珍しい姿を持つので、近くで見たくなったのですよ」

「――珍しい？ 私が？」

ドレイクの歩む足が止まった。

彼がアデラから離れる。

回りを見渡すとそこは実家の歩きなれた路地であつた。

街灯に群れる虫。

細い路地に迫るように建てられた住宅。

そこから空を仰げば、隣接された家同士から張られた洗濯物を干す為の紐……。

二・三步足を出す、地に着く度にもう光る方陣は現れることはなかった。

「魔法と言つのは便利なものだな……」

感嘆の息を漏らす。

「魔法と言つものは万人の為のものですから。この移動も、そもそもが移動が辛い老人の為や遠方で暮らす離れた家族に会う為、人で

は運べない物資を送るためのものでしてね」
成程な——とアデラ。

ドレイクを見てアデラは先程の彼の台詞を思いだし、改めて聞き直した。

「私の姿が珍しいとおっしゃったが……この褐色の肌のことですか？」

「褐色の肌に金の髪が大変珍しい——と言うことです。染めてはいらっしゃらない
でしょう？」

「自毛ですが……。そんなに珍しいものですか？ エルズバーグは多民族国家ですから、私のような毛等は少なからずいるものかと……」

「人の成りというものは、体内に組み込まれている法則の情報で決まるのです」

「法則……薬師がよく言う化け学というものですか？」

「似てますが違います。私どもは遺伝子と呼んでいます」

——遺伝子

以前に私の走りで驚いて主が呟いていた。

「そう言えば、ロジオン様が何やら一人心地におっしゃっていたのを聞いたことがあります」

「ロジオン……あの子も貴女と同じ、他の者達と成りが違いますから——彼の場合は第二王妃の一族が持つ『白変種』を受け継いでいます」

「耳にしたことがあります。第二王妃様のご実家は一族でそのようなお姿が多いと聞いておりますが、ご凋落され種族存続のために、現陛下に申し出て嫁いできたと同っております。確か白種族、青銀

種族とも言われていると……。しかし、ロジオン様もロジオン様のご兄弟も母君である王妃様も皆、他国ではそんなに珍しい姿なのですか？」

「国から出たことがない貴女には分からないことでしょうが、そうそういません。貴女も含めて。ロジオンは髪や瞳に青みがかかり更に輪をかけて珍しい。しかも――」

ドレイクの手がアデラの金糸のような髪をやりわりと一掴みする。

「皆、人を虜にする美しい姿だ」

「お褒めを頂戴して光栄だが、私はエルズバークでは残念ながら美女定義には外れている」

ドレイクの手をやりわりと退けアデラは礼を述べた。

「つれないな」

ドレイクは肩を竦めた。

「では、明日の夕刻に」

立ち去ろうとするアデラにドレイクは

「稀な何かを持つ者は、稀な宿命を背負う――と云われがあります」

と、徐に話す。

「――えっ？」

怪訝に眉を寄せるアデラにドレイクは、僅かに口角を上げた。

「貴女もロジオンも、そして私も――稀な姿を持つ故に、その宿命を引き寄せるかも知れません」

「……」

「――あくまでも云われですけどね」

そう告げ、ドレイクの姿は闇に溶けていった。

17 魔導術統率協会からの派遣者(6)(後書き)

次回は9/27を予定しています。

18 穏やかな一時

朝、喉の乾きに目覚めたロジオンは目を擦りながら、のそのそと厨房に向かっていた。

厨房に近付くほどに臭う、焦げ臭さに一抹の不安を覚える。

「いや〜ん、失敗しちゃったよ〜ん！」

この無駄に語尾を伸ばして喋る黄色い声……。

「エマ……何焦がしたの……？」

厨房に入ってみれば、やはりそこには無駄にフリルの付いたエプロンを身に纏うエマの姿があり、黒い物体がこびりついてるフライパンを上下に振り回し落とそうとしていた。

「あつ、おはよ〜。ロジオン、よく眠れた？」

「おはよう……。で、それ、何？」

「目玉焼き〜。焦がしちゃった」

しっぱ〜い！ と舌を出して朝から絶好調にキャピキャピしているエマを朝から見ると、無駄に疲れる——ロジオンは心の中でそう呟くと「貸して」とフライパンを受けとると、フライパン返して焦げを削ぎ落とす。

「堅焼きにしたかったの〜。わたし、半熟苦手だし〜」

上目使いで首を傾げながらロジオンを見つめ、言い訳をするエマにロジオンは背筋の寒い思いをした。

（慣れないなあ……）

以前のエマをよく知っているだけあって、どうも態度が硬化して

しまう。

それでもなるべく平静を保とうとロジオンは努力していた。

「フライパンをよく熱して……油を少し多目に引くの。最初の片面を長めに焼いて……しっかりときたら返しを使って卵をひっくり返して……」

ほらっ——と、エマに見本を見せる。

「へえ」。ロジオン相変わらず器用ね。王子として生活しててもご飯は自作なの？」

「……何言ってるの。生活全般の家事やらなすぎるんだよ……師匠もエマも含めて他の魔法使い達は」

溜め息を付きながら、焼けた目玉焼きを皿に乗せる。

「だって面倒く。食べたら皿洗いもめんどく」

「腰振る暇あったらハムでも切って……そのくらい出来るよね？」
色仕掛けなのかただの癖なのか、無駄に腰を振り続けるエマに淡々と告げると、ロジオンは次々に卵をフライパンに割り入れた。

*

アデラの実家、ピアス家は縦長に並ぶ住宅街の内の中にある。

中流家庭そのものの家庭。

だが、今は亡き祖母には勿体無いくらい裕福な生活に思えたらしい——いつも太陽に向かって感謝の意を示していた。

いつでも祈りが捧げられるよう屋上を作り、一日の大半をそこで過ごしていた。

祖母が屋上に持ち込み、植えた色とりどりの草花をアデラは祖母の顔と重ねて見ていた。

国の恩義に応えるため、次世代のアサシンを育てようと躍起になつていた祖母。

今は祖母のかつての仲間達が育てたアサシン達が影で暗躍している……。

「お姉ちゃん、ここにいたのね。何してるの？」

屋上に続く階段を登ってきたのは、妹のラーレだった。

「あら、ラーレもお休みだったの？」

「感謝祭近いでしょ？ 休暇と言う名の巡回よ」

職業が自由に選べるエルズバーグでも世襲制は存在する。

アサシンの家系はアサシン——アデラがアサシンを降りた現在は妹・ラーレが受け継いでいた。

肩まである素直な黒髪を揺らし、ラーレはアデラが腕に下げている籠の中を覗く。

「ハーブ摘んでるんだ」

「お祖母様からのハーブは香りが高くて評判が良いからね。手土産に持っていくの」

「母さんから聞いた。第五王子に頼まれてるんだってね」

手伝うよ——と、ラーレもハーブを摘んでは籠に入れる。

「でも、よく懐いたね。悪臭王子」

「懐いたって……犬や猫みたいな言い方を……」

「だって、今までずうずうつと付き人拒否してたじゃない。もう噂だよ？ どう手なずけたのかって」

「ああ……」

アデラの肩は溜め息で揺れる。

ラーレは普段はアサシンとしての顔を隠し、王女達のその他大勢の侍女をしている。

どうロジオン王子を懐柔したのか——あの噂が王宮中飛び交っているのだろつ。

「恋愛音痴のお姉ちゃんに限って、誘惑して懐柔させたなんて私は信じてないけど」

「そのまま信じないでいて」

「うん、お姉ちゃんに女の色香を使って相手を手込めにするなんて無理無理」

「そうそう」

ちよっぴりグサツときたが事実なので素直に頷くアデラ。

「やるとしたら拳で言うことかせる感じだもんね」

「……」

「いくらお姉ちゃんでも、王子の身分の人にその辺のガキンチヨ相手するみたいに拳を振らないよねえ」

キラキラと笑うラーレの傍らで、アデラのハーブを摘む指が小刻みに震えた。

その微妙な変化に気付いたラーレは固まり、姉を見る。

「まさか……マジ？」

——妹よ、さすがだ——

嘘が下手な姉。

その目は真実を物語る。

——すいません、やりました——

「しかし、陛下から『多少乱暴な手を使って良い』と許可を頂いていたのだし……」

「いやああ……だからと言って素直に拳で言うこと聞かせる？
しかも『多少』だよ？」

「うううう……。やっぱ、まずい……？」

（やっぱ、この人に女らしい誘惑は無理だわ……）

ラーレは、相変わらず不器用な姉に安堵とこれから『彼氏いない暦更新』するのではないかと言う一抹の心配を抱き、溜息をつく。

「……噂の件と、このことはお父さんとお母さんには黙っとくよ……」

「うん……そうしてくれたら嬉しい……」

「姉ちゃんたちー！ 朝飯だつてさー！」

ぎょつとして二人後ろを振り向いた。

大きな声を出し、階段からニヨキリと顔を見せた十代そこそこの少年はトニノ——ピアス家の長男でありアデラとラーレの弟である。

「もう少しハーブ摘んじやうから。先に食べてて」

「早く来てよ。父さん、久しぶりに家族揃って飯が食えるってスゲエ楽しみにしてんだからさ」

「分かった分かった」

分かってんのかな、とぶつぶつ言いながら階段を下りていくトニノを二人眺め、完全に心配が無くなったのが分かるとアデラは「トニノにも内緒だからね。あの子、お喋りだから……」

ラーレは頷きながら

「うん。口止め料は『シエルダム』の最新バックで手を打つから」と、アデラの今月の給金が全部無くなる条件を出した。

同じ職場で働くものじゃない——アデラは半泣きで承諾することとなった。

*

朝食はドレイクも共に席に着いた。

勿論ロジオンも。

二人向き合う形で席に付く。

「これはエマが作ったのですか？」

切り分けした目玉焼きをフォークに刺しながら、ドレイクは誰に
となく尋ねる。

「ロジオンよ」

エマの答えに口に食べ物運ぶドレイクの手が止まる。

無言でフォークを置くドレイクにロジオンは

「何も入れて無いよ。目玉焼きじゃあ入れようが無いでしょ？」

と、微笑む。

「昔、一服盛られたことを思い出しましたよ。まだ十にもならなかつた君が

『初めて一人で作ったオムレツなの』

と、まあ、清纯に瞳を輝かせて食べてくれと……。一口だけで即効で寝るって、一体どれだけの量を入れたんでしょうね？ 睡眠薬を、君は」

「見かけと体積が相当違うと聞いていたもんだから……超大型動物用睡眠薬を……。どの位だったかな？ でも下剤や痺れ薬よりましだったでしょ……？」

「常人だったら、そのまま目が覚めなかったんじゃないですかね」

「——ほら……それはドレイクだから、そこは安心」
「……」

ドレイクの口角が上がる。

本人的には微笑んでるらしかったが、エマとルーカス的には怖か

った。

（目、笑ってないよ！）

猛禽類のような厳しい視線の標的なのに構わずロジオンは、普通に食事を掻き込む。

ドレイクは気にもしないロジオンの態度に慣れてるのか、黙ったまま作り置きのチャパティを食べ始めた。

「ね、ドレイク。今日はどうするの？」

食休みの茶を飲みながらエマはドレイクに尋ねる。

取り合えず感謝祭まで池の中に閉じ込めておける結界は張った。

次は完全にコンラートを封するか滅するか――。

「コンラートは滅する方向と決定している。その一番有効な方法を考えねばならないな」

代わりにルーカスが答えた。

「取り込んだ水の精を傷付けずにコンラートだけを滅しなければなりません。それ相応の準備が必要ですね」

「やっぱ『聖光』？」

エマの台詞にドレイクは、ようやく瞳を細める。

「切り離すために『餌』がここにいるのですよ」

「『餌』でーす」

相変わらず呑気な口調でロジオンは手を上げた。

「本気で罠にするんですか？」

ドレイクの隣に座っていたルーカスが身を乗り出し問う。

「そうよ。失敗したらロジオンがコンラートになっちゃうじゃない。嫌よ」エロ親父系ロジオンなんて」

「エロ親父……」

新たな異名が生まれそうだと、違うところで内心ビク付いたロジオンだった。

「やれやれ……」

ドレイクは立ち上がると、呆れたように三人に向けて言い放った。

「何の為に私が出向いたと思ってるのしょうね？ 魔承師補佐の私が。貴方達で出来るんなら私がわざわざ出向く必要はありませんよ」

そうして

「ロジオン、一緒に来なさい」

と促すと、ロジオンを連れて、黙りこくるエマとルーカスを置いて部屋を出ていった。

「……むかつく」

唸るエマに

「声、戻ってるぞ」

と、ルーカス。

「あらっ、いっけな」

と、エマは黄色い声で舌を出す。

「エマが腹立つのは分かるが、ドレイクの実力は確かだしな……長い時間で培ってきた技も経験も、元からの魔力もさ」

「……魔力なら」

「うん？」

「ロジオンの方が高いわよ」

ぼつりと言ったエマの台詞にルーカスも「うん」と頷いた。

「だからさ、魔承師様も色々と考慮して我々も派遣したんだろう？」

「

「それもドレイクは嫌なんだろう。やんなっちゃう！」
ブツクサ言いながらエマは窓の外を眺める。

マントを羽織り、既に外を歩いているドレイクとロジオンがいた。

18 穏やかな一時（後書き）

次回は9/29です。

19 代償

「ドレイク、今夜、用で城を抜きたいんだけど……」

キビキビと歩くドレイクの後を付いていきながらロジオンは頼んでみる。

「花火の試し打ちでしょう？」

「知ってるんだ……」

「駄目ですよ。当に理由も陛下を通し、伝達されているでしょうから心配いりません」

「……」

「夜は闇の力が増大します。万が一、コンラートが結界を破って襲ってきたら、庭師や花火師の者達に被害が及ぶのを君は良しとするのですか？」

「……いや」

ロジオンは首を横に振った。

「試作花火はここからでも見えましよう。コンラートの弔いも込めているなら、池の下にいる彼と共にここで観賞なさい」

「はい……」

それでも彼なりに気をきかせているのだろう。

師匠のコンラートと話している彼が好きではなかった。

恐喝と嫌みが混じった話し方。

殆どロジオンは外されて、コンラートとドレイク二人で話している姿を見ているだけで、話している内容は知らなかった。

—— 一つだけ、彼が目の前に現れることは、この地を離れる事と理解していた。

(まあ、女性絡みもそうだけど)

最後に会った二年前――

ドレイクは師に

『ようやく戻る気になったのですか。とことん自分勝手ですね、貴方は』

そう言った。

――ドレイクは知っていたんだ。

師の病気も

この国に帰る理由も。

引っ掛かっていた、ずっと。

――師匠……。

聞きたくても聞けなかったこと、沢山ある。

この人は知ってる。

――彼に尋ねても良いでしょうか？――

「ロジオン」

ドレイクと呼ばれ、示した方向に目を向ける。

「私が張った結界を『壊した』のは君ですね？」

「ああ、ドレイクが張ったんだ。どうりで師匠が弾かれたわけだ」

「全く、無理に解いたから、あちこちに残ってるじゃないですか」
右手を振り払うように小刻みに動かす。

「張り直しできる？ 手伝うよ」

「結構です。君が張る結界だとコンラートが侵入してしまう」
「じゃあ……違う結界、教えてよ」

ドレイクが無言でロジオンに顔を向ける。
彼のあまり見られない驚いた表情に、ロジオンは苦笑する。

「そんなに驚くこと？」

「大いに驚きますね。君が私に教えを乞うなんて。ただ……」
「ただ？」

「教えを乞う態度じゃありません」

「きちんとした態度なら教えてくれるの？」

「どうしましうかね」

にやりとドレイクの口の片端が上がった。

「だと思った」

ロジオンだとて彼の性格を全く知らなくは無い。
それに――

「一人の師と仰ぐ人から基礎から教えて貰い、もう一人立ち出来る君がまた、他の者から教えて貰うには『代償』が必要です」
とドレイク。

『代償』

――魔法を扱う者同士が、魔法の技を乞う際に発生する取引。
土台と言うべき基礎は共通であるが、そこから先は自分が『師』と崇める人物が築いた魔法を教わる。

所謂――継承制。

大抵は四大元素を代表にあらゆる魔法が施行出来るようになるまで、師の元で修行を積んでいくが、魔法を使う者だとて人―得意・不得意が生じる。

自分の師が苦手で自分に身に付かなかった場合や、他の者達の魔法を見て会得したい。

だが、教えを乞いに行くにも師の恩義もあるし、相手にも魔法を造り出したプライドがある。

おいそれと簡単に伝授させるわけにはいかない。

そこで、教える代わりに『代償』を相手から貰うのだ。

最初に伝授する側がそれ相応だと思う『代償』を相手に掲示する。伝授して欲しい側がそれを聞いて、受け入れるかどうかを意思表示する。

魔法の技術を広く進め、世に貢献する取引なのだから『昇華』と呼ぶべきだと唱えるものもある。

――が

それが通貨であったり、品物であったりする時もあるが、他の、例えば労働であったり魔法技術の交換であったり、形あるものだけに限らない。

世俗に興味がないのが多い為か、道德観や道理から離れた者もいる。

逆に欲にまみれた者もかり。

恩師の命や

教えを乞いに来た者の身体や魂を要求する者もいる。

遙か昔に一国を築いた魔導師が、新しい魔法に惹かれ他所から来た魔導師に教えを乞いたら、国を引き換えにされたと言う記述も残る。

教えを乞う側が身体・精神に痛みを伴う場合が多いことから今だ『代償』と言われていた。

——とは言え、そこまで酷い取引は滅多に無い。

教えを乞う側もそれに対し拒否も可能であるし、代わりを提示できるからだ。

大体のやり取りを交わし、お互い納得済みで『代償』が決まる。

（……と言っただけどね……）

ドレイク（このひと）は何を提示するか――。

でも、自分で魔法を創り出すのにヒントが欲しい。
師匠を滅する方向じゃない魔法。

（ドレイクの知識と経験は底知れない）
と師匠が話してくれたその魔法――知りたい。

「ドレイク。『代償』の提示を」

*

「そうですね……」

ドレイクは顎に手をやり、ロジオンを見つめた。

何か思い付いたのか、僅かに口角を上げ顎に付けていた手を下ろす。

「土下座して私の靴下を舐める――は？」

——何それ――

ロジオンは無言で首を横に振った。

「コンラートがいる池に放尿」

「……取り込まれてる水の精に失礼です……」

自分の師匠のなれの果ては、どうでも良いらしいロジオン。

「感謝祭に城のバルコニーで腹躍り」

「僕的には良いんだけど、あれは腹に贅肉付いてないとウケないから、やり損」

「ビヤ樽、腰に付けてエルズバーク一周」

「ど根性は柄に合わない」

「……教えを乞う側なのに我が儘ですなぁ」

ドレイクが呆れたように深く溜息をついた。

「羞恥プレイばっかじゃん……」

「今までの鬱憤が溜まっているのですね」

と、ドレイクはロジオンに影のある笑いを見せる。

——今までのこと、かなり根を持つて——

(……この人やっぱり暗い……)

自分がドレイクにやらかしたことは忘れ、ルーカスに頼めば良かったとロジオンは思った。

「——あ……、じゃあ、こんなのはどう?」

「何です？」

何か良い『代償』を思い付いたらしいロジオンが、ドレイクに揭示する。

「王宮に仕えている美女百人に囲まれた、ハーレムな生活」

「……過去にコンラートが揭示した『代償』が、男性全てに当てはまる願望だと思わないように」

「ええ！ そうなの？ 僕は……結構嬉しいけど……。でも百人は相手にできないな……。うゝん。頑張つてせいぜい五十人……。うゝん」

——あの師匠にこの弟子あり——

ドレイクは深く長い溜息を付く。

「ドレイクは、女の人に興味が無い訳？」

「常人の女性には関心が無いだけです」

「……じゃあ……やつぱり……」

「——何です？」

ロジオンの自分を奇妙なものを見る眼差しが、ドレイクは気になった。

——コンラートから、何か変なことを吹き込まれている雰囲気はしていたが……。

「人の女性の好みにケチは付けたくはないけど……。爬虫類の雌を好んでも……僕は用意ができないんだけど……」

寒い風がドレイクの身体を吹き抜けたような気がした。

「……ロジオン」

「ん？」

「この件が済んだら、じっくり腰を据えて話し合う必要があるようです」

*

「ドレイク。もう真面目に『代償』を掲示してくれないかな？」

「最初の方は大分真面目でしたが……」

(……真面目だったんだ……あれ……)

冗談かと思つて返してたよ……ロジオンはブツブツ呟く。

「そうですね。本音を言わせてもらえば、コンラートの魔法日記を
所望したい」

「魔法日記……か」

魔法日記——魔法を駆使用する者達の命と言われる位、魔法を使う
者には同等に扱われる。

アキレス腱だ。

——故に、自分以外分らない場所か、見られても平気なように
自分しか分らない暗号で書かれる。

過去の先人達の魔法日記が手に入った場合、これ幸いと皆、必死
に解読し、自分の魔法とするのだ。

——それ程、自分の『魔法を創る行為』は難しい。

「良いよ。魔法日記……」

あまりにあっさりと承諾したロジオンに、ドレイクの赤い瞳が見開く。

「見越して、今日アデラに持ってきてくれるよう頼んであるから……来たらず」

「形見だと言える魔法日記に、随分と執着の無い……」

「日記に記された魔法は……全部覚えたから」

「——何だって？」

さらりと言ったロジオンの言葉に、ドレイクは信じられないと言う風に言葉を返した。

「コンラートの今までの魔法の記録を全て？ 攻撃も？ 他の属性の魔法も全て？ ゆうに五十年分はあるものですよ？」

「うん。出来るかどうかも試してみたし……。僕にとっては覚えやすいんだ……師匠の魔法」

生きて十六年目に入ろうとする少年が、約五十年分の師の創り上げた魔法を全て理解し、施行出来ると言うのか。

そら恐ろしい——

「ただ……」

「？」

ロジオンが片眉を上げて困ったようにその眉尻を掻く。

「攻撃魔法……かなり威力弱くて……。強い威力のやつも、ちゃんと施行してるのに……何でなんだか……」

「仕方ないでしょうね」

「？ 何が仕方ないの？」

さらりと答えたドレイクに、ロジオンは少々ムツとする。

「コンラートがそう教えたからです」

「……師匠が……？」

どういうこと？——訝しげな視線を投げつけるロジオンから、ドレイクは顔ごと違う方向に向き、じつとそちらを見ながら言った。

「……丁度、良い演習材が向こうからやってきましたよ。試してどこが悪いのか確認してみたら宜しいでしょう」
ドレイクの視線の後を追うと、そこには中規模隊位の人の数がこちらに向かってきていた。

「……えっ……！」

先頭で一際立派な馬に乗るのは——

「——父上……！」

19 代償（後書き）

次回は明日9/30です。

今回のドレイクの代償ネタ、なかなか思いつかなくて蒼井りゅう先生とふじやましのぶ先生にご協力いただきました♪
突然の相談にかかわらず、色々と使えそうなネタ提供をありがとうございました。

20 親と子と

訪れたのは、ロジオンの父親であるエルズバーグ国王陛下だけではなかった。

馬車から母親である第二王妃。

それに妹であるアラベラ王女様とイレイン王女様

それぞれ各護衛に侍女。

それから

「王宮付き魔導師と魔法使い……？」

後ろからある者は馬やロバで。またある者は徒歩で。

——そして方陣移動で。

それは王家の付き人より多い人数である。

馬から下りた父・国王陛下は短く揃えた白髪が多い顎髭を撫でながら、第二王妃と共にロジオンに近付く。

「あゝ良い。ロジオン、ドレイク、面を上げい」

右手を胸に当て、頭を下げる略式のお辞儀をしている二人に陛下はそう告げた。

顔を上げると、見晴らしの良い木陰に侍女達が組立式の椅子とテーブルを組み立て、茶の用意をしていた。

「……あの、一体何をしに……？」

ロジオンは後ろでこちらをじっと見つめている、王宮魔導師や魔法使いの痛い視線を感じつつ、父に尋ねた。

「まあ、ロジオン。その話は後だ。僕はお前に言っただけのことであってやって来たのだ」

「はい……」

察しは付いていたので姿勢を正した。

「ドレイクから話は聞いた。一年も何故黙っておった？ 知れば儂が心労でも起こすかと思うたか？ 其ほど歳は取ってはおらんわ」

「……申し訳ありません。迷惑はかけたくは無かったのです……」
静かな口調ではあったが、激昂しているのは投げ掛ける言葉の波状で分かった。

「もつと大事になるところであつたのは分かつておるのか？」

「はい……ドレイクにも嗜められました。真摯に受け止めます……」
父の怒りが伝わったのか、ニコニコと母の第二王妃にまわりついていたアラベラ王女様とイレイン王女様が、母のドレスを握りしめ眉を下げた。

頭を垂らしていたロジオンの肩に父の手が置かれ、驚いて顔を上げるとすぐ側に父の顔があった。

今でも泣きそうになるのを必死に堪えて、深い皺を刻んだ顔がクシャクシャになっていた。

——だから、言いたくなかったんだ……。

父の顔を直視できなく、ロジオンはうつ向いてしまう。

（自分のことで、もう悲しんで欲しくなかったのに）

師匠には感謝している。

だけど、黙って国を出たことを聞いた時、この父と母は小さかった自分が急に消えて、どれだけ悲しんだのだろうと思うと、少し師匠を恨んだ。

特に母は我が子を奪われた思いがあり、恨んでいると聞いていた。自分が亡き師匠の化け物に苦しめられていると知ったら、二人はがんとして受け入れるべきでは無かったと後悔し、更に師匠を恨むかもしれない。

後悔も恨みも広げて欲しく無い――。

だからこそ自分がやらなくてはならない。

（そう思ったのに……）

「ロジオン……僕はそんなに頼りないか？」

父が問う。

ロジオンはいいえ、と、首を横に振った。

「父上は……この国の王です……。その立場の方が、息子のこと
で……私用に権力をお使いになってはと……」

「お前は物分かりが良すぎよう……」

「しかし……」

「僕はお前に国王としてでなく、父として頼って欲しいだけだ」

胸が痛んだ。

自分の態度が一番この人を悲しませたことに。

後悔に下を向いたままのロジオンを、父は抱き寄せる。

「……ごめんなさい」

小さな子供がそつと謝るように、ロジオンは父の肩に額を付けて
そつと呟いた。

父が頷いたのが分かった。

「ロジオン……」

母の柔らかな手が触れる。

父が離れ、代わりに母が近付く。

自然と額と額をくっ付けた。

「いつの間に、わたくしより大きくなって……。二年前に再開できた時にはわたくしより少し低めでした」

「そうでしたか……？」

二年前、本物の王子だと言う証を見せる前に、その青い瞳から涙を溢し

『わたくしの子です！』

と自分に飛び込み、顔中至るところにキスをして来た母。

一目見て、すぐに自分の子だと分かる力が不思議だった。

母と言うものは皆、そうなのかも知れない——愛情を讃えた瞳で自分を見つめる母をみるとそう思う。

「たまには、陛下やわたくしの所へいらっしゃい。せつかく帰ってきたのですよ……」

「……この件が済んだら……きっと……」

ロジオンは父と母にキスをし、約束を交わした。

*

「陛下、宜しいでしょうか？」

ずっと父である国王陛下の後ろに付き添っていた男が、良い区切りだと声をかけてきた。

インテリらしく、上品な絹使用のワンピースのような服を着、端を刺繍で鮮やかにしたローブを纏っている。

男はフードを外し、整髪剤で後ろへ流した金髪を整えると、国王陛下にまっすぐと身体を向け物申した。

「我々、陛下に仕える魔法を扱う者達の嘆願を、魔導術統率協会の

魔承師補佐と言う栄えある地位にいらっしゃるドレイク殿に是非受け入れて欲しいとお頼みしたく、お願いをしに来たのが本来の目的でございます」

「せっかちな男だの、お前は。家族のわだかまりを無くすと言う感動の場面に水を差しおる」

「それ故、お待ちしておりました。後はごゆるりと王宮に戻られてからお願い申し上げます」

最高権力者である国王陛下にぞんざいな態度で返す男に、陛下はやれやれと顎髭を撫でながら、静観していたドレイクに向かって話した。

「ドレイク、主にこやつらが話があるそうじゃ」

と陛下は後ろに控えているローブの男と、更に後ろにいる魔導師や魔法使い達を指差す。

「昨晚の話なら受けるつもりはありません。ハイン」

ドレイクに名指しで言われたハイン——ローブの男は、それでも食い下がる。

「しかし！ 魔法で戦う場合、前衛・後衛で二人一組が常でございますよう？ ドレイク殿は一人で攻めも守りも行い、コンラートとやりあうつもりですか？」

「他に二人派遣されてきている。要らぬ心配です」

「相手はコンラートですよ？ しかも化け物になり、水の精まで取り込んでいる。生前より強敵である可能性が高い。私は貴方を心配して言っているですよ！」

「心配？」

ドレイクの声が、冷たい意思を含んだように低くなった。機嫌を損ねたのは間違いない。

「申し訳ない。失礼なことを……」

「私は、人の言葉を正確に聞き取れない方とは認めません。背中を預けたら『覚えていません』『聞き間違えたようです』と言って攻撃されそうですから」

——恐らく、僕の助力の件だろう——

ロジオンは、八つ当たりとばかりにこちらを睨む王宮筆頭魔導師であるハインを見た。

後からドレイクに問われても、何だかんだとそれらしい言い訳を述べることは分かっていた。

（だけど……ドレイクの後衛やりたかったら、もう少し、誤魔化しやすい言い訳考えれば良かったのに……）

魔導術統率協会直属の魔導師や魔法使いに選ばれると言うことは、魔法を扱う者にとって憧れであり夢である。

魔承師に認められ、推薦された者だけがなれる。

それ故、憧れを抱いているものは、こうやって魔導術統率協会から派遣されてきた者に推薦してもらう為に懸命になるのだ。

「不愉快な言動はお詫びいたします。コンラートの件は、いずれは私を先頭に王宮内の魔法を扱う者達で事を収めるつもりでございましたから……事前に伝達をしておいてくれたのだったら……」

——まさかこんな急に来るとは思わなかった——

言葉の端端に見える焦りを取り繕うにも、話せば話すほど彼の魂胆が見えてきてロジオンは不快だった。

事前に知っていたら、善人の仮面を上手に被り自分に助力を貸していただろう——。

（そっちの方がまだ良かったのに……どのみち烏合の衆になってい

ただらうけど……)

言い訳されている当の本人のドレイクは、自分の魔法の使い手としての実力を疑問視された発言以外の台詞は気にも止めていない様子だ。

「ドレイク殿！ 決して足手まといにはまりません。見事にフォロ―致します！」

食い下がるハインに後ろで待機していた魔導師や魔法使い達がいっても堪らずドレイクに歩みより、共に嘆願を始めた。

「お願い致します、ドレイク殿！ ハイン様の实力は確かです！」

「ハイン様なら、きつとお役に立てましょう！」

「ハイン様の魔法は、我々がこの目で見て確信しております！」

「どうかドレイク様と戦うと言うハイン様の夢をお叶え下さい！」

黙って意見を聞いていたドレイクに国王陛下が告げた。

「朝議会の席でこやつらが乗り込んできてな。ハインを囲んで儂に騒ぎ立てて困っておる」

「それはお困りでしたね」

「――それでだ。儂の提案がある。ドレイク、そちはこの提案を受けねばならぬぞ。でなければエルズバーグを守る魔導師や魔法使いが半分はいなくなる」

「内容次第ですな」

どうぞ話を、と涼しい顔でドレイクは続きを促す。

「ドレイク、一度ハインと一戦交えてみたら良いではないか。さすれば互いの实力が分かるう！」

国王陛下の言葉を聞いてからドレイクは、周囲の、既に設置された椅子やテーブルに目除け。

茶や菓子の支度に勤しむ侍女達や、より広い広場を作ろうと柴刈

りに励む護衛達を見て尋ねた。

「王宮魔法管轄の魔導師や魔法使い達が嘆願に来たのは分かりました。して、周囲の茶会の用意の意図は？」

「うむ。感謝祭の準備も臣下達が滞りなく進めておる故、中休みでこの一戦に付き合うことにした」

名誉に思われよ——脇で控えていた護衛が、澄ました顔でドレイクに告げる。

「見事な平和ぼけでいらっしやる」

と、ドレイクはわざとらしい笑いを見せた。

「今、ここに攻められたら陛下の命は無いですな」

そう付け加えたドレイクに国王陛下は、顎髭を撫でながら

「心配はいらぬ。時期国王のデイリオンは王宮に残してある。儂に何かがあっても、もう立派にやっていけよう」

とこちらも、わざとらしい笑いをしながら答えた。

（呑気だ……呑気すぎる）

ロジオンは頭を抱えた。

先程の感動の抱擁など、彼方に飛ばすほどに父王に緊張感がないし、母である王妃も切り替え早くさつさと日除けの下に設置された椅子に座って、侍女が入れた茶を飲んでいた。

長く平和が続いた臨場感漂う場面だ。

「ロジオン兄様」

アラベラ王女様とイレイン王女様がロジオンの腕を掴むと、第二

王妃の元へ引つ張っていく。

「ロジオン兄様も一緒に魔法対決を観賞しましょう」

「初めてタルトタタンを焼いたのよ。是非ご試食して」

キヤイキヤイト、嬉しそうにロジオンを引つ張っていくが

「待ちなさい」

とドレイクが引き留めた。

そうして国王陛下に

「良いでしょう。その申し出、お受け致します」と告げた。

「おお！ 魔導術統率協会の実力者の魔法が見れるのだな！ ハイ
ン、負けるでないぞ！」

と、国王陛下。

ハインも

「お受け下さるか！ 身に余る光栄。しかし負けませぬぞ！ ドレイク殿！」
とドレイクを煽る。

——だが、ドレイクは全く表情を変えることなく揚々と二人に告げた。

「ハインと一戦を交えるのは、私ではなくロジオンです」と。

20 親と子と（後書き）

次回は10/4頃を予定しています。

21 勝負(1)

——えっ？

その場に居る全員が、呆気に取られた様子でドレイクを見た。
勿論、名指しされたロジオン本人も。

いち早くハインがドレイクにもの申し出す。

「お待ちください！ 何故ロジオン王子と一戦を交えねばならないのでしょうか？」

ドレイクはその問いに、普段の彼にはあり得ないほどにつこりと
笑い

「実はですね、皆様がこちらにたどり着く前に、ロジオン王子が私の後衛をやることが決まったのですよ」

と、勝手に決めたことをシャアシャアと言いつつ放った。

皆の注目が一斉に注がれ、「いや、違う」とぎよつと首を横に振るロジオン。

「——私に違う魔法を教えてくれと言っつのは、そう言っつことです」

——習つより慣れる——

ドレイクは実践講習派らしい。

(ええええええ……だからと、王宮筆頭とやりあつのはまずいよ……)

「——ちよっ！ ドレイ……！」

異議を唱えようとドレイクに声を掛けようとしたら、先に早くドレイクにポンと肩を叩かれた。

「講習用人材です」

ぼそりと囁かれた。

「——いや、ドレイク。僕の立場上まずいから！　一応僕は王子だし、王家から見たらハインは従臣なんだ。それを考えたらハインが僕に怪我をさせないよう本気は出さないし、怪我させなくてもやりあうだけで騒ぎ立てる一族や臣下もいるんだ」

「貴方は王子でありたいのでしょうか？」

「……」

ドレイクの言葉にロジオンは口を結ぶ。

「王子でいたいのならコンラートの件は降りなさい。一切手出しはいけません。貴方が魔法の使い手として生きていきたいから、師を自らの手で何とかしたいと私に教えを乞いたのではないのですか？」

ドレイクの言い方は坦々として感情の一切がない。

その分、中途半端な自分を責めているような気がしてロジオンは拳を握る。

——もう、答えはだしてある。

生まれてから決まっていた自分の生き方。

だけど、この生き方しか無いと身体が、魂が訴えている。

ロジオンは父と向き合う。

今までとは違う顔立ち——決意した息子の表情に父王は頷いた。

「……父上、今日のことは不問に」

「うむ。一族や臣下は儂が押さえよう」

そうしてハインに向きなおす。

「ハイン、王子ではなく、魔法使いの僕として戦ってください」

「元から、そのつもりでしたよ」

ロジオンの言葉にハインは口の片端を上げた。

ひどく意地の悪い表情だったが、ロジオンは気にすることはなかった。

「魔法の被害が周囲に及ばぬよう私と、共に派遣されてきた魔導術統率協会の二人が結界を張りましょう。皆様は結界の外でご覧ください」

とドレイクが言いながら国王陛下とロジオンの妹二人を促した。

そこにハインが

「ドレイク殿、私の部下達にも張らせますから、貴方のお気遣いは無用です」

と、遠巻きに見ていた王宮魔導師や魔法使い達を指差し告げた。

「結構です」

とドレイクは薄く口を開けて笑みを作った。

「『貴方の親衛隊』ですから、私は信用していません」

そう言うドレイクにハインは、悔しそうに眉間を皺を寄せた。

*

呼ばれたエマとルーカスが結界の準備をしているその外で、ロジオンとハインを皆、遠巻きで見っていた。

「ドレイク様」

ロジオンの代わりに茶と菓子を頂き、優雅に野分きを楽しんでいたドレイクに声をかけてきた二人組がいた。

一人はハインと同じく刺繍が施されたローブを着込んだ初老の女性。

もう一人は十いくかいかないかの幼い少女であった。

こちらはフード付きの赤いマントを被っていた。

初老の女はフードを外し、片側に結わいたその白髪が多い髪を晒し、頭を垂らす。

付き添っていた幼い少女も同様の行動を取った。

「お初にお目にかかります。わたくしはサマンサと申す、このエルズバーグの王宮で魔法管轄処に席を置いております治療専門の魔導師にございます。今回、この事態に杞憂しハイン様に同行いたしました」

ドレイクも飲みかけの王家御用達の香り高い紅茶を置き、立ち上がるとこの初老の治療系魔導師に頭を垂らす。

「もう、王宮に務めて長いのですか？」

「かれこれ十年になります。治療系を専門に扱う者がなかなか入ってこないで、わたくしが頑張るしかないのが現状で……」

そう言いながら、横で控えている幼い少女の、柔らかくうねるサングレイブロンドの髪が覆う頭を撫でる。

「この子はリシエルと言います。最近ようやく熱心に学ぼうとする子が出てきまして、弟子にしましたの」

リシエルと言う少女は師に頭を撫でられ、嬉しさに頬を林檎色に染めた。

「私は魔導術統率協会の派遣者なので、込み入ったことは出来ませんが……あまり良い内情では無いようですね」

と、奥でハインに声援を送る王宮の魔導師や魔法使い達に視線をやる。

「ドレイク様は、ハイン様を見てどう思われましょう？」

ドレイクに問うサマンサの声音は憂いが籠っていた。

「まだお若いし、なかなかの色男ですからね、彼は」

「それに、お話もとても上手なのです。いつの間にか黒を白にしてみうほどに」

「——ほう？ あれで？」

ドレイクの嘲りが入った口調に、サマンサは思わず苦笑する。

「あれはドレイク様の気迫に押されてしまったようですね。さすがですわ」

そうして、サマンサは準備が終わるまで心を落ち着かせているのか、胡座をかき瞳を閉じているロジオンを見た。

「……わたくしはロジオン王子に期待をかけております。あの方が、今の魔法管轄所を変えてくれることに……」

しかし——とサマンサはドレイクに向き直す。

「王子にはまだ荷が重すぎると思っております。——勿論、この一戦も……」

非難めいた口調でドレイクに告げる。

「魔法を扱う者達の間には、貧富や身分の差はありません。……あるのは扱う魔法の優劣に魔力の差。幾ら王子が未知数の力を持つと言われていても、ハイン様を相手にするのは無謀では無いでしょうか？」

「だから治療系魔導師の貴女がこちらに出向いたのでしょうか？ ハインの派閥にわざわざついてきてまで」

「……ええ」

「ハインはこの世界の人間にしては珍しく私利私欲が強い方ですよ。我が道を行く者が多い我々の中では稀です。だからこそ、説得力のある会話術がある彼に従ってしまう魔導師や魔法使いがいるのです。よう。だが——全く周囲を気にしない者達には、口出しをしてくる彼が鬱陶しい。結果、魔法管轄所の二分化——なわけですね？」

「……魔法を扱う王家の、しかも直系である王子が魔法管轄に入ってくだされば……失礼な話かもしれませんが、身分を全面に出し纏められるのではないかと……ハイン様の唯我独尊の体制は他の管轄にも悪影響が出ているのです……」

サマンサは、ちらりと国王陛下に視線をやる。

「陛下も存じていますが、静観して様子を見ている状態です。でき

れば、ドレイク様が闘って、自惚れたあの方に己を見直す機会を作
って頂きたかった……」

「ドレイク！ 結界印完了よ！」

エマとルーカスが、防壁を作るための印を張り終えて戻ってきた。
「――では、始めましょうか」

まるで、今までの話を聞いていなかったようなドレイクの振る舞
いにサマンサは

「ドレイク様！ お考え直しを！」
と詰め寄った。

不思議そうに顔を見合わせたエマとルーカスにドレイクは、印の
外で待機するように告げた。

そうしてサマンサの方に顔を向けると

「貴女も直ぐに治癒できるよう、待機しておいてください」
と伝えた。

「……はい」

「サマンサ」

諦めの含んだ返事にドレイクはこう言った。

「怪我をするのは、ロジオン王子とは限りませんよ……？」

*

地から光の線が音もなく沸き上がる。その線が一本から二本に交
差をし、それがまた交差をし繋がり網目上に上へ横へ円上に広がっ
ていく。

ドレイクの防壁詠唱

基礎土台は『アエラの城壁』

古の神の一人であるアエラ神は、戦いを好まない平和神の一人。

地の中に眠る精力と術者の魔力を融合させ、壁を作り魔法攻撃から身を守る。

『地』の称号を持つルーカスが土台を施行した。得意な元素を持つ者が施行した方が容易いし、また、強い魔法になる。

今回の防壁魔法は、国王陛下並びに力の無い王族関係がいるため、対物防壁を兼ねた詠唱となった。

「綺麗！ お母様、綺麗ね！」

小さな王女様二人には特に評判の良い魔法防壁だ。

光の壁が繋がり、完了するとゆっくりと元の風景に戻った。

魔法を施行する前と変わらないように見えるが、魔法や対物攻撃が加わると、防壁が役目を成す。

「防壁施行時間は半刻！ それまでに決着を付けるよう！」

ドレイクの声が澄みきった空に響く。

魔法影響で見えない壁に反響しているのだ。

その防壁の向こう側でエマが

「ロジオン、頑張つて〜！」

と、黄色い声を出し応援をする。

壁の向こうなのでロジオンの耳にはくぐもって聞こえた。

壁の内側にいるのは

ロジオン

ハイン

そしてドレイクの三人のみ。

後は安全を考え、皆壁の外である。

「怪我で続行不可能、又はどちらかが負けを認めた場合、そして私
がこれ以上闘うのに了承得ない場合にて終了する——お互い、それ

で異議はありませんね？」

「ありません」

「同じく」

ドレイクの意見に二人同意する。

「——では、始め！」

一気に緊迫した静寂が周囲を包んだ。

皆、固唾を飲んで見守る中、その雰囲気が好きではない者がいた。

——エマである。

自分が戦いの中に身を投じているときは良い。

だが、傍観者の立場に変わると、この生死に関わるかもしれないと言う雰囲気を孕んだ緊迫さが苦手だった。

しかも傍観しなければならぬ戦いは、小さい頃から知っているロジオンだ。

（やば！ やばっ！ ヤバ！ ヤバイよー！）

あのすかした魔導師にケチヨンケチヨンにやられるロジオンでは無いことは分かっているが、ロジオンの魔法の弱点を知っているエマの脳裏には、拭いきれない不安が広がる。

（あゝ！ 私が今ロジオンに出来ることって……！）

——応援しかないよー！

「ロジオン！ 負けないでー！」

精一杯声を張り上げる。

「勝つたらー、えーと、えーと、私の胸でいーっぱい！ パフパフし

てあげるからー!!」

「いらないよ！ 変態か僕は!!」

「酷い…… ロジオン…… 精一杯考えた励ましかったのに……」
即、思いつき拒否の返答に、エマは土に突っ伏してへこんだ……。

それに憤慨したのは、何故かハインであった。

（あの美しい方の御褒美を、あんな言い方で拒絶とは！）

ドレイクに呼ばれてやってきた、魔導術統率協会からの派遣者エマ殿。

咲き始めの薔薇のような頬。

小さな顔に大きな瞳は、地中から掘り出された宝石のよう。

情熱を讃えた赤毛は軽やかに肩や背を跳ねる。

見事にくびれた腰

——そして

母性の象徴の胸はなんと形良く揺れるか！

（美だ！ これこそ美！ 王宮に仕えるどの女より美しい！）

——ようするに一目惚れしたらしい。

男盛りの自分より成人前のガキに、あんな羨ましいご褒美付きの
声援を受けて。

——しかも、声援を受けたロジオンは嫌な顔をして思いつき拒

絶する。

（許さん！ 許さんぞ！）

ハインは野望の炎だけではなく
恋の炎も付けてしまったらしい――

びつとハインの人差し指がロジオンに向けられる。

「ロジオン！」

「いきなり呼び捨て？」

ロジオンの台詞にお構いなしにハインは宣言をした。

「美しい女性の精一杯の応援に何と酷い言葉を投げつけるか！ これから君が受ける魔法はエマ殿の怒りと悲しみが籠ったものとなるぞ！」

「――はっ？」

「おい、エマ。お前の余計な応援が相手に火を付けたぞ……」
ルーカスの言葉にエマは
「うわぁ！ 美しさは罪なのね……ヤバッ！」
とうつとりと呟いた。

21 勝負(1)(後書き)

次回は10/6の予定です。

22 勝負(2)

ハインの点にかざした両手からパチパチと静電気が起こる。

(雷? 放電?)

ロジオンの見極めより早く音が大きく激しくなる。

それは引き続き音を激しくし、痙攣を起こした光のように時に周囲に威嚇をしながら大きくなっていく。

とうとうハインの頭より大きくなった。

周囲の感嘆の声が届く。

「これだけじゃ芸がない」

とハインは引き続き詠唱しだすと、その雷電の玉は拳くらいの大きさになって分かれ四方に散らばっていく。

「ハイン様の得意な魔法だ。初っぱなから飛ばしてるなあ」

「これくらいやらないとぼんくら王子にはわかんねーんじゃね?」

「やゝねえ。今は『悪臭』でしょ?」

早くも勝利を確信したのか、共に来た魔導師や魔法使い達はい気になってロジオンを罵倒し始めた。

魔法を扱う者達の間では、魔力や魔法の技の強さが絶対。

ロジオンが王家の人間だろうと関係がない。

魔導師や魔法使いの世界にも、彼らなりの常識や理念があるのだ。

——とは言え

「やんなっちゃうな。何? あの馬鹿集団。口しか動かしてないじゃん」

エマの辛辣な口調がハインの親衛隊とも言える集団にも届いた。

「——何! 我々を愚弄すると言うことは、ハイン様を愚弄すると

言うことだぞ！」

「そうよ！　ハイン様は魔導術統率協会に入るのに相応しきお方！　貴女なんてど〴〵せ、その牛のように大きい胸で魔承師を誘惑して得た地位なんじゃない？」

「——ああ？　ざけんな」

エマが声を落として凄んだときだった。

がこん

「——ぴっ！」

奇妙な音が女の頭上からし、エマを罵倒した女が奇声を発して、紐が切れた人形のように倒れた。

他の親衛隊が慌てて女を介抱する。

皆、怯えた様子でスゴスゴとエマから距離を取った。

「超絶結界を張れるエマ様を舐めるんじゃないよ」

そう言つとエマは、フンと鼻息を荒くしながらフンワリと波打つ赤毛を掻き上げた。

*

バチバチと空気が激しく裂ける音を立て、ハインが作り上げた幾つもの雷電の玉は、ロジオンに曲折しながら空を滑り向かっていく。

「お母様！　お兄様が火傷しちゃうー！」

「陛下！　あれは火傷どころでは……！」

妹王女達と王妃が真っ青になって立ち上がる。

「「あれ位、何ともない」」

国王陛下とドレイクの声が重なった。

「遅い」

ロジオンは自分のマントの裾を掴むと、雷電の玉に向かって翻した。

マントに当たる瞬間、放電のつんざく音と、激しい光が放出される。

対魔法防御の念が織り込まれているマント。

魔法を扱う者には必需品である。

それだけで威力の弱い魔法は弾き返すことが出来るが、それ以上の魔法に対抗する場合、自分の魔力を注ぐこともある。

——ロジオンの場合、後者を選択した。

一瞬、驚いた表情を出したハインだったが、すぐに不敵な笑みを浮かべた。

「まだまだ雷電の玉はウヨウヨしてるぞ？ 全てをマントで払うつもりか？」

（しかも、標的はロジオンと誘導施行してある）

——逃げても逃げても追いかけてくるぞ。

コンラートに予言されたくらいで、ちやほやされて魔導術統率協会のメンバーにちやほやされて、しかも——ちらりと防壁の外のエマを見る。

（超絶美女と仲が良いなんて！）

——羨ましい！ 羨ましすぎる！

ハインは魔法を扱う者の中では、一般人と同じ欲求を持った珍しい

い若者であつたのが王宮魔法管轄所を狂わせた要因である。

彼がその辺の魔導師と同じく世俗に無関心でマイペースな人間だったら、二分化せず、各自分の研究に勤しむ日常があつたのだ。

「……面倒」

ロジオンがぽつりと呟くその口調は、単調で酷く冷めたものだった。

ブルーグレーの瞳が長い前の毛の間から輝いた気がし、ハインは思わず腰が引く。

「Takaisin（戻れ）」

ロジオンが一言、そう述べた刹那

——放電の玉が跡形もなく消えた。

「……えっ？」

呆氣に取られたのは、ハインだけではない。

ドレイク、エマ、ルーカス以外の周囲にいた者全てが、目を見開き動きが止まった。

「すごい！ ロジオン兄様！」

妹王女二人の歓声に皆、ようやく我に帰った。

信じられない——ざわざわと囁く声に怒りで震えたのはハインであつた。

「何をした！ 何をしたんだ！ドレイク殿！ 貴方の仕業ですね！

対等な勝負に手を貸すとは！」

ドレイクはそんなハインの怒りに

「何もしておりません」

と淡々と答えた。

「一瞬で雷電の玉全てを消すなどと、あのぼんくらに出来るわけがない！」

「消したんじゃない。『戻した』んだ、無に」とロジオン。

「『戻した』……だと？」

「『消す』とこちらが施行した魔法とぶつかって、火花が飛びそうだからね……。ハインの魔法に化学方式が盛り込まれていて良かったよ……。自然超訳や古文字式よりずっと得意なんだ」

更に啞然としたハインは、ブルブルと震える口でロジオンに尋ねた。

「ど、どうやって私の魔法を解読したんだ……？」

「マントではらった時……僕の魔力から君の魔法の施行式が伝達された。それからある程度……解読した……皆、やってることでしょう？」

首を傾けハインに同意を得ようとするロジオンに、横からドレイクが口を挟む。

「ロジオン、マントで魔法を受けて魔力伝達をするやり方は、常通ではありません」

「そうなの？」

「それは危険な方法ですから。経験を積んだ者が混戦して時間が無い時位でしょうね、使うのは。——コンラート位の実力なら容易いでしょうが」

「……確かに、師匠見て覚えた方法だ……」

余裕綽々と語るロジオンにハインは馬鹿にされたようです

頭に血が上った。

「自慢か？ 自慢しているのか！——くそっ！」

（ぼんくらの癖に！ 今まで録に魔法を見せなかったくせに！）

ハインが詠唱を唱えながら両手を地に付けた。

「——！」
ロジオンとドレイクが魔法施行の気配を感じ、飛んで後ろへ下がる。

地中から土の刃がロジオンに向けて攻撃が始まった。

円錐に突き上がる土は、僅かに根付く草花を一瞬に突き刺す——
身体を突き刺す程の強度があるのが分かった。隙間無く突き上がる円錐は前後左右に生まれ逃げ道を絶つ。

（お前は、ぼんくらのままの評価で丁度良いんだよ！）

ハインのしたり顔が禍禍しく歪む。悪鬼に取り付かれているように暗く歪んだ笑顔であった。

「……だから、遅いんだ」

再びロジオンの冷めた呟きが出る。

今度は無言だった。

ロジオンの口が動かない——魔法施行が間に合わない故だと思ったハインだったが

「——！！」

ロジオンのマントが靡いた途端、風圧が一気に上がった。

ロジオンの足元から風圧と共に土が削られ、逆にハインに迫って

くる。

ハインが魔法で造り上げた円錐は底から崩れ、土塊となって風に飛ばされ逆にハインを攻撃した。

「！！！」

防御の魔法詠唱も間に合わない。

強度が上がった円錐の土塊が、共にハインの身体を痛め付ける。

風圧で飛ばされハインは一瞬宙に浮き、地面に倒れ込んでしまった。

*

——この力の差は何？

ハインに付いてきた魔導師や魔法使い達は、愕然と魔法防壁の向こうにいる二人を見ていた。

こんなにハインは弱かった？

こんなに王子は強かった？

「圧倒的じゃないか……」

「何で……あんなに強いのに、今まで魔法を出さなかったんだ……？」

「馬鹿ね、あんだ達」

エマが呆れたように告げた。

「魔法の存在理由は何？ 入門中の入門よ？」

——万人の為のもの——

「自分の矜持や誇示、遊びで魔法を出すのは違っただろう？」

とルーカスが諭す。

「魔法は、その理論や方程式、組み立て——それに絡む式陣が理解できてても一定以上の魔力がなければ発動・施行は出来ない。エルズバーグの王宮^{こく}では多くの魔導師や魔法使いを召し抱えているが、世界中から見たら魔法が出来る者はそう多くないんだ。恐らく、世界人口の五分の一居るか居ないかだと思った」

「皆、魔法が出来るわけじゃないから、出来る人は万人の生活の為に使うわけよ。それが一番の魔法定義で考えの基礎。思い出してよね」

とエマが腕組をして、ふんぞり返りながらハインの親衛隊に告げた。

*

「嘘だ……嘘だ……」

へたり込み焦点の定まらないまま、ぶつぶつと呟いているハインは、上等な絹のローブから品良くまとめた髪の毛まで土塗れであった。

ゆつくりと近付いてくる影に、ひつ、と低い声を出してハインは後ずさりする。

自分を見下ろす影——ロジオンだった。

左手をハインの前にかざす。

口の動きから詠唱をしている。

左手を使うのは攻撃魔法の基本——。

（この距離じゃ殺られる！）

力が抜けて動けない、今からじゃあ防御魔法も間に合わない。

ロジオンのかざす左手から、生暖かい風がハインの顔に当たる。

（もう駄目だ——！！）

ハインはぎゅっと目を瞑った。

ぼんっ

と、目の前で空気の弾けた音がした。

あゝあ、と眉尻を下げて自分の左手を見つめるロジオンにドレイクは尋ねた。

「何の攻撃魔法を施行したんですか？」

「灼熱……のはず」

「蚊なら倒せる威力ですね」

「……攻撃魔法だと、みんなこんな感じなんだ……どうなの？」

「戦では、ただの一度も攻撃魔法を施行した経験はないのですか？」

「無いよ……師匠、教えてくれなかったし」

淡々と語り合う二人には、ハインは映っていない。

「お、お前ら二人！ 二人して！ 私を茶番に落とし入れたな！」

「——茶番？」

ドレイクの怜悯な赤い瞳が、ハインを貫く。

視線の脅威に慄きながらも、ハインは必死に虚勢を張りドレイクに楯突いた。

「そつだ！ 大方、陛下か王子に頼まれて一芝居打ったんだろう！ 魔承師の犬は誰にでも尻尾を振るんだな！」

「……犬とはね。そんな小物と一緒にしないで頂きたい」

じっと、ハインを見下ろしていたドレイクが、徐に笑みを浮かべた——口角だけ上げて。

（だから怖いって、それ！）

遠巻きで見ていたエマとルーカスが心の中で叫んだ。

「茶番に付き合っただけなのはこちらの方ですよ、ハイン。まあ、こちらにも講習人材が丁度欲しかったところですね。——残念なのは君が思ったより役に立たなかったことですね。これなら」
「犬」の方がまだましでした」

「——！！」

ドレイクの台詞と気迫に負け、ハインは「降参します」とようやく口に出した。

22 勝負(2) (後書き)

次回は10/7です。

23 コンラートを守る者

頂垂れながらサマンサからの治癒を受けているハインを、ロジオンは黙って見ていた。

侍女が「こちらでお茶を」と父王の元へ促そうとしたが断つて。

親衛隊の空気はバラバラである。

今までの尊敬はどこかへ吹き飛び、侮蔑の視線でハインを見る者達。今だ信じられない表情の者。次の責任者を狙う様子の者。瞳を輝かせロジオンに尊敬の眼差しを送る者。

「ハイン」

ロジオンは彼と同じ目線の位置にしゃがむ。

ハインは目を合わせることなくぶつきら棒に「何のようです？」とロジオンに言った。

そして

「おめでとうございます。私をやぶったからには王子、あなたが王宮筆頭魔法使いですよ。私はさっさと辞めますよ」

と、投げやりに言い放った。

「辞めて……君はどうするつもり？」

「さあね。エルズバーグ内を転々とするか……それとも国外に出るか……はっ！ 私がどこにいても貴方には関係がない」

「君……生まれはエルズバーグ？」

「そうですね。生まれも育ちもエルズバーグだ。もっと西の街ですけど。この国は大きいですからね」

「……この国を出て、修行したことは？」

「ありませんよ。必要ないじゃないですか。これだけ大きい国に住んでいれば」

「……それが、今回の敗因だ……」

「——はっ？」

ハインが負けを認めて、初めてロジオンと顔を合わせた。
顔、とロジオンはリシエルから清潔な布を貰いハインに渡した。
ハインの顔は土埃だらけだったからだ。
涙と鼻水も流れていたせいもあるが。

「……負けたの、初めて？」

「師匠以外の奴にはね……」

「この国で負けて良かったね……」

「嫌みか？」

「本心だよ。ハインの魔法は……この国でしか通用しないからね」

ロジオンの言葉にハインは眉を潜めた。

ロジオンは構わず話を続ける。

「演習だって……エルズバーク内でやって……他の国とは演習はしないでしょう？ 演習はあくまでも演習——実戦とは違う……実戦は生と死のやり取りだ」

「……」

「僕とハインの違いは『実戦での経験の差』だ」

「王子……貴方……実戦の経験が……」

「あるよ。結構な数だね」

サマンサとリシエルも驚いて眼を開いてロジオンを見た。

苦笑いしながらロジオンは、人差し指を立て自分の口に当てる。

「父上や母上、それに兄弟達にはまだ内緒にしておいて……。衝撃を受けるだろうから」

「王子、ではコンラート様と共に戦に？」

サマンサが尋ねた。

「うん……。大抵師匠を招く国は、危機に瀕している、戦を始めよ

うとしている国が多いからね……。師匠は……。戦いに出ても……。僕を守る自信があったのだろう」

ロジオンは当時を思い出したのか、言葉を噛み締めるよう、いつもよりも更にゆっくりと語った。

「魔法と槍と弓矢に剣。石砲や、それなりの国では大砲や火薬の投入。混戦になるともう、敵や味方が入り交じってね……。滅茶苦茶だ、自分の耳と目を頼りに敵か味方を知り、支援や防御に聖光その上に師匠の後衛。次から次へと繰り出される物理攻撃に魔法攻撃……。怖がっている場合じゃない。負けてしまふ、消えなくても良い命が消えてしまふ……。早く魔法を施行しなければ……。一度でも戦を経験して、生き延びれた魔法使いや魔導師達は、その重要性を身に染みて分かっている。だから詠唱を口に出さなくても頭の中でイメージして、施行できるようにするわけ」

「しつ、しかしそれでは、問いかけに必要な召喚系や精密にかけねばならない封印が……」

「そこはそれ……。臨機応変でね」

微笑むロジオンの瞳の色は陰り、まるで深い海の底を見てきたようだった。

*

「……やっぱり、コンラート様の後衛をなさっていたのはロジオン王子だったんですね……」

ロジオンが着替えを強制させられ侍女に無理矢理小城に連れていかれたのを見送ってから、リシエルがぼそりと言った。

「リシエルは他国から来たのですものね……」

サマンサの台詞にリシエルは、軽く頷く。

——水のコンラートの後ろに守り手あり——

マントの襟は鼻まで隠し、フードは髪を隠し、見えるは色素の薄い瞳のみ。

男か女か、はたまた子供か大人か。敵も味方も、その見事に的確に繰り出す魔法支援と防御の数々に

——流石にコンラートの後ろを守るものよ——

と、感嘆し、又は恐れた。

「きっと……顔を知られては王子の立場として問題になるから、コンラート様が顔を隠すよう王子に話していたのかもしれないね……。ロジオン王子は何故顔を隠さなければならないのか、知らなかったのでしょうか……」

治療を終えたサマンサが、まるで過去のロジオンを見るように遠い目をした。

「……」

ハインはもう、やさぐれた仕草はすることはなく、今までとはまるで別な顔付きで空を仰ぎ、遥かに広がる彼方をいつまでも見つめていた。

23 コンラートを守る者（後書き）

次回は10/12です。

24 身体憑依

（やれやれ、馬が残ってて助かった）

両脇と背に荷物を積んだ馬を引き、小城へと先を進めるのはアデラだった。

アデラの実家を含め、四件程回れたが、その都度土産を持たされアデラはまさに「方陣魔法が出来たら良かったのに」と言う荷物まみれの状態で王宮に戻ってきた。

馬を借りようと厩の番人の所へ行ったら、陛下と第二王妃、下の王女二人に付き人達に魔法管轄所の者達が馬を借りてロジオンのいる場所へ向かったと聞いた。

『早馬はねえが、良いか？』

文句はない。アデラは首を縦に振った。

（しかし……一体、何の用で？）

首を傾げながらアデラは、ロジオンが普段住み着いている平屋に辿り着いた。

「——さて」

アデラは服の裏の胸ポケットに、大事にしまっていたものを出す。

琥珀のブローチ——ロジオンがエルズバーク第五王子だと言う証の品。

琥珀の中には、各王子王女ごとに象徴となる物が埋まっている。

ロジオンの場合は第二王妃が産んだ初めての子でもある為、王妃の故郷で原産の薔薇杉の葉である。実が薔薇のような形な為そう呼

ばれている樹である。

天然でそうそう希望の物が入っている琥珀はなかなか無いので、
その場合人の手が加えられる。

ブローチの土台には

『ロジオンⅡイエレⅡエクローズⅡエルズバーグ
雪原の月の十二日目に生誕』

と刻まれている。

このブローチに自分の魔力を注ぎ、鍵としていた。
勿論、魔法日記の隠し場所もこのブローチ鍵が使われている。

アデラはブローチを愛しく両手で握りしめ

（ロジオン様、お部屋の扉を開けますよ）
と、念を送った。

——— こんなので彼に伝わるのだろうか？

しかし、伝わらないと開けることが出来ない。

今、ブローチは鍵としての役割だけでなく、媒体としても担っているのだ。

暫くしても何の反応も無いのでアデラは少々心配になった。

（私の念が弱いのか？）

祖母に習って太陽に祈るポーズを試みる。

（ええい！ 伝われ———！ つったわれ、つったわれ！ 伝わらないと扉を蹴破るぞお！）

『……態度と頭の中の台詞が合っていないんだけど……』

「——— うわっ！ …… ロジオン様？」

立ち上がりキョロキョロと辺りを見渡してみるが、声が聞こえる

のにロジオンの姿が見えない。

クスクスと笑う彼の声が頭に響く。

『直接、君の頭に語りかけてるからね。そこにはいないよ、僕』

「でも、私のやっていたこと分かっているご様子でしたが……」

『うん、見えるから』

「見える？ どこから？」

『姿見の鏡から』

「昨晚の……？」

アデラはドレイクに外出許可を貰いに行く前の、ロジオンとのやり取りを思い出した。

平屋の家と魔法日記の鍵は、ロジオンを媒体にしないと開かないと言う。

ではどうするか？ ——アデラにロジオンの意識を憑依させ氣を送る。

『意識憑依』または『身体憑依』と言う。

意識支配とまた違い、あちらは支配された人は次第に自己を失い、思考や感情が喪失するが身体憑依は、一時的に相手の身体に術者の精神が入る状態を言う。

それには術者が憑依しやすいよう媒体の品を相手に持たせ、相手の行動が見えて憑依できるよう映す品も必要になる。

それは映像として見えるものだったら、水面だろうと硝子だろうとグラスだろうと何でも良いのだが、今回はロジオンに与えられた部屋に大きな姿見の鏡があつたのでそれを利用した。

二人で鏡の前に立ち、一回転させられた後、鏡の向こうのロジオンを見るように言われた。

良いよ、と言われるまで じっと鏡に写し出された主を見つめる。

後ろから聞こえる詠唱と、鏡に見える主の口の動きにずっと耳と目が離せなかった……。

『アデラ……扉にブローチをかざして』

「は、はい」

浸っている場合ではなかった。

アデラは深呼吸をし心を落ち着かせ、ブローチを扉にかざす。

『ちょっと……気持ち悪い思いするけど、我慢してね』

そう、アデラの頭の中でロジオンの台詞が響いた瞬間——後ろから何かが触れ、自分の身体を包もうとしてしてくる。

自分の皮膚の下から溶け込んで入ってくる水飴のような感覚。

（——気っ、気持ち悪っ！）

『気持ち悪いよねえ。もう、大丈夫だと思うけど……』

「……あつ……。はい、平気です」

いつもより身体が重たい感じはするが、ぬめりが身体を包みながら入ってくる嫌な感じは消えた。

『もう、解錠したから入れる……扉、開けてくれる？』

ノブに手を掛け、扉を開けると室内へと入る。

開けるとすぐに居間の間取りの主のすむ平屋は、昨日の朝に出た時と変わらずに明るいい日差しが出迎えてくれた。

『……何か、何日も留守にしていた気分……』

「また戻れましょう」

ばやく主にアデラは優しく言葉を返した。

『……うん』

頷く主の言葉には自信が見られなかった。

「さあ、魔法日記の場所は？ 取ってさっさと引き上げましょう！

ロジオン様に沢山お土産を持ち帰りましたよ」

アデラも朝から忙しく動いて疲れていたが、しんみりしている主のロジオンの為にも張り切る素振りを見せた。

くすり——と自分の頭の中で主の笑う声が聞こえる。

『そうだね……。今日は人が多くていつまでも憑依してられないし……ちゃっちゃつとやっつけてしまおう』

「国王陛下がお訪ねに？」

『うん……試作花火の打ち上げまでいるみたいだ……付き人が外で炊き出しやつてるよ』

「ロジオン様をお訪ねに？」

『まあ……色々。帰ってきたら話すよ』

分かりました——と、アデラは頷き誘導で寝室に移動する。

寝室にある姿見の前を通った時、アデラがぎよつとしその前で立ち止まった。

「——！ ロジオン様！」

姿見に写る姿は自分の筈なのに

「ロジオン様が写ってる……！」

驚いて、鏡に近付き自分の顔を撫でる。

自分の手で触れる顔・手も顔も自分の物の感触なのに……写る姿はロジオンだ。

『こちらに写る姿はアデラだよ』

あっけらかんとロジオンは言う。

「……はあ……」

複雑な気持ちのまま寝室の暖炉の横前に向かった。

『うん……そう、その辺りに薔薇杉の実の落書きがあるでしょ……』

？ そこに身体を中心に合わせて。右手にブローチを持って……両手を真っ直ぐに壁に付けて』

「左手にブローチを持っではいけないのでしょうか？」

『それだと師匠の魔法日記が取り出せない……右手側にあるんだ……』

……師匠の』

理解できない部分があるが、その質問は保留にしておこう。アデ

ラは思った。

ロジオンの声が頭に反響していて、二日酔いの頭痛のようだ。
この状態で長く会話していると、しばらく寝込みそうだ。

そう思い、主の言う通りに薔薇杉の落書きの前に立ち、両手を真っ直ぐに壁に当てた。

『…………』

アデラの頭の中に、知らない語源を呟く主の言葉が響く。

壁が柔らかくなった———そう思った時、泥沼に手をつっ込んだようにズブズブと壁の中に沈んでいった。

「ひゃあ！」

『その先に日記があるから、手を引っ込めないで』

驚いて手を抜こうとするアデラに憑依している形のロジオンが押し戻し、どうにか彼女を諭す。

覚悟を決めて壁の中に潜った手で探ってみれば、爪先に何かが当たり掴んでみた。

感触からして手帳のようだ。

指の平にふれるザラザラ感は刺繍だと分かった。左手にも同じ位の深さで同じように触れる。

こちらは革製ではなかるうか。ツルツルとした感触があった。

『それ。どっちも引っ抜いて』

右手にはブローチも握っているために、少々神経を使ったが掴み、無事にどちらも引っ抜いた。

「これが『魔法日記』…………！」

どちらも手のひらに収まる大きさで、思いの外薄い。

コンラートの方はさすが、と言うべきか、刺繍の装丁の見目素晴らしいものであるが、この薄さで果たして彼が生きてきた長さを語れるものなのか——アデラは首を傾げた。

「…………どちらも薄いんですね。もっと大きくて厚い物かと思ってい

ました」

『あちこちに放浪するのに『そのまま』じゃあ荷物になるからね……形を変えてあるんだ』

「これは原形ではないのですか？」

『後で見せてあげる……ドレイクに渡さなくてはならないしね……』

「……何があつたんです？」

アデラだとて、必修で魔法日記のことは知っていた。

魔法を扱う者達にとって命と同等の魔法日記。生前贈与は絶対に無いし、大抵は弟子に渡される。

それから言えばロジオンが持つのは当たり前だ。

——なのに何故、ドレイクに？

事情を知らないアデラが不振がるのは、ごく当たり前である。

『来たら、その辺の件も話すよ……何せ今日は……もう、次から次へと……』

ロジオンがうんざり——とでもいうように溜め息を付いたのが聞こえた。

「分かりました。では後程」

『うん。『抜く』から……今度は平気だと思うよ』

それだけ言つと、もう主の声はアデラに届かなくなり、その瞬間に頭痛もなくなり身体も軽くなった。

「霊にとりつかれるのって……こんな風なのかもな……」

ぽつりと独り言を言つとアデラはさしあたって玄関の扉をどう施錠しようか考えを巡らせた。

24 身体憑依（後書き）

次回の更新は10/15です。

25 宴(1)

戻ってきたら驚いた――。

暫くの寝ぐらの小城の庭には人・人・人……。

既に炊き出しが終わり、庭に設置された台には鳩や家鴨に鶏の蒸し・焼きが、茹で豆が挽かれた皿の上に並び、秋の味覚の野菜のスープが湯気を立て食欲を誘う。

王宮で焼いてきたパンにデニッシュ、タルト、パウンドケーキ。連れてきた調理人は、焼き石の中に栗を放り込み焼き栗作りに専念している。

国王陛下に第二王妃、まだ小さな二人の王女達は連れてきた護衛や侍女に囲まれ、談笑しながら食事中。

手が空いている者達も好き好きに料理を手に取り、酒も口に盛り上がった。

異色と言えば王宮の魔法管轄所の魔導師や魔法使い達だが、和気あいあいと皆に混じって食事をしていた。

(……何があつたのだろうか?)

とにもかくにも――陛下と王妃にご機嫌伺いに出向き、挨拶をする。

その席に、自分の主であるロジオンも同席していた。

気付かなかったのは、彼が王子らしい格好をされていたからだ。

今回は腰までの短いジャケットに、切り替えある膝までのシャツをウエスト部分で宝飾のベルトで留め、スパッツを履いていた。

ブーツは唐草の型取りをした物を使い、留め金に金のバックルが付いたものである。

髪の毛も散々くしけずられ、艶々と輝いていた。

アデラにとって見とれてしまう姿だが、ロジオンの方は彼女を見ると気恥ずかしいのか途端に談笑を止め、視線を合わせることもしないで、黙々と食事に専念し始めた。

「陛下に第二王妃様、拝顔賜りましたこと御礼申し上げます。参上するのが遅れましたこと謹んでお詫び致します。」

アデラは帯剣を自分の横に置くと、片膝を着き正式な挨拶をする。

「よい。ロジオンから聞いておる。面を上げよ」

はい、とアデラ。

「今宵は無礼講じゃ。アデラも皆に混じって飲んで食べて楽しむがよい」

「ありがたきお言葉にございますが……陛下、私には何が何だか……何故、このような宴がここで。しかも、わざわざ陛下や第二王妃様や王女様方まで……こちらにご訪問に出向きました理由が分かりかねません」

「おお。アデラは留守にしておったから詳しい経緯は知らんだな」

「父上」

突如、ロジオンが口を挟んできた。

「僕から後で話しておきます。彼女に頼んだ品を確認しなければならないので……その時にでも」

父王にそう話すとロジオンは、接待用だと思われる品のある笑顔をアデラに向け

「アデラ、ご苦労様。しばらく……皆と食事していると良い」と告げた。

「はい。ではお言葉に甘えて馳走になってきます」

正規の皿代わりに使われるパン皿を貰い、バターたっぷりのデニッシュに肉汁がたっぷりと滴る鴨肉を挟みながら食べる。濃厚なソースと鴨の脂が口の中に一杯に広がる。口の中に残る脂を取り除くように、赤の葡萄酒を飲み喉を潤した。

この宴につかわれた料理素材も飲み物も、感謝祭用の物であろう。ここで、これだけ飲み食いしても本番用は充分足りるというにとだろう。

台の上に贅沢に並べられた食事と、それを手に取り立食して、喋り、笑い、飲む人々。

沈み行く太陽の地平線を彩る橙の光が、そんな人々の陰影を濃くし今日最後の輝きを成す。

点々と設置されたかがり火に台の上の蠟燭。

王族の占める場所には、一際明るい場面を提供するランプ。

——平和なのだな……。

アデラはふと、祖母のかつての仲間達の滅亡した亡国の話を思い出す。

戦に続く戦。

荒れていく地。

貧困

食糧難

疲れていく人々。

一握りの支配級の者達は贅沢を止めない。

負の遺産を背負わされるのは、何の力も持たない者達。

『救いが欲しくて、皆、一心に見えない神に祈るのよ。心の拠り所が欲しいの。生きていく希望をね……』

このエルズバークに住む者達は、どれだけ恵まれた生活を送って

いるのか。命を繋ぐ衣食住の保証をしてくれるだけでも、どれだけ幸せなことなのか——見に染みている者だけが、平和を維持しようと躍起になった。

『アデラ、貴方には『覚悟』が足りない……』

祖母が放った言葉。私が聞こえなかった部分が、かつての祖母の仲間に会って、ようやく知り得た。

それを考えると

（ラーレ……あの子も今のままでは……）

まもなく祖母が亡くなり、空白になったままのアサシンの座を、一緒に鍛練を積んでいたラーレが受け継いだ。

勿論ラーレはまだ若輩。アサシン達を束ねるには経験不足と言うことで、先に入った年長者が纏めている。

世襲制と言うのは変わらないので、いずれはラーレが筆頭になるだろう……。

まだ、重要任務は任されていないとは話していた妹の様子は、緊迫感が全く見られなかった。

（四六時中、緊張していても疲れるだけだけど……）

やる時はやるのかな、あの子、兄弟の中じゃ一番要領が良いし。

パン皿の汁でふやけた部分をぼんやりと見つめ、思想に更けるアデラに

「アッデーラちゃん」

と後ろから抱き付き、胸を揉む者——エマだ。

「ひゃああああ！ エマさん！ いきなり何を！」

思わず身を屈め、投げ飛ばそうとしたが、相手は女性でしかも酔っぱらい。思いとどまり、エマをひっぺがそうとするが小判鮫のように背中から離れなかった。

それどころか

「アデラちゃんって、以外と胸あるのね。普段ぺしゃんこなのはど〜して〜？」

と、ますます胸を揉み出す。

「普段は中に防具服を着込んでいるからです！」

「え〜？ それはまずいでしょ？ 胸が横に流れちゃうよ〜」

「ちよつ、ちよつ、ちよつ」

エマの自分の胸を揉む手付きがいやらしい。

（玄人？ 慣れてる？）

大きさを確認するための手の動きじゃない。むずむずする感覚。

「ル、ルーカスさん！」

ルーカスに助けを求めるも、ルーカスも王宮の魔導師や魔法使い達に囲まれている状態で、談笑していてこちらをみていない。

「エマさん……！ 酔い過ぎです！」

「う〜。良いなあ〜、本乳」

うつとりした声音で呟くエマには、アデラの声が全く耳に入っていないようだ。

「いっしょ」

——ゴッ

エマのしつこい乳揉みの手が離れた。

アデラの乳の代わりに今度は自分の後頭部を押さえるエマの後ろには、パン皿を持つロジオンがいた。

「い……ったあ！ ロジオン、あんた何年もののパン皿で私の頭ごついたの！」

「公衆の面前でエロいことしているからでしょ」

衝撃で酔いが冷めたらしいエマの文句をさらっと流し、ロジオンはアデラに話しかけた。

「荷物は……？」

「はい。小城のロジオン様の利用しておりますお部屋に」

「食事は食べた？」

「はあ……あらかた」

「そう」

ロジオンはそう言うと、先程エマの後頭部をどついたパン皿に、タルトやパウンドケーキにクッキーを盛る。

「あと……焼き栗と。アデラ、その葡萄酒の瓶持って付いてきてじゃあね、とブータレているエマに手を振り、さっさとアデラをその場から連れていった。

*

そう言えばドレイクの姿が無かったことに気付く。

「宴にドレイク殿の姿が見当たりませんでしたね」

先に進む主に尋ねる。

「宴が始まる前までは王宮の治療系魔導師と話し込んでいたけど……始まった途端、食事持って小城に戻ったよ。魔承師に経過報告とか……って。いてもルーカスみたいに寄られるからね……あの人、集られるの好きじゃないし、そもそも人が苦手みたいだし……」

ああ、だからあんなに表情が無いのかしらとアデラは頷く。

「――？」

てつきり魔法日記の確認に小城へ戻るのかと思っていたのに、行く方向が違ふことにアデラは気付いた。

「？……あの、どこへ？」

「池」

ロジオンはそう答え、ずんずん先へ進む。

「時間的にそろそろだから……急ごう」

池とは結界を張り、コンラートを一時的に出さないようにしているあの場所だ。

宴の場所から人の笑い声が届く。

日が暮れ始め、滅多に人が来ないこの侘しい場所を、ほんの少しだけ明るくしている気がした。

「……カンテラ、持ってくれば良かったかな」

主がアデラの方を見て言っているのは、暗闇が苦手だと言う彼女に気をきかせているのだろう。

「平気です。——と、言うか平気になったみたいです」

「？」

不思議そうに瞼をしばたかせるロジオンにアデラは言った。

「霊とか、化け物とか、こうやって人の身体に入ってくるんだな、とか何となく分かりましたし、実物は闇より恐ろしいものだとなりましたから」

「……後者の言い分は分かったけど……前者の意味が分からない」
首を傾げる主にアデラは

「とにかく、何とかなつたと——言うことです」
と苦笑いを見せた。

25 宴(1)(後書き)

うおおおお！ 体調激悪…。なるべく早く次ぎ投稿します。

26 宴(2)

池の前にお供えのように、パン皿に載せた菓子に葡萄酒が疑問でアデラは主に尋ねた。

「師匠……甘い物が好物だったんだよ。お酒と一緒によく食べていたんだ」

「イメージが壊れまくりですね……」

そう言うアデラにロジオンは笑う。

「『疲れた頭には糖分』って……よく言っでは食べていたんだよ」

さて座ろうか、とロジオンは自分の首に巻かれているスカーフを取ると、草地にそれをひき、アデラに進める。

アデラは驚きながら断った。

当たり前だ。本来ならば従者が主にしなければならぬことなのだから。

「いけません。こんな高級なスカーフで。しかも私は仕える立場ですよ？ ロジオン様がお座り下さい。私地べたは慣れてますから」

「どんな女性にも……紳士な態度は忘れるな……師匠が言っていたよ。それに僕だって、そんな品良く育ってないよ？」

「時と場合によります」

「……良いから座ってよ。このスカーフ長いから、一緒に座れるだろうし」

さりげなく譲渡案を出したロジオンの意見に、アデラは渋々と了承した。

「では、失礼します」

と恐る恐るスカーフの上に腰を掛けるアデラを見て、やれやれとロジオンも座る。

その時だ。

——ヒュルルル

空中に響く高い音に二人空を見上げた。

「試作花火の打ち上げ……始まった」

大きな炸裂音の直ぐに空に咲く花のように、花弁を広げては消えていく。

黄と白が主体の花火が次々と打ち上げられ、暫しその様子にアデラは見とれていた。

「多分、次が最後……僕が作った花火……」

一際大きいことを裏づける、打ち上げてからの闇の空間。刹那、大きな炸裂音になりその火花の彩りを見せた。

「……青い……。ロジオン様、花火が青と黄です!」

打ち上がった花火は青が主体の初めて見る色の花火で、アデラは興奮に思わず主の腕を掴んだ。

「……」

「……」

掴んだものの花火が終わった今、辺りは闇。

墨のように暗い池の周囲の向こうに宴の明かりが見え、辛うじて互いの輪郭が見えた。

ふいに生温かい感触が頬に触れ、それが主の唇ではないかと思い、全身が熱くなる。

「失礼しました! 馴れ馴れしいことをしてしまいました」
パツと離れ、怪しまれない程度に距離を取る。

主のいる側から舌打ちの音がしたのは、きっと自分の気のせいだとアデラは思い込むことにした。

しばらく沈黙の後、暗闇に慣れた目で主を見た。

彼もアデラの視線に気付いたのか顔を向ける。

「あの花火の青……なかなか綺麗に出なくて……どうだった？」

「綺麗でした。黄色と白以外の花火なんて初めて見ました。サファ
イア色で、とても……」

「師匠が拘ってたんだ、ずっと……病気で臥せっても……」はつき
りした青を夜空に放ちたい』って」

「そうでしたか……」

ロジオンは思い起こすように瞼を閉じ、ゆっくりと花火の消えた
夜空を見上げた。

「魔法を施行すれば師匠なら青の花火なんて簡単なのに……」人の
手で作るからこそ、一瞬の美しさが心にいつまでも残るのだ』って」
「簡単に魔法が繰り出せるコンラート様だからこそ、そうお考えに
なったのでしょうか……」

「子供みたいだったよ……瞳輝かせてさ。こう組み合わせたら配合
がどうのこうの……って……」

会話が途切れた。

泣いてはいない――

だが、泣いているように唇が震えているロジオンの心の内は、皆
が思うよりコンラートに対する、一言では言いきれない複雑な思い
が混濁しているのだろうとアデラは思った。

ロジオンがコンラートと共に世界を放浪していた十数年、側にい
たのはコンラートしかいなかった。

彼と生活をし、教えを忠実に会得し、親がいらないと思っていたロジオンにとって、彼は師匠である前に親でもあったのだ。

魔導術統率協会——コンラートを追う側の指令者のドレイク。

コンラートが事実を歪めてロジオンに話していたことは、追ってきたドレイクやエマにルーカスに対する態度から見れば分かることだし、ロジオンに手出しできない魔導術統率協会は彼を使えば逃げることも容易い——と、エマ達は話していた。

『それに関しては、ロジオンが成長した現在、誤解は解けている』
とも。

コンラートから聞かされていた話。

エルズバーグに戻ってきて知った真実。

ロジオンは、コンラートを恨むことは全く無かったと言い切れ無
いだろう。

——でも、彼は間違いなくコンラートを好いている。

だからこそ、滅する方向ではない方法を模索しているのだ。

尊敬と愛情に反する

恨み、怒り

戸惑い——と共に。

「やっぱ……憎めないや……」

そうぽつりと言った。

宴の場所が騒がしくなってきた。

「帰り支度かな……もう、戻らないと……あつ！ごめん、アデラ。今日、起きたこと話すって言っというて忘れてた」

申し訳なさそうに謝るロジオンに、アデラは首を横に振った。

「謝ることはありませんよ。今日はもうお疲れでしょう？ 明日にして今夜はごゆるりとお身体をお休め下さい」

「——いや……だけど。明日は明日で忙しいと思うから」

「焦らなくても私はロジオン様のお側にずっとついていいるのですから、その時に少しずつで結構です」

宴の場所から漏れる僅かな明かりを頼りに、ロジオンは自分に微笑むアデラをじっと見つめた。

そうして深い息を付く。身体力が抜けていくように。

「アデラ」

「はい」

「……だからさ、そう言う誤解を受けるような発言は……」

「他の者がどう言おうと、関係はありません。私はロジオン様の従者なのでから」

「……僕が誤解するんだよね……」

「はい？」

疑問系の返事をしたアデラに、ロジオンは少し残念そうにこう言った。

「良いよ、もう……アデラは僕の従者。手放す気はありません」

この言葉をどう取ったのか——分かるアデラの齒切り良い返事に、ロジオンは苦笑し彼女の手を握った。

「いけません。従者と手を繋ぐなんて」

慌てるアデラにロジオンは

「じゃあ、腰なら良いわけ？」

と、可笑しそうに返す。

「うう、なお悪いです」

ロジオンのアデラの手を握る力が籠る。

「宴の場所に着くまでで良いから……アデラの手は気持ちが良い……
……落ち着けるんだ」

「……分かりました」

剣ダコについている自分の手が落ち着けるだなんて以外だが、そう言うのなら主の言う通りしよう。

ゆっくりなロジオンの歩調に会わせ、二人は温かな淡い橙の明かりに向かって歩き出した。

*

一つのランプがうつすらと部屋を写し出す。

ドレイクが使っている部屋は、いわゆる書斎であった場所。

以前の所有者が残っていた書籍の数々は、彼の暇潰しの書物でしかなく、これから役立つとは到底思えないものばかりである。

国王陛下には城にあるものは自由に使って良いと許可を頂いているせいか、元々の彼の性分なのか、読んだと思われる本は部屋の片隅に積み上げられていた。

彼はと言えば、他の部屋から持ち出してきた壁掛けの姿見の前に立ち、鏡の向こうに向かって話し込んでいる。

『無理に戦わせることも無かったでしょう……』

「彼が早くに自分の力の不均衡に気付いて欲しいと思った故のことです。思ったより相手が小物でしたから、果たしてそれに気付くまでに至ったかどうかですが」

『彼の身体が充実するのはまだ先……焦ることはありません』

「それまで待てるのですか？ 貴女は……イゾルテ様」

鏡の向こうからの声が止まった。

ドレイクの問いかけは続く。

「貴女はもう何百年も待った。次世代の魔承師を……。いえ、『あの方』を。これは貴女の為でもある。また過去に繰り返されてきた、コンラートのような者達に取り込まれても宜しいのですか？ その度に私が『あの方』を抹殺し、また転生を待つと言うのでしょうか？」

『コンラートを含む、過去の魔導師達は……全て自分の支配下に魔術統率協会を置くことなど……考えてはいませんでした。……私と『あの方』の考えに共鳴出来ない者達もありました……当たり前なのです。反対する者が出て当たり前……』

「時の流れだと言うなら、今もそうでしょう？ コンラートが離れた今です。私が彼を導きましょう。的確に『あの方』を呼び戻せるように」

『……でも』

「私では不安ですか？」

『……違う』

そう答えたイゾルテと呼ばれた女性の声は、拙いものであった。

「『あの方』を幾度もこの手で殺めた私が、魔力も身体も成長に満する前にあの方を殺めた私が、またこの世代に手を下すと？」

長い静寂が続き『許して……』とすすり泣く声が鏡の向こうから聞こえ、ドレイクは拳を握った。

「……貴女が今だ迷っているのがよく分かりました。貴女の心のままに思っていましたか……やはり、私が導きましょう。——ロジオンを」

『ドレイク！』

「心配なら監視を付けても構いません。……私も、もう待つのは疲れています……。ただ、これだけは分かって欲しい」

ドレイクは優しく鏡に触れ、向こう側にいる女性に告げる。

「私は長い貴女の憂いを、取り除きたいだけなのです」

と……。

26 宴(2) (後書き)

花火は昔は色付きでは無かったと。

ただ、異世界風だし特にこだわる必要はないかな？と思い、現代でも結構難しいらしい青色の花火を出してみました。

お知らせ：「ムーンライト」ともう一つ「なろう」で掲載している話の続きを書く為に、しばらく休載します。再開は未定です。

18歳以上の方でしたら「ムーン」も読めるので、宜しかったら読んでみて下さい。

「ムーン」の方では「UTA」言うネームで掲載しています。

27 魔法痛（前書き）

昨年から連載止まって今頃再開です。遅くなつてごめんなさい。

27 魔法痛

「ロジオン様、失礼致します」

アデラはロジオンが私室として宛がわれている部屋の扉を叩く。朝食の支度が整っていると言っのに一向に起きてこないからだ。

——それはロジオンに限ったことではないが。

ドレイクもルーカスもエマも起きてこない。

ようするに、この小城で起きているのはアデラ一人である。

昨日、色々と大変だったと言うことは聞いているが

『この時間にロジオンを起こしてください』

とドレイクに言付かれたアデラとしては、言ったドレイク本人も起きてこないことに少々ムツとしていた。

「ロジオン様、入りますよ」

前のように魔法で鍵を掛けているかも知れない。

一声かけて扉の取っ手を回してみれば簡単に開いた。

恐る恐る扉を開け、顔を覗かせてみたら奥の方からロジオンの呻き声がして、アデラに緊張が走った。

「ロジオン様！」

帯剣の鞘を抜き奥の寝室に飛び込む。

ロジオンは、寝台にうつ伏せになって呻いていた。

「アッ……アデラ……」

しかめた顔をアデラに向ける——蒼白である。

「どうなされたのです！　しっかりなさって下さい」

剣を鞘に戻し、慌ててロジオンに近付く。

「魔法……」

「魔法？ 誰かに魔法をかけられたのですか！」

「いや……そうじゃなくて……」

「魔法痛でしょう」

アデラの後ろで無表情ながら、どこか呆れた雰囲気を漂わせているドレイクがいた。

*

「魔法痛と言うのは、魔法を使ったことの経験の無い者や久しぶりに一定量を越えた魔力を使った者、相手の魔力を取り込んだ者に症状が出るのです。――筋肉痛と似たようなものです」

「……はあ、つまり、ロジオン様は、久しぶりに相応量の魔力を使ったと？」

「使ってるよ！ ……ただ……使う属性が片寄ってたから……」

アイタタ、と言いながら、起き上がるロジオンの動きは酷くぎこちない。

「それだけじゃありません。マントからハインの魔力をその身に取り込んだでしょう？ ――魔法痛だけで済んだことを幸運だと思うんですね」

「……今までは平気だったんだよ」

「それだけ魔力を駆使していない、と言うことです」

ロジオンとドレイクの言い合いを横で黙って聞いていたアデラだったが、ブーツを穿くのに苦勞している自分の主に、今日から始めると言う魔法の訓練に不安を覚えた。

「ドレイク殿、この魔法痛なるものは、どうしたら治まるものなの

でしょう？」

二人の間に割り込み、アデラは尋ねてみる。

「筋肉痛と同じようなものですから、直に治まりますよ」

「そうでしたか。では、マッサージとかも有効で？」

「それは――」

「すごく有効！」

ロジオンの明るい返答にアデラは面食らった。

何せ、今までに聞いたことがない程の弾んだ声だ。

「ぱああと、ロジオンの周りだけ明るいように見える。

「筋肉痛と同じようなものだからね！ うん！ さすがアデラ！

気がきくな！ 特に 肩から腕にかけて、もう痛くて痛くて！」

揉んでと、寝台にゴロンとうつ伏せになったロジオンを見て

「――揉むより、同じ程度の魔力を送った方が早いでしょう……」

と、がつつりロジオンの肩を掴んだのはドレイクだった。

白塗りの可愛らしい小城に似つかわしくない、悲痛で恐怖に満ちた叫び声が響き渡った……。

*

「注ぎすぎ。身体がピリピリする。」

「先程よりかは身体の自由が利くでしょう？」

「淡々と言い、さつさと前を歩くドレイクにロジオンは、また一つ文句を言った。

「……何で、この人がいるの？」

ロジオンが指を示した先にはハインがいた。

「はい！ 昨日の王子の戦いぶりと経験したお話を伺い、大変感銘を受けまして！ これからは王子に付いて、色々学んでいきたいと思っただのです！」

昨日の傲慢な態度と打って変わった、従順な明るい様子にロジオンは顔をしかめる。

——いや、態度なんのかのの問題ではない。

「……って、言うか、ドレイク。今……関係の無い人を、この場所に置いたら危険じゃ無かった？」

「そうなんですがね」

さして興味がなさそうにハインを見ると、彼は

「事情は存じております！ だからこそ私をご利用して頂きたくドレイク様にお願ひ申し上げたのです！ 魔と化したコンラート師を滅するための魔法を会得するのに、どうぞ私めの身体を使ってください！」

そう、瞳を輝かせながらロジオンに迫った。

「……誤解を生むような言い方、止めてよ……」

ぎよつとしながら後退りするロジオンにドレイクは

「犬より使えるようになります、と言い切ったのでね。家事全般をアデラ殿一人でこなすのは大変だと考えて了承したのです」と、付け加えた。

「えっ？ 家事？」

と、驚くハインに

「成る程」

と納得して頷くロジオン。

「犬は家事が出来ませんから」

ドレイクは悠然と答えると、またロジオンが驚く台詞を述べた。

「何せ、サマンサさんとその弟子も暫く滞在するのでね」

「——ええ！ ちょっと……！ それって、また何で？」

「治療専門ですから。治癒関係の知識は深いお方ですし、『お役に立てるか』と申し出てきたのです。……それに……」

——まあ、自分の身は自分で守ってもらう条件なので構わないでしょう——

ドレイクはそう言って、途中まで述べた言葉を飲み込んだ。

*

朝はランニングと柔軟、それと筋力鍛練。
それだけでロジオンはヘトヘトになり、朝食の後眠り込んでいた。

「ロジオン様、起きて下さい。こんなところで眠り込んでいたらお風邪を召されます」

朝食後、ハインを指導しながら家事に勤しんでいたアデラは、居間の長椅子で熟睡している主に声をかけた。

声をかけても目覚める様子はなく、うつ伏せのまま熟睡している。自分の腕を枕にしても息苦しいのだろうか、顔を横にして寝入っていた。

微かに聞こえる寝息に反応する髪は、柔らかに頬に掛かって、部屋に入る僅かな日の光を取り込み銀の髪を更に神秘に輝かせていた。（こうしてじっくり見ると、本当に端麗な顔立ちをしてらっしゃる）

第二王妃様がお産みになったお子は、ロジオン様を入れて五人。その中で王妃の美貌をそのままに受け継いだと評判なのは、ロジオン様のすぐ下の王子・ユリオン様だが。

（ロジオン様だって王妃様とよく似てらっしゃる）

まあ、今までルンペン並みの姿で悪臭まで放っていたものだから、皆、その印象が強いのだろうな。

つらつらと思い、良い機会だと言わんばかりにアデラは主を近くで見つめていた。

扉の開く音がし、食い入るように主を眺めていたアデラは縮み上がった

「ロジオン様！ 起きて下さい！」

身体を揺さぶり、懸命に起こしている振りをする。

「……何？ 何かあったの？」

いつもの、のんびりとした口調と様子でロジオンは起きると、目を擦りながらアデラに尋ねてきた。

「い、いえ。寝るのですたら御自分のお部屋で……と」

誤魔化したアデラにロジオンは大して不思議がる様子もなく、入ってきた小さな訪問者に笑顔を向けた。

サマンサの弟子・リシエルだった。

小走りに近付いてくる、ニコニコと笑みを浮かべながら緩やかに流れるウェーブの髪を靡かせる姿は、十歳前後の無邪気な少女らしさで溢れ、その可愛らしさにアデラも微笑む。

リシエルはロジオンの前で止まると、ペコリとお辞儀をした。

「ロジオン様、ドレイク様とサマンサ様がお呼びです。わたしがご案内を仰せつかまりました」

「分かった。ありがとう」

「ドレイク様から『魔法日記を持ってくるように』とお言付けがございます」

「……ああ、そうだね……渡さないと……」

事の成り行きを教えて貰っていない、アデラの不思議そうな表情を見たロジオンは

「アデラに言っただけでなかったね……。向かいながら話そうか……」

と、立ち上がったが「イタタ」と不格好に一步一步いつも以上にゆっくり歩く姿を見てアデラは慌てた。

「魔法痛がまだ痛みますか？」

そう尋ねるとロジオンは

「いや……これは筋肉痛」

と、アデラに苦笑いを見せた。

*

足の筋肉痛を堪え、魔法日記を取りに行き、リシエルの案内で部屋へ向かう。

その間、アデラに昨日起きた事を話した。

「代償……ですか……。魔法を扱う者達は、違う価値観をお持ちなんです」

ふふんと小首を傾けアデラは感想を述べた。

「魔法使いや魔導師は魔法が財産だからね……。特に自分が産み出した魔法には執着が物凄いわ」

「わたしのよう魔法が使えない者達が執着する、金や土地や——
そのような物と同じなのですね」

「そうだね……だから——」

「違います」

ロジオンの台詞を遮ったのは、リシエルだった。

ずっと淑やかに前を歩き案内していたリシエルが、聞いていたのだろう、立ち止まり後ろに振り向き二人と向き合った。

ふわりとした印象の少女が眉をつり上げ、上目使いで二人を見上げる。

怒りを露にしているのは、歪んだ口許と刺すような視線で分かった。

「魔法は金よりも、ずっと太古よりあるものです。法律と言う人と

人の間をに規律と束縛を定める物が出来るより以前、ずっと私達が律する為に守っていた――だから『魔法』と呼ぶんです。魔法を扱う者達の間の高尚な取引を、汚い金との特価交換と一緒にしないで――

リシエルの言い分に二人は立ち止まり、啞然と彼女を見つめた。

――いや、言い分もそうだが、先程までの幼い少女そのままの愛くるしい様子が一変したことに二人は驚いていた。

リシエルは二人の様子に構うことなく、肩を怒らせたままに再び前を歩き部屋へと案内を始め、ロジオンとアデラの二人は気まずいままリシエルの後を付いていった。

28 魔法日記

サマンサが魔法痛の治療を施し、身体が少々楽になった所でコンラートの魔法日記を開帳することになった。

「他の氣が入った魔力では、日記が開かない可能性がありますからね」

だったら、朝の時点でサマンサがいることを教えてくれれば良いのに――ロジオンの物言いはスルーされ、治療が終了した。

部屋には、この小城にいる全ての人間が集合していた。

皆の興味の的は、ロジオンが手にしているコンラートの魔法日記――。

「『水』の称号を持つだけあって、魔力もあつたし新しい魔法もどんどん創ったもんね」。魔法を施行している時の姿は、イケてたわ」

エマがその様子を思ひだし、うつとりとしながら腰を振る。

「エマ様は、コンラート様の魔法施行を見たことがお有りなんですか！ いやあ、羨ましい！」

その隣をすっかり陣取っているハイン。

「俺も一応『地』の称号を持つ魔導師なんだけど……」

言うにも、皆、丸々と無視であり、影の薄い魔導師であることを一人再確認したルーカスである。

「ハイン殿は、エマさんしか見えていないようですから……」
アデラがルーカスに励ますように言った。

兎に角、ハインは朝からエマにご機嫌を取ったり褒め称えたりと忙しいらしい。

その成果か、エマとはすっかり仲が良いらしいが

「家事は手抜き」

と、アデラはその件では少々ご機嫌斜めであつた。

結局増えた人数分忙しくなったのだ。

昨夜に陛下のお供に來た宮廷の料理人が氣を利かせて、保存がきいて簡単に作れる食材を置いていつてくれたが、得てして魔法を扱う者達は、魔法以外のことは面倒臭がりやが多いと聞く。

興味対象外のものは人でも何でも目に入らないようで、横にも縦にもしない。

そんなんだから、大抵の個別部屋は散らかり放題で足の踏み場がないと言う。

——勿論、皆が皆、そうではないが。

サマンサは身の回りは神経質なほどに理路整然とされているらしいし、ロジオンにいたっては、自分の身だしなみには氣を付けないが、室内は綺麗に掃除され整頓されていた。

（一人一人見れば違うのだと思うけど……）

アデラは溜息をつく。

ドレイクは部屋中、至る場所に本のサークルが出来ており、移動前には何処に居たのか予想が付くような部屋だ。

エマはクローゼットと寝る場所以外は、まさしく足の踏み場がない。クローゼット内と化粧台はきちんと整頓されていた……。

ルーカスに至っては片付けようとすると「その場所から動かさないで。分らなくなる」と注意を受ける始末。

（もう、個々の部屋は各自で掃除をしてもらおう）

こめかみを押さえながら、思い出してイライラしているアデラの耳にロジオンの詠唱が入ってきた。

瞳を開け主を見ると、その光景に思わず

「——あつ……！」

と声を上げてしまい、隣にいたハインにシートと人差し指を立てられ、慌てて手で口を塞いだ。

刺繍の装丁の見事なコンラートの日記帳が、ロジオンの掲げられた両手に挟まれた形で宙に浮き、ぼんやりとした光を放ちながらクルクルと回転していた。

手帳ほどの大きさのコンラートの日記が、その大きさと姿を変えていく。

手帳から辞典の大きさになり、それから図鑑並みの大きさに。厚みなどほとんど無かった物が、彼の人生の長さを証明するかのような厚さに。

本来の形に戻ったのか、日記は宙に浮いたまま回転を止めた。

「所持者の書き換えを……」

ロジオンに促されドレイクは頷き、彼の隣に立つ。

「背表紙へ」

ロジオンが日記に命じると、日記は意思を持つかのように自ら背表紙を開けた。

「あの日記、生きているみたいだ……」

アデラは不思議な光景に、目が見開きっぱなしだった。

「軍事訓練には日記は開きませんからね。魔法を扱い、その道で生きる人は皆、持っています」

ハインが答え、アデラに至極優しく説明を始めた。

——恐らく隣のエマに良い印象を与えたいために。

「日記には魔力を自然に取り込める、特殊な羊皮紙を使います。それを使い書くことで、自然に己の魔力を日記に注ぎ、自分だけの日記にすることが出来ます」

アデラは、わざとらしいほどの優しい声のハインを気味悪く思いながら説明を聞いていた。

「では、今やっている『所持者の書き換え』と言うのは？」

「初めて日記を作った時に、何らかの形で署名をするんです。そのまま名前を書いても良いし、指紋や手形でも何でも良いんですが、大抵は――」

ほら、とハインはロジオンとドレイクを指す。

ドレイクが自分の指にナイフの先を突き立てていた。

「血文字で署名がほとんどですね。特に今回のように譲渡する場合、以前の所持者の名前も消さなければなりません。自分の血で以前の所持者の名も塗りつぶせるので、手とり早いんです。――血は心の臓を流れ続け、その人の人生と共に流れます。自分の血で塗りつぶすことは、以前の所持者の人生を受けるとも意味するからなんです」

「――血で乗っ取る、潰す――とも言つたよね…… あんま好きな表現じゃないけど」

ロジオンとドレイクの様子を見ながら、エマがポソリと呟いた。

「私も好きじゃありませんよ」

ハインが嬉しそうに同意した。

――ホントかよ

アデラと同じくルーカスも、そんな顔をしてハインを見た。

「そうすると、魔法日記は所持者以外は見る事が出来ない――と言つことになるの。うっかり落としたりして、他の魔法を扱う者

達に見られたら大変でしょう？」

「見たらどうなるですか？」

「所持者の魔力によってだけども、ただじゃあ済まないわね。何せ一枚一枚に魔力を込めてるんだし」

エマの台詞を聞いてアデラは仰天した。

「ロジオン様は何故、平気でコンラート師の日記を？」

ああ、と、黙ってみていたルークスが口を開く。

「ロジオンも保持者として署名をしているんだよ、きっと。師弟同士で親密だったり、師が余命が幾許も無いとね、よくやるんだよ」

「そうなんですか……良かった……」

心底ホッとしている様子のアデラを見て、エマは意味ありげな笑いを見せた。

「アデラちゃんったら！ 彼氏を心配する彼女みたい。妬けるなあ！」

「な、何言ってるんですか！ 主人を心配するのは従者として、あ、当たり前で……！」

顔を真っ赤にし、全力で否定するアデラの声が大きくて再びハイソーンと、今度はルークスまで「シッ」と指を立てた。

「すいません……」

シユンとアデラは肩を縮めた。

一方、ロジオンとドレイクの二人は、外野の会話など全く耳に入っていないかった。

ドレイクは指にナイフの先を突き立て、指先から溢れる血でコンラートの署名を塗り潰していき、そして、背表紙の空白の部分に自分の名を書いていく。

はたと気付き、ロジオンはドレイクに尋ねた。

「僕の名前は……消さないの？」

「消す必要は無いでしょう。常に所持するのは私でも、所持者が複数いた方が都合が良いときもあるのです。くだらない者の手に渡るのはロジオン、貴方だって意に沿わないでしょう?」

「うん……ドレイク」

「何でしょう?」

「……ありがとう」

フツ、とドレイクが微かに笑った声を出した。

刹那、宙に浮いていた魔法日記が風に当てられ、紙が唸るように音を立て、次々と捲れていく。そのページ数は驚く程多い。

新しい主人を確認するように捲れていく日記を見ながら、ドレイクは

「コンラートは魔力を扱う者としては短い人生でした。——短かった故に数多くの魔法や魔薬、召喚を創れ、その魔力が高かったのやも知れません……」

そう言った。

最後のページが捲れると、日記は新しい保持者に満足したのか、ゆっくりと自らの光を閉じていき、元の日記の姿に戻った。

「S o v b e d r ? g e r i (欺 き 眠 れ) 」

ドレイクはロジオンから教わった呪文を日記に告げると――

日記は回転を繰り返し、再び手帳ほどの大きさになった。

「では、頂いていきますよ」

「どうぞ……約束は守ってよ」

「勿論ですよ。師弟の関係になるのですから」

コンラートの日記を胸元のポケットにしまい込みながら目を細めた。

——何かやりそうな顔だよね——

そう思ったのはロジオンだけではなく、エマやルーカスや、付き合いの短いアデラさえも嫌な予感で思わず口元を歪めた。

気付かないで二人の様子を瞳を輝かせて感動している、宮廷魔導師二人——サマンサにハイン。
そしてリシエルであった。

29 魔法使いに必要？

日記をドレイクに引き渡した後も、基礎体力作りだとかでランニングに加圧式とか言う筋力づくりに柔軟が繰り返された。

魔法使いに筋力は必要なのか？

アデラは首を傾げた。

宮廷の魔法使いや魔導師達は、普段部屋に閉じ籠っているせいか、顔色は青白くてヒョロヒョロが多い。

勿論、漏れずに例外はいるが――。

仲良く皿洗いをしているハインとエマを見る。

少々強めに言ったら

――「っわっ、キッツ！――」

と言いそうな顔をして、アデラを見つめていたハインだが

「そうよね」。アデラちゃん一人じゃ大変よね。元々は仕官なんだしい。わたしも料理ぐらい手伝うわあ」

と、エマの一言で

「そうでしたよね！ その通りでした！ 私も簡単な料理くらいは覚えた方が良くないと考えていたんです！」

と、元気良く同意した。

（魔法を使える男も、恋をすると普通の男と変わらないか）

水洗いした皿を受け取り水気を拭き取りながら、心の中で溜め息をつく。

二人の世界に入っているのでアデラは

『魔法使いに筋肉は必要か？』

——の質問が出来ず、黙々と後片付けをしていた。
(後でロジオン様にお尋ねしてみよう)

*

「~~~~~」

寝台にうつ伏せで寝転んでいるロジオンは、しきりに唸っていた。
早くも新たな筋肉痛が襲ってきたらしい。

アデラの質問に答えようと首を横にただけでも痛みが走るのか
少しずつ、ずらしては顔をしかめては止まっていた。

「筋力……て、言うか……体力って言うか……まあ、自分が繰り出す魔法に負けない身体が必要……と言った方が適當。身体を鍛えると言うのは、精神を鍛えると連動しているし……召喚を行使するには精神力が大事だし……攻撃魔法を施行すれば……威力次第だけど反動が返ってくるしね……。まあ……皆さん、その辺りはケースバイケースで……魔導師辺りになれば……身体に負担がないよう上手くやっているわけで……とにかく、今はなまくらになった身体を戻しなさいと……」

「ドレイク殿に言われたわけですね？」

そう言うこと——ロジオンはパタリと首を敷き布に落とした。

「それより……アデラ、実家に戻って何か手がかりになるような話……あつた？」

瞬く間にアデラの表情が曇り、ロジオンは無駄足だったことを悟った。

「……そうか……残念だな……」

「申し訳ありません……」

悔しそくに唇を噛むアデラに、ロジオンは首を横に振って見せた。
「がっかりしないで、その為にドレイクに頼んだんだ……そんな簡単に自分の魔法を造るヒントが見つかるわけじゃないし」

ドレイクの魔法に掛けるしかないかなあ——そう言うロジオンの

言葉に、どこか落胆の影が隠れているのをアデラは見逃さなかった。
「何か懸念することが起こりましたか？」

「……ドレイクは今生きている魔導師の中では一番魔法を駆使できるし……魔力も高い……彼一人でも師匠を滅する事は簡単なんだよ、そんな魔法も彼はきつと知っているよ……長い時を生きてきたんだもの。なのに、何故……ルーカスやエマまで連れてきて尚……結界の中に封じ込めたままではいるんだろう……」

「それはロジオン様に、猶予を与えているのでは無いのでしょうか？」

「あ……あの入ってね……魔法に関わっている事件に関して酷く冷酷なんだ。魔法使いや魔導師の評価を下げる事件……じゃなくて……魔法そのものの評価を下げる事件に容赦ない人なの。今回ののはまさしく、そうでしょ……？ 水の称号を持つ魔導師が……死しても生に執着して襲っている……彼にとっては許してはいけないことだ」

「だから、猶予を与えているなんて考えられない」言い切ると、ふーと疲れたのか筋肉痛が痛むのか、また顔を枕に伏せた。

「育ち盛りの身体を……こんなに酷使して……逆に身体を壊したらどうしてくれるんだ？」

アデラに構わず、ブツブツと一人言を言っ、ふてくされているロジオンにアデラは

「何処が一番痛みますか？ 揉んであげましょうか？」
と、尋ねた。

一瞬、間が空き、ロジオンが勢い良く跳ね起きた。

「——ええ！？ ほんと？ 本当に揉んでくれるの？」

キラキラとブルーグレイの瞳を輝かせ、アデラに詰め寄った。

「……以外とお元気そうなので、大丈夫ですね」

アデラが詰め寄ってきた主に引き気味に言うつ

「腰！ それからふくらはぎ！ お願いします！」

ロジオンは、さつとうつ伏せになると、いつもよりずっと早く喋りアデラを促した。

はぐつと溜め息を一つ付くと、アデラはロジオンの腰に手をあて、押し込むようにマッサージを始めた。

「痛みますか？」

「うん、気持ち良い」

「本来ならご自分でストレッチなど、なさるのが一番良いんですよ？」

「うん、分かってるよ。でも……一度、誰かにやって貰いたかったんだ……。いつも師匠にやってあげていたから……」

「そうなんですか？」

「僕がやってあげるでしょ……？ そうすると凄く気持ち良さそうにしてるんだ……。『そんなに気持ちが良いもんなんだ』って思ってた……ずつとしてもらいたいな……って思ってたんだ……」

「まあ……」

「それで御褒美につてね……次の日にソフトクリームを買ってくれたんだ……」

「お好きなんですか？ ソフトクリーム」

「うん。美味しいよね……ああ、食べたい……」

アデラのプーツと吹き出した笑いに、ロジオンは不思議そうに顔を起こす。

「何か……可笑しなこと言った？ 僕……？」

「い、いえ。ソフトクリームが好物とは、ずいぶん可愛らしいなと」

口元に手を当て、クスクスと笑っているアデラにロジオンは方眉を釣り上げ、口を尖らせた。

「しょうがないでしょ。師匠が甘いもの食べ過ぎると虫歯になるからって、滅多に食べさせてもらえなかったし」

「でも、コンラート師は甘い物がお好きだったと昨夜……ご一緒に召し上がらなかったのですか？」

「少しは……ね」

「ソフトクリームは別格なわけですね？」

「……冷たいものを食べ過ぎるとお腹壊すって……滅多に食べられなかったんだよ」

「私の御褒美も、ソフトクリームで結構ですよ」

「……はいはい……何だってなあ……そんなに可笑しいかなあ……？」

ますます口を尖らし、ゴニョゴニョと話す主に、アデラは歳相応の感情を見た気がし、笑いが止まらなかった。

硬くなっているロジオンの腰を押しながら、ふと思ったことを口にした。

「ロジオン様、すぐにコンラート様を滅することが出来る力をドレイク様が持っていて、それをしないと云うなら、第三者の意見が入っているのかも知れませんか？」

ロジオンが思いつきり眉間に皺を寄せた。

「……第三者……？」

何か思い当たる節があるのかロジオンは、一点を見つめたまま考えに耽りだし、何か納得したかのように頷いた。

そしてアデラに

「こう云う勘は鋭いよね……アデラは……」

「？」

のんびりとしたいつもの口調なのに、どこか棘があって今度はアデラが思いつきり眉間に眉を寄せた。

勘と言うのは経験も必要なことなので、アデラに恋愛事に勘を働かせよ——と言うのは無理なことである。

*

小さな影が、ドレイクの使っている部屋の扉を開く。

その影は慎重に、音を立てずに扉を閉めると、ゆっくりと辺りを見回した。

幾つかの本で作られたサークルと、積み上げられ、塔のようになつた本。それは、一見、乱雑で適当に置かれているように見えるが、その影は、実は緻密な法則性に基づいて並んでいることに気付いたらしい。

「……人の成りを形成しても、獣の習性は抜けきれないと見える」
中傷とも聞き取れる言葉を吐く声音は、その小さな影と似つかわしくない老成したものであった。

「——！」

奥から視線を感じ、影はそちらの方向を向き、安堵に肩が揺れた。それは大きな姿見の鏡であつたからだ。

ただ、自分の姿が写し出されているだけ——そう思った。

「自分の姿を見て、惚れ惚れしているまいな？ あの手」

鼻にかかった笑いが口元から漏れる。

あの種族にしては自己愛が強いと陰口を叩かれている奴だ。鏡が置いてあることに何の疑問もわからない。

——やはり、あの人を起こすしかないようね。

小さな影は、そう思い直すと、来た時と同じように音もなく扉を開け、閉じた。

扉が閉じた後、何も写らなくなった鏡に、ゆつくりと人の姿が写し出された。

それは、つい先程の侵入者の影の姿——リシエルであったが——。ゆらりと鏡面が揺れ、彼女の姿が歪み形容できぬほどになったかと思うと、再び女の姿が浮かび上がった。

そこに写し出されたのはリシエルの小さな少女の姿ではなく、青みのある銀髪の美しい乙女の姿であった。

そのブルーグレイの瞳を真っ直ぐにリシエルがいた場所を暫く見据えていたが、ふっと諦めたように瞳を閉じると右手を軽く振った。

——鏡面にはもう、人は写っておらず、闇の中に異形の物かのよう
に積まれた本が写っているだけであった。

30 初恋、失恋、恋敵（1）

世界各国、その国それぞれの習慣がある。

エルズバーグは多国籍国家として名が知れているだけでなく、人口も然り。

『職人と商人の国』と言う別名があるだけに人口の流れがあり読みにくい、推定として十万人はエルズバーグで生活をしていると言う。

それだけ大きければ、宮廷で全ての地域を執政ことは不可能で、東西南北に分け、そこから更に細かく分け行政を行っている。

そして——やはり、と言うか、習慣なども大きく四つに分かっていた。

その分かれた習慣の一つに『風呂』がある。

「エルズバーグは、朝にお風呂に入るのね」

「エマさんの育った国は違うんですか？」

「うちはね、夕方から夜が多いわねえ。でもお、一日何回も入る人、結構いるわよ」

「綺麗好きな方が多いんですね。エマさんを見れば分かります」

「きゃー！やだぁー！ 恥ずかしいけどお……嬉しいー！」

ポツと顔を赤らめ、恥じらうエマの隣に並び歩くハインは——

湯上がりの、ほのかに香る女の匂いに

鼻の下が伸びそうになるのを、顔の全筋肉を使い阻止し、爽やかな好青年を必死に演じていた。

（いい香りだゝああ……）

抱き締めたいと悶えて震える手足を押さえ込み、エマの横にいる。

ハインは魔法を扱う者の中では珍しいタイプだ。

言えば、生前のコンラート師のような……。

英雄色を好むと言うどこかの国の謂れを信じ、そのままに実行にうつして、女性経験値は魔法実践経験値より遥かに上回っていた。

——しかし

（この気持ちは何なんだろうか？）

彼女を初めて見た時から続いている、この、胸の奥のくすぐったさ。

彼女とこうして他愛の無い会話をしているだけなのに、魔法の呪文を口ずさむより弾む気持ち。

彼女の行動・言動・仕草の全てを見ていたい。

触れたいのに——触れてしまったばかりに嫌われはしないか？と言う——自信の無い不安。

いつでも彼女を目で追っていたい。

自分の視界から消えるのが怖くて仕方ない。

閉じ込めて自分のものにしたい。

——でも、欲望のままにしたらきつと嫌われる。

今までに経験したことの無い、不安と期待に入り交じった気持ち。

でも、何故だろう？

ちっとも不快じゃあない。

初めてだ。こんな感情。

（これが恋）

これが――

恋――

生まれて初めて女性を好きになったハインであった。

*

「いけません！ お入りになって下さい！」

逃げようとするロジオンの襟首をひっ掴まえ、問答無用に引きずり風呂場へ向かうアデラ。

「一日二日位、入らなくても大丈夫なのに……」

「昨日、運動して汗をかかれたでしょう！ 本当はすぐに汗を流すべきなんです！」

「そんなの……濡らしたタオルで身体拭けば良いじゃない」

「それすらもされておりませんよね？」

アデラはキツと、自分が首根っこをひっ掴んでいる主を振り替える様に睨んだが――ルーカスだった。

「ひゃあああ！ ルーカス殿！？」

慌てて手を離れた途端、ロジオンの姿に戻り啞然とするアデラだ。

「えっ？ えっ？ 何？ 一体何が？」

「『成りすまし』って言う幻術だよ……」

じゃあ！ と、アデラの手が離れたことを良いことに、ロジオンは駆け足で逃げていったが

「マッサージ！ 今夜はやりませんよー！ 臭すぎて倒れるのはごめんですからー！」

とアデラが駆け足で去っていく主に大声で呼び掛けたら――

「やだ」

と速攻で戻ってきた……。

*

「手間を取らせないで下さいよ」

設置式の風呂桶には、湯気が煌々と立ち上ぼり丁度良い湯加減のようだ。

「嫌いじゃないけど……面倒なんだ。ここに来る前までは……毎日入らなかつたし」

「国から国への旅と聞いておりますから、それは当たり前でございますよう？　今は定住されているのですからね。しかも育ち盛りで新陳代謝の激しい年代に……」

次々に自分の服を脱がしにかかるアデラに、流石にロジオンは慌てふためいて逃げだした。

壁にへばりつき、キョトンとした顔でこちらを見ているアデラに言った。

「自分で脱ぐから……！」

「――あ……！す、す、す、すすすいません！」

上半身が裸の主を見て、ようやく事の重大さに気付いたアデラは同じく、ロジオンから慌てふためいて逃げた。

ひしゃげるほど、思いつきり閉めた扉の向こうでアデラは

「も、申し訳ありません！　自分の弟と錯覚してしまいました！

弟も風呂に入るのが苦手で、いつも服をひっぺがしていたものです

から！」

と、慌て食っている口調で弁明した。

「……うん、そう……弟ね……ちなみに弟さんは幾つ？」

「？ 十二ですが」

——十二のガキと同じ扱い……。

——来年で成人なのに……。

胸がシクシクする。

——もしかして失恋かしら？

壁に頭をぶつけ、一人落ち込むロジオンであった。

*

「手伝って貰って助かりました。ありがとうございます」

アデラは朝食後のテーブルを片付けながら、同じく片付けをしているサマンサに礼を言う

「いいえ、押し掛け同然で滞在しているのですから、このくらい当然ですよ。どうぞ遠慮無くお申し付けください」

サマンサはゆるりとアデラに微笑みながら言葉を返した。

物静かでおっとりな魔導師の老婦人と言う印象のサマンサであったが、意外にも家事は手際が良いし、特に料理は大した腕前だった。

宮廷料理人が置いていつてくれた食材と調理済みの食べ物を上手く組み合わせ、飽きない工夫をしてくれた。

「わたしね……手を動かすものが好きなのよ。料理とか手芸とか」

アデラに向ける笑顔は、本当に嬉しそうでアデラも顔が綻ぶ。

「普段からもやっていたらっしゃるんですか？」

「一人でしょ？ 面倒で宮廷の食堂とかで適当に済ませてきたけど。

……今はリシエルがいるから作っているのよ」

重ねた皿を大きな盆の上に乗せ、二人で流しまで持っていく。

自分ができる労力は魔法に頼らない——魔法を扱う者達の生活基準である。

「リシエルは何時から一緒に？」

「まだ短いのよ。一年も経っていないわ。あの子、わたしがまだエルズバーグに来る前に親しくしていた方の娘でね……。一人になつて、私を頼って来たのよ……。初めて会った時は、ガリガリで肌に血色は無いし髪は荒れてボサボサだしで……。栄養の整った食事をさせなくては——と思って作り始めたのよ」

「そうでしたか……」

「歳月が経って、国の様子も大分変わっていたようだし、ここに辿り着くまで苦労したのは一目見て分かりました……。それなのに、ひねくれた様子も見せずに懸命に私に尽くしてくれて……」

「良い子ですね」

涙を浮かべ頷くサマンサを見て、昨日見たリシエルの変貌の一片を話すのは止そうと思った。

エルズバーグに来るまでに辛い思いをし、どこか歪んでしまったのかもしれない。

（サマンサ殿と生活していくうちに、きっとリシエルの心の軌道修正がされていくだろう）

——この方の側で過ごすなら、きっと大丈夫——

アデラは穏やかな物腰の、優しい老魔導師と共に微笑んだ。

「——そう言えば……」

調理場に行く洗い場まで盆を持っていき、一息付くと思いついたのかサマンサが首を傾げた。

「ロジオン様のご様子がおかしくございませんでした？　こう……常に消沈なさっていたようにお見えでしたけど……」

何かございました？　——そうアデラに尋ねられても、アデラも首を傾げるばかり。

「私も気にはなっていたのですが……はつきりとお言いにならないのです」

「かたやハイン様は気が落ち着かぬ様子でしたし……」

「それは原因は分かっておりますから問題がありません」

鈍いアデラもそれだけは、サマンサの問いにさらりと答えた。

目下、気にするところは自分の主であるロジオンの落ち込みっぷりだ。

ドレイクに叱咤された時とは違う秋波を感じる。

（風呂に入った後なのよねえ……）

思い出してハッと気付きアデラの顔が青くなった。

（わざとではないにしろ、お年頃のロジオン様の上半身を見てしまったから羞恥で……？）

——繊細な年頃に何て事をしてしまったのか——！

（これはすぐに再度ロジオン様にきちんとお詫び申し上げねば！）

あたふたとし出したアデラにサマンサは、ますます首を傾げていると、玄関の呼び鈴の音が響いた。

「来客……？」

アデラとサマンサは顔を見合わせた。

一昨日の前夜祭のイベント扱いされたロジオンとハインの一騎討ちの後、ロジオンの父である陛下に頼み、この辺り一帯は出入り禁止にしてもらっていたのだ。

——そのはずなのに何故

揉め事の予感にアデラの胸中は大いにざわめいた。

こいつ言つ予感は良く当たる——。

玄関に出向いたアデラは、その来客の姿を見て頭を抱えた。

「……やっぱり……。どうして嫌な予感は当たるのか……」

忌々しそうに呟いた先にはアデラの顔を見つめ、神妙な顔付きで立っているエイルマーがいた。

31 初恋、失恋、恋敵(2)

「お前……一体、何の用なんだ？」

鬱陶しいのがやって来た——アデラは、そんな様子を隠さずにエイルマーに應對した。

当のエイルマーには、そのような意思は目下伝わっていない。

それどころか、小さな瞳を潤ませてアデラに迫り、距離を縮めてきた。

「良いんだ、アデラ……君の気持ちは分かっているよ。何も心配はいらないよ。全てを承知で俺はこうして迎えにきてやったんだ……」
「——やったんだあ？ いや、その前に私の気持ち？ 分かっている？ 何を分かっているんだ？」

妄想が入っていると思われる目線上の台詞に、アデラは頭を抱えた。

「自分の身の上に危険が及んでいるのを知ったから、俺を冷たい態度で遠ざけたんだろう？ ああ！ 俺は何て罪作りな男だったんだ！ 君の気持ちに気付かずに苦しみの渦中に放り込んでしまった！ 太陽の光を受けて輝く砂漠の砂のような君、このような薄暗い陰気な城に閉じ込める悪い魔法使いから救いに来たんだよ！」

「……色々間違いついでどこから突っ込んだら良いやら……」
酔いしれているエイルマーは、かなり質が悪い。

騎士としての腕と素質は筋金入りなのに、女性に対する思い込みの勘違いも筋金入りなのだ。

頭を抱えているアデラの腕を掴み、エイルマーが切り出した。

「危険をかえりみず君のために迎えに来たのだ！ さあ！ もう本心を隠す必要など無い！ 私の胸に飛び込むんだ！ そして共に帰ろう！」

「主を置いて帰るわけがなからう！ 妄想ではっちゃけおつて！ 帰るなら一人で帰れ！」

アデラは掴まれた手を払いエイルマーに怒鳴ったが、彼は呆れながら大きな溜め息を付き首を横に振る。

「はあ……君はどうしてこうも素直じゃないんだ？ それともロジオン王子に惑わされたままなのか？」

「貴様の頭の中が煩惱だらけなのだ！」

「アデラ……私は君が王子の欲望の純潔が王子に散らされていても構わないのだよ？ 心身共々ボロボロになった君を癒してやれるのは私だけだ……さあ！ アデラ、私の胸に飛び込んでおいで！」
高ぶった感情そのままに両手を広げ、エイルマーはアデラを誘う。

——今度はアデラが溜め息を付きながら首を横に振る番だった。

（どうしてこう言葉が通じないんだ……）
どうしよう。

追っ払って早々に宮廷に戻って欲しいが、こいつは一筋縄では行かないのはよく知っている。

（エイルマーより、がたいの良い奴数人に連れて行って貰えば良いんだが……）

残念なことに小城には、該当する人物はいない。

ドレイクが見かけによらなそうだが、こんな面倒なことに協力してくれそうもない。

「この面白そうな人、誰？」

異邦人より酷い相手をどう追い返そうか思案を巡らせているアデラに、後ろから声をかけてきた人物——ロジオンだった。

*

「ロジオン様——ぶっふ」

アデラが無様な声を出したのは仕方ない。

エイルマーがアデラを押し退けた際に、彼の腕が彼女の顔に当たったのだ。

庇う姿勢を取ったらしいが、顔面強打では庇われた方は迷惑である——特にこの場合では庇われたくない男に庇われているのだし。

しかし、庇った方の男——エイルマーは自信満々・英雄気取りで胸を張り堂々とロジオンに物申ししていた。

「ロジオン王子！ 立場を利用し相思相愛の男女を切り裂くことは、神をも許されぬ行為ですぞ！」

「アデラは……以前、付き合っている人はいない……と僕に話していたけど？ って言うか、君どちら様？」

「しかも！ 主従関係と言う逆らうことの出来ぬ者に、なんと云う不埒なことを！」

「……だから君誰なの？」

「人として恥を知らぬのですか！」

「だから……君名前は？ どの所属？」

「今、心を入れ替えればきっと神もお許しになります！ そして私もアデラだって貴方様の行為を許します！」

「だーかーら！ 君誰！」

「聞いているんですか！」

「それはこっちの台詞だよ！」

エイルマーは肩が揺れるほど、大きな溜め息を付いて言った。

「なんと言ったこと……。話し合いどころか会話も成り立たぬとは」

「それはお前だ！」

ロジオンとアデラ、二人声が揃った。

この騒ぎにエマとハインが顔を出してきて、新しい顔に首を傾けた。

「ロジオン、今この辺りは出入り禁止でしょ。どうして知らない

い顔がいるのお？」

腰を振りながら軽やかな足取りでロジオンに近づくエマの姿を見て、後ろで癒されているハインであったが――。

「――私は貴女を待っていました！ 貴女こそ私の花！ 生きる理由！ 生涯の伴侶！」

ロジオンとアデラと口論していた男がそう言いながら、瞳を輝かせエマの手を握りしめたのを見た瞬間、あり得ない早さで間を詰めた。

「――おい！ お前！」

しっかりと握りしめた手の握力はさすがで、ハインの腕力では離すことが出来ない。

エイルマーはハインなどその場にいるのに見えていないようで、相変わらず瞳を輝かせエマを見つめ、手を握られた当のエマは、目を見開いたまま固まっていた。

「アデラ」

ポカンと口を開けたまま事の成り行きを見ていたアデラにエイルマーは顔を向けると、申し訳ない様子で口を開いた。

「アデラ……すまない。私は真実の人に出会ってしまった……。君の気持ちは嬉しいが、受け取ること出来ない……。女性達を惹き付けて止めない私を許してくれ」

「――はあ？」

アデラとエマ、二人揃って疑問詞の台詞を吐いたが、疑問詞の内容が違うのは見てとれた。

（いつあんと付き合った？ つーか、私があんに惚れている設定になっているのは何故だ？）

――アデラ。

（どうして私があんと付き合うことになってんのぉ？）

——エマ。

脳に口があつたなら、是非エイルマーに聞かせたい言葉である。

——例え聞こえても、彼の脳に入っていくかどうかだが——

「ちょっと！離しなさいよ！」

エマが手を揺さぶり逃れようとするが、エイルマーの手はますます固く握られていく。

「いつ——たいじゃないの！」

「恥ずかしがらなくても良い……私には分かっている、お互い目が合った瞬間に恋に落ちたことを……」

「……あんた、頭の病氣？」

「恋の病と言えよう……」

エイルマーは自身の台詞にうつとりとしながら、エマを引き寄せた。

「ぎゃっ！気持ちワル〜！筋肉系好みじゃない！」

「またそのように……何て可愛い子猫ちゃんだろう」

「エマ殿を離すのだ！勘違いもいい加減にしろ！」

どうにかして、エイルマーからエマをひっぺがそうとするハインとアデラ。

その様子を途中から離脱したロジオンがやや離れて眺めていた。

（カオスだ——）
と。

確かにエマは可愛い。

そう思うが、昔の姿を知っているロジオンには恋心も嫉妬心も沸き上がらない。

今思うのは——

（エマの過去を隠し続けるのは……いけないんじゃない……いや……でも）

焦りに躊躇い、この場を收拾しなくてはならない思いである。

「ちよっ……ちよつとみんな落ち着いてよ……」

声をかけ止めに入るが皆興奮状態で、ロジオンの声など耳に入っていないかった。

「私はあ筋肉だけの頭空っぱな奴が一番嫌いなのおー!」

「その通りだぞ! 離れたまえ! 力で女性を屈せようなど!」

「いい加減にしろ! 団長に報告するぞ!」

その時――

「手を離せ――って何度言えば分かるんだよ? おい」

ドスのきいた低く野太い声が響き、皆、凍りついたように固まった。

――それもそうだろう。

その声はエイルマーの目の前――エマから聞こえたのだから。

「その薄汚ねえ手を離しやがれ、頭のイカれた筋肉野郎!」

エイルマーに向けられたエマの視線は、眼力が逞しい。

「――ヒッ!」

雰囲気のアマりの変わり様に息を飲み込んだエイルマーは、そのがたいからは想像できない高い声を上げ――そのまま身体が跳ね上がり、尻餅を付いた。

「エイルマー?」

アデラは何が起きたのか分からず、前屈みで尻餅を付いたエイル

マーを見る。

「エイルマーだあ？ エイルマーっつーんか？ この脳内筋肉」
エマの低い声音に慄きながらも「そうですか」とアデラは返事した。

「俺の名前と同じかよ！ かあー！ ムカつくうううう！」

「「「ーえっ……？」「」」

アデラ、ハイン、エイルマー。

三人、野太い声に固まっていたが、新たな事実完全に凍りついてしまった……。

「……自分から言っちゃったよ……」

あゝあと、少し離れた場所でロジオンは頭を押さえた。

32 初恋、失恋、恋敵(3)

「エマは東のリニシュの国の出でね……向こうの言語で書くと『E i R U M A』なんだ」

ロジオンは三人の前で、羊皮紙にスペルを書いて見せた。

「それで頭文字の『E』は『エ』……後ろの『M A』は『マ』と呼ぶわけ……。その国独自の名前のスペルだから……まあ、今の本人見ても思い付かないよね……」

EとM Aに丸を付けられた羊皮紙を見て呆然とするハインとエイルマーは、すっかり気の抜けた炭酸水のようにだった。

「……それは分かりましたが、ロジオン様……エマ……いや、エイルマーは何故——」

「『エマ』で良いよ……と、言うより……そう呼ばないと……男女問わず恐ろしい目に……」

「……あつたんですね……ロジオン様は……」

真っ青な顔で頷くロジオンは、過去の経験を生かした助言だと、はた目でも分かった。

共に頷くルーカスも同様であった。

アデラは一つ咳払いをして、話を続けた。

「エマ殿はそのお、いつから……なんででしょう？ あのように女装を？」

「女装じゃないんだ。今、女性化している最中なんだよ」

と、ルーカス。

「女性化？」

アデラの再問いかけにルーカスは頷くと、説明を始めた。

「手っ取り早いのは薬を引用したり、まあ、身体に手を加えたり———なんだけど、薬だと定期的に服用しなければいけないし、身体に傷を付けてだと後々に後遺症が残るかもしれない……だから、自分の魔力を使って自身を変化させるんだよ」

「そんなことまで可能なのですか……魔法と言うものは万能なのですね」

感心しているアデラに

「いや……可能だけど、実際施行するとしたら……大変だよ」とロジオン。

「うん、そう。身体の造りは勿論、骨格やら皮膚やら筋肉量や脂肪にホルモン等々——変えていかなきゃいけないからね。一日二日で出来るものじゃない。時間を掛けてゆっくり変化をさせないと狂いが生じる」

「では——エマ殿はいつたい何時から……」

「僕がエルズバーグに向かう前に……一度会った時は……今のエマになっていた……」

「吃驚したろう……？ その前はまだ男の成りだったし……」

ルーカスの言葉にロジオンはゆっくりと首を振り

「いや……その時より、数年会っていないくて……その後の方が……筋肉質の体育会系の姿のまま……女物の服を着て現れた時の……あの……」

「ああ……それな……声が先に女性化したから……それで我慢が出来なくなった……らしい……」

思い出したのか二人、脂汗を掻きながら紅茶を飲んだ。

「それを聞くと、随分長い時間が掛かるようですね……」

「僕が生まれる前から……やっていたらしいからね」

「俺が気付いたのは、もう少し前——魔法を施行する力が弱くなつて『終わりの時』が近付いてきているのかと思って尋ねてみたら——って訳だね……成人した身体を形成し直すからなあ、少しずつとは言え相当量魔力を消費するもんなんだな、と」

「じゃあ……エマは今よりずっと魔力があるわけなんだ？」

ロジオンが驚いたようにルーカスに聞いたが、いつものゆっくりとした口調が少々早くなっただけで、あまり驚いたようには見えな
い。

「『結界』の魔導師と成りうる人材だったんだ」

「『結界』……？ 称号でしょうか？」

「ああ、そうだよ」

「称号は四大元素の『火』『水』『土』『風』しかないかと思って
ました」

アデラの言葉にルーカスは首を横に振った。

「それは『元祖』とも言われているもので一般的に有名なものでね。
実際は地上にある、有りとあらゆるものの物質に対して、それぞれ
得意としている者達がいるんだ」

納得したように頷くアデラにルーカスは話を続ける。

「本当なら今頃は魔導師なはずなんだ。『結界』の称号まで付いて
いる魔導師になっていただろうに——それより『女』になることを
優先してしまったんだよね……」

眉間に眉を寄せ喋るルーカスは怒りと言うより、憤懣やる方ない
ような表情に見えた。

話が一区切り付き、ふらりと、エイルマーは立ち上がり、よ
たよたとした足取りで小城から去っていった。

「お騒がせな人だね……」

ロジオンの言葉にアデラは同意した。

「またすぐに新たな恋に出会って立ち直りましょうから」

「そう言うもの……？」

「あやつは、そう言う奴なのです」

「ふ〜ん……で、アデラ……君は彼を追わないの？」

「何故です？」

「何故って……付き合っていて……君が心配だから追いかけてきた

んじゃないの？ 彼？」

アデラの首が思いっきり横に振られる。

「何をおっしゃいますか！ 私と奴の間に、そのような事実はありません！ ただの同僚です！」

「ふん……。でも……。彼はそう見てなかったようだよ？」

「いつも宮廷城の誰かに勝手に惚れて、脳内で付き合っていると言う設定にされてしまうのです。——これで何回目なのか知りませんが……」

「……思わせ振りの事をしたんじゃないの？」

「い、いいえ！ 決してそんなことはありません！」

確かロジオン宅で徹夜をして帰った日、起こされ何故か説教されて

——その時、眠い中、いい加減に相づちを打っていた——

その時、エイルマーに勘違いされたのだろうと言うことは間違いないだろう。

まだ私に粘着しているならまだしも、途中で対象人物を変えたから特に主に話す必要はないだろう——アデラはそう思っていた。

（しかし……。適当に相槌を打ったことが、思わせ振りの言動になってしまつて、このような騒動までに発展しまったのだよね……）

そう考えるとアデラは居たたまれなくなり、ロジオンに頭を垂らした。

「申し訳ありません……」

「何故……。謝るの？ 向こうが思い込みで乗り込んで来ただけなら……。アデラは謝る必要がないでしょう？ それとも……。彼が誤解をするような言動をしたの……？」

この時、主の様子が違うことにアデラはようやく気付いた。

周囲の雰囲気を観察することに長けているハインは早々に部屋から退出しており、無頓着なルーカスは暢気に茶のお代わりをしていた。

一年前、初めて顔を合わせた時と同じ、平坦で冷たい口調。
固い、何の感情も見れない表情。

「どうなの……？ アデラ」
「そ、それは……」

向けられたロジオンの眼差しの冷たさは、どこか軽蔑の光が宿っているようでアデラは思わず俯いてしまった。

「……」
「……」

ロジオンはじつとアデラを見つめ
アデラは、ロジオンの視線を避けるように俯く。

よろしくない雰囲気の中、空気を読まないルーカスは一人茶をする。

「アデラ、何か食べるもの無いかな？」
茶だけ飲んでいて胃が刺激されたのか、ルーカスが徐に尋ねた。
はっと顔を上げたアデラにロジオンは

「菓子でも出してあげて……」
そう言って立ち上がると、先に扉に向かって歩いて行ってしまった。

「ロジオン様、どちらへ？」
「ドレイクの訓練の続き……もう時間だから」
しばらく邪魔しないで——そう言っつと、振り向きもしないで部屋

から出てってしまった。

「ロジオン様……」

呆然とするアデラに

「ついでにこの紅茶、渋くなってるから湯を足してくれると嬉しいんだけど。後、お菓子は栗が良いなあ。出来れば焼き栗じゃなく甘く煮たもの」

と、またもやルーカスは空気を讀まない発言を繰り返した。

33 初恋、失恋、恋敵（4）

洗濯物のシーツが風にそよぐ。

エルズバーグは秋から冬にかけ乾燥する。

天気が良い時は、朝早く干せば夕方前にはよく乾いた。

アデラは乾いたシーツの前でずっと立ち尽くしていた。

仕事は山ほどあるのに頭が働かない。

思い出すのは――ロジオンの硬化した態度。

平坦な冷めた口調。

ここ数日で一気に親しくなり、比例してロジオンの口調も柔らかくなり、年相応の態度や表情も見せてくれるようになった。

信頼されてきた――。

「……そう思ってきたのに」

弱音が吐き出される。

「この人なら私の真実を知っても気にしないでくれるかもっ……て」

「うん……そうね……」

「私の変体が終わるまで待ってくれるかなって……」

「うん……？」

自分が吐いた台詞じゃない。

一体、自分は誰に相槌を打っているんだ？

摩くシーツを避け、ロープに掛けられた洗濯物達の間を潜ると、

茂みにしゃがみこんで俯いているエマがいた。

「――エマ殿！」

ここですつと泣いていたのか、エマの瞳と鼻先は真っ赤でヒヤッ

クリを上げていた。

「アデラちゃん……」

すんすんと鼻を吸いながら、ゆっくりとこちらを見上げるエマ。大きな瞳から瞬く間に涙が溢れ、すべらかな頬を伝い落ちる。時々噛み締めたのだらう。唇は赤みを帯びていた。

涙でぐちゃぐちゃな顔なのに――

（か、可愛い……）

元から女の性を持つ自分より可愛い。

（信じられないわ、ああ言われても）

「……聞いたんでしょお？ 私のこと。ロジオンとルーカスから」

「……はい」

「ハインは？ どうしてたあ？」

「ハイン殿は……しばらく放心状態でしたが、場の雰囲気察して

――え？ ハイン殿？ え？ え？」

かあああとエマの頬が赤くなり、流石のアデラも啞然と口が開きっぱなしになってしまった。

「エエエエ、エマ殿？ 落ちていてくださいね？ あの男、性格に問題ありませんか？ 確かにお洒落ですし、容姿もなかなかですが、でも、でもですね――」

「アデラちゃんこそ落ち着いてよ。……良いじゃない。下心があつて優しくてもさ。私に好かれようと一生懸命で、後に付いてくる姿がシロイワヤギみたいなんだもん」

「白いわ山羊？」

「シロイワヤギ。全身白い毛皮で覆われていてね、断ペキの崖に住み着いてるの。可愛いんだあ……それに似ているの、彼……」

「……もう少し、メジャーな動物に例えてくだされば想像しやすいのですが……」

人の好みは一概に言えないとは言え、エマの好みはシロイワヤギを知らないアデラにとっては首を傾げざる得ない。

「ハインなら……今の私でも受け入れてくれ……る……かもって……でも、でも……駄目なのかなあ」

「エマ殿……」

エマの瞳から絶え間なく流れる涙を、アデラは一番側に干してあった拭い布で拭いてやる。

「アデラちゃん……！」

こっん、とアデラの胸にエマの額があたる。

「うっ、うっ、うえ、うええええ！」

絞り出すように泣くエマの背中をアデラは、ひたすら擦ってやる。
「泣いたら良いですよ、気が済むまで……」

*

「私、物心ついた頃から自分の身体に違和感を感じてたの……。男の子の遊びより、女の子達と女の子の遊びをする方がずっと好きでね……。小さい頃はそれで良かったけど、成長するにしたがって周囲も“おかしい”と騒ぎだしてきたの……。言われても仕方なかったけどね、女の子達と混じって髪結ったり紅引いたりしたから……。親にも怒られて……。変なことなんだって思っ、髪切って必要以上に筋肉付けて……」

「……」

アデラとエマ二人、横並びに座り風に揺れる洗濯物をぼんやりと見つめながら座り込んで、黙ってエマの話を聞いていた。

「強力な結界を張れる魔法使いとして名が知れるようになって、協会に呼ばれて次の『結界』の称号を持つことになるだろうって告げられても……。ちっとも嬉しくなかった。だって本当になりたくて、したくて今の姿になったわけじゃないもの……。そりゃあ、魔法なんて魔力がなければ使えない、私はその点で恵まれていた。魔法を使い万人の為に役立てようと言う気持ちはあるわ。——でも、自分のために使ってはいけないの？って思い始めたの……」

「それで性交代を……」

「ロジオン達から聞いた？」

「ルーカス殿が残念がっております。今ごろ、当に魔導師になって『結界』の称号を持てただろうにと」

「あいつらしいなあ。確かに称号を持てることは名誉なことなんだろうって思うけど——決心していなければ私、今頃狂ってるか自分で命絶つてたわ」

「今は……そう思いますか？」

アデラの問いにかけにエマははっと目を見開き、しばらく一点を見つめて考えに耽った。

「フフ……」

そう自嘲するように低く笑う。

「思わないわあ。苦しくて悲しいけど死にたいとは思わない。——何か分かつちやた」

悟ったのか、思う存分泣いたせいか、エマの顔は先程よりずっと晴れやかだ。

そして立ち上がり、たつぷりフレアの入ったスカートに付いた塵をはたく。

「私が、女として生きたい気持ちを理解してもらえないのが悲しかったんだわあ」

「エマ殿」

「でも、それってえ、その事をきちんと話していなかった私も悪いんだよね」

「……」

「話すわあ、ちゃんと。ハインだけじゃなくて——ルーカスやロジオン、ドレイク……そして魔承師様にも。自分が自分らしく生きたいから女の性を選んだことを。否定されるか認めてもらえるか分からないけどお」

そうアデラに微笑むエマの姿は、今までと違い意思を持つ一人の女性だった。

「素敵です、エマ殿」

アデラも立ち上がり、エマの手力強く握った。

「アデラちゃんも仲直りした方が良いんじゃない？」

「——えっ？ わ、私はロジオン様とは何もないですよ？」

「私、ロジオンとは言っていないけど？」

したり顔のエマに、アデラはグツと言葉が詰まる。

「あの子、普通の男の子と同じように接した方が良いと思うの」

「い、いや……第二王妃様には姉のように接してくれと言われて、私はそのように接しているだけで……それで良い関係でいられそうだったのが……私が……エイルマーとのいざこざを黙っていたばかりに……すっかり信頼が……」

話が進むに連れ声が弱々しくなり、元氣無く肩をがっくりと落としたアデラにエマは「うんうん」と彼女の頭を叩いた。

「ロジオンは勘が鋭いし、コンラートの恋愛沙汰を見て育ってるからあ、同年代の子達より理解してるわよ」

「——いや！ 本当に奴とは何もないのですよ！」

「見りやあ分かるわよ」。あいつ自分の理想を目の前にいた女に見ただけじゃない

「……見抜いてらっしゃいますね」

ウフフと、笑うとエマはアデラの耳元で話し出した。

「微妙なお年頃なのよ、ロジオンはあ。側にいてくれる女の人自分以外の男との悶着に相談もしてくれない。自分は頼りにされない・弟扱いなのは、嫌なんじゃない？」

アデラはますます消沈していった。

「男なんてさ、ギョツ！して“ごめんね”すれば、すぐに機嫌が直るわよ——元・男の助言！」

今も男入ってるけど、キャラキャラ笑うエマに分からないよう

にアデラは、そつと溜め息を付いた。

——そんな風に割りきれないのよね……。

恋愛に関して不器用な事は、自分自身よく理解している。

しかも色仕掛けなどもつての他。

アサシンとしての修行の中に『色仕掛けで情報を仕入れる』と言うものがあつたが

『……何でそんなに下手なの？』

と周囲に呆れられたほどだ。

(抱き締めてごめんなさいなんて……)

想像しただけで動悸と目眩がしてくる。

——それに

自分の中で主には好意を持っているが、果たしてそれが“好き”
と言う感情なのか？

——分らない。

それが、本当に異性としての感情だったら、先には辛いことしか
起きてこない。

——彼は王子で

——私は彼の従者

これ以上の事は無いのだ……。

33 初恋、失恋、恋敵(4) (後書き)

シロイワヤギ↓<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B7%E3%83%AD%E3%82%AE4%E3%83%AF%E3%83%A4%E3%82%AE4%E3%83%AF%E3%83%A4%E3%82%AE>
顔がこうだから可愛いではないと思う…。

34 呼ぶ声

鬱蒼とした木々の中、囲むように円形の闇がある。

その場所は日のある時間帯なら、地下から滾々と湧き出でる水を受け止める池であるが、夜を迎えたこの時間になると、性質を変えたように暗く黒く染まる。

生い茂る草木の仕業もあるだろうが、異物を取り込んでしまった故もあるだろう。

人の身体と言う箱から自由になった、我欲に忠実な魂——コンラート・オーケルベリを——

その深い闇に向かい歩いていく足音。

踏まれた草の音は小さい。

それに比例し、身体も細く小さかった。

闇と同化した泉の前まで来ると止まり、胸元に手を当て囁いた。

囁きは何かの呪文のようだ。

囁き終わると、胸元に合わせた小さな手をゆっくりと離す。

——離れた手に吸い付くように胸元から小さな球体が出てきた。

ぼんやりと光るその球体は、小さな手のひらに包まれるくらいに更に小さく、中に何かが入っているようだった。

うつすらと闇を照らす光は、小さな訪問者の顔を照らす。

緩やかなウェーブの髪と健康そうに紅に染まる頬。

小さな身体に見合った顔立ちは幼い少女であったが、あどけなさが全く無く、薄暗く映し出された周囲の草木と同じように、どこかゾッとする雰囲気がある。

「——情けで私の身体の中でお前を生かしておいたのだ。今こそ役

にお立ち、私とコンラートの為に……」

球体にそう命じると、それは自分の意思があるように、ゆっくりと少女の手から離れ池の中央に向かって飛んでいった。

*

ドレイクの眼が大きく見開く。

「——この気……！」

跳ねるように椅子から立ち、マントを羽織った。

自分の心の臓が騒ぎ立てる。

血の流れが急げとせつつく。

怒りで全身の毛が逆立つ。

分かる。

『気』だけじゃない。

『匂い』『同種族の血脈』

『助け』『乞う』『絶望』『悲しみ』『同族のみに届くメッセージ』

——『血』——

ドレイクの赤い瞳が滾った。

「おのれ！！ 我が同族を贗として封を破る気か！！」

叫びと同時ドレイクの身体は泉へと跳ぶ。

*

「——！！ ドレイク？」

ドレイクが空間移動を施行したのに瞬時気付いたロジオンとルーカスにエマは、合わせたように部屋から飛び出した。

従者らしく部屋の角に控えていたアデラも血相を抱えて、飛び出した主に慌てて付いていく。

「ルーカス！ エマ！」

「ロジオン！」

四人は玄関の踊り場で顔を合わせた。

「ドレイクが小城に張り巡らせた結界を破ってまで瞬間移動していた！ こりゃあ大事だぞ！」

「池の結界しかないわよねえ……破れたの？」

ロジオンが首を横に振る。

「いや……それなら僕にだって分かる。だけど――泉に異変があるのは確実」

「——行くぞ！」

ルーカスの言葉にロジオンとエマが頷く。
すぐにルーカスとエマが池へと跳んだ。

ロジオンも向かおうとした刹那――手を掴まれた。
アデラだ。

「ロジオン様、私も行きます！」

「君はここに残って！ 宮廷に非常事態信号を送って。それからハインとサマンサに小城に防御結界を張り直すように伝えて！ ——頼んだよ」

「私は貴方の従者です！」

「言うこと聞かないと首にするよ！」

ロジオンの怒鳴り声を初めて聞いた——アデラは、その迫力に言葉が出なくなってしまった。

戦だ。

戦に向かう人の姿勢だ。

そう感じた。

過去にアサシンとして訓練を積んでいた頃、このような姿勢の現役者を幾人か見てきた。

本人を取り巻く張りつめた空気——集中し、今、自分の持てる力を最大限まで引き出そうとしている。

「……ドレイクは称号を持ってないけど……間違いなく実力があつて、冷静沈着で強い魔導師なんだ……。魔力を扱う者を統べる『魔承師』より強いんじゃないか……。って噂される位……。そのドレイクが……。自ら張った結界を解除施行しないで……。無理矢理破って泉に向かった。——それほど急を要する何かが起きたってことなんだよ……。？」

「……分かりました。ロジオン様のお言い付け通りに役目を果たします」

ほっとした様子の主は「頼むね」と一言告げ空間移動し、アデラの目の前から消えた。

溜め息が出た。

「役立たずだ……。私」

自分がアサシンとしていきていけば、もっと役に立てただろうか？

——落ち込んでいる時ではない。

アデラは気を取り直して、ハインとサマンサの部屋に向かった。

*

ハインは流石、魔導師を名乗るだけあつてすでに状況は把握していた。

「たった今、魔法で宮廷に信号を出しておきましたよ」

「後、小城の結界を張り直して欲しいとのことですよ」

「分かりました——と、言いたい所なんです……」

ハインがばつ悪そうに笑う。

「どうしたんです？」

「ドレイク殿が張った結界の形跡があちこちに残っていて、まずそれを消滅させなければならいんですが……私ひとりでは難しいのです」

「よく分かりませんが……サマンサ殿にも手伝って貰えば何とかなのでは？——ロジオン様はそうおっしゃっておりますが……」

「それなんです、先程サマンサの部屋の扉を叩いてみたものの、何の応答もないんです」

「——えっ？」

サマンサとリシエルが使っている部屋の前にアデラとハイン二人立つ。

「気配はあります。だが、全く返事もしない、扉も施錠されている——で」

眉を潜めて話すハイン。

「中で倒れているのでは？」

「分かりません」

首を横に振るハインをよそにアデラは扉を叩いた。
やはり反応はない。

「魔法の施錠ですか？」

「——あ！……てつきりそうだと……」

「どうです？ 魔法？」

ハインを扉の前に引き寄せ、確認させる。

「いえ。普通の施錠でした……」

笑って誤魔化しているハインをよそに、アデラは至極真面目に言った。

「魔法じゃなかったら私にも破れます——下がっていて」

「破るって……扉を壊すつもりですか！？」

「中に人の気配があるのでしょう？ 私もそれは感じます。でも、うんともすんとも言わない——倒れているか何かあったかも知れないじゃないですか？」

「……う」

下がって——アデラはもう一度ハインに言うのと腰を落とし構えた。

「一度や二度で無理だったら、鉈を持ってきましょう」

「あ、あのアデラ殿……そんなことしなくても魔法で——」

アデラの腹の底から沸き立つ気合いと声にハインは冷や汗をかきながら、他の案を推してみたが——彼女の耳に全く入ることはなく、次の瞬間、彼女の切れの良い足蹴りが扉をひしゃげ、切れ目を入れた。

「一度では駄目だったか。鈍っているな」

舌打ちすると再び構えに入るアデラに、ハインはビビって肩を縮めた。

何せ、物に対して身体を使い破壊を施行したことが無い彼は、近距離でその様子を見たのは初めてだったのだ。

振り子原理を使った回し蹴りは、随分と迫力あるもので、しばらく夢に出てきそうだ。

「もう一度――」

「ア、アデラ殿、言う通りに鉈、持ってき――」

「……開けます。開けますから」

部屋の中から、掠れた声が聞こえた。

声音からしてサマンサのようだ。

アデラもハインも、倒れていなかったことにほっと胸を撫で下ろした。

「何かあったのですか？　今、由々しき問題が起きたらしいのです」

「知っています……ごめんなさい……」

「？」

――なぜ謝るのか？

アデラとハイン、顔を見合わせた。

「私が知ってること……全てお話しします。……だから……」

扉が開く。

ゆっくりと恐る恐る――。

そこには、サマンサが怯えた様子で二人の前にたたずんでいた。

二人の顔を交互に見つめ、今にも泣きそうな顔で言った。

「……お願いします！　お母さんを止めてください！」

34 呼ぶ声（後書き）

話が詰まってしまうました。

ひねり出しますのではしお待ち下さい。

九月には次が掲載出来るよう頑張ります。

35 腐植の滓

「流石のドレイクも、数少なくなつた同族の危機を感じたら冷静でいられなくなるのねえ？」

「……古の言い伝えを真に受け、我が同族をの血を利用するか——カーリナ」

「言い伝え？ 嫌だわドレイク、それが言い伝えかどうか貴方自身が一番よく知っているでしょう？」

泉を背に二人のやり取りの口調は冴え冴えと響き、閉じられた空間でもないのに反響しているように聞こえる。

二人に共通しているのは、至極冷静で落ち着いている態度。

だが、ドレイクの声音はいつもよりさらに低く怒りを押さえているようで

もう一人——カーリナと呼ばれた少女は、弾んだ声で芝居を楽しんでいるように見られる。

カーリナの動作も仕草も、幼い少女そのままで若々しく、足取りも羽が生えたように軽いステップを踏む。

「竜の血は古より万能薬と伝えられている。特に『不治の病』『不老』に『不死』の効力があるとな」

「謂われただけで、実際そのような効果はない——貴様が知らないわけではなかるうに」

「——でも」

妖精さながらに踏む軽やかなステップを止め、カーリナは池の中央で浮いている球体を指した。

「どんなに強力な結界でも、消滅させることは出来る」

パチンとカーリナは指を鳴らす。

それに呼応し球体が音も無く割れ、中に入っていた個体が現れた。

小さな黒い竜——幼体のようで背に生える羽は、萌える幼葉のよう
に薄い。

ドレイクの柳眉が吊り上がった。

幼体の竜の首筋には切り傷があり、そこから細い赤い筋が下へ流
れていたのだ。

「特に同じ種の竜同士の結果なら——無理に力で壊さなくても、ほ
んの数滴の血で充分なはず。この竜は幼いから、そもそも力で壊す
ことは期待してないからねえ」

——止まりなさい！

カーリナの声が響く。

自分を飛び越え幼竜を救おうとしたドレイクの目論みに、カーリ
ナは瞬時に気付き左手——主に攻撃魔法を繰り出す方を幼竜に向け
た。

「……」

無表情だが怒りで赤い瞳をたぎらせ、自分を見つめるドレイクに
カーリナは悠然と微笑んだ。

「竜は生命力が逞しいわ。五体バラバラにされたってすぐには死な
ない。あの竜だって、今まで相当血を抜いて利用したけど細々と命
を繋いでる——ああ、でも、この結果を消滅させる頃には命が尽き
そうよ？ どうする？ ドレイク」

勝利を確信しているカーリナの微笑みは、少女らしさの全く無い、
背徳の影があるものだった。

「助けたかったら、貴方自ら結果を消滅させなくてはねえ？」

「……あの竜はどこで捕らえてきた？」

「知りたいの？ 知るためには『代償』が必要じゃなくって？」

「——人の成りをして暮らしていた者を捕らえたのか？」

「私の話を聞いて無いのかしら？」

「どうなのか聞いているんだ！」

「うるさいわね！ 知りたければ『代償』をよこしな！」

「コンラートの魔法日記だろう、大方！ 探しに私の部屋に忍びに来たのは承知だ！」

しばし静寂が起きた。

ぼたり

幼竜の血の最初の一滴が池に落ちた。

「あーら、言い合っている暇があつたらさつさと決断したら？」

——でないと、あの竜が死ぬわよ？」

「……出自など、どうでも良い。幼竜と魔法日記を引き換えだ」

「結界を解きなさい。それが先よ」

「『代償』と引き換えと言うなら、それでは同等に価しない」

ギリリ——とリシエルの口元から齒軋りの音が聞こえた。

「じゃあ、脅迫と鞍替えしようか！」

後悔するが良い！ 池に向かって伸ばすリシエルの左手が握られる。

「キエエエエ！」

幼竜の首が捻られ、痛みで泣き叫んだ。

絞られるように一滴・二滴と血が池に落ちるその時——。

「——どりゃ！」

池の反対側から勢いを付けルークスが飛び、幼竜をキャッチすると刹那、姿が消え再び池の反対の陸地に現れた。

「——な……どうして！？ 私に気付かずれずにどうやってここまで！？」

じりじりと近づくドレイクから距離を取りながら、カーリナは驚愕した。

「私が気配を消す魔法を施行したからよ。周囲に違和感無く溶け込むように気配を消すまでの実力、そう滅多にいないでしょ、カーリナ」

ルークスの後ろ——後衛を担当するエマが顔を出した。

「エイルマー……。オカマになったと言う話は真だったか……」

上から下まで染々と見つめるカーリナに

「性転換！ おかまじゃねーよ！ エロキチストーカー！」
と怒鳴った。

エマの台詞にカーリナの顔は、瞬く間に怒りで真っ赤に染まる。

「エロキチはあんたでしょ！ そんな胸でかに形成させて、バランス悪くて気持ち悪いんだよ！」

「はあん、負け惜しみ？ だったら幼女の身体から乗り換えたら？ 前の前みたいにあ？ ——あつ、ごめーん。前の身体は『本物』だったけど、お胸は残念だったわよねえ」

あかんべーをしながら嫌みを言い返すエマに、カーリナは全身を朱に染めて怒っている。

まさに怒髪天を衝くと表現して良い。

その様子が面白いのか、エマはますますからかい出した。

「大丈夫！ 女は胸じゃないわあ。性格よあ。——あ、でも性格も

最悪だったわね。それでコンラートにフラれたんだしい。やだあ、
カーリナったら良いとこ全然無いわあ」

「コンラートにフラれてないわよ！ エイルマー……！！！」
怒りで髪が逆立つ——その表現そのままのカーリナは、すっかり
我を忘れていた。

その隙をドレイクは見逃さなかった。

「Tule hangout punainen rot m
aasta（地腐の赤い溜まり場より来たれ）『腐植の滓』」

「——！」

カーリナの足元から一瞬にして伸びてきた蔓のようなものは水泥
で、水音を立てながら腐臭を漂わせカーリナを囲む。

「うう……」

ジュールジュールと水泥混じりの音を壮大に立てながら、隙間を埋め
ていく。

「ドレイク！ 駄目だ、彼女の身体まで腐り果ててしまうよ！」

後から追い付いてきたロジオンが止めに入ってきた。

同時『腐植の滓』の動きが止まる。

「『魂替え』で、元の魂はまだ生きている！ 魂を元に戻さなくて
は！」

そう訴えるロジオンをドレイクは冷めた目付きで言い返す。

「『魂替え』は、時間をかけて試行する魔法。更にお互い了承した
上でないと拒絶が返ってきて、どちらも消滅してしまう。成功して

いるところを見ると互いが了承でしょう。——躊躇う必要はありません」

「相手はまだ小さな子だよ……？ 訳もよく分からずに交換したかも知れない」

「無駄ですね。この女が元の身体に戻ることなど承知するはずがない」

——ジュール——

音をたて再び動き出す『腐植の滓』

ロジオンの瞳が一瞬だけ煌めいた。

「Pyritte palamaan kotin pes?
paikkatahraamakipe? pohjalaho
(腐底の住処に戻り穢れた褥の温床に励め)——『赤い溜まり場の勇士達に戻れ』」

『腐植の滓』

世界は幾つにも分かれ、独自に発展した世界を創り上げていると言われている。

分かりやすい例で言うと『水』や『火』などの特性を持つ者達(精霊と呼ばれている)の世界に介入し、そこに住む者や対武器の力を借りる——『召喚』である。

この『腐植の滓』も異世界の水溶植物を召喚したもので、自らの根本に脳を携える。

——所謂怪物

だが脳は持つていても知能は低く——そうとは言え、プライドは高く凶暴である。

コンタクトを取りやすい異世界植物であるが、そのプライドの高さゆえに滅多に従わず、気に障ると召喚者にまで攻撃するし、召喚したらしたらでなかなか帰らない。

扱いにくい怪物で、水の性質を得意とする者達も、そうそう召喚しないのだ。

その怪物を召喚し、見事に操って見せたのが——コンラートである。

コンラートの召喚魔法をドレイクが施行したところを見ると、彼が魔法日記を読み進めていることは明らかであった。

——そして、ロジオンは——？

36 咆哮（前書き）

タイミングの良い所で切ったら短くなりました…。

36 咆哮

詠唱が終わると同時、悪臭を放っていた水泥の怪物は掻き消されたかのように自分の世界へ戻った。

「ロジオン！」

腹立ちげに怒鳴り付けてきたドレイクにロジオンは

「師匠の魔法なら、大体の施行解除は出来る！ 兎に角、一旦彼女を捕らえて！」
と怒なり返す。

咳き込み、草むらに倒れ込むカーリナに

「？？拍？他の声音（彼の放つ音を潰せ）『絶音』」
今度はエマが魔法を施行する。

「エマ！ それだけじゃ彼女の魔法施行は止められんよ！ 頭の中で呪文を唱えられたら——！」

ルーカスが違う魔法施行を促すが、エマは余裕ある笑いを見せる。
「腐植の滓の臭いでやられてるわ……ルーカス！」

エマがルーカスを見て叫んだ。

「——！」

エマの叫びと同時だった。

ルーカスの身体が軽々と宙に吹き飛ぶ。

繁る木々の頂点を越え、凄まじく枝を折りながら落下した。

「……意識支配だ」

ドレイクが忌々しいしく呟いた。
黒い幼竜はその身体に見合わない猛々しい咆哮を響かせ、形を変えていった。

萌葉に似た薄い飛膜の可愛い翼は、太い骨格を持つ立派な大きな翼に。

小さな鱗で覆われた身体は、鎧を付けたかのように見ただけで固く丈夫そうな身体に。

怯えた情けを乞う紅玉の瞳は、その意思が全く見えない空の輝きを持つ大きな瞳に。

爪が出ているかいないか分からないほどの小さな鳥のような足は、荒々しい長い爪を持つ大きな足に。

成竜とみちがう姿に形を変えた幼竜は、黒竜の気性を現すように落雷に似た咆哮を轟かす。

ビリビリと身体中が痺れる感覚に耐えながら、ロジオンはドレイクに尋ねた。

「竜は一気に成長するものなの？」

「身体の成長を司る器官を狂わせたのでしょ……脳のある部分を魔力を注入して急成長させた。これはもう……」

助からない――

ドレイクの呟きが表情と裏腹で冷淡なのが、ロジオンには胸が痛むものだった。

腕の中に収まるほどの小さな幼竜が、見上げるほどに大きく急成長をした。

これが人なら急激に成長した身体に、内蔵はもちろん、骨や皮膚諸々追い付くはずがない。

身体の急成長に皮膚は裂け、骨はスカスカになり、急に肥大した内蔵は支障をきたすだろう——最悪、歩き出そうと足を上げた途端、身体は悲鳴を上げ崩れ果てる。

果たして竜はどんなのか？

ロジオン自身、竜の姿を見るのは初めてで、目を見張る大きさに呆然としていた。

——嘘付ケ——

「……えっ？」

何処からとなく聞こえてきた声に、ロジオンは周囲を見回す。余計な人物がいる気配は無い。

——魂ガ覚エテイルハズ——
——研ギ澄マセ——

周囲から聞こえる声じゃない。

ロジオンは自分の頭を押さえた。

「——なっ……！？」

身体憑依でもない。
意識支配でもない。

頭の中から問いかけてくる声。

——過去——

——遠イ魂ノ記憶——

「ああ……！」

頭の中で流れていく映像には多くの竜。

自由に空を飛ぶ姿を見る誰かの目。

竜だけではなく、今や書物の中でしか見ることの無い飛来動物達。

知ってる。

僕は知ってる。

書物の中ではない映像。

——どうして知ってる？

「魂の……記憶……？」

「ロジオン！ 避けなさい！」

危険を案ずるドレイクの声と押された衝撃に、ロジオンは今の危機的状況の現実到我に返った。

「キャハハハ！」

少女の甲高い笑い声の意味する事——。

ロジオンを庇ったドレイクが、代わりに急成長を遂げた竜に捕えられ、握りしめられていた——。

37 取引

力の加減なんて無いのは見て明らかだった。

握られたドレイクの身体の部分が、雑巾のように絞られている。

「ぐううう！」

それでもドレイクは、内側から必死に抵抗しているようだった。

「ドレイク！」

自分が、ぼんやりしていたからだ。

ロジオンは起き上がり、走り寄ろうとしたがエマに止められた。

「よく見て！」

エマが竜を指差す。

ぼんやりと掛かる黄緑色のシールド。

「『時間差施行』が張られてる。何の魔法の施行だか分からないようにしてあるんだよ！ カリーナの最も得意なやり方なんだ！」

「覚えていてくれて嬉しいよ、エイルマー」

「『トラップ』のカリーナだったね」

カリーナは自分の称号を言われご満悦のようであった。

「形勢逆転ね。ルーカスも倒れたままだし、こちらには人質。ドレイクとこの竜を引き換えよ？ コンラートを解放して、彼の魔法日記を渡しなさい」

「私一人じゃ無理って知ってて言うかなあ？」

「ああ、あんた性転換の為に魔力費やしてんのよねえ……やっぱり、予定通りに行きましょう。新しい竜の血が手に入ったことだし、手元にあった竜はここで使いきるわ」

「カーリナ、あんたドレイクを手に入れたつもり？」

片眉を上げて馬鹿にした様子のエマに向け、カーリナは隠し持っていたネックレスを見せた。

それは小さな紅玉が付いていて、ゆらゆらと揺れる。

「……『竜の王』の印？」

ロジオンが呟く。

「流石コンラートの愛弟子ね、ロジオン。——古代に存在していたと言われている、竜の王の心臓と言われているもの。王が亡くなる時、自分の後継の竜に授けたのよ——人と竜との抗争の時、争いを生むものとして破壊された——でも、破片でも、持つものには竜達は無条件で従うわ」

「……それ、本物？」

ロジオンの問いに、カーリナは微笑みを更に深いものとした。

「この子で立証済みよ。確実に従わせるために『意識支配』も施行してるけどね——これさえあればドレイクだとて私に従うでしょう？」

ちらり、とカーリナは竜に握りしめられているドレイクを見る。

「ドレイク……美しく逞しい、まさに竜の誉。ロジオンよりコンラートの形代に相応しい」

長い時を生き、知力も魔力もある『万物の長』とも称される竜は、古き時代、小さき生き物である人間にとって、恐れ・敬う存在であった。

しかし、共存していくうちに人間達は気付いてしまったのだ。

——大きな体躯に反し大体の竜は大人しく、どんな生き物に対しても傷付けることを良しとしない、優しい性質だと言うことに——

『竜の血肉は不老不死・万病を直す特效薬』

と言う空言を真に受けたと事も要因だが、人間達は今までの鬱憤を晴らすかのように次々と竜を襲った。

——器用に人の姿に化する竜まで——

逃げ、また大人しく殺されていく竜達だったが、一種類だけ獰猛な性質を持つ竜がいた。

それが、ドレイクの本来の姿——黒竜。

元々は、穏やかな性質の他の竜達を守る、所謂『騎士』の役目を担う竜だと言われている。

守り戦いながら過ぎていく時の中、穏やかな種類の竜は滅亡を遂げ、『騎士』の役割の黒竜もいつのまにか姿を消した。

ドレイクが竜だと知る者達は、大体が魔力を持つ者達——ある程度力を持つ魔法使いや魔導師達である。

今や希少となってしまうた竜族の為に、皆、騒ぎ立てるような真似はしなかったし——何より、長いこと魔承師に絶大に信頼されており、魔法を駆使する力は随一だと認めていた。

——魔法を扱う者達は、何より魔力と魔法を扱う強さが何より。

そこで見てなさい——カーリナの右手が振り落とされようとした時——

「待て！　ここに魔法日記はあるぞ！」

魔法日記を片手に高らかに声を上げる者——アデラがいた。

*

アデラが掲げる見事な刺繍の装丁の本は、確かにコンラートの魔法日記である。

「サマンサ！　——いや、カーリナ！　ドレイク殿と竜を解放しろ！　そうしたら魔法日記を引き渡す！」

「ア、アデラ！　勝手に——」

「今はドレイク殿と竜を助けるのが先です！　ここは大人しく引き渡しましょう！」

有無言わさないアデラの気迫にロジオンは、言葉を飲み込んでしまった。

確かにこのままではドレイクは助けられない・コンラートは復活するで、こちらに有益になることが一つもない。

「こちらへ投げなさい。それから竜ごとドレイクを引き渡しましょう」

したり顔で要求するカーリナにアデラは

「竜とドレイク殿が先だ！」

と返す。

「こちらが立場が上だと分かってないようね」

「そう言うが、貴様の『トラップ』が施行されている。そこに投げ

ても跳ね返されるか、トラップが発動されるだけだろう！」

「……では、そこに置きなさい」

どうしても自分が有利に立ちたいカーリナは、そう命令した。

この状況で、自分が一番有利だと分かっている。これを覆すわけにはいかない。

「言っただろう。竜とドレイク殿の解放が先だと」

カーリナは威風堂々と交渉を続ける、アデラと言われた女を睨み付けた。

——ただの人間だ。魔力の持たない。

小麦色の肌に金髪と、珍しい容姿の持ち主に違いないが。

——ただ、それだけだ。

（なのに、この女の気迫に押されている……）

——ただの人間ごときに！

「うるさいね！ こちらの言う通りでないのなら、コンラートを解放して痛い目に合わせるよ！」

ドレイクを握りしめている竜を指し、アデラに怒鳴るカーリナに

「それをやるなら、魔法日記を燃やす所存だ」

アデラはそう告げた。

すると——後ろの闇から赤々と燃ゆる炎の光が出現した。

フラスコの中で燃ゆる炎を手にハインと、サマンサの姿のリシェルが立っていた。

*

「あはははは！ 魔法のど素人の人間の考えることね」

カーリナの馬鹿にした笑いが耳をつんざく。

「何がおかしい？」

そう聞いてきたアデラの表情は余裕で、焦りは全くなかった。

「知らないようね？ 魔法日記はね、魔力でコーティングされているから、燃えやしないのよ。しかも、そんな小さな炎で燃やそうだななんて——貴女、それでロジオンの従者？ なあんにも分かってないのねえ？」

「当たり前じゃないか。従者になってから……まだ日がたつてないし……教えてもない」

そうロジオンが反論したが、当の本人は涼しい顔で

「——やってみないと分からないじゃないか」

と、手にしていたコンラートの日記の刺繍の装丁の部分を、ほんの少し千切る。

「——ええ！？」

ギョツとした声を出したロジオンをよそに、アデラは千切った刺繍の部分をフラスコに入れる。

フラスコの中の炎に触れると、あっという間に燃え塵と化した。

「……燃えた？ 嘘！？」

エマが叫ぶ。

「偽物を担いできたな！」

怒りだしたカーリナに、アデラは微笑みながら首を横に振った。

「真正正銘の本物だ。ドレイク殿の部屋から探し出すのに苦労した。本のサークルの一つに紛れていたのだ」

「ア……デラ……な」

ドレイクも驚いているようだが、圧迫されて息が途切れ、声が出ないようだった。

「カーリナ！」

フラスコの炎を持つハインがカーリナに向けて口を開く。

「この国は『職人と商人の国』！ 我々魔法を扱う者達でも目を疑

う品が流れてくるんだ！　これは『フラスコの住人』と呼ばれた珍品を、魔法管轄処の者達が手を加えたもの。――信じがたい品だとあることを、その目で見るが良い！」

「そんなものがあるなんて、魔法管轄処に居た頃に聞いたことなどないよ！」

「そうだろう。魔法管轄の研究室に保管されていたものだからな。」

――私も、くだらない玩具しか造ってないし、しょっちゅう爆発事故起こすから滅多に近づかないし」

あまり褒められた内容ではないことを、ハインは胸を張って答えた。

「これも、ろくでもない品物として記憶にあつたのを、使えるかもと急いで持ってきたのさ」

「そんなことしたら、ロジオンやドレイクは！　折角のコンラートの遺産なのだ！　覚えることなく抹消させる気が！」

「もう……覚えてるよ。全部」

事も無げに告げたロジオンの台詞に、カーリナが驚いたのは言うまでもない。

コンラートは魔法を扱う者としては短い人生だったが、魔力もさながら、その創りだした魔法に、異世界から呼び出す召喚の多さは、長く生きている魔導師よりも遥かに多い。

魔法日記に記した魔法全てを覚えたとは、考えられないことだった。

「ドレイクだってもう幾つか覚えただろうけど……僕が教えれば良いことだし……アデラ！」

「はい！」

「こちらの意見が受け入れられないようなら……燃やして！」

「はい！」

快活なアデラの返事にカーリナは慌てて

「解放すれば良いんでしょ！ 1、2、3で『トラップ』施行解除するから、その時に日記を投げな！解除すれば、そいつはドレイクが何とかするでしょう！」
と条件を受け入れた。

37 取引（後書き）

話の区切りが中途半端ですいません…。

38 地獄の鑑賞者

「1、2……3！」

カーリナが掛け声と同時に『トラップ』を施行解除し

「それ！」

アデラも同時に魔法日記を投げた。

——空高く

「高すぎだ！ ノーコン！」

距離は良かったがカーリナの身長より、ずっと高い所まで投げたアデラに彼女は叱咤した。

「それで良いんです」

アデラが日記を見上げながら満足そうに言った。

突如、闇の中から現れた蔓に日記は絡め取られてしまう。

絡め取られた魔法日記は、そのままルーカスの手に渡った――。

「ナイスコントロール、アデラ」

ルーカスが細い目を更に細くし、笑って見せる。

だが、胸を押さえているところを見ると肋がやられたらしい。

「ルーカス！ それを寄越すのよ！」

険しい顔で近付いてくるカーリナにルーカスは、痛みで荒くなる息を整えながら言った。

「……こっち（魔法日記）ばかりに気を取られている場合じゃないだろう？」

「――！」

背筋が一瞬にして凍りつく眼差し。

難解な言語で詠まれる呪文。

——来る。大きな魔法が——

カーリナは振り返り様、対魔法防御を施行した時——。

ドレイクの紅い瞳が薄闇に煌めいたのが見えた。

割れる音が空に響く。

カーリナの施行した魔法は、ドレイクの魔法に負けた事を意味した。

ドン！

と、一度だけ大きな縦揺れが起き、静寂となった。

それは虫の声一つ聞かない静寂で、何かが起きる前触れだと、そこにいる誰もが感じ取っていた。

感じる圧迫感。

それは物凄い勢いで四方から迫り来る。

カーリナは感じていた。

——これは自分に向かって迫ってくる——

「……何……何が……！」

方陣で移動しようとするが足が地にピッタリ吸い付き、動けない。

「古代からの尊き血を受け継ぎながら、魔力を持たぬ人と同様な腐り果てた真似を……容赦せぬ」

ドレイクの冷えた声が冴えざえと辺りに響く。

「聴かせてやろう。コンラートと同類の闇の喜びの声を——」

——ヒイイイウオオオオオオオオオオオ

—ホオオオアアアアアアオオオオ

迫る大勢の低い呻き声は、地を張る。

それが物凄い勢いで自分に向かっているのが分かり、カーリナの身は凍え震えた。

それは周囲も同じ反応だった。

アデラは、サマンサの身体のリシエルをしっかりと抱き締め、それ以外の者は魔法を扱える為、自然と防御の右手を構えていた。ドレイクが施行したのだ——並大抵の魔法防御では、先程の力——リナの魔法のように負ける。

「……ちよつと……こつちには寄越さないでよ」

エマがドレイクに肩肘張るが冷や汗が流れる。

ミスは犯さないと思うが、万が一を考えての構えだ。

そんなヘマはしない——そう言いたげにドレイクの口角が片方だけ上がった。

[illegible]

（歪な歡喜に身を捩れ） 「閉幕への喝采」

ドレイクが試行した召喚魔法の名を上げた刹那――

それはやってきた。

闇の向こうから、身体とも言えない身体を宙に飛ばして。

足は溶けた蠟燭のように形はなく、伸びた先は闇のまた向こう。

顔は皆、同じ顔——いや、顔がない。皆のつぺらで唯一口らしき

ところにポツカリと穴が開いているだけだった。

同じところと言えば、皆一様に骨で作ったカンテラを片手に握りしめて、喝采を送るべき相手を取り囲んだ。

——カーリナを——

*

フアアアアアアアア

カーリナを取り囲み、一斉に声を上げる。

それは木々を震わせ、周囲の耳をつんざき、押さえても意味がないほどであった。

取り囲まれたカーリナは特に堪えている。

ビリビリと身体が——魂が——振動する。

身体に力が入らない。

魂が

吸いとられる

「『地獄の観賞者』だ」

あんなに沢山呼んじゃって、と胸を押さえ痛みをこらえる様子でアデラ達と合流したルーカスが言った。

『地獄の観賞者』

普段は地獄にて罪人として落ちた者達をカンテラで照らし、その者の生前の生き様を見するという。

罪深き者だと喜び喝采を送り魂を吸う。

「初めて見ましたよ……流石ですね、ドレイク様。土台詠唱さえ長
いはずなのに短かったし、更に高い召喚魔法に造り上げていて……」
「これならカーリナの魂を吸ってリシエルの身体を……」

アデラの台詞にサマンサの手が強く握られた。

辛そうに俯いている彼女の中身は、母に裏切られた子——リシエ
ルなのだ。

しかし、裏切られたとは言え母は母。

どんな母でも子は慕い続ける——極たまに見せる『母』の思いや
りに。

それに、母がこのまま『地獄の観賞人達』に魂を吸いとられてい
くのを見ているのは辛いことだ。

「リシエル」

見せないようアデラは彼女を抱き締めた。

「ただの『入魂』なら、俺たちでも出来るからね」

と、ルーカスは喝采を浴びているカーリナを見ながら告げた。

「——ただ、カーリナはしぶといからなあ……魔力も魔法も。この
ままうまくいくかなあ……」

39 想いの違い

「いやああああ!」

自分の叫びが観賞者の喜びの喝采に打ち消される。

耳障りな声が身体を突き抜ける度に力が抜けていく。

魂が

命が

吸いとられる。

——嫌よ!

コンラートに認めてもらうのよ

彼の恋人になるのよ

「——いや!」

観賞者を睨み付けようと顔を上げ、恐ろしさに目を見開いた。

観賞者の顔が——よく知る顔に形を変えていく。

「カーリナだ……」

エマがポカンと口を開けた。

「そりゃあ魂の記憶だもの……本来の彼女の顔が写し出されるよ……」

ロジオンの言葉にエマは「そうだわねえ」と頷いた。

これに一番衝撃を受けたのは、本人——カーリナだった。

本当に吸われてる。

魂が抜かれてる。

いやいやいやいや！！

「いやややああああ！ 絶対に嫌！ こんなのがコンラートと
同類？ ふざけるんじゃないわよ！ コンラートはこんなんじゃない
い！ もっと理性的で理智的で素晴らしい男よ！ 彼になら魂を吸
われようが食われようが好きにされても構わない！ —— ロジオン

！」

「？」

「あんたのせいよ！ あんたが大人しく身体を明け渡さないからこ
うなっただよ！ 師弟関係なら病に倒れた師の代わりに身体の変
換位してやるのが当たり前なんだよ！ あんたがしないからコンラ
ートは化け物って言われて、私がこんな目に遭うんだ！」

「身勝手な言い分ですね」

ドレイクの台詞に皆頷いた。

—— ロジオン以外は。

*

「あああああああ！」

カーリナの断末魔に近い叫びに、リシエルは耳を塞いだ。
アデラは彼女の頭を撫で、強く抱き締める。

小城で彼女から聞いた話を思いだしアデラは胸を痛めた。

カーリナの魂替の犠牲となった女性も、今や初老の姿となり——
新たな犠牲となったりシエルの新たな魂の寄代であった。

魔力を扱う者は、魔力を持たない者に比べ生きる長さが違う。
個人によるが病死や事故死、戦死等々により亡くなった者達を除
けば魔力を持たない者達より遥かに長い時を生きる。

——しかし、魔力を扱う者達にも、分からないことがある。

——何時、成長が止まるか——だ。

精神・魔力共々、最も高く、充実している時期に止まる。

それが体力的に最高潮の時に止まるのか、最も成熟した身体の時
に止まるのか——分からないのだ。

幼い時に止まってしまった者もいれば、歳を取ってから止まった
者もいる。

ルーカスやエマのように、身体が成熟した時期に止まった者もい
る。

大抵は皆、すんなりとその事実を受け入れるが、稀に受け入れる
ことの出来ない者が出てきた——カーリナのように。

カーリナは魔法使いとして修行している時期にコンラートと出会
い、熱烈なアプローチを続けた。

しかし——何年たっても、自分の思いを受け止めて貰えない。

カーリナの本来の身体は四十代で止まり、コンラートは若い女性
にばかり熱を上げる。

——この身体では駄目——

カーリナは友でもあつた魔導師・サマンサを拐かし、撤廃の一つ『魂替』を行った。

その内容は卑劣で許しがたい。
騙されたサマンサは自分の命と引替えに『呪い』を施行した。

——かつて、自分の肉体であつた身体の『若さ』が魔力を扱わない普通の人間達——いや、若干早く歳を取っていく。
喜びに浮かれていたカーリナの落胆と忸怩^{じくじ}たる思いは言うまでもない。

そこで考えたのが、まだ子供が産めるうちに子を産み、その子と肉体を交換することであつた。

産まれてくる子の造形を考え、美男を選び子を産んだ。

サマンサの容姿自体が美女の定義に入っていたお陰が、すんなりと相手を見つけることが出来たのは良かった。

サマンサの身体で身籠り、産んだ子は思惑通りの女の子——リシエルであつた。

カーリナは夫となつた男性とリシエルを捨て、姿を晦ます。

ここで彼女が巧妙だったのは、捜して来るよう手掛かりを残していったことだ。

母の温もりさえ覚えていない子が、恋しさで手掛かりを便りに会いに来る——カーリナには確信があつた。

元夫は薄命の相を持っていたし、身内もない。

国内が荒れ始めていた時期に姿を晦ましたから、元夫が亡くなつたら厳しい国の情勢の中、己の食いぶちを減らしてまで他所の子の面倒を見ようなどと人の良い家庭など、さらに無いだろう。

豊かで保安のしつかりとした大国・エルズバーグで宮廷に仕える

為に家を出た——と言う話と証になるものを娘に手渡ししていれば——
——元夫の死後、きつと訪ねにやって来る。

——かくて思惑通りに事が動いた——

必死に会いに来た娘を抱き締め、労り、可愛がり、手料理でもてなした。

『会いたくても宮廷で働くようになった自分は忙しくて会いに行けなかった』

『結婚し子供がいることは誰も知らない。知られたらここには居られなくなるから“知り合いの娘”としておいて欲しい』

そう説き伏せた。

リシエルにとつても、暖かい住居と安定した生活——何より、ようやく会えた母親から離れたくない。

素直に頷いた。

そうして師匠と弟子の関係で、周囲を誤魔化し生活していた。

魔法管轄処にいるのは、周囲に興味の無い同業者達——特に怪しむ者もない。

師匠と弟子の関係でも、リシエルは幸せだった。

会いたかった母は優しい。

魔導師として自分に魔法を覚えてくれるだけでなく、普通の母親のように一緒に料理をしたり編み物や刺繍もしたり、自分が思い描いていた母親像そのままだからだ。

——ただ、気になるのは普通の母親より老けていること——

遅い結婚だったと聞いていたが、今の母を見てどうしても五十代位に見える。

父から母の年齢を聞いていて、そこから計算してもおかしい。

そんな疑問がいつも頭にこびりついていた頃、母から

『呪いにかかり、早く歳を取っていく』

と涙ながらに告げられた。

驚きショックを受けるリシエルに

『研究して呪いを解く方法を見つけた。その為には、一度身体を取り替えないと解けない』

と話した。

『この魔法は私しか知らないの……リシエルにはまだ無理だし……自分が見つけた魔法を他の同業者に知られては名折れだし……リシエル、私の可愛い娘……貴女なら分かってくれるわね？』

母に乞われ、母を慕うリシエルに拒否など出来なかった。

呪いが解ければ元の身体に戻れるし、母が昔の若く美しい姿に戻れるというなら――。

――だから

それなのに――

身体は老婦人だが、子供の泣き方そのままに泣くリシエルが痛々しかった。

39 想いの違い（後書き）

うまく区切れなかった！

40 復活（1）

（ここに連れてきてはいけなかったのではないか？）

そのように視線でハインに訴えたが、ハインは目の前の召喚に心を奪われたままであった。

——ロジオン様は？

ロジオンの方へ目をやる。

視線を感じたのか、アデラの方を向いた。

鑑賞者の青白い光にあてられているせいか、いつもより顔色が悪く見えた。

（ロジオン様——）

サマンサの身体のリシエルを抱き締めている様子を見て、アデラが何を言いたいのか悟ったのか、早足で近付いてきた。

「ロジオン様、リシエルは小城へ戻した方が……この光景はこの子にはきついと思われます」

ロジオンは首を横に振った。

「『鑑賞者』が魂を吸い付くしたら、すぐに魂を元へ戻さないと定着が難しくなるんだ」

そう言ってロジオンは再びドレイクのいる方角を見つめる。

「ドレイクは……リシエルがこの場にいるのを確認して……あの召喚を選んだんだと思う」

「コンラートオオオオオ！！」

絶叫するカーリナが、突如、苦しみ紛れに何かを池に向かって投げつけた動作をした。

「——!？」

——『それ』が何なのか——気付いたのはドレイクとロジオン。

ドレイクは身を投げ出し『それ』を受け止めようと腕を伸ばす。

ロジオンはアデラとリシエルに対し『アエラの城壁』の土台結界を施行した。

『それ』はドレイクの指先を掠り、池へと落ちていった。

——竜の心臓の欠片が……。

＊

血は心の臓を流れ続け、その人の人生と共に流れる。

血の浄化を繰り返し、身体全体に送るポンプ役。

それは竜だと同じ。

それが、コンラートを封じ込めた池へと落ちたことの意味は——。

結界を一気に解き放つ——。

池の中から光が放たれた。

朝日のあの輝きを凝縮したような眩しい光で、皆、目を瞑る。
瞬間、硝子が弾け飛んだのと似た音が響く。

——それは三人が重ねて張った結界が一度に壊れた音であった。

「あららら。本物だったんだ」

エマが暢気な台詞を吐いたが、表情は至って真剣だ。

そろそろと池から離れ、木陰に潜んでいるロジオン達と合流する。

「やっぱいつて〜」

エマに言われなくても皆、分かっている。

「……この場合、私はどうしたら良いでしょうか？」

ハインが顔面蒼白になってロジオンに尋ねてきた。

ロジオンとルーカスが顔を合わせる。

ルーカスは胸を押さえながら立ち上がったが、その様子は痛々しく、とても闘えそうもない。

「みんな、リシエル連れて……僕から離れた方が良いね……。エマに気配ごと消せる結界を張ってもらって……」

下手に自分の側にいたら、今度はエマやルーカスどころか、リシエルやハインまで標的になる。

エマは現段階で十分戦力だが、ルーカスが負傷しているし、ハインは自分の魔法では間に合わないし、敵わないことも身を持って理解している。

リシエルは、魔法を習い始めたばかりだ。

——この三人を保護するのに、エマは一杯一杯になる。

「ロジオンはどうするんだ？」

「自分の身くらいは守れるよ……今まで何度も切り抜けた」

ルーカスの問いにロジオンはそう言い切る。

「でもさあ、やばい勘がビリビリ身体にきてんのよ。あんた達も感じてるよねえ？ 今までのようにいかないかもよ？」

エマが、一緒に結界を張ろうとロジオンを促したが、首を横に振った。

「……だったら、ますます駄目だよ。ドレイクの後衛を試みる——彼に頼るしかないよね……」

——頼みの綱はドレイクしかない——
そこにいる者達は全員そう思っただけで、頼りなかった。

「何を言っんです？ ロジオン様も共に戦いましょう！」

しかし一人、拳を上げ、はっきりとした口調で共戦の意を表した者がいた。

アデラだった——。

*

「後衛だとて、立派な参戦ではないですか？」

「そうだけど……その後衛だって師匠相手じゃ……まともに出来るかどうか……」

「——そんなにコンラート師が、自分の師匠が怖いんですか？」

「アデラに何が分かる……！」

ロジオンの怒りが籠った怒鳴り声に、アデラ以外一同に息を止めた。

「第一！ 何でここに来たんだよ、来たらクビにするよと言ったじゃない！……そんなにクビになりたいわけ？ こんな危険に巻き込まれて怖くなったから、クビになるように此処まで出向いたわけ？ ご苦労様だね！」

滅茶苦茶な事を言っただけで怒鳴っているのは、ロジオン自身も分かっていた。

でも、現状も心情も一向に改善されない——どうして良いか自分でも分からない。

ぐるぐると闇の中を、ただひたすら歩いているだけに思える今にロジオンは

（アデラがこの現状を回避する）

と言う自分の予見を、信じてみようとしたことに後悔していた。

自分の当たらないことの多い予感を当てにして、彼女を巻き込んでしまった――。

「でも、ドレイク殿と魔法日記の危機は回避しましたよ？――それに、コンラート師が復活したら、お互い離ればなれでは危険なものでしたよね？返って良かったではないですか」

だが、アデラは怯まず飄々とロジオンに物申す。

「……アデラは……危険に飛び込むの平気なんだね」

「平気じゃありません――でも、貴方が闘うと言うなら、共に闘うのが私の喜びです」

「……主人に忠誠を誓った騎士が……よく言う台詞だね」

池の中から放たれる光が、更に強みを帯びる。

周囲の陰影を、彼の陰影を、更に濃くして。

今の彼の心の内を表しているようにアデラには見えた。

この位の歳頃の精神は、成長している身体と同じだ。

しっかりとってきたよう不安定で、光と闇の僅かな境界線にいて――
――場面にどちらにも足が着く。

――自分もそうだった。

（うつん……今も大して変わらない）

アサシンになるのを諦めた時、どこかほっとした自分がいた。

それと同時に――今までやって来た鍛練が無駄になったことの虚無感到、できそこないと誰かに後ろ指を刺されているのではと言う猜疑。

自分が諦めたことによって、アサシンを受け継ぐことになった妹・ラーレへの後ろめたさ。

——ずっと不安定なまま生きるの？

（変わらなきゃ……自分を誤魔化して、平気な振りをしていた自分から——）

クビになっても、怪我をしても……命を落としても。

「忠誠を誓っても……僕は何もあげられない」

「見返りが欲しいわけではありません！」

激昂にロジオンは目を見開き、アデラを見つめた。

ロジオンを見つめているアデラの表情は険しく、美眉はつり上がっていた。

——だが、瞳から一筋の滴が頬を濡らし、それが余計にロジオンを驚かしていた。

「確かに私は魔法も使えないし、アサシンとして幼い頃から鍛えられたのに、その才が無い……。——でも、私はロジオン様の手助けを出来る物を何も持っていないと思いたくない。今まで生きて教わったことを全て否定して、貴方の側にいるのは嫌なのです！ お飾りの従者ではなく、私を私の出来る役目をさせてください！」

ロジオンの視線が落ちる。

「貴方を見て、ようやく出た勇気を無駄にさせないで下さい……これは私自身のためでもあるんです」

「……僕だってアデラと同じだ」

そう言うとう右手が何かを描いた。アエラの城壁の施行を撤廃した

ようだった。

「——ロジオン様」

「僕の魔法じゃあ……師匠には効かない……でも、今……僕が出来ることを精一杯やろう。アデラ、君と……」

一言一言噛み締めるように告げるロジオンの口調は、先程までの荒くれたものは無かった。

ゆつくりとアデラに差し出されたロジオンの手。

「はい」

アデラは、快活に返事をしロジオンの手を握りしめた。

「お飾りじゃない、今までやって来たことは無駄じゃない……一人じゃなくて二人なら……出来る気がする。前にアデラも、そう言うてくれたよね？」

そう述べ、微笑むロジオンの姿にルーカスやエマも安堵したように頷いた。

分かった気がする——ロジオンは思った。

——あの予見は、こう言うことだったんだ——と。

周囲が池から放たれる光に包まれる。

あまりの眩しさに目を瞑り、次に目を開けた時、皆が見たものは

池の中央で淡い光を保ちながら浮いている一人の少年——。

40 復活（1）（後書き）

私事が忙しくなってます。次の更新は来週以降になるかと…。

4 1 復活（2）

ロジオンくらいの年齢だと思われる少年は、内側から光を放っているように明るかった。

軽く両手を広げゆつくりと瞼を開く。

ゆらゆらと池の上を浮く姿は、足元から頭まで色素が全く無く、人としての存在感はどこにも見当たらない。

そのせいなのか、薄手衣を身に纏い風もないのに身体ごと揺らぐ少年は、蛹から孵ったばかりの昆虫のように見えた。

「……コンラート」

ルーカスが呟いた。

「コンラートって若い頃、ああいう顔だった？」

エマが眉間に皺を寄せた。

確かに美男の類に入っていた記憶はあるが、目の前にいる少年は中性的な美しさで、少女とも取れる。

「コンラートが少年だった頃の姿に、取り込んだ池の精霊の写実化の姿も写してるんじゃないか？」

「ああ、水の属性の精霊は美男美女が多いもんねえ」

とエマは頷いて見せた。

その——色素を持っていない姿は、自ら放つ光で闇を溶かし自分の周囲をぼんやりと明るくしている。

その様子も、風もないのに揺れる薄衣に、背中を流れる髪は神秘を纏い、確かに精霊の姿と類似していた。

色素の無い瞳が、一番池の近くにいたカーリナを写す。

「コンラート……」

カーリナに施行していた『閉幕への喝采』は既に弾き飛ばされた。自分の魔力で必死に抵抗して、全ての魂が吸われることはなかったが、身体に力が入らない。

——だが、カーリナは今嬉しさにただ涙を流す。

何の感情もない無機質な様子の彼だが、カーリナにとって、こんな長く見つめられたのは初めてだったからだ

感激で胸の鼓動が上がり、どうにかなりそうだ。

「私に分かる……？ カーリナだよ。ずっとずっと、貴方だけを愛し続けたんだよ……。貴方が死んでも、死んでもから変わり果てた姿になっても……ずっとずっと」

カーリナの幼い腕が、よろよろとコンラートに向かって差しのべられた。

「見て、私の身体……魂替えしたの。あと数年したら、貴方好みの女に成長するから——そうしたら、今の貴方に丁度釣り合いが取れるよね……」

コンラートの手がゆっくりと、拙くカーリナの差しのべられた手に向かう。

——途過ぎるが故なのか——

情熱が過ぎるが故なのか——

魔法を扱う者のモラルも、扱わない者のモラルも無視した自己中心な考えは、本人の性根の問題も抱え周囲の親い者達を巻き込んだ。

——全ては、コンラートに愛を受け入れてもらう為——その瞬間がようやく来る。

願いが叶う

——カーリナは幸せの絶頂の中にいた。

*

二人の手が重なり、繋がる。

コンラートが悠然と微笑み、カーリナもつられて微笑んだ——瞬間。

中途半端な悲鳴が起こり、がくり、とカーリナが乗っ取っていたリシエルの身体が倒れた。

「——コンラート！」

ドレイクの横からの魔法攻撃に合い、コンラートが吹っ飛ぶ。

「この（リシエル）の身体は他人の物。——勿論、形成しているその身体も貴方のではない」

ドレイクは腕を広げ、呟く。手の平から光輝く何かが、コンラートに帯状に向かった。

「離しますよ、その身体から」

コンラートは逃げ去ろうとするが、ドレイクの掌から伸びる光は、彼を確実に仕留めた。

すり抜こうとしても、またしつこく身体に巻き付いてくる。

身体に付着すると、あっという間に広がり隙間無く繋がった。

それは口以外の、コンラートの身体を埋め尽くす。

地に転がる姿は、大きな蛹だった。

「……まだ知恵不足だったと言うことか……？」

ドレイクは簡単に捕獲できたことに疑問を抱き、眉間に皺を寄せた。

ロジオンとアデラは、倒れているリシエルの身体をエマ達の場所まで運んだ。

仰向けにして脈を診ても診なくても、事切れているのは一目瞭然だった。

「お母さん……」

リシエルの涙が幾つも頬を伝い、地に落ちる。

「罰をくらったんだ……。今までの重ねてきた罪の……リシエル……泣くのはいつでも出来る」

ロジオンが泣き続けるリシエルを諭す。

「元の身体が物理的な死を遂げる前に……君の魂を戻さないといけない。分かるね……？」

目を擦りながらも、懸命に頷くリシエルを仰向けに寝かす。続いて、その横にリシエルの身体を同じように寝かした。

「ルーカス、エマ……そしてハイン。頼むね」

「肋いつても、これくらいは出来るさ」

と、ルーカス。

「任せときなさいよお」

エマにウィンクされた。

「微力ながら、やらせて頂きます！」

不安なのか苦笑いをして頷くハインにロジオンは

「やり方、分かるよね？」

少々不安になって尋ねた。

「はい。但し実践はありません、それが不安で……」

ロジオンはポンと彼の肩を叩いた——小刻みに震えていた。
「統一された文章を読むだけだから……大丈夫。リシエルを助けた
いと言う思いだけを心に抱いて……ハインなら出来るよ」
ロジオンの真っ直ぐな瞳に見つめられ、ハインは「はい」と力強
く返事を返した。

各自の魔法日記が本来の姿に戻り、左手の上に浮く。

「『光聖』属性『救済』の章」

声を揃え、魔法日記に命ずる。

すると、パラパラと指定された頁を独りでに捲り、開いた。

『光聖』は魔法の中で特殊な属性で、権限は魔導術統率協会ではな
く、僧侶を中心とした教会にある。

『信仰』性の強い魔法な為、教会に所属する者の方がより強い魔法
を施行できるのだ。

——しかし現実問題、戦場など、危険な場所に出向くことが多い
のは魔導師や魔法使い。

相手側に『闇』が得意な者がいたり、死人使いがいたら有効なの
は『光聖』だ。

僧侶が所属する教会はなかなか迅速に動けないようで、対応に遅
れる場合も多い。

この辺りの兼ね合いから、教会から

『詠唱を各自で勝手に変えない』

『頁は必ず冒頭に記すこと』

と、条件の元に魔法日記に添えられている。

『光聖』は神話から始まり『召喚』『救済』『除滅』『鎮魂』『祈
り』が大抵の魔法日記に頁として添えられた。

「『救済』の章『入魂』」

右手をかざす。

「魂の闇路を照らし、萎み逝く命の花を咲かせるための恵みの露を、星影より乞う——」

地が円形に紋様を描き光を放つ。

閉じるような眩しい光ではなく、柔らかで温かみを帯びた優しい照らし。

「人智は果て無し、無窮の遠究め行かん。^{おち}それ故、迷える魂に御手を与える慈しみと憐憫の教えを忘れたり——」

そこだけ厳かな空間と成り、完全に周囲と遮断された。

42 復活(3)

ピシ……

僅かに聞こえる割れる音に気付いた時には、コンラートは封縛を解き、軽やかに宙を飛んでいた。

両手に水の球体を抱いて――。

ドレイクは球体に標的をあてた。

一瞬にして水の球体は蒸発し気体になる――が、ドレイクは自分の失敗に舌打ちをした。

コンラートの手まで干乾びてしまった。

通常の人なら、熱いと感じるくらいで済むはずだった。

だがコンラートが取り込んでいるのは、水の精霊。人より揮発率が高い。

念頭に置いて威力を押さえて施行したが、思ったより過敏であつたらしい。

コンラートは池の中へ滑り込んで行つた。

「閉じる！」

ドレイクが刹那、左から右へと腕を振る。

池全体が光を放ち、瞬時に古代文字で形成された封印結界が池を覆う。

――だが

パキイイイン

と、乾いた音が、封された池から響いた。

「……なれの果てでも、高名な魔導師――と言つことですね」
ドレイクが忌々しく呟いた。

崩壊された結界から、飛び魚のごとく水が幾つも線を成して飛び

上がる。

それが鉄砲のようにドレイクに襲いかかってきた。
先端が魚の口に似、パクパクと開けながら、水しぶきを上げて向かってくる。

ドレイクは、竜の身体能力を発揮した跳躍で地を蹴り、木々の幹を飛び蹴り、襲いかかる水攻撃を避ける。

誘導施行もかけているようで、それはドレイクの後を易々と追いかけてきた。

水力で枝をなぎ倒し、葉や木の破片を巻き込み更なる凶器に仕立てあげる。

ドレイクは方陣の場所を踏む——瞬時に姿が消え別な場所へ出現した。

池の真上に——。

誘導施行された水の凶器は、池の上の方陣にいるドレイクに向かって突き立てた。

——だがドレイクに当たる瞬間、彼の姿は消え、凶器と化した水は、勢いのまま己の住処の池に突っ込んだ。

その勢いは津波を起こし、池の外にまで流れ出る。

*

「池の上にも方陣が……」

アデラが、信じられない物を見たようにロジオンに告げる。

「水の王の力を借りたか……事前に用意していたか……だね」

しっかりとこつち見て、とロジオンに促され、アデラは再び自分の剣の刃の部分に目を向けた。

手入れされた刃からは、僅かな月明かりと繰り出す魔法の起こす光で、アデラとロジオンの顔がうつすらと写っていた。

「ドレイクのことだから、水の精を切り離す策は出来てるだろうけど……その後のことを考えると……僕達も策を張っておく」

「はい」

「刃に写る僕の口の動きを見て……」

*

ドレイクは動きを止めていなかった。

魔法攻撃に取り込んでしまった木々の破片——物理攻撃まで加わった自分の施行した魔法。

それが自身に戻ってきたことで、僅かに隙が出来た。

「上げる！」

ドレイクの命で水中から飛び出てきたのは、コンラートだった。

水に関与できるのは水の精霊——特に支配している王。

事前にコンタクトを取り、精神の繋がりを依頼していた。

身体憑依・精神支配とは異なったもので、精神感応と言われている。

正体不明の化け物に変わってしまったコンラートが仲間を取り込んでしまつては、水の王も流石に静観している訳にはいかない。

生来、臆病な一面を持つが、ドレイクなら信頼を得て精神に繋がりを持たせた。

“私の中で水の中で隙を見せたら、押し上げて池から放り出せ”

——かくてドレイクの思惑通りにいった。

自分が支配した池から放り出されたコンラートは、地の上で呆然としていた。

何が起きたのか気付いていないのは明らかであるが、それも短い間だ――。

ドレイクは刹那コンラートに魔法を繰り出した。

コンラートを取り囲む柵のような立体陣。

「?????? ???? ????（唸り、轟け）身体の奥底まで」
ドレイクが施行した魔法は音波魔法。
それも閉じられた狭い範囲内である。

ウイイイイイイン

身が波打つような強烈な音波にコンラートは懸命に陣から脱出しようとして、柵のような立体陣に手を掛けた。

だが、更に状況を悪くしただけであった。

音波を発しているのは、この立体陣の柵からであり、あまりの強烈さにブルブルと身体全体にくる。

かなりの電流を受けているのと似た感覚で、身体が振動し肌が波打っていた。

「うつ、うつ、うつ」

がくんがくん、とコンラートの身体が激しく揺れる。

「水の精はこのくらいの波動なら、風に波打たれる程度のもの。――だが、コンラート……元・人間の貴方はどうでしょうか？」
ドレイクの口元が上がった。

立体陣の中のコンラートがブレだした。

二人いる錯覚。

重なったり離れたりを繰り返し——ずるり、と人の形成した殻から出る何か……。

——コンラートだった。

——水の精から離れた。

ドレイクは、左手を素早く握る仕草を取る。

コンラートを閉じ込めた立体陣は、一瞬に細い柱となり化け物と化した身体を縛り付けた。

「王！」

ドレイクが誰にともなく叫ぶ。

離れて自由になった池の精霊だが、コンラートに精神を含む全てを乗っ取られ弱りきっている。

自ら土に溶け、浸水し自分のある場所に戻るのにも絶え絶えで行っていた。

また捕まってしまう——ドレイクは王に保護して貰う為に呼び掛ける。

急に土に浸透するスピードが上がり、水の精は土に溶けていった。

「——！？」

自分の左の握り拳が、意思に関係なく開く。

破裂音に、コンラートが柱から解き放たれたことを知る。

「——ちっ！」

ドレイクの左の掌が血で染まった。ボトリと中指が落ちる。掌に深く亀裂が入り、血が止めどなく流れていく。

封印がまだ未完成のうちに解かれたことで、跳ね返りが来たためだ。

忌々しく左手を振り、己の血を払う。

水の精が離れたのは良いが、魂が自由になった分動きが格段に早い。

そのことは長く生きてきた分、ドレイクは知っていた。

逃がさない自信はあるが生前が高い魔力に、様々な魔法を駆使したコンラートだ。

——封じ込めて滅する方向が一番確実だが——

（まだ準備が整わん）

封じ込めるだけで手一杯か——。

ドレイクは、先程とは格段に早いスピードで迫るコンラートを見て、そう思った。

*

「??????? (借り給う) 『戦女神パラスの鎧』」

『戦女神パラスの鎧』——物・魔の防御だけではなく、かけられた個々の能力も飛躍的に上がる魔法である。

ただ、軍隊など大人数には施行が出来ず、一人の魔法使い・魔導師で一人しか出来ない。

戦では大抵自身自身に施行する魔法であった。

施行ギリギリであった。

少しでも判断が遅れていたら殺されていたか、取り込まれていたか。

「自由だな！　コンサート！」

ぴったりと追いついてくる影の顔がうつすらしか無いのに、にやりと笑ったのがはつきりと見えた。

43 復活（4）

元々、身体能力の高い竜のドレイク。それは人智を越える。

魔力を使わなくても、その恵まれた身体を使い普通の人では出来ない急所や難所も易々と通れる。

リスのように蹴り上げ、木々の幹と幹の間を軽々と渡ることも出来る。

しかも今は身体も能力も格段に上げる補助魔法も施行している。

——なのに、早さも繰り出す魔法もほぼ同等。

（形代から解放されたと言うことだけで、能力がこれほど上がるのか！）

生前のコンラートは確かに強い魔導師だったが、自分の方が勝っていた——確かに。

死ぬ前に飲んだ薬の副作用もあるのだろうか？

「——！？」

ぐんっ——コンラートのスピードがまた上がった。

成長している——死んで化け物となっても。

顔が近付く。

うつすらと浮き上がる顔は、先程取り込んでいた水の精霊の容姿がまだ残っていた。

《ドレイク……ドレイクだ》

頭に直接届く声は、生前のコンラートのものだ。

《ほしい、ほしいんだ……からだ、ずっとわかくて、ずっといきて

いけて、ずつつよくて》

《——イゾルテが、イゾルテより——》

——イゾルテ？

自分の脳に直接送り込まれる言葉と映像に、ドレイクはあまりの怒りに我を忘れそうになった。

何も着けていない、生まれたままの姿の。

腰まで届く銀の髪は、たゆたゆに揺れ。

顔は喜びに紅潮し、瞳は快楽に揺らぐ。

「おのれ！ イゾルテ様に淫欲を抱いていたか！」

自分の主が、妄想でも恥辱を受けていたのかと言う怒りがドレイクを襲う。

聖光を放たないまま右手に握りしめ、コンラートを殴った。

逆方向に吹っ飛んだが、空中で旋回し再びドレイクに迫るコンラートに

「イゾルテ様の為にもこの身体は渡さん！ あの方をお守りするのは私の役目なのだ！」

そう怒鳴り付けた。

*

風の早さで向かってくるコンラートを、迎え撃つドレイク——標
的は彼に移ったかのように見られた。

「師匠！」

その時、池を挟んだ向こう岸で呼ぶ懐かしい声にコンラートは、ぐるんと首を伸ばし振り返った。

フード付きの短いマントに、月下に輝く青銀の髪。

ブルーグレイの瞳。

整った顔立ちは、まだ少年の面影を残して……。

《口、口、ロジオオオオオン！》

納まる形代が無い、コンラートの影のように黒い魂は、ギュルンと伸びた。

《ほしい、ほしい、そのからだ》

池など一越えだ。

「ロジオン！」

ドレイクも飛び越えながら、攻撃魔法の詠唱を口にした。したり顔でコンラートを待ち受けたロジオンの顔がぶれる。

《？》

次の瞬間にはアデラに変わっていた。

アデラの目の前で、地から円形方陣の紋様が浮かびコンラートを捕らえる。

アデラがその場を離れると——後ろにロジオンが立ち、詠唱を口ずさんでいた。

金色に輝く円柱形魔法陣——だが、すぐに空にガラスが割れ、崩れるような音が響く。

刹那、また円柱形魔法陣がコンラートを捕らえる。

何度もそれが繰り返される中、アデラは駆け足でドレイクの出血している左手の止血をする為に近付いた。

眉を潜めながら、中指の無い左手に端切れを巻く。

「簡単に巻いてくれ。どうせまた生えてくる」

「生え——！？」

ぎょっとしたアデラだが、彼が人を型どった竜だったことを思いだし納得した。

——竜は爬虫類なんだ、きつと、と。

「コンラートの魔法日記は！？　今、誰が持っている！？」

普段の丁寧で慇懃な口調ではないドレイクに、アデラは焦りの色を感じた。

「ルーカスが。しかし、今は『入魂』の施行中で」

そうか——と、ドレイクは顎に指を当て少し考えた後、自分の上着の内ポケットから掌サイズの手帳を取り出した。

「やはりまだ届いていない……だから教会は！」

「何かを教会に依頼したのですか？」

「コンラートを滅する為の呪文だ。——今はない異世界のね。出し渋って！　これだから只人は信用がならないんだ！」

激しい口調は、魔力を持たない人全てを憎んでいるような印象を受けて、アデラは黙り込んだ。

仲間を死に追いやり続けたのは、力の持たない人——ドレイクが、日頃どれだけ我慢して接しているのか——

憎まれても、只の人のアデラには何も言えなかった。

「——ロジオンは円柱形封印魔法陣を、どれだけ施行している？」

突然尋ねられたアデラは、はつとしながらも

「異世界から封印陣を召喚出来るまで時間を稼ぎたいと——結構な数だと思われます」

と答えた。

「ロジオンの今の魔力で『円柱形封印魔法陣』の『時間差施行』と『召喚封印陣』を同時にやれば十五分そこそこ……」

「時間差施行をしていることをご存じでしたか」

ああ、と気の無い返事をしドレイクは立ち上がると

「教会へ跳ぶ。出し渋りをしている幹部を締め上げて、対コンラー

トの呪文を取り上げる」
そう言った。

そうしてアデラに向き直すと
「万が一の為、貴女に魔法を施行しておく
と右手を動かす。

「私は戦います！ 守られるのは——」
結構です——」そう言おうとした。

が、ドレイクの台詞は違うものだった。

「ロジオンの助けになるように」

「ドレイク殿……」

ドレイクはアデラのブーツを指差す。

「隠してあるマインゴーシュを。それごと魔法をかける……」

44 在する者達

『召喚封印魔法陣』

異世界の者から封印魔法陣なる物を召喚する。

以前からコンタクトを取っている者なら召喚は容易いが、今回はコンラートが接していない異世界の者を探し、交渉をしないとならぬ。

——間に合うか？

詠唱と共に精神を離脱させ、遠く彼方へと飛ばす。

勿論、闇雲ではない。

魔法使いとか魔導師とか魔力とか——馴染み深い『魔』の世界への介入。

——ナゼ、『魔』ナンダイ？

また声が聞こえる。今度は先程と少し声音が違った。

——何故、我々ニ『魔』ガ付イタ？

——遠イ昔、魔法使イト力魔導師ナンテ名称ナド無カッタ

後から付いたんだ。

——ソウ、後カラダヨ

じゃあ……

——『魔』ヨリ召喚シヤスイ世界ノヲ探シナヨ

精霊界？

—— 違ウネ

神界？

ゲラゲラと幾人もの笑い声が重なる。

—— 神界ト言ウ異世界ガ、在ルト思ウンダ？

違うのか？

—— 今デ言ウ神界ハ、後デ命名サレタ世界

…… 無いのか。

—— 知ラニンダネ

—— 全クダ

—— 仕方ナイサ、時ガ経チ過ギテイル

—— 只人二、都合ノ良イヨウニ世界ガ創リ変エラレタ

—— コノ、世界ハ——

「……！？」

集中が途切れ、精神が戻る。

それでも、頭の中で自分に語りかけてくる幾人かの声に、ロジオンは釘付けになってしまった。

——知リタクナイカ？

——コノ世界ノコト

——異世界ノコト

——イヤ、一番知リタイノハ

「……お前達は誰だ？」

*

時間差施行で幾重にも施行していた、最後の円柱形封陣が破れた——。

ドレイクはまだ戻ってこない。

ルーカス達の入魂も今だ続く。

ロジオンが、異世界への呼び掛けを途中で止めた。

何か不都合でも起きたのか？——ロジオンはこめかみを押さえたまま、狼狽えていた。

すぐ近くに今、最も警戒しなくてはならない化け物が——「コンラートがいるのに——」。

《ロジオン——》

ロジオンが我に返った視線の先には、既にコンラートが覆い被さるうと、闇より暗い闇の触手を広げていた。

「ロジオン様！」

コンラートの肩から腰にかけ、斜めに直線の空間が出来た。間髪入れず、反対の肩から逆の腰にかけても。

アデラだった。

自らを主張するようにマインゴーシュは、金色の光を放つ。

ドレイクがアデラのマインゴーシュに『光聖』の念を入れた為だ。二回の攻撃に弾みが付いた身体は、三回目の攻撃をかける。

二つのマインゴーシュを宙で合わせて、両手で柄を掴むと頭上から真つ二つに切り付けた。

「ア……デラ？ ……『戦女神パラスの鎧』？」

「ロジオン様！ ご無事ですか？ 何ともございませんか？」

アデラはロジオンの肩を掴み、わさわさと前後に揺らす。

ぼんやりとした様子で自分を見つめる主に、アデラは不安を感じたためだ。

視線は合ってるのに、心有らずで彼方に在るように見えた。

「ロジオ……！」

「——アデラ……！」

急に正気に戻ったようにアデラに怒鳴るロジオンに、彼女はホッとする間も無かった。

再生を果たしたコンラートが、あつという間にアデラを池に引きずり入れたからだった。

「くそっ！」

ロジオンも池の中へ飛び込んだ。

*

夜の池の中は、闇の色を引き込み暗いはずなのに――。
薄明かるい。

ああ、そうか。

月明かりと

アデラに施行されている『戦女神パラスの鎧』だ。

身体全体がボンヤリと光る姿をすぐに見付けることが出来て、施行してくれたドレイクに感謝した。

ロジオンは、逃れようと暴れているアデラに追い付こうと、必死に手足を動かす。

アデラが手に持っていたマインゴーシュで、自分を掴む影を確実に切り裂いた。

先程の剣の扱い方と言い、見事だ。

水の抵抗力も頭に置いて剣を扱っている。

技術を見ると、アサシンとしての才は十二分に兼ね備えている。

コンラートから離れ、こちらに向かって浮上してきたアデラの腕を掴み、自分に引き寄せた。

顔が近付き、視線が重なる。

（――えっ？）

突然、自分の身体が硬直し、ロジオンは焦った。

身体が吊った？――いや、そんなんじゃない。

意識が、深い海の底に引きずり込まれる感覚に背筋が凍った。

（――精神支配！）

何故だ？ アデラ？

（まさか！ アデラは魔力を持っていない、出来るはずが無い！）
でも目が合ったのは、見つめたのは彼女しか――
アデラの瞳を見て、ロジオンはまさか、と自分を疑った。

アデラの瞳の中に映る自分の姿――。

（違う！）

そう感じた。自分なのに自分じゃない。
アデラの瞳の中の自分が笑った。

「――！？」

――駄目だな、丸ツキリ冴エナイネ

――カノ使イ方ヲ教エテヤロウ

――ナニ、少シノ間、身体ヲ借リルダケダ――

誰かに頭を掴まれた気がした――刹那、ロジオンの意識はそこで
途絶えた。

45 亡異世界の呪文

「ウワッ！」

身に付けているローブに足を取られ倒れる教皇に、僧侶達は慌てて駆け寄り彼を起こす。

「魔承師補佐！ なんと言う無礼なことを！」

僧侶の一人がドレイクに向け、怒りを露にした。

勝手に躓いてそれを人のせいにするとは、余程こちらに非があると思わせたいらしい。

「周囲がめくらだと苦勞しますね、教皇」

「ぬ……」

教皇は老体を周囲の僧侶達に起こしてもらい、ヨタヨタと歩き出した。

「……付いてきなさい」

ドレイクにそう声を掛けた。

「教皇、我々も……」

「お前達はここにいなさい！」

付いてこようとする僧侶達に放った教皇の言い方は、思いもよらず 険のある言い方で僧侶達は一瞬にして固まる。

「魔導術統率協会から依頼が来ていたことを、何故すぐに話さなかったのだ！ 何を置いても先に連絡をするよう常に申しているではないか！」

「し、しかし…… 感謝祭間近で教皇様共々忙しく……」

「魔導術統率協会の依頼は緊急を要することが多い。いつも、そう申しているはず！」

もう良い——教皇は、何度も言い伝えた台詞にうんざりした様子でドレイクとその場を去った。

ここ中央教区も、感謝祭の準備で夜遅くまで追われていた。

教皇のいるクレサレッド教会は、魔導術統率協会と同等の古い歴史と伝統を持つ。

その歴史故に矜持が高く、教会に保管してある、あらゆる文庫を出し惜しみする傾向があつた。

——魔導術統率協会も知らない、未知の世界の書物も置いてある為に、急な危機の時には自分で考え・創るより余程早い。

教皇は祭壇の裏側に付くと、自分の首にかけていた四角い金板を外す。

祭壇の裏には、それがぴったりと収まる凹みがあり、教皇はそこに金板をはめ込んだ。

すると、枠組みが出現し引き出しのようになり、独りでに開いた。

そこには——数珠のような物が深紅のビロードの上に大儀そうに置かれていた。

数珠とよく似ているが、数珠にはない人差し指と薬指と親指にも通すところがあり、手首の部分には留め金がある。数珠玉の大きさも普通の半分もない。

これが教皇しか持てない、『知識の宝庫』と言う名の教本であつた。

教皇は左手にそれを嵌めると一言一言、言葉を述べる。

これは呪文ではなく合言葉のようなものだ。

すると大きな図鑑ほどの、透明の鏡のようなものが数珠の上に出現した。

「悪しき魔を払う言葉で宜しいのですかな？」

「『払う』だけでは駄目です」

「では、滅する方で……」

教皇はそう言うと、その鏡に指を当て文字を書き出す。

押すような動作をすると、鏡に色々な形の紋様が写し出された。
——それは異世界のあらゆる文字だとドレイクは知っていた。

魔力を持たない者達の、亡世界だと言うことも……。

「ドレイク殿」

暫くして教皇がドレイクに声を掛けた。

焦燥の色が濃い。

「どうしました？」

「はつきり、滅すると記録している文書があまり見当たらないようです」

「退散だとまたやってくる。魂を消滅出来る呪文はないのですか？」

「——退散や祓い、除霊、浄霊に関する言葉は多く出てくるが……善でも悪でも命は尊いと言う教えがあるので、在るべき場所へ帰るようにしますが、帰れなくなるような魂の抹消までの呪文は、そもそも少ないのでしょうか……」

首を横に振りながらも教皇は、ドレイクの期待にそえる呪文を探した。

「……浄霊か封印でも構いません」

仕方ない——そんな風にドレイクは、そつと溜め息をついた。
時間がない。もうロジオンが数多く施行した円柱形封印魔法陣は終わる。

異世界から封印陣を召喚できる『召喚封印魔方陣』が成功していれば良いが。

あれは大分時間をかけないと難しいし、何より精神を消耗させる。コンラートの知らない、力のある異世界の者を探すのがそもそも大変だ。

「……これならどうです？ ジャーハンと言う国の呪文です。はっきり消滅と記されています」

「それで良い。もう時間が無い」

「他に浄化と封印の呪文も、幾つかお渡ししましょう」

教皇が透き通る鏡に向かい人差し指をくるくると回すと、縮小し、数珠の上に収まった。

ドレイクは自分の魔法日記を元の大きさに戻し、机の上に置く。教皇は数珠を嵌めた左手をひっくり返し、魔法日記の表紙にあてた。

「直接なので、申し訳ないが中身は後で修正を……」

魔法日記に直接記憶させる方法の一つだ。

この場合、たまに白紙の頁ではなく、別の、先に記した頁に紛れてしまう場合がある——それを教皇は言っていた。

「いつものことですから」

吸い込む度に光を放つ魔法日記と、情報を送る時に規則的に光る数珠を見ながらドレイクは言った。

数珠と日記から放出される光が急に消え、辺りは静かな薄闇に戻った。

「私は急がなくてはなりませんので、失礼します」

「強敵なようですな。お気を付けて」

ドレイクの無くなった中指を見て教皇は懸念した。

ドレイクは仮の姿になった日記を胸元にしまつと、足早に一番近い移動方陣に向かう。

「——ドレイク殿！」

教皇の、弾かれたような大きな呼び声に後ろを振り替える。

「感謝祭が終わったら、魔承師様に近いうちにお時間を頂けないか御伝言を！ ご相談があるのです！」

「確かに。伝えておきましょう」

何か困ったことが周囲に起きているのだろつと予想がついた。

（だが今は……）

ロジオンの身が案じられ、一刻も早く戻ることがドレイクの最優先事項であった。

45 亡異世界の呪文（後書き）

私用で、次回の投稿は週末か来週になります。

46 豹変（前書き）

私用が一旦落ち着いたので投稿します。

46 豹変

リシエルの『入魂』が終了し、安堵している場合ではなかった。

激しい水音に池を見てみれば、ドレイクどころか、ロジオンもアデラも——コンラートもない。

「やだ！　もしかして全員、池に引きずり込まれた音？」
三人青ざめて顔を合わせる。

「——エ、エマ！　かつ……！　つう——」

雑木林から飛び出したエマを止めようとしたルーカスだが、肋の痛みで踞ってしまった。

「ルーカスとハインは、リシエル連れて避難してえ！　怪我してんだからあ！」

エマは走りながらルーカス達に言い、どんどん池に近付いていた。

池に引きずり込まれたなら、一刻も早く助けなければならない。
ドレイクとロジオンなら、水中で何かしらの魔法を施行するだろうが

（アデラちゃん……！）

アデラは魔力が無い。只人だ。

一番コンラートにつけこまれ安いだろう。

「エマ殿！　一人じゃ危ない！」

すぐ後ろからハインの声がして、エマは驚いて振り返った。

「私しかないでしょ！　動けるのお！」

「私だつて動けますよ！」

「詠唱してる間にやられちゃうつて！」

「魔法以外の——エマ殿！」

池の中から飛沫をあげて飛び出てきた影が、エマに突っ込んで

きた。

「危ない！」

ハインがエマを押し倒し回避する。

「——ね？ 魔法以外でも役に立てるでしょ？」

「……もう少し気を付けて避けてよね」

嬉しそうに話すハインに、エマは擦りむいた鼻を押さえた。

闇の中に蠢く闇にハインとエマは目を凝らす。

——コンラートだ。

二人身構えた。

だが、コンラートが子供並みの大きさで眉を潜める。

先程の少年の姿よりぐんと小さく、弱々しくなっているのだ。

何があつたのか？

入魂に集中していたエマ達には把握が出来ない。

「——ひっ！？」

自分の後ろから来る、凍てつくような波動にエマは思わず声を出した。

声を出さなくとも、ハインも同じだった。

恐る恐るコンラートを見ると——その、のっぺりとした顔には昔の面影も見当たらず、ようやく目鼻立ちが分かる程度なのに——怯えている。人目で分かった。

チャポン……

再び起きた水音に振り向く。
身体に、たなびく波紋は先程の凍てつくものと同じ。
だけど――

何故その波状が、ロジオンから出てるのか……？

*

浮力の魔法施行で、ロジオンは水面に浮いていた。

片腕にアデラを抱き、地面に着地する。同時、ロジオンはアデラを手放した。

がくり、とアデラの膝が折れ、地に突っ伏す形で咳き込む。

「ぐ……ッ！ ゲホッ！ ゴボ！……」

「アデラちゃん！」

水を飲んで吐き出しているアデラの背中を、エマは懸命に擦った。
びしょ濡れで、後ろに結わき止めていた髪が肩に落ち、びったり
肌や首にまとわり付いている。

「防具服着てるんでしょ？ なら上着とシャツ脱いで。風邪引いち
やう！」

エマは早口で捲し立てると、自分のマントをアデラに掛けた。

エマのマントは袖を通せる型の物なので、上着の役割として充分
果たせる。

水を吐きながらもアデラは

「ロジオン様……はっ？！ ご無事か？ 水の中で様子がおかしく
……なられて……！」

と懸命に尋ねた。

「アデラちゃんを抱き抱えて、水から上がってきたわよ……ただ」
そう言つとエマはアデラの肩を抱いて、対物魔の結界を張った。

「中身がロジオンとは限らないかもねえ……」

*

池に戻ってきてドレイクはその光景に愕然とし、また、恐れていたことが起きたことに血の気が引いた。

コンラートはもう逃げ出せないほどに弱々しく、更に透明感を増し、地べたに這いつくばっていた。

ロジオンは――

今の状況を楽しんでいるのか、自信ある笑みを始終絶やさずにいた。

師であるコンラートを滅することに、何の躊躇いも無いように。

新たな気配に気付き、ロジオンはドレイクの方に振り向いた。彼はドレイクに涼やかな笑顔を向ける。

「やあ……ドレイク。久しぶりだね。息災で何よりだ」

声音はロジオンだが、口調が違う。

のんびりとし、平坦とした彼の口調ではなく、落ち着いた大人の男性のものだ。

その口調にドレイクは覚えがあった。

「消滅の呪文を手に入れてきたようだが……骨折り損になってしまったね――もっと早く私が出てくれば良かったのだが……」

コンラートの方を見ながら話しかけるロジオンに、ドレイクは言

った。
「マルティン様……？」
と。

*

——マルティン

魔法を扱う者達が知らないことは無い人物。

魔法の創立者であり、魔導術統率協会の創設者。

尊敬があまりにも深く、皆、子にその名を名付けるのを憚るほどに。

その名は魔力の持たない者達——アデラさえも知っている。

まさか——と、エマもハインもアデラも啞然と、ロジオンとドレイクのやり取りを聞いていた。

「私の魂を受け継いだ者が、上手に攻撃魔法を使えないようだったから、指南のつもりで出てきたのだが……余計なお世話だっただろうか？」

「——いえ」

ロジオンは微笑みを深くする。

「表情が固いね、ドレイク。私が、今のこの身体を乗っ取るのではないか——と、疑ってはいまいか？」

「……マルティン様ならしないでしょ」

「——なら、久しぶりの再会だ。随喜の顔を見せて欲しいな。突然の事で驚くのは仕方ないが」

ふっ、とドレイクの顔が緩む。

普段、無表情に近い顔の彼が、このように柔らかく笑うのは珍しい。

本当にマルティンなのか？――

柔らかなで清々しい笑みを浮かべるロジオンは、ずっと大人びて見え、いつもの、のんびりした口調ではないが。

この、身もよだつ恐ろしさは何なのか？

『地獄の鑑賞者』達が大勢やって来た時よりも恐ろしく感じる。

マルティンとは、このような人物だったのか？

――いや、そもそも――

（どうして、ロジオン様に？　ロジオン様はどうされたのだ？　ロジオン様がマルティンの振りをしている？）

アデラの頭は混乱の渦の中、すぐるようにロジオンを見つめる。それに気付いたのか、アデラの方を向いて彼は微笑んだ。

「心配しなくて良い。君の主人は中にいる――眠ってもらっているがね」

と、自分の胸に手を当てアデラに言った。

アデラは返す言葉も浮かばず、ただ頷くだけだった。

話しかけられただけで手足が震える。

畏れ多いとか、畏敬の念で震えているのでは無いのだけは分かっている。

――ドレイクは何ともないのか？

――本当にマルティンなのか？

それは、隣にいるエマやハインも同じ気持ちであった。

しかし、自分達には遠い過去が存在であるマルティンが、どのような人物だったかなど知らない。

マルティンの時代から生きている、ドレイクしか知らないのだ。黙って見守るしかなかった。

「イズルテも変わりはないか？」

「はい。元気に過ごしております」

「それが気掛かりだった。ずっと君が付いていてくれたのだろ
う？」

「私を保護し、育ててくださったマルティン様の大事な妹君ですか
ら……」

「ありがとう、ドレイク」

ロジオンの手がドレイクの、高さのある肩に触れようとす。

——が、ドレイクにかわされた。

瞬時、アデラ達に防壁結果が施行される。

「……マルティン様ではありませんね？ よく似た口調をしてらっ
しゃるが、狂心がただ漏れですよ」

ロジオンは不貞腐れた表情をし、顔を下に向けた。長めの前髪が、
たらんと下がる。

くく、と含みのある笑いが、俯く顔から漏れた。

「ふ……ははははははは！」

笑いと同時に、顔を上げたロジオンは——。

歪んだ笑みを浮かべ、ドレイク達を見つめ返した。

47 残忍なエクティレス

「お互い猿芝居だったのかよ」

大口を開けて笑うロジオンの声は、酷く下品で耳障りだった。

「私を保護して、育ててくださったのはイズルテ様——マルティン様は私に魔法は教えてくださいましたが、その他は一切関与しておりませんでした」

「かまかけたんだ。じゃあ、それなりに似た雰囲気だったってことだよな？」

さあ、どうでしょう？——ドレイクは先程のやりとりに、さほど興味を持たないようだ。

「死んでも尚、魂に溶けずに自己を保つか……往生際の悪い所は変わってませんね」

ぴたり、とロジオンの笑いが止まった。

好敵手と出会ったように瞳を輝かせ、口角は大きく上を向く。

ロジオンの姿は、挑み行く獣そのものだ。

「お前と決着を付けたかったのさ。それが心残りでさ——こいつと魂を繋ぐことが出来なかった。そうしたら！」

くつく、と肩を震わせつつ話を続ける。

「他にも繋ぐことが出来なくて、溶け込めない奴がいるじゃん！

こいつ、すっげえ不完全なんな！ こんな端切れだらけの魂で、よくまともにいられるよ」

「貴方も生前はそうでした」

「——だから、俺が生まれた、だろ？」

「違う、と言いましたよ。『生まれた』のではなく『作られた』と」

覚えていないのですか？ とドレイクに問われたが、彼は初めて聞いたように大きく目を見開いた。

「エクティレス」

ドレイクが彼の名を呼ぶ。

「エクティレス」

再び名を呼ぶ。

「ああ……そうだ。思い出した」

彼は呟くと、歪んだ笑顔を見せた。

「狡猾な魔導師に育てられた。俺が『何者』か知っていたから。成長して、周りから言われた名前が『残忍な処刑人』」
エクティレス

*

「エ、エクティレス……！」

声を上げたハインに、エマは掌で彼の口を塞いだ。

エマもハインも、そしてアデラム、その名を知っていた。

——歴史上に残る、最も残酷な魔法使い——

魔力の持たない人間達を無差別に襲い、諫めようとした魔導師達をも死に至らしめた。

『数ある多くの血族を滅亡に導き、尚、我らの尊き血を濁す汚れた者達は、粛清されて当然』

—— 粛清

—— 粛清

一つの町を一瞬にして、躊躇うこと無く消滅させた。

魔法使いと言う地位でありながら、その魔力と魔法は巨大で強力であり――。

育てた魔導師同様に、狡猾で卑怯であった。

何人もの魔導師や魔法使いが挑みに行ったが、捕まらない――あ
げく殺される。

「負けなかった、誰にも。――ただど負けたんだ、あんたに。あと
一刺しで殺れたのに……邪魔をしゃがった。あの女――イゾルテの
野郎が」

憎々しく目をつり上げ喋る顔は歪み、狂相がありありと晒け出さ
れる。

その、狂気表情とオーラを身に纏い、彼はまた笑う。

「だが、今はいない――出てこれないんだろ？ 絶好の機会じゃな
いか！ はは！ お前が俺に敵わないことはお前自身知ってること
！」

エクティレスが言い終えた瞬間だった。

閃光が辺りを包んだ。

それはエクティレスが、ロジオンの身体を使い試行した、攻撃魔
法だった。

強い閃光が辺りを白く、無に染める。

膨大なエネルギーを一気に放出したせいだ。

過去、一瞬にして町を荒野に変えた『白鎌』だと分かった時には
既に遅い――いや、気付けたとしても、防げる防御魔法を施行でき
るか――。

答えは否。

白い閃光に視界も頭の中も遮られた。

*

次に目を開けた時は、もう、この世界の住人では無いだろう――
アデラもエマもハインもそう思った。

瞼を閉じて、通して裏側まで入ってくる白い光が落ち着き、三人は恐る恐る目を開けた。

「――！！」

目の前には視界を黒く染める程の大きな、鱗を持つ動物が三人を守るように立ちはだかっていた。

大きな動物だ。顔を見ようとも見上げても、見えない高い樹のてっぺんのように。

黒光りする鱗、一つ一つも大きく、鋼鉄のように見える。

様々な文字が羅列された円周が幾重とつらなり、啞然と見ているアデラ達の身体を通り抜け、鱗を持つ動物の中へ入っていった。

その魔法陣らしき円周は、かなり広範囲に渡っているらしく、目の良いアデラには遥か遠くから滑るようにやってくるのが見えた。

「――！！」

大きな黒い動物の姿が陽炎のように揺れる。

半透明になった動物に重なる人の姿――。

人の姿の方が色濃くなり、誰なのかはつきりと分かった。

「ドレイク殿！」

アデラは叫び、近付いたが人の姿になった彼を見て、ぎゃつと叫んで仰け反った。

——全身、何も着けていなかったからだ。

先程の鱗の付いた黒い大きな動物はドレイクの真の姿で、黒竜であることにアデラは気付き——全裸なのは、本来の姿に戻った時に服が破け飛んだのだらう。

「いやん、ドレイクったらあん」

エマが緊迫した場に合わない声を出し手で目を塞ぐが、お決まりで指の間から眺める。

アデラが慌ててハインからローブをひっぺがした。

「私のブランド品……」

ハインが憮然とした様子で呟いたが、ドレイクの身体を隠すには他に無い。

ドレイクは膝を地に付けたまま立ち上がろうとも、声を上げようともしない。

顔には疲労の色が濃かった。

「さっすが！ ドレイクだ。あんたが魔法防御張らなきゃ、宮廷の近くまで焼け野原だったな！ ——だけど」

「——！」

ヒュツと空を切る音が、アデラの前を通りドレイクに当たる。

エクティレスの蹴りがドレイクの左頬に当たり、吹っ飛んだ。

「魔力を使い果たしちゃったね。暫くは立つことも出来ないんじゃないん？」

「……く……」

ドレイクは悔しさに歯軋りをするも、それさえも力が入らないようだった。

その姿を見てエクティレスは、暗い笑みをドレイクに見せる。

「……でも、俺はまだまだいけるぜ。このシミっ垂れた国を吹き飛ばせるくらいな」

「お前が、使っている……その少年の、生まれたく……にだ！ 生まれ変わりの、者の……国にまで……手を……！」

途切れ途切れながらも、止めさせようと説得するドレイクに、エクティレスは言い捨てた。

「俺はこいつ。こいつは俺。身体の共有は当然の如し——」

「ふざけるな！ この悪ガキ」

ロジオンの上半が捻り、身体が吹っ飛んだ。

誰かに殴られた、それは分かった。

しかし、誰に殴られたのか？

ザッと、地を踏みつける勇ましい足音。

「貴様は死んだのだ。さっさとロジオン様を戻せ！」

両足を広げ、背筋を伸ばし、ぐっと拳を上げ畏怖堂々と立つ乙女——アデラだった。

48 アデラ、キレル

「アデラちゃん……」

ここでも出てくるのか——スゴい！ エマの素直な感想だ。自分もハインも、エクティレスの波動に身体が硬直して動けない。だが、アデラに至っては、全くいつも通りに動いているようだった。

——魔力を持つ人じゃないからかしらん？

それにしたって、あの破壊力の魔法を目の当たりにして、びびったり泣き出したりしないところも凄いが——。

（その、おっかない本人を悪ガキ扱いして殴るところがまたスゴい）

——漢おつこだわ。

「……素敵」

「——え？」

エマの反応にエクティレスに硬直していたハインの身体は、瞬時に解けた。

驚いたのは二人だけではない。
ドレイクもそうだが——

半捻りで地に倒れたエクティレスが、一番衝撃だった。

ジンジンと左頬が痛む。

口の中が錆びた鉄の味がする。口を切ったんだと知った。

——何だ？

何だ？ この女？

混乱したのは一瞬だけ。

エクティレスは怒りを露にし、すぐに立ち上がるとアデラに掴みかかったが

「グフツ！」

瞬時に腹に拳を入れられた。

「——てめ……！」

間髪入れずに、前屈みになって隙だらけの背中に肘鉄が入る。痛い。特に殴られた腹の方が。胃の内容物が口から出そうだ。こんな事をされたことが無いエクティレスは混乱していた。

——何でだ？

こいつ魔力を持たない只の人間じゃないか？

何で俺、そんな奴にやられてるんだ？

怒りじゃない違う感情が沸き上がる。

ぐい、と両肩を掴まれ上半身を起こされた。

すぐ目の前に女の顔があり、エクティレスは息を飲んだ。

ガツン、と拳で両側のこめかみ部分をグリグリされ、脳まで抉られそうな痛みを叫ぶ。

「この！ クソ女、止める！ よくも俺にこんなことを！」

「悪ガキに罰を下すのが何が悪い！」

「何だと！ ババア！ 俺に罰を下すだと？ 笑わせんな！」

「笑わせとらん！ 私をババアと言うが、お前は幾つで亡くなったんだ！」

「四十だ！」

——ギリギリと、こめかみから音が鳴った気がした。

「……お前の方が歳くつとるだろ……！それで人をババア呼ばわ
りか！」

[illegible]

振り払おうとすれど、アデラの拳は接着剤でも付いているかのよう
に離れない。

それどころか、ますます痛みが強くなっていく。

「何でだ……？魔法が使えない、ただの人間の女に俺が……？」

罰とし、身体に苦痛を与えている事実より、魔力の持たない女にこのようなことをされ、全く抵抗できない——恐怖を感じていた。

青ざめて行くエクティレスにアデラは、つり上がった瞳で彼を睨みながら答えた。

「お前の身体はロジオン様の身体。ロジオン様はな、グウタラな生活が続けていたせいで、著しく体力が落ちているのだ！」

「魔力が大事なのに、体力なんか関係——」

「ある！ ドレイク殿を試してみろ！ 起き上がれなくなると言うのは、体力も共に消耗しているのだ！ お前は先程、まだ強い魔法が施行できると豪語したが、こうやって『ただ』の人間の私に振り回されていると言うことは、ロジオン様自体の身体の体力は、限界に近いということだ！」

「ええ……！」

エクティレスは驚き、改めて身体の調子を確認する。

確かに、足腰に力が入らない気がする。

いきなり経験の無い大きな魔法を施行したせいで、身体が慣れなかったのだと思っていたが……。

「……ヘタレ過ぎる」

雷が貫いたような衝撃だった——エクティレスには。

どんだけひ弱で怠惰な生活してたんだ、こいつ。ロジオン

くたりと座り込んでしまったエクティレスの肩を、アデラは優しく叩く。

「ロジオン様を出すのだ。ヘタレだろうと、今の姿がこれなのだ。諦める」

慰めているのだろうが、内容的に情けないことを言っていて、余計に哀愁が漂っている。

諦めるだろうか？——期待した。

だが、含み笑いが彼の口から漏れてきたことで、まだ諦めていないことが分かった。

「——!?!」

襟首を掴まれ、持ち上げられアデラは呻いた。

「馬鹿か。今まで大人しく猫被って、この機会を待ち望んでいたんだぜ？ 誰が渡すかよ」

せせら笑うロジオンの顔は、悪意に満ちた凶悪な人相であった。

「体力なんぞこれから付けければ良いだけだろ。コンラートとか言う、こいつの師のせいで中々出てこれなかったんだ」

ちらり、と小さく、弱々しく横たわるコンラートの成の果てを見ながら尚も笑った。

「——待つてろ、ゆっくりなぶり殺してやるよ」

その前に——と、宙に浮いた状態で呻いているアデラと視線を合わせる。

「女、大したもんだぜ。この俺に拳を叩きつけるとはな。褒美として、可愛がつて、スタスタにしてやるよ」

「……な、ふざ……け！」

「この（ロジオン）の身体で可愛がつてやる、ってんだ。本望だろ？ お互いに。——まあ、最後にや肉の塊になる運命だけど」
腕がアデラの胸に伸びてきた。

「——！」

弾けた音にアデラは一瞬目を閉じた。擦られたようなヒリヒリした痛みが走り、まさか——と瞳を開けた。

防具服が弾け飛び、自分の胸が露になっていた。

「見んな！」

直ぐに反応したのはエマで、当たり前のようにハインの目を塞ぐ。この中で一番、煩惱を持つ男と判断された故だ。

その判断に異議の無いハインは、大人しく目を塞がれた。

「歴史史上、最悪の魔法使いの情婦になれる栄誉だ——ありがたく受け取りな」

力加減無しで胸を鷲掴みされた。

——いやだ！

そう思った刹那——。

《止める！》

木霊する声に、皆、一斉にエクティレス——ロジオンの方を向いた。

49 さよなら（前書き）

「コンラート編」終わりです。

49 さよなら

どさり、とアダラの身体が地に着く。

絞められた首を擦りながら彼——ロジオンの身体を乗っ取っているエクティレスを見た。

——この声……。

「ロジオン様……？」

《ちょっと借りるだけ、と言つといて……随分勝手なことしてくれるね？ 許さないよ》

ちつ、とエクティレスが舌打ちをしたが、すぐに禍々しい表情に戻った。

「引つ込んでろよ、ヘタレ。お前にはもったいねえんだよ、この身体も、この女も。今度からは俺が有向に使つてやる——この世界の肅清の為にな」

《覗いたよ……君の魂。君がやっていたことは肅清じゃない……ただの殺戮だ。そこには理想も理念も信念も何もなかった——狂者が面白がつて力を使つて、誇示していただけ……》

「それがお前の前世の一人だぜ？」

《でも、今の僕じゃない。君が……悔いているなら、僕の中に溶けて……今に、共に贖罪を含めて生きるなら……受け止める》

——はん！

エクティレスの、馬鹿にした笑いが辺りに響いた。

「神父にでもなったつもりか？ 何様なんだよ、俺が出てこなきゃ
攻撃魔法も録に使えなかった奴がよ」

《そうだね…… お陰で分かったよーどうすれば良いのか》

内側から押し出される感覚にエクティレスは、驚き、また恐れる。
「何しやがる！ これは俺の身体だ！」

《ボケてんの？ 頭悪いの？》

《過去の自分自身欺いてさ、どうしようもないね》

《出てってね》

溶け合わない魂の声の誹謗が、エクティレスにも届く。

「お前らだつて、未練があつて溶けないくせに！ 出てけだつて？
出てつたら魂が欠けるんだぜ？」

《溶けない理由が違うよ》

《複雑なんだよなあ…… その、魂が継ぎ接ぎだの、欠けるだのつて》
《ロジオンは理解出来たのにね。やっぱ、馬鹿なの？》

「ああ？ 意味分かんねえ！」

《——アデラ——！》

ロジオン様の声だ！

アデラの『女豹』と言う異名に相応しき駿足が、地を蹴った。
あつという間にエクティレスの間合いに入る。

「——！？」

腕を掴まれた——そう感じた時には、身体が宙に浮いていた。
エクティレスの視界が回転し、身体に痛みが走り目が回る。
逃さなかった——その時を。

剥がれる

繋ぎ目を一気に剥がされた感覚を受け、自分がロジオンの身体から追い出されたことを、明るくなってきた空から知った。

《畜生！ 畜生！》

形代が無いと日の光はキツイ。

《きつと復活してみせるからな！》

エクティレスは悪態を吐き、あっという間に西の空へと消えていった。

*

「ロジオン様！」

はあ、と今まで呼吸をしてこなかったような大きな息継ぎが聞こえ、ゆつくりと起き上がる姿——のろのろとした動作。

長めの前髪をふるふると振り、髪の間からアデラを見つめる彼は――。

「……ロジオン様？」

ロジオンの中に何人かいるようだった。

ロジオンじゃなかったら？

恐る恐る近付く。

「アデラ……殴りすぎ。痛いよ……」

平坦な、ゆっくりとした口調、声。

自分を見つめ返すブルーグレーの瞳は落ち着いた海の色。狂気の光りがない。

「——ロジオン様！」

——ロジオン様だ、いつもの——

アデラは、地で胡座をかいているロジオンを抱き締めた。

驚いたのはロジオンの方である。

何せ、エクティレスに防具服を破かれ、胸がさらけ出されているアデラに抱き締められたのだ。

「ア、アデラ……あの……」

魔法使いでも年頃の男だ。こう抱き締められ、顔が女性の胸に埋まると言う状態が嬉しくないわけがない。

しかも、露になっっている胸に、普段心憎からず思っている相手。ふにゃん、と柔らかさの中に張りがある胸の中——。

（頭……沸騰する！ 理性吹っ飛ぶ！）

このご馳走を食って良いってこと？

欲望に爆発寸前なロジオンの耳に、すすり泣く声が聞こえた。

すぐ近く——目の前。

「……アデラ？」

鼻をすする音と嗚咽に混じり、何度も同じ言葉が繰り返されていた。

「怖かった……戻ってこないのかと……良かった……」

「ごめん……」

ロジオンの謝罪の言葉に、アデラの泣きが熱を帯びる。

「怖かったんですからね……！ ロジオン様なのにロジオン様じゃないのが……！ 変な人に乗っ取られないで下さいよ！」

「うん……ごめん。悪かった……」

——ああ、彼女は必死だったのか

——僕を取り戻すために——

ロジオンは目の前のご馳走より、それが何より嬉しくて、アデラの背中を労るように撫でた。

*

エクティレスがいなくなつて、身が軽くなつたエマとハインは、魔力を使いきつて動けなくなつたドレイクに、魔力を送る。

魔力のカラーと言ふべきか、性質は人それぞれだが、魔導師程になれば人から送られた魔力を自分に適した性質に合わせることが可能だ。

「もう大丈夫です」

しっかりと口調と共に立ち上がったドレイクを見て、二人は安心した。

ロジオンも、多少ふらつくが動ける。

——それより

「腹と背中……あと、こめかみ……痛い……」
そちらの方が至って問題のようだ。

「すいません……」

エマから借りたマントをしっかりと羽織り、反省しきりに深々と頭を下げるアデラ。

「いや……アデラの、この鉄拳で起きたようなものだから……」
それで危機を回避できたようなものだから、ロジオンも責めるわけにはいかない。

「良いじゃない？ 良い思いもしたんだしい」

エマが自分の顔の前で、両手をパフパフと左右に動かす。アデラの小麦色の肌が、活火山のように染まった。

まあね——と笑って見せ、ロジオンは静かに様子を見ていたドレイクに近付く。

ドレイクは自分の魔法日記を開き、ある頁をロジオンに見せた。

「私の今の状態では、強力な魔法は施行できません。……どれを使うかは——ロジオン、貴方が決めなさい」

それは、ドレイクが教会から手に入れた『消滅』『封印』『浄化』の呪文の頁だった。

もう、動くことが出来ない小さな塊となった師の元へ出向く。

「師匠……」

膝を付き、語りかける。

仰向けで倒れているコンラートは、極端に細く、小さくなった両腕を懸命にロジオンに向け動かした。

「ホシイ……ホシ……イ、ロジ……オ……」

もう、生前のコンラートでは無い。

死ぬ前の己の願望や心残りが凝り固まって生まれた、残留思念の物質化。

それでも、顔の部分にうつすらと残る彼の面影に、ロジオンの視界はぼやけた。

「……花火……」

コンラートに語り掛ける。

「花火……青い、色……池の中でも見る……出来ました？」

長い沈黙が続いた。

最初、何を言っているのか分からない様子が、記憶が甦ってきたのか、嬉しそうに身体を振るわせ始めた。

それに合わせるように顔の輪郭もはつきりとし……。

「コンラート師匠……？」

生前の、元気だった頃の顔立ちが浮かび上がる。

「は……なびは……青だった……」

「……出来はどうでした……？」

「美しかったよ……。夜に映える、はつきりとした青……卑しい心を浄化させるような……。私の好きな一番好きな……色」

ロジオン

——お前の髪が風に乗って、たなびく時の色。

コンラートの瞳に写る顔はロジオンの他に、向こうに誰が見えているのか——。

ロジオンが流す涙が、コンラートの瞳から溢れる滴と合わさり、流れた。

残留思念の塊の中に、生前の彼が残っていた。

それがロジオンには嬉しく、また、悲しかった。

「ロジオン……お前の手で私を……。これ以上、醜態を晒したくはない……」

「は……い」

「お前の……手で逝くことを誇りに思う……お前も……それを誇りにしなさい……」

「……」

「親から引き離して……酷なことをした……」

師の懺悔にロジオンは、言葉無く首を横に振った。

「……酷いことをしたと分かっているが……お前と過ごした日々は……誰にも渡したくない……宝だ」

「師……匠……」

最初は自分が見付けた使命感だけだった。

小さな、腕の中にすっぽりと収まる赤ん坊が、自分を見るたびに無垢に笑い、眠り、不快な表現を表すために泣き、そして無条件に慕い全身で愛情を向けてきた。

——何と新鮮な毎日だっただろう。

子を育てた経験の無い自分が、全く苦勞なく育てたわけじゃなく、苦勞した部分の方が多い。

なのに、思い出されるのは、成長してきたロジオンとの楽しかった日々ばかりだ。

「……楽しかった。ありがとう……ロジオン……」

——さあ、私が私であるうちに——

コンラートが小さく、短くなった腕を広げロジオンを促す。

「お前が下す采配を……全て……受け入れよう」

ロジオンとコンラートが触れている地が輝きだした。

見ているだけで温かく、安らいだ気持ちになっていく、春の日差しより柔らかな光。

ロジオンの瞳から絶えず涙が溢れていたが、口ずさむ呪文は震え

がなく、しっかりと詠唱していた。

光が球体となって浮き出し、コンラートを包む。

幾つも幾つも生まれた球体は、コンラートの姿をすっぽり包んだ。

「僕も……楽しかった……。ありがとうございました……」

——さよなら、師匠——

朝日が木々を、池を暁に染め、目覚めを要求する。

それに混じり浄化の光は斑に空を上っていく。

いつしか溶け込み、移り行く自然の一部になったかのように見えなくなり

——憂いの日々は終わりを告げた——

50 感謝祭（前書き）

今まで後回しにしていた話が続きます。

50 感謝祭

エルズバーグの感謝祭は地区ごとに二日ずつ、ずれて行われる。国の面積が広すぎて、国をあげて行くと産業が一気に停止してしまう為だ。

何せ、こうした年に数回の祭りには皆、仕事を休んで楽しみたい。店という店は一斉に閉めてしまう。もちろん食べ物扱う出店なんかも。

楽士や踊り子だって休んでしまう。

そうになると、飲んで食べて歌って踊って——楽しむことが出来なくなるのだ。

それで地区ごとにずれて行い、他の地区が祭りで休みの地区に出向き稼ぐわけだ。

中には年中無休で働き、稼ぐ商人もいるが……。

（王族も似たようなもんだね……）

ロジオンはそつと溜め息を付いた。

*

宮廷を背に上がる花火を背景に、メインバルコニーに集合する王族。

中央にはメインのロジオンの父である陛下。

両脇・左には第一王妃が立ち、ずらりと第一王妃の嫡子達が並ぶ。

第一王子のディリオン殿下夫妻とその子達。

第二王子は他国へ婿養子に行ってしまったので飛ばして第三王子・アリオン夫妻とその子達。

第四王子・エアロンが並ぶ。

第一王妃が産んだ王女達は成人し、皆、他国や他の区域の有力者達に嫁いでいった。

右には第二王妃が立ち、すぐ横には第五王子のロジオンに第六王子のユリオン。

第六王女のリーリヤ、第七王女のアラベラ、第八王女のイレインが並ぶ。

男子は名前に統一感を持たせたと言うが、返ってややこしい。ややこしいが名前に連帯感を感じるのか、仲が良い。

しかも——今年はきちんとロジオンが『王子』として参加している。

同世代の民衆の女の子達に絶賛に人気のある、第六王子のユリオンと似た顔が並んでいる。

どよめきから歓声に、甲高い女性達の声——ロジオンは手を振りながら『王室スマイル』と言う上品な笑顔で、宮廷に集まってきた民衆に応えた。

バルコニーでのお披露目の時間が終わり、王族達は陛下である父と二人の王妃、それと後継者であるディリオン殿下夫妻は晩餐会に出席するが、後の兄弟達は自由である。

年に数回ある国をあげての行事には勿論、王族全員の参加義務がある催しがあるが、下に生まれた者ほど拘束が少ない。

その点、ロジオンは五番目なので、まだ気楽なわけだ。

バルコニーから室内に入った途端にロジオンは、ヘナヘナと蹠つた。

じんわりと汗を掻き、しかめっ面である。

「ロジオン様！」

控えていたアデラが肩を貸し、ロジオンはゆっくり立ち上がったが、背中を丸めたままだ。

「兄上、大丈夫ですか？」

すぐ隣にいたユリオンも寄り添い、肩を貸す――が、華奢なので潰れた。

慌てて、ユリオンの従者が彼を起こす。

「もう、兄様ったら力無いんですから」

百合の名を持つリーリアが、代わりにロジオンに肩を貸す。

身体を動かすのが好きな彼女は、普段から運動を欠かさない。ユリオンよりずっと安定している。

「フッフ……僕は豎琴以上の重い物を、持ったことが無いのさ」

念入りに手入れされた銀の髪を掻き分け、ユリオンは言った。

返す言葉が見つからないので皆、スルーする。

「ロジオン」

「陛下……」

家臣達が大勢揃っている中では、例え親子でもわきまえなければならぬ。

王室には面倒なしきたりや作法があることは、食客として師と渡り歩いていた頃から知っているロジオンだが、それが自分の身に起きると面倒くさい。

「負った傷が痛むようで……退出したいと思います」

ロジオンの台詞に、父である国王陛下はウンウンと頷く。

「師との戦いとの傷だと聞いておる。……よくぞ打ち勝った！ 魔導術統率協会の皆々からその様子を聞いて、父は……父は……！」

腕を後ろに組んだままの体勢で立っていた父陛下は、くっ、と顔を上げた。

ぶるぶると震えているところを見ると、感涙しているらしい。

「ロジオンはまだ結婚が決まっていけないから、深夜から始まる舞踏会には参加しなくてはならないが……痛そうだしなあ」

代わりにデイリオンがロジオンと話す。

「全治二週間で、一番腹部にきているから、まともな食事が取れないでいるのです」

アデラが答える。

デイリオンと補佐役のアリオンが顔を見合わせた。

「殿下、二ヶ月後には新年祭が控えてますから、それには必ず出席すると言つことで、今回は見送っても良いのでは？」

「……まあ、感謝祭は民衆のための祭りみたいなものだし……」

まだ感激に涙を流している父陛下は二人の王妃に任せて、てきぱきと指示を与えるデイリオン殿下とアリオンを見て、取り合えず次世代のエルズバーク国は安心だとロジオンは思った。

その一方――。

「兄上！ 今夜の舞踏会で兄上の武勇伝を詩にして歌いますよ！」

「いや、止めてそれ……」

瞳を輝かせて迫るユリオンを見て、自分と似ているのがこつ言うの――だと思つと、物悲しい気持ちになった。

51 君は何者

「申し訳ありません……。私がしたことなのに、亡きお方の所業にして……」

「良いんじゃない？ よく 師匠は『女性に不利になる罪は被れ』と言っていたし……。本望でしょう」

宮廷内の自室の寝台に横たわるロジオンは、自分に何度も頭を下げるアデラに、慰めるように言った。

腹と背に打撲。全治二週間は本場で、その原因はエクティレスであるが――身体はロジオンのものだ。

エクティレスは追い出せたが、アデラが付けた怪我はそのまま残った。

大変だったのは、それから数時間後で、痛みがますます強くなり普通に立っていらなくなってしまうたのだ。

加えて、食べられないわ頭痛はするわで――。

こんな状態にした張本人がアデラだと知られば、どんな処罰が下されるか……。

ロジオンは曲がりなりにも、王位継承権を持つ王子なのだから。

「結果的に……アデラの活躍が一役買ったんだし……気にしないで」

「代わりに心を尽くしてお世話させて下さい」

「じゃあ……」

「夜伽は無いです」

さらりとかわされ、湿布の用意をしますと、近くで甲斐甲斐しく支度をするアデラの姿を、ロジオンはじつと見つめた。

こんな状態じゃあ夜伽も何もないから、冗談だったんだけど。

（まあ、可能だったとしても……）

色々と問題が発生してるしね――。

ロジオンは考えに耽る。

自分自身の気付かなかった問題が、明るみに出たこともそうだが。

――アデラだ。

アデラは魔力を持たない。先祖に魔力を持つ者がいて、先祖がえりでもしたのかと魔力で探ってみても、欠片も見えなかった。

ただ、アデラとなると、今まで経験の無い奇妙な感覚に襲われる時がある。

微々たるもので、はつきりと意識したことはなかったけど。

ドレイクの部屋から持ち出したコンラートの魔法日記だって、事前にドレイクが目眩ましをかけ、尚且、取り出したら『トラップ』が発動するように施行してあったはず。

（だから、ドレイクも驚いていたんだ）

それに――魔法コーティングされた日記の装丁を千切るなんて――

（しかも師匠の日記を破ることが出来るなんて……）

長年使うものだからコーティングしていても、たまに手入れを行うが、その時だって大層魔力を要する。

（やることが豪傑だから……小さい所業が隠れてそのまま忘れてっちゃうんだよね……周囲が）

――エクティレスの、悪意に満ちたオーラを受けても動けていたし。

（魔力がなかったから平気だったとか言う問題じゃない）

魔力の無い普通の人間だったら尚更立ちすくむだろうし。

（魔法が通じない――とぼやいたのを聞いたし……）

——でも、ドレイクの意識支配や僕の身体憑依は施行できた。
『戦女神パラスの鎧』も施行できていた。

（……なんなんだろう……？）

湿布と替えの包帯を手にし、振り返ったアデラと視線が合う。

ずっと見られていたのかと、アデラはどきまぎしながら

「な、何でしょうか？」

と尋ねた。

「ん……。アデラって立ち姿……綺麗だなんて」

「……」

師匠と言う見本が常にいたとしても、息をするように女性の口説き文句が出てくるのってどうなのよ？

嬉しい反面、そんな考えが浮かんでアデラは素直に喜べずにいた。
「お褒めいただいて恐縮ですが、ロジオン様はまだ十五なのですから、大人の口真似をしないで年相応になされませ」

自分でも可愛くない返答だと思うアデラだが、こういう場合、誉めてくれた自分の主にどう言葉を返せば、気のきいた会話になるのか分からない。

だが、ロジオンは勘に障ること無く逆に問いかけてきた。

「年相応って……どう言う言葉？」

「しょ、少年らしい言葉ですよ」

じっと見つめられて、しどろもどろになりだしたアデラを見て、ロジオンは目を細めて笑う。

——こう言う時の主は、妙に大人びて苦手だ。

従者としてようやく認めてもらった時も、こつやっておちよくられた。

（私が子供だから……？）

歳の差が逆転している会話に気付き、へこみながら湿布の交換を始める。

「脱いでくださいな」

とアデラ。

「脱がしてくださいな」

とロジオン。

むーっ、とするアデラに

「痛いんだよね……脱ぐ時なんか特に……」

はあ、とロジオンは溜め息をつく。

「アデラが……必死だったのは分かるけど……見事に急所を当てるから……痛くて痛くて」

目を潤ませて、か弱い様子を見せる主にアデラは、罪悪感たつぷりに服のボタンに手をかけた。

そろそろと、ゆっくり服を脱がす。

彼女の顔は至極真剣だ。

動かしたり、何かに触れたりするだけで激痛が走ると言うのだから。

シャツを脱がし、ほっとしながら汗を拭くアデラを見て、ロジオンの顔はますます緩む。

（面白い人だ、ほんと）

何でも一生懸命で

何でも全力投球で

大人の中で育ってきたロジオン。

その大人達は大抵、何でもそつなくこなすか、やりたくないことは徹底してやらないと言う、極端な者達が多かった。

（こつ言つの生きている輝き——と言つのかな）

包帯も真剣に外しているアデラを茶化す気もなく、その様子をニコニコと見つめていた。

湿布も取り替えて、服も脱ぎ着しやすいゆったりとした物に着替えさせてもらったロジオンは、満足そうに寝台に落ち着く。
アデラは気疲れでぐったりしていた。

ロジオンが「おいで」とアデラに手招きをする。

「——えっ？」

アデラが急沸騰した。

考えてみたらここは寝室。

しかも、今は二人つきり。

感謝祭で使用人などは出払っていいし、呼ばなきゃ来ない。

——こ、これって……！

（あ、朝チュン設定じゃないのー！）

アデラは真っ赤になった顔をブンブンと振りながら

「ロ、ロロロロロロジオン様！ け、結構ですから！ その！ お怪我を治すことに専念して頂いて——」
と後ずさる。

「え……？ 良いの？」

「良いんです、結構です！」

「……でも、髪の毛……解れてるよ」

——そのままにいるの？

と、困惑気味のロジオンを見て、アデラは改めて自分の姿を鏡で確認する。

結わいてある髪が、一束解れてしまっていた。

「——あ……」

包帯を巻く時に、引っ掛かった感じがこれだったのだと納得した。

「櫛……もつといで。結わいてあげる」

「へっ……？」

ぽ かんとしているアデラにロジオンは、目を細め、あの大人びた笑顔を見せた。

52 幸せな二人

髪留めが外される。

捻って留めていた髪が音もなく肩に落ちた。

ロジオンは後ろから、髪に付いている整髪料をけし梳りながら絹糸のようなアデラの髪を解かしていく。

「あの、ロジオン様」

「何？」

アデラは寝台の端に座って大人しく髪をすがれているが、忙しく指を動かしていた。

「自分で出来ますから……」

「やらせてよ」

普通なら、従の自分が主であるロジオンにするべきことではないか――。

でも、と渋るアデラにロジオンは

「久しぶりなんだ……こう言うの。だから……」

と、懇願するように話す。

こう、ねだるように言われるとアデラは何も言えなくなってしまった。

「コンラート様にも、こうやって？」

ヘアクリームを手に擦り付け、アデラの髪を編み込んでいく様は手慣れていた。

「うん……。師匠のはもっと……。時間がかかったな」

懐かしそうに喋るロジオンの顔を、手鏡越しに覗く。

コンラートを浄化した後、暫く空を見上げたまま動かなかった主は、置いてきぼりをされた子供のような顔をしていた。

今は何の憂いもない、穏やかな顔で、落ち着いた瞳で自分の髪を編んでいる。

（良かった……）

アデラは、鏡に映る優しげな少年に向けて微笑んだ。

両脇の髪を耳の上から編み込んでいき、後ろは高く上げて結び、四つほどに分け三つ編みにしていく。

両脇の編み込みと四つに分けた三つ編みを、高く結んだ根本にくるくると巻いていった。

時々、ピンを使い押さえ、最後に髪留めでしっかりと押さえた。

「……お上手ですね」

浮いたり編み忘れの部分もなく、専門の美容師にやってもらったような出来映えだ。

自分で風呂場を造ったりと、ロジオンの手先の器用さには本当に感心してしまう。

「どう？」

「はい、素敵です。ありがとうございました」

アデラの素直な感想に、ロジオンは満足そうに微笑んだ。

「でも……勿体無いなあ……そんなに綺麗な髪をしているのに……下ろしとけば良いのに」

「中途半端な長さで邪魔なんです。仕事中は特に」

「仕事が……休みの時は下ろしているんだ？」

「はい」

ふーん、と呟く主にアデラはフィンガーボールと水差しを持ってきて、整髪クリームの付いたロジオンの手を洗う。

「自分で出来るよ」

「お礼です」

照れ臭そうにしながらも、まんざらじゃないロジオンは結局、なすがままにされた。

すぐ側にアデラの顔がある。

意思の強そうな眉

髪の色より色味の濃い睫毛。

通った鼻筋に、形良い小鼻。

ふつくらした唇は艶々として血色が良い。

正統派美人の類のアデラだ。

どうやら自分は、こういうタイプが好みだと分かってきた。

「……？」

誰かの顔とぶれる。

一時目を閉じて、ああ、そうか——と目を開けた。

「ロジオン様？」

じつと一点を見つめて動かない主にアデラは首を傾ける。

ゆつくりと顔を扉に向け、ロジオンは口を開いた。

「……何、盗み聞きしてんの……？」

入ってきたよ、とロジオンが促し入ってきたのは、にやけ顔のエマとハインだった。

「いやあ、良い雰囲気なので、お邪魔かなと思ひまして」

「だあってねえ？ 『やらせてよ』『久しぶりなんだ』ってロジオ

ンは言ってるしい。アデラちゃんは『お上手なんですネ』なんて言ってるの聞いたら……」

——ねえ？ と見合わせ相づちを打つ二人を見て、誤解された意味を知りアデラは顔を赤くし、ロジオンは呆れた。

「自分達が良い雰囲気だから……周りもそうだと思わないで欲しいよ。頭の中……それで一杯なんじゃないの？」

「やあん！ ロジオンったら！ おませなんだからあ！」

勢い良く背中を叩かれたロジオンは

「か……完治が延びた……」

と、痛さに震えながら寝台に踞った。

*

「そんでねえ、ハインが言ってくれたの！『女体化が終わるまでに貴女に相応しい男になります』って！もおおう、カッコいいでしょ？！」

キャラキャラと黄色い声を出しながら、ロジオンの打撲した腹をバンバン叩くエマに――。

その横で

「いやあ……！ 本当にそう思ったんで、思いを打ち明けただけですよ」

と、しまりの無い顔を見せるハイン。

「もう……昨日から何度も聞いてるよ」

うんざりしながら冷めた視線を送るロジオンに、苦笑いのアデラ。コンラートの件が済み、包み隠さずに自分の気持ちを伝えようとしたエマより先に、ハインの方が実行に移したのだ。

バンバン――エマはロジオンの打撲した腹を叩く。

「『エマさんは、そのままで充分ですが、エマさんがきちんと女性になりたいと言うなら、全力で応援します。でも、女性化が完成したら今よりもっとモテますよね……それは嫌ですね』――だって！ もおおお！ 可愛くない！？」

「だって、そうじゃないですか。今だって大変美しいんですよ？完全に女性になったら不安ですよ。――私的にはこのままでも……」

「いやあん、ハインったらあ！ 目移りなんかしないわよお！ や・く・そ・く！」

エマとハイン二人で、指切りげんまんをする。

「エマさん……」

「エマと呼んで……ハイン……」

小指を絡めたまま二人見つめ合う視線が熱い。

絡んだ小指に、ロジオンの鋭い手刀が入った。

「治療に来たのか、いちやつきに来たのか……どっちなの！」

「——どっちも」

二人揃った返事にロジオンはむすりとした。

今回で、幸せな結果になったのはこの二人だけだ——ロジオンはそう思った。

53 緘口令解除

「だってえ、誰も聞いてくれないし。ドレイクとルーカスなんかあ、リシエル連れてさっさと帰っちゃったしい」

「用件が済むとさっさと帰るところは……昔からじゃない。ルーカスは肋にヒビ入ってて……早く魔導術統率協会に戻って治癒師の手当てが必要だし」

ドレイクは予定より早く事が解決したので、魔導術統率協会の方の感謝祭準備の参加の為に今日の朝、帰ってしまった。

その際に、孤児となったりリシエルを連れていったのだ。

『魔力を持ち、魔法も教わっていますからね。魔導術統率協会マジックの所属している者に預けます』

サマンサかカーリナ——どちらの力を受け継いでいるか、観察し様子を見るとのことだろう。

「治癒の力は、サマンサから受け継いだものだったのでしょうか？」

ハインが誰ともなく尋ねた。

同じ宮廷で働いていた同僚が悪女と名高いカーリナで、サマンサと言う治癒系魔導師の身体を乗っとり、子まで産んでいた——今だ、にわかに信じられない様子だ。

魔力は、身体ではなく魂に宿ると言われている。

しかも——治癒系は『聖』と同様に特殊な魔法に入り、魂に宿る能力によって使えない者もいるのだ。

大抵は皆、使える治癒は微力で、専門の治癒系の者に任せる。

残念ながら『治癒』の魔力を持つ者はそういない。

使える者、その潜在能力を持つ者は稀少である為、どこの国でも雇いたがるのだ。ドレイクがリシエルを連れていったのには、そのような背景がある。

リシエルに治癒能力が備わっていれば、魔導術統率協会でも貴重な戦力となる。

「……僕はカーリナのことはよく知らないんだ……師匠の口からも彼女の名が出た記憶がないし」

エマは知らないの？——そう振られ、口を開く。

「コンラートを追っかけ回していた時代の時は知ってるわよ。治癒は持っていたけどお、私くらいなもんよ」

微力ながらもエマも治癒が使える。

それで暫く滞在してロジオンの治癒にあたれと、ドレイクに命じられたのだ。

——ちなみにハインは、エマにくつついてきただけである。

「サマンサとして働いていた時は、素晴らしい治癒能力でした。やはりサマンサの魔力だったのでしょうか？——そうだとしたら、魔力は魂に宿ると言う理論が成り立たなくなります」

「……それは、あくまでも魔法の構造を理論的に説明した時の説明……。魔力だって……どう発動して魔法が施行されるか……はつきり説明出来ないんだから」

「そうよね。この理論って、確か魔力の持たない者達に説明を求められて、創立者・マルティンが話したものはず」

「他の人物の身体に自分の魂を入れて……それで何かしら変化が生まれても……おかしくない、と結論付けても良いんじゃないかな……？ 非道な行為だから禁行にした……と言うのも間違っていないし……へたをすれば、身体と魂に、おかしな変化が起きるから……との意味もあるのかも」

「ケースバイケースってねえ」

——今日はここまでえ——エマの治癒が終了した。

「……これじゃあ時間掛かるね……やっぱ」

「しょうがないでしょ。感謝祭が済むまで私で我慢しなさいよお」
エマがぶーたれた。

宮廷の魔法管轄処に在籍している魔法使いや魔導師達も、非常事態が起きない限り感謝祭を楽しんでいる最中だ。

王子権限で命じることが出来るだろうが、生死に関わる怪我じゃないし――。

それにオープニングのバルコニーにてのお披露目に間に合うよう、殴られた顔の腫れは治癒してくれたのだ――我が儘は言えない。

「ドレイクに……感謝祭が終わったら魔導術統率協会そうちに来るように言われてるからな……」

「魔導術統率協会の感謝祭は三日後だからあ、それ以降でしょう？ ゆっくりで良いわよお。魔承師様も謁見ばかりで疲れてると思うし」

「私の、貴方に対する見解が間違っているかも知れません」
ドレイクは僕にそう言った。

「……何の？」

問いにドレイクは、人差し指を僕の胸に当てる。

「今回で目覚めた……それは、分かりますね？ 聞いているはず、欠片達に」

「……」

聞いたと言うより聞こえた、の方が正しい――僕はそう思った。

「しかし、肝心の方が目覚めない……いつも、いつの代の時も目覚める事は無かった……」

『誰が……？』

『目覚めが必要なのです。この世界の為に、あの御方の為にも——だから、ずっと追い掛けて来た』

『……そうして、道を誤ってきた、目覚める事が無かった前世の僕を殺めてきた……』

ドレイクは、僕の視線から逃れるように瞳を閉じた。

『目覚めている欠片は……ドレイク、君を恨んではないようだよ……あのエクティレスは別として』

あの御方の為だと——欠片達は知っている。

世界の為と言うより、その人の為に生きていることを。

ドレイクも、繰り返す行為に苦しむ悔悛者だと言うことを。

前世の僕もその御方を愛していた。

今の自分では、助けることが出来ないと悟ったからドレイクの手に下ったのだ。

ドレイクは再び瞳を開き、その竜の受け継ぐ紅い眼を僕に向けた。驚いたのは、彼が僕に今まで見せたことが無い、愛惜の眼差しで僕を見つめたことだ。

くしゃり——僕の髪を擦るように？き雑ぜる。

『ロジオン、貴方が一番似ている……。そして、一番分らない』

——だから、来なさい。

——アデラも連れて。

——あの娘も、私には分らない。

あの御方に視て貰うのが、一番早いでしょう——魔承師様に。

思い出す。昨日の彼との会話。

「あ、でも、感謝祭後からはロジオン様は、大変かも知れませんね」
「？……何が？」

ハインの台詞に思いに耽っていたロジオンは、ピンと来ないようだった。

「何がって——。緘口令ですよ、コンラート様の死の！ エルズバ―グは本日で緘口令は解除ですよ？」

「——あ——！」

「魔導術統率協会も、感謝祭でコンラートの死を発表して追悼するわよおって、ドレイクが」

ロジオンの顔色がどんどん冴えなくなっていた。

「……それって、もしかしたら『水』の称号争奪戦が始まるってことですか……？」

エマに尋ねるアデラも、冷や汗を掻いている。

「称号が得られるのは魔導師だけよお」

「——でも、ロジオン様はコンラート師の一番弟子ですから、お弟子さんを倒すことが一種のアピールであり、実力を周囲に認められ

ることに繋がるわけです」

「ロジオンは魔法使いだから、殴り込みに来るのは基本、魔法使いだけとお……」

「最近、ルールを守らない輩も多くなってますからね」

エマとアデラの痛い視線にハインは、過去にロジオンに戦いを挑んだ事を思いだした。

「……すいませんでした」

と亀のごとく首を縮めた。

54 修繕費の支払いは

魔法を扱う者達にとっては魔導術統率協会の通達の方に重荷を置くから、挑みに来るのは魔導術統率協会の感謝祭後ではないかと結論付け、エマとハインは帰っていった。

これから感謝祭を楽しむのだそうだ。

「魔導術統率協会の方でも楽しむくせに……」

ブチブチ不満を言いながら寝台に横たわっているロジオンに、アデラはますます申し訳なさで胸が一杯になってしまう。

本当なら今頃は晩餐会に出る必要がない兄弟達と、ここぞとばかりに城下街にお忍びに出て、羽を伸ばしているはずなのだ。

「ロジオン様、何かお召し上がりになりますか？ 柔らかいものなら食べられましょう？」

アデラの言葉に、ああ、そうだね、と答えると、ロジオンは

「アデラも良いよ。感謝祭を楽しんでおいで」

と、逆に気を使われた台詞が返ってきた。

アデラは慌てて首を横に振る。

「お側にいますよ。ロジオン様を一人には出来ません。……それに、こうなったのには大体が私の責任です」

「でも……せつかくの休みでしょう？」

「宮廷で働く者達は、故郷の休みに合わせて休暇を取るか、順番にずれて休みを取るからですから」

だから、先程も従者達は皆、揃っていたでしょう？ ——と、ロジオンに告げる。

「皆……休んでいるのに損だね」

「それは王公も同じじゃないですか」

——それに、こう言う時に働くと賃金が良いんですよ——と指で円を作るアデラを見てロジオンは安心したように微笑んだ。

「じゃあ……アデラの休みはいつ？」

「ロジオン様次第なんですが、感謝祭と魔導術統率協会の謁見が済んでから頂戴したいと思っています」

——ああ、僕次第なんだっけ。ロジオンは人差し指を額に当て、考える。

「時期的には丁度良いね……。でも……結構先だよ？」

「大丈夫です。元気なのが取り柄ですから」

ガッツポーズを取るアデラにロジオンは

「可愛いよね、アデラは……」

と、また沸騰させる台詞を吐いた。

ブルーグレーの済んだ眼差しで、じっと見つめられると落ち着かなくなる。

微笑みを保ったままの彼のこの表情は、アデラには心臓の鼓動を早くする強心剤みたいなものだ。

「ロ、ロジオン様、何か食べましょう？ エアロン様が晩餐会の為にお考えになったメニューが数多くありましたよ？ 頂いてきますから」

「……それより、外の出店の食べ物が良いなあ……上品な味に飽きてきちゃって……」

「しかし、あまり離れるわけには——」

「城のすぐ外まで並んでいたよ……？ 一時もしないで戻ってこれるんじゃない？」

串焼きとか揚げパンが食べたいな——腹の痛みで食欲が無かった主が言う我が儘にアデラは、戻ってきた食欲に安堵し

「なるべく早く戻ってきますね」

と軽い足取りで部屋を出ていった。

折角の庶民が中心のお祭りだ。雰囲気だけでも味わって楽しんで欲しい。

そう考えて言った我が儘だった。

（怪我がなければ、舞踏会まで一緒に楽しめたかったけれど……）
怪我をしていたから舞踏会に参加しなくて良くなったからトント
ンだが。

魔導術統率協会の謁見が済むまで分からないが、恐らくゆっくり
は出来なくなるだろうとロジオンは思っていた。

諦めなければならぬこと、捨てなければならぬこと、受け入
れなければならぬこと——物理的にも心理的にも多く出てきた。

——アデラも離さなければならぬかもな——

彼女の能力は未知数だが、普通の人間だ。

魔法に関わる問題に巻き込んではいけない。

自分の父と母も

兄弟達も

——根本的に違うんだ。

魔力を持つ者と

只人とは

（早速、厄介事もあるしさ……）

閉じていた瞳を開け、ロジオンは続き部屋の仕切られたカーテンを見つめる。

「……出てきたら？」

くつく、と忍び笑いをしながらカーテンを開けて入ってきた男。

見かけ、二十歳そこそこだ。

魔法を扱う者の象徴のマントの裏地が蛍光色で派手だ。

気取り屋らしい足取りで、ロジオンに向かって歩いてくる。

「流石、コンラート師の愛弟子・ロジオン王子。いつから俺があそこにいると？」

しゃべり方も妙に気取っている。

「従者を退かせる前から……」

アデラに外出して貰った理由がこれでもあった。

「怪我人相手に勝って……嬉しい？」

「怪我人相手だって勝ちも勝ち」

「僕に勝つても……魔導師に昇格して『水』の王と戦って認めてもらわないと……称号は得られないよ？」

「そこまで望んではいませんよ。貴方に勝って、宮廷の魔法管轄処の筆頭になれば良いんです」

名声も上がりますし——男は腰から短い杖を抜き、先をロジオンに向けた。

補助魔具だ。

「魔力増幅ね……それがあると詠唱も短くて済むし……魔力もそう使わないね」

説明をするロジオンの口調は、至極冷静で淡々としている。

狙われていると言う焦りも微塵も見られない。

それが反って男を逆上させた。

「ごちゃごちゃ言っていないで、やられちゃいなさい！」

指揮者のごとく杖を頭上に上げ、振り落とす瞬間——ボキッと音がして、杖が真っ二つに折れた。

「——えっ？」

驚いた男は、何とかくっ付けようとするが、戻りようがない。

「紛い物掴まされたね……コーティングがすっかりされていない」

「だって、これは宮廷に出入りしている商人から——」

「名だけで信用してはいけないよ……自分の目で視ないと……」

「くそっ！ 怪我したボンクラに負けるわけが——」

男は、腰に付けていたもう一本の杖を手にした。

「暫くは静かに暮らしたいから……犠牲になってもらうよ」

ロジオンが言い終わるか終わらないか——そんなタイミングだった。

ブルーグレーの瞳が煌めく。

窓が開く音に豪風と、その後、崩れる音に悲鳴と、水しぶきにどよめき。

上手く遊水池に落ちたみたいだ。

怪我はしているが魔法を使うには、何の支障が無いことに何故気付かないのか？

「大丈夫か……？ エルズバーグの魔法管轄処……」
一人ぼやく。

部屋に付属のバルコニーの柵が壊れてしまった。

「……修繕費は君持ちだからね……って、名前聞いてなかった……」

まあ、後日ハインに聞いて請求しましょう——と、ロジオンはく
いっと手首を捻る。

魔法で開けた窓が閉まり、風で乱れたカーテンが一人でに整う。
何も起きなかったかのように静寂だけが残った。

54 修繕費の支払いは（後書き）

今週は家庭内の用事が目白押しで、今度の更新は週末か来週になります。

55 魔承師（1）

「着いたよ」

方陣移動で着いた先――。

――魔導術統率協会。

円錐の五つの建物が一定の距離で五角形の角を作って並び、それより高い円柱の建物が中央にそびえている。

合計で六つの建造物は、歴史を感じる懐古さがあひながら、どこか斬新な印象もある。

アデラは、何処かでこの建造物と似た物を見たような気がして、眉を寄せた。

「クレサレッド教会と似てるでしょ？」

ロジオンの台詞にアデラは、あつ、と気付き、宮廷に飾られている教会を模写した絵画を思い出した。

教会は光を受けとめるような淡いクリーム色の建造物だが、こちららは反対の闇を吸収したかに見える色なのだ。

色のせいなのか、こちらの方がより古く感じる。

「ロジオン様、この荷物は……」

「持っていくよ……ありがとう」

付き添いで一緒に来たハインが、両手に抱えた箱をロジオンに渡す。

「――では、私は辺りを散策しますよ」

「一緒に来ないのですか？」

そう言うアデラにハインはいやいやと、首を横に振った。

「私は出入りを許可されていませんから。この周辺は珍しい薬草な

どが自生していると言うし、研究がてらブラブラしています」

確かに周辺は、人の手が入っていない原生林が繁り、辛うじて獣道があるだけのようだ。

「確かに、見慣れない草花がありそう……」

人の気配もあり、手入れもされている大きな建物なのに、周囲は人が行き来できるように整備もされていないし、集落や町もない。

「大きな街の中心となって発展しているクレサレッド教会とは模様が違うのですね」

アデラの疑問はもつともだとロジオンもハインも笑う。

「魔法で移動するから……道は必要ないんだ」

「——基本、魔力を持たない只人はやって来ないので。用事がある時は方陣移動で街や集落に出してしまうんです」

成る程——アデラは頷いた。

認められ、この魔導術統率協会に出入りする許可の条件の一つに『方陣移動が出来る者』が入っているな、と理解した。

——では、と、やたらにこやかに見送るハインを不思議に思いながら、アデラはロジオンの後ろを付いていった。

*

持ちます、と主が手に持つ荷物を受けとる。

「ハイン殿、変わりましたね。魔導術統率協会の出入りに随分執着していたようなのに……」

喜び勇んで入ってくるかと思いきや——自分からあっさり引き下がったのが、アデラの首を傾げる態度だったのだ。

「大方……外でエマと待ち合わせしてるんじゃない……？」

エマは魔導の感謝祭に合わせて帰ってしまった。

それから会ってないとしたら、久しぶりの逢瀬だ。

「付き合い始めたばかりだから……まだ、燃え上がり中だろうし」
後は若い二人に任せましょう——ぼのぼのと、見合いの仲介人のようなことを言うとロジオンは先に進む。

円錐型の建物の間を進み、ひたすら中央の建築物へ。
空を仰いでみると、各建物から建物へ続く渡り廊下が何階かごとに造られている。

徐に主が止まったので、アデラは視線を戻し先を見た。
全身黒でまとめた出で立ちの——ドレイクだった。

「着きましたか。魔承師様がお待ちです」
相変わらず慇懃な口調に、感情の出ない顔だ。

「ちよつと待つて……これ……」

と、先に行こうとするドレイクをロジオンはひき止め、アデラから箱を受けとると彼に渡す。

「陛下からです」

受け取った箱をドレイクは、まじまじと見つめる。

「生物……？」

「感謝祭の時に、他国から献呈されたものなんだけど……飼い方が分からないそうだよ……ドレイクなら分かるんじゃないかって……お譲りするそうです」

「……」

ドレイクは被せられたビロード生地を外す——すると空気孔が幾つか空いている木製の箱が姿を現した。

空気孔から中を確認し、ドレイクは呟いた。

「……オオヨロイトカゲですね」

「流石、ドレイク」

「感謝祭からもう十日も経ってるのですが、今までどうやって飼育を？ 乾燥帯から温帯で、サバナ気候から砂漠気候でないと住めな

い生物ですよ？」

「宮廷にある温室に放し飼いで……様子を見ていたらいいんだけど……花を摘みに来たメイド達が、目撃の度に悲鳴は起きるわ……卒倒するわで」

「宮廷には不向きだと判断されて、厄介払いされに来たわけですね」「ドレイクが宮廷に来て面倒見てくれるなら……と、陛下の御伝言です」

暫くじつと空気孔からトカゲを見ていたドレイクだったが

「良いでしょう。他にも保護している在来種がいますから、一緒に面倒をみます」

と、あっさりと承諾した。

「ドレイクなら……そう言ってくれると思ったよ」

平坦な口調ながらも、どこか弾んだ口ぶりの主を見て

——確信犯——

とアデラは思った。

*

建物内にも方陣があり、こちらのは何処にあるのか、はつきり床に明記されていた。

一応階段があるが、あまり使われていないらしい。

魔方阵の円上に三人乗る。

すると直ぐに魔方阵が光り、光が消えた後は別な場所にいた。

ドレイクとロジオンに続き、アデラも恐る恐る魔方阵から出る。

そこは広い謁見場だった。

エルズバーグの謁見兼大広間の倍はあるだろうか。

床や壁は大理石とは違う無機質な材質で出来ており、灰色に近い色味を出していた。

その色のせいか、昼間なのに全体的に薄暗く感じられる。

（最上階なのか）

天井には青系のステンドグラスが美しい模様を作り、日光を受けて謁見場を照らす。

——夜来るとさぞかし美しいだろう——

クレサレッド教会が昼の象徴のような造りで、協会が夜の象徴の造りにして『対』にしているのだと、宮廷の絵画を見ている時に、信心深い仕官から聞いたことをアデラは思い出した。

「ここでお待ちなさい」

ドレイクが近くに控えていた男にトカゲ入りの箱を渡し、一言一言指示を出したようだ。

男が返事をし、自分達に会釈をすると箱を持って引っ込んでしまった。

「……今の人、混じってるね……竜の血が……」

ぼそりとロジオンが呟いた。

ドレイク同様、全く人と変わりがなかったのに、どうして分かるのかアデラには不思議だった。

（そこが只人との違いなんだろうけど……）

ドレイクは高砂に上がると、太いロープを引っ張る。

すると高砂の後ろを被っていたカーテンが上がって、ステンドグラスの大きな窓が出現した。

ドレイクは連なる窓を一つ一つ開ける。

外の風が入り、濁った空気を追いやり、謁見の間が一気に明るくなった。

「――？」

窓の向こうがバルコニーになっており、そこに人がいたようだ。立ち上がりドレイクと何か話し込んでいた。

長い髪が光を受けて輝く。

輝く色は青みのある銀髪にアデラには見えた。

「あの御方が、魔承師様でしょうか？」

「……見えるの？」

ロジオンが振り替えて、後ろに控えているアデラを見る。主の表情は固い――と言うより無い。

口調ものんびりだが、更に単調に聞こえた。

「ロジオン様……緊張されてます？」

アデラの問いに素直に頷き答えた。

「魔承師の気が……凄い……建物に入ってからずっと……嫌な感じやなくて、静かで安らかな波動なんだけど……」

ドレイクが魔承師の手を取り、バルコニーから誘導する。

長い銀髪が、濃紺のマントと共に揺れている。

ロジオンとアデラは、その姿に見惚れた。

目が離せないまま、ロジオンは話し続けた。

「僕が赤ん坊の時に会った以来で……顔、覚えていない……はずなのに……」

左手に持つ三日月がシンボルの長い杖が、魔承師の靴の音と重なり、響く。

透ける程に真白な肌。

そこに映えるのは咲き誇りの蓮の花弁に似た色の唇。

瞳は満月の光が、多く溶けたような輝く青。

「ロジオン……ですね？」

透き通る声音が出る口は、揃った白く小さな歯が見え、小さく微

笑む。

身体を隠す服が、反って彼女の整ったラインを強調させているように思えるが、いやらしさより清らかさが全面に出るのは何故なのか。

小さく頷くロジオンに、嬉しそうに魔承師は言う。

「魔承師・イズルテです」

——と。

ああ、知らないはずなのに知っている。
この美しい人を。

——やっぱり、この記憶は

僕が生まれる前の魂の記憶。

一番大切な人だとの為だと
なのに

——ああ、結局……不幸にした。

55 魔承師(1)(後書き)

オオヨロイトカゲ <http://www.sauria.info/pb/lizards/detail.php?id=333>
1781336 上げえです。

56 魔承師(2)

「大きくなりましたね……お顔をよく見せて？」

「はい……」

ロジオンがイゾルテの元へ歩き始めたと同時に、イゾルテも段差の低い階段を足早に下りてきた。

「——あっ！」

足の甲まであるドレスの裾を踏みつけたイゾルテは、バランスを崩してしまった。

階段から落ちる——ドレイクが後ろから手を伸ばすが僅かに届かず、前から支えようと両腕を広げたロジオンに向かって倒れてしまった。

「——きゃあ！」

「うっ！ ぶっ！」

うまく受け止めたかと思っただ、背のリーチ分が、案外、勢い良く落ちてきたせい——しかも、身体の鍛練を怠っていたのが災いしてか、そのまま二人床へ倒れてしまった。

——しかも、ロジオンの顔にイゾルテの胸が押し付けられた形で

アデラとドレイクが、各々の自分の主人の元へ走る。

「お怪我は？」

ドレイクが後ろからイゾルテの両腕を掴み、よっこらと起こした。

「私は大丈夫。——ロジオンは？」

アデラに起こされ、服を整えながら、顔を赤く染めて気をかけてくるイゾルテに

「僕も……平気です」

男の意地をかけて平気な顔をし答えた。

——尻が痛い顔面は良い思いをした——
相殺だ。

「久しぶりにやらかしたね。何の為の杖なのだか」

ドレイクは、転んだ際に宙に飛んでいった杖をイゾルテに渡す。

「ごめんなさい。つい……」

しおらかな口調だが、表情を見るにあまり反省していないようだ。だが、杖をつかないと転ぶ危険があると言っるのは——。

「失礼なことをお尋ねしますが、魔承師様はおみ足が悪いのですか？」

思いきって尋ねたのはアデラだった。

「いいえ」

イゾルテとドレイクは揃って首を横に振る。

「この御方は、見かけよりぼんやりなのです。よく転んだり滑ったりと目が離せないの、せめて自衛はするように杖を持たせているわけです」

飾りの杖を持ち、うふふふ、とにこやかに笑うイゾルテと、無表情ながらもどこか呆れた雰囲気を出すドレイク。

——ああ、結構な回数なんだな——とロジオンとアデラは示し合
わせたように頷いた。

「ドレスの裾が長いのよ……。こんなの無い方がずっと歩きやすいのに。そう思わない？」

ドレスを掴み、アデラの同意を得ようとするイゾルテだが、ドレ

イクが反語する。

「アンダーパンツの姿で謁見して、謁見者の鼻血で何回床を汚しているんです？」

アンダーパンツ——戦用の女性の補助防具で防寒も備えて且つ丈夫で動きやすい作りな為、普段着として履いている女性も多い。

だが、鎧を着ける前に履くものなので、スパッツのようにピツタリとした、肌に密着する型がほとんどだ。大抵は重ね着をするが…。

「だって……鬱陶しいんですもの。それに、それが原因で鼻血が出たなんて思えないわ——だって、ドレイクは見たって一度だって鼻血を出したことが無いでしょう？」

「私の感覚と人間の感覚が違うからですと、何回も話をしましたよ」
「ただっ子のようなイゾルテの言い分に、懇々と親のように説き伏せていくドレイク。」

——僕達、何のために来たんだっけ？

ロジオンは首を傾けた。

「あの——」

アデラが恐る恐る二人の会話の間に入る。

「イゾルテ様がお履きになっている靴は、丈の長いお靴なのでしょうか？」

「ええ」

と、イゾルテは裾を片方上げて見せた。

膝丈まであるブーツだ。

「いつもこの長さを履いているのでしたら、膝丈か膝下までの長さでも問題ないと思いますが……」

——あっ——

イゾルテとドレイク。

今になってそれに気付いたらしく、二人でしばらく裾を眺めていた。

それから、嬉しそうに両手で裾を上げ、イゾルテはアデラに礼を言った。

「気づかなかったわ、ありがとう……ええと——」

「アデラ、と申します」

そう恭しく頭を下げる。

「貴女がアデラですね。やはり、同性の意見は参考になります」

「恐縮です」

「……やはり、近くに女性を置いた方が良いでしょうかね」

ドレイクが、顎に手を当て考えに耽る。

「お世話する人はいないのでですか？」

「以前はいたのですが、今は私がやっています」

「「えっ？」」

今度はロジオンとアデラが、顔を見合わせた。

「着替えとか風呂とか……全部？」

想像すると羨ましい——が、ドレイクは「いいえ」と首を横に振る。

「そう言うことは自分でやって頂いております。子供ではないのですから」

「でも、時々お手伝って貰っているのよ」

「長湯し過ぎで、よく湯船に沈んでいるので」

うふふと、イゾルテはまた笑う。

——最初の印象と違う魔承師は、いつも笑顔を絶やさないうんや

りさんで。

補佐のドレイクは、仕事の補佐より、日常の補佐の方に重点が置かれていたらしいと、二人は知った。

*

謁見と言っても、堅苦しい事は一切無かった。

謁見前にいたバルコニーで、景色を眺めながら茶と菓子を頂き、雑談に応じた。

従者だから、と後ろに控えていたアデラも、イゾルテに押しきられ怖々と椅子に座り雑談に加わる。

ドレイクは脇に控えて、茶や菓子のお代わりを煎れては注ぐ。

（これで背広を着ていたら、執事だわ）

アデラは左手を後ろに当て、直立不動に立っているドレイクが、様になっているので思わず吹き出しそうになる。

竜なのに、その辺の中途半端な礼儀を身に付けた人より出来ている。

人の生活を見て覚えたのだろう。

（そう言うのが好きなのだろうか）

——だが、彼の竜族としての只人との確執を思いだし、それは違うと考え直した。

憎いから、見ていたんだ。

人の醜い部分や傲った部分、弱点・短所・長所——全てをその紅い瞳で余すことなく見つめ——報復をする ために。

——何故、彼は人に報復をしないのだろうか？

今の彼なら充分に可能だろう、なのに——ドレイクの視線の先を見ると、いつもイゾルテがいる。

彼女が――

彼女がいるから。

（抑制剤なのか……）

トクン……と、少しでも鼓動が乱れたような気がしたが、微妙な乱れですぐに治まったせいかなアデラはすぐに忘れてしまった。

「ドレイク」

イゾルテが彼を呼ぶ。

二人近付き、ドレイクの耳元で何か告げた。

彼は承知したのか頷き、持っていたポットを卓上に置いた。そうしてアデラに向かい合う。

「アデラ殿、少々頼まれて欲しいことがあるのですが」

「何でしょうか？」

「先ほど助言頂いた、ドレスの裾の件で、早速一枚お直しをしたいとイゾルテ様が申しましてね。ここには針子がないので、申し訳ないがご助力願えませんか？」

「え？……まあ、裾上げくらいは出来ますが……」

主であるロジオンに眼差しを向ける。

自分は従者だ。主人に付き添っている時は、常に主を一番に考えなければならぬ。

勝手な行動は許されない。

「良いよ……行ってきて」

ロジオンは特に反対する理由もないので、すぐに頷いた。

「では、参りましょうか」
はい、とアデラは立ち上がり、イゾルテとロジオンに一礼をし、ドレイクの後を付いていった。

*

来た時と同じように方陣で移動する。

着いた場所は一階ではなく、別なフロアだった。

「ここから連絡通路を通り、別の棟へ行きます」

向こうから話しかけてくることもなく、アデラも話題も無いので黙って後ろからついていく。

聞こえるのは二人の靴音だけだった。

人気の無い静けさに、ふとアデラは疑問がわいた。

「直属の魔導師や魔法使い達は普段、何処に？」

「別の棟です。これから入る棟にはイゾルテ様と私しか利用していませんから」

連絡通路から別棟へ入る。

真ん中に螺旋階段があり、その周辺にスペースがある。

「上へ」

促され、螺旋階段とはまた別の、壁に沿ってつけられた階段を上る。

上りきると開かれたスペースで、一番奥にある観音扉の部屋を案内された。

「どうぞ、お入りなさい」

先に入ったドレイクに促され、失礼します、と入る。

中は重厚な木材中心に作られた家具が揃い、長く使われているものしか出ない艶と渋味がある。

だが、どれも質素で余計な装飾がない。

しかも必要最低限の家具だ。

目についたのは、本棚にびっしりと並べられた書物の数々。哲学的な書物の内容で、アデラには眠たくなる物ばかりだ。

（イゾルテ様は、このような難しい本を読まれるのか）

感心してうんうんと頷いていると

「お好きですか？」

と、ドレイクが声をかけてきた。

「本は読めますが、私はもっぱら仮想の小説ばかりです。イゾルテ様は、このような難しい本もお読みになるのですね」

「この本は私のです」

「——えっ？」

と、言うことは——。

「イゾルテ様のお部屋は、この上。ここは私の部屋です」

57 マルティンの魔法（1）

「イゾルテ様のドレスの裾を直すのではないのですか？」

「申し訳ありません。イゾルテ様がロジオンと二人きりで話したいことがあると申されたので、このような虚言を使いました」

「はあ、とアデラは気の抜けた言葉を返した。

——別に回りくどいことしなくても、言ってくれば席を外すのに。」

「今まで楽しく話していたのに、いきなり席を外してくれなんて言え、お気を悪くなさるか」と

それに、とドレイクは言いながらアデラを更にバルコニーへ誘導する。

「急に深刻な……ロジオンに関わる話に切り替わるのに、タイミングが欲しかった——と言うのもあります」

アデラの足が止まった。

明らかに、その場から外されたことに傷付いている。

「……成程、貴女がアサシンに向いていない理由の一つですね」

何がおかしいのかドレイクは、口の片側だけ上げた。

「ロジオン様からお聞きしたのですか？」

この、意地の悪い笑い方をするドレイクを睨みながらアデラは尋ねた。

「エルズバーク国王陛下からです。長を務める家系だそうで、今は妹君が継いでいる」

「妹の方が才があっただけのことです」

「アサシンとしてはそうでしょうな」

「……私には才が無い、言われなくても分かっています！ だから、だからこそアサシンとして磨いた技術だけは役に立てたい。ロジオ

ン様にお仕えしてあの方の役に立ちたいのです！」

「その決意は本物ですか？」

「本物です」

「ロジオンが何者か知っても？」

「コンラート師の件で、ロジオン様が得体の知れない何かを抱えていると知りました。——それでもお仕えする気持ちは変わりません」

「貴女はロジオンといることで、諦めなければいけないことが出てきます——その決意が決まらないうちに聞かせるには酷だと判断したから、あの場所から貴女を外しました」

「……諦める？」

——そうです、とドレイクはバルコニーの縁に座る。

「貴女の能力は計り知れない、だが、只人です。止まることなく老いが進み、短い寿命を終える……」

「あ……」

「ロジオンは恐らく、私くらいで絶頂期を迎えそこで成長が止まるそれから、只人から見たら長い時を生きていきます。貴女は、一生を彼に忠誠を誓い、従者として生きていくつもりではないでしょう？ あと何年かしたら結婚をし、子を産み、自分達の血を残していく作業がある」

「……」

「ロジオンに付いていくのには、結婚と出産を諦めるだけではありません」

言葉もなくドレイクを見つめるアデラに話を続ける。

「今までの日常の中で捨てなくてはならないことや、あえて拾わなくてはならないことも出てくるでしょう——波乱にとんだ毎日を死ぬまで送らなければなくなるかも知れません」

——貴女には何の得もない。
——それでも貴女はロジオンの側にいますか？

*

彼女と二人きりになっても、居心地が悪いとは思わない。
自然に、溶け込むように自分は受け入れている。

——分かってる。

魂の記憶が僕の生に干渉しているからだ。

何度もこう言う場面があったことも教えてくれた。

彼女が僕に向かい微笑む。

僕と同じ銀の髪は、柔らかで淋しさを含む秋の風が揺らす。

海に似た色が生まれ、その様子を僕は眺めて胸を焦がす。

このチリチリと痛む胸は、誰が——なんだろう？

——君は僕、僕は君——

だからと言って、僕の目に写る彼女を僕は、思うほど恋していない
ようなんだ。

*

じつとイゾルテはロジオンを見ていた。

『見ている』んではなくて『視ている』んだと、ロジオンには分か
った。

こんなにあからさまなのは、判断しづらい何かがあるのだろう。

「……成程。ドレイクでも視えない理由が分かります」

イズルテはそう呟き目を伏せた。

「僕の中の人のことですか……？」

「自分の魂の呼び掛けは経験していると、ドレイクから聞いています」

混乱したでしょう？ —— イズルテは同情するように眉尻を下げた。

「はい……でも大丈夫。自己主張してきたのは、師匠相手の最後の時でしたし……後は似た場面に遭遇すると頭に過去の映像が出てくるくらいです」

「何とかしてあげたいのだけれど、私では無理で……ごめんなさい」
「中にいる人達が言っていました……最初の人が無理矢理、輪廻に加わるうとしたからだ……」

「……そこから、ドレイクも私も見解を間違っていました。輪廻と言う輪の中で、溶け込めなかった記憶が、人格まで支配するようになったのだと——」

「これは……？」

ロジオンが何の躊躇いもなく尋ねてくるのが、イズルテには心苦しいようで瞳を伏せた。

「……僕もある程度は予想もして……それなりに覚悟しています」
「何故……このような魔法を……」

独り言を呟くイズルテの美眉は歪んでいた。

躊躇っていたが、意を決したようにロジオンに顔を向け、口を開いた。

「ロジオン、貴方は……初代の魔承師であり、私の兄でもある——
マルティンの……創った魔法で間違いないでしょう」

長い沈黙があった。

視線を落とし、膝につけた自分の握り拳をロジオンは見つめる。

……僕は創られた……？

58 マルティンの魔法（2）

何か足元から崩れた気がし、止めどもない、やるせない感情が口
ジオンを襲った。

ぐるぐると目が回っている気がする。

足が震え、力が入らない。

落ち着かないと。そう思っても、どう心を静めてきたのかさえ思
い出せない。

自分の考えていたことと違う。

見当違いがショックでこうなってるんじゃない。

だけど——どこかで期待していた部分

「魔法を創りあげた……原初の魔承師・マルティンが関わっている
のだと感じていた！……マルティンの魂の輪廻の先が……自分じゃ
ないかと思っていた！」

言葉として吐き出される。

その見当外れの期待の内容よりもっと、もっと衝撃な内容だから
——。

——僕は人ではないの？

——育つ人形なの？

僕は何の為に創られたの？——

がたりと椅子から膝から落ちた。

円卓の上に置かれた皿も茶も何もかも床に落ち、音を立て割れた

……。

「ロジオン！」

泣きながら震えているロジオンの姿は異常で、イゾルテは自分の告げた事がどれだけ言葉が足りなかったか知り、呆然と目の前の少年を見つめる。

ロジオンは——誰かに揺さぶられているように左右前後に揺れ、子供に遊ばれている操り人形のように見えた。

*

「——！？ イゾルテ様？ ——ロジオン！」

ドレイクが顔色を変え、中央の塔がある方向を見据えた。

「——ロジオン様に、何かあったのですか？」

「『あつた』んじゃなくて『してる』んです！」

貴女はここにいなさい——ドレイクはそうアデラに告げたが、彼女はがっしりとドレイクの腕を掴んで離さなかった。

「私も行きます！」

仕方ないとも言わんばかりの表情でドレイクは頷くと、ロジオンとイゾルテのいるバルコニーへと跳んだ。

*

跳んだ先が謁見場で、二人が真つ先に見たものは、見上げる程高い窓のステンドグラスがすべて粉々に飛び散り、破片が床に散らばっていたことだった。

二人言葉を出す余裕もなく、バルコニーに駆け寄って愕然とした。椅子と円卓、食器は全て粉碎され、石造りのバルコニーの柵までもが形を無くしていた。

床は亀裂が走り、塊と化したバルコニーの一部が大量に跳び跳ねしている。

「ドレイク！」

イズルテは、この界限だけに被害を抑えるために結界魔法を施行していたが、至る場所でバチバチと火花が飛び交い、ドレイクは危険な状態だと悟った。

「いかん！ 今の状態のイズルテ様にはロジオンは止められん！」

「私が……私が悪いのです！ ああ、もっと言葉を選んでいれば……！」

ドレイクの怒りがロジオンに向かう——危険を感じたイズルテは阻止を含めてそう言ったが、彼の黒竜としての使命が感情を支配した。

「ロジオン……！ 貴様！」

「いけない！ ドレイク殿、よく見てくれ！」

彼の左手から目映い光が生まれたのをアデラが制した。

ロジオンは背中を丸めて踞っていた。

銀の髪を乱し、顔を床に突っ伏し震えていた。

微かに耳に届く喘ぎは、泣きじゃくっている声と似ている。

「イズルテ様……これは？」

「真実の一つをお話したのです……彼にはまだ早すぎました……受け止められなかった」

アデラの視線から逃げるようにイズルテは目を伏せた。同時、涙が溢れ頬を伝う。

「まだ話は途中でしよう？ それでこうなるとは未熟すぎる——何にせよ止めないと」

ときなさい、とドレイクはアデラを押し退けようとしたが、アデ

ラはますます立ちはだかる。

「アデラど——」

「しばし時間を下さい」

強い口調と眼差しにドレイクは一瞬怯んだ。

アデラは踵を返すとロジオンに向かう。

「ロジオン様！ アデラです！ どうされたのです！」

途中破片が、アデラの肩や足に当たったが気にしている場合ではない。

あんな姿の主は初めてみた。余程にショッキングな内容だったのだろう。

コンラート師の時も泣いていたが、必死に悲しみを堪えていた。彼は立ち向かえる力を持っている。未熟とかそんなじゃない。

彼自身の、これから生きる為の根本から崩す何か——。

震え泣く主に近付く。

彼はまだ少年だ。まだ十五じゃないか。

本来なら一国の王子として、人の好い父王や母妃の元で兄弟に囲まれて、なに不自由無く暮らしているはずなのだ。

それなのに、人より高い魔力があるというだけで親から離れ、辛い現状を見て育ち、魔法使いと言う道を選ばされた。

本人は何も恨んでも悲しんでもいないと話したのに——。

ここまで主を混乱させ、嘆かせる真実の一つ。あと幾つの真実が彼をこうさせるのか——。

ああ——

瞼をぎゅっと閉じた。

もう、いい。捨てよう——

私は離れられない、このままでは。

主が、彼が、笑ってくれば、それで……。

「ロジオン様！」

何度目かの呼び掛けで、ロジオンはようやく顔を上げた。

同時、破かれる寸前だった結界の亀裂音がなくなり、ドレイクは自分の主人であるイゾルテを抱き寄せた。

ロジオンは――涙で頬と掛かる前髪は濡れ、澄んでいたブルーグレーの瞳は充血していた。

「ア……デラ？」

視点が定まらない瞳は、ぼんやりとした表情を強調させる。

彼女が誰かだったか思い出したように「アデラ」と名を繰り返した。

ロジオンの瞳に、すがり付くような鈍い光が生まれた。

震える手が怯えるようにアデラに向けられた。

「アデラは……僕が何者でも……いてくれるよね？ ……僕が……人じゃなくても……側にいてくれるよね……？」

床にへばりつくように座り込むロジオンの手を握ると、アデラは彼を抱き締めた。

「当たり前です！ アデラはロジオン様の従者です。何処へでもお供致します！」

「……絶対だよ……？ 嘘つかないでよ……？」

「嘘は申しません」

——私は、何があっても貴方様の味方です——

だから

安心して——

私の好きな人……。

59 イル・マギア(1)

感情のままに魔力を使い、精も根も尽き果てたらしいロジオンは、アデラに抱き締められたまま眠ってしまった。

揺さぶって起こしてみても、うつすらと瞼を開けるが

「眠い……」

と言つて、また眠ってしまう。

魔力を持ち自分で全く制御出来ない赤ん坊や、癪癪を起こした子供がよくこうなると、ドレイクがアデラに話す。

「魔力が高いだけに迷惑な結果になりましたが」

溜め息を付き、野外で待つハインに知らせに行った。今宵はこちらに泊まると、宮廷に言伝てを頼みに行ったのだ。

与えられた部屋の寝台で、安らかな寝息をたて眠るロジオンを見て、アデラもようやく安堵した。

手を差しのべてきた時の主は、明らかにおかしかった。

顔は死人かと思うほど白く、目は窪み見開き——狂ったのかと一瞬血の気が引いた。

だけど、ここで怖じ気付く訳にはいかない。この手を、彼を、抱き締めなければ。コンラート師がない今、精神共に身体を預ける相手は自分しかない。求める相手が自分しかないのだ——主は。

扉を叩く音にアデラは振り向く。

ドレイクが食事を運んできてくれた。

「ロジオンは起きませんか？」

側に設置されたテーブルに食事を置きながら、アデラに尋ねる。

「はい。でも、安らかな顔でほっとしています」

「そうですか」

ドレイクは手短に言うと、お腹が空いたらどうぞと蓋付きの皿をさした。

「ありがとうございます」

アデラは礼を言って再び視線をロジオンに戻す。

では、と部屋を出ようと扉のノブに手を掛けたが、思い直したようにで扉のすぐ横の壁に背を付けた。

「……？」

不思議に思い、アデラは顔を上げドレイクに視線を向ける。

彼は腕を組み、アデラを見て言った。

「決意は……本物ですか？」

決意とは、ロジオンに言ったことだろう。

「今、離れることはロジオン様には良くない……考えてみてください、最も信頼していた師が亡くなり、十数年ぶりに再開した家族にも慣れていない。心身を預ける場所が無い。ロジオン様には信頼でき、何かあった時に共に前へ進める相手が必要です」

「ロジオンが家族と一線を置く理由はコンラートの件だけではないと知ったでしょう？ 離ればなれで暮らしてきただけが理由ではないことを……」

「はい」

「それはアデラ、貴女にも当てはまる。家族や貴女は只人だ。歳を取り、私達より早く死ぬ。取り残される悲しみをロジオンに味わせることになる——ロジオンは潜在的に悲しみを回避しているんですよ」

「私は、死ぬその時までロジオン様の側にいるつもりではありませんせん」

「……？」

アデラは真っ直ぐな瞳でドレイクを見つめ、微笑む。

「これからロジオン様にも、色々な出会いがあるでしょう？ きつ

と、魔法使いに魔導師が多いでしょうか？ 同じ年代の、自分と同じ方達と共感をして、長い時を有意義に過ごせる友と呼べる方達が出来て……そうしたら、私はもうロジオン様の側にいる必要はありません」

「それまで、ですか……」

「それまで、です」

真っ直ぐにこちらを見つめる常緑色の瞳は、躊躇いの一切も感じられない。

——ドレイクは思い出し瞼を閉じる。

もう記憶も臆気な遠い昔に、このような瞳を持つ仲間達を誇らしく眺め、自分も一員となる日を夢見た——。

只人は嫌いだ。嫌悪している。

だが彼女のような、同族を思い出す強い決意をもつ瞳を持つ只人は嫌いではない。

魔力を持つ尊き人や自分のような他種族に持つ、特別な力など無いのに、己の限界を越えてまで相手に尽くすのは尊敬に値する。

「貴女の意味の強さは、私の種族のとよく似てる」

「『黒竜』の……？」

すぐ戻ります——ドレイクはアデラにそう告げ部屋を出て、今度は手に何かを持って入ってきた。

「貴女に、これを……お譲りしましょう」

卓上に置かれたのは二対のマインゴーシュとヘッドドレスだった。マインゴーシュは柄と刃が繋ぎ目が無く、見たことがない光沢を放っている。

ヘッドドレスは装い用ではなく、胄の簡易型だと分かった。

磨かれた材質も、これまた見たことがない。

「……これは何で出来ているのでしょうか？」

「私の爪と骨、それとカーリナに利用されて命を落とした同族の骨です」

そう言えば終わった後に、落ちた自分の指と幼竜の亡骸を拾っていた。

取れたドレイクの指は、本来の姿の——鋭い爪を持つ固い竜の指に戻っていた。

『このまま放置して、只人に見つかれば騒ぎになりますから』

そう言いながら自分の爪と一緒に、大事そうに腕に抱いていた黒竜の幼体。

幼竜は原型を止めていない姿になって息絶えていた。

今でも時々、竜の特殊な能力を利用する輩がいると——ロジオンは言った。

彼は竜の血をひきながら、不遇な境遇にいる者達の探索と保護もしているのだとも聞いた。

彼はどんな気持ちで変わり果てた同胞を抱き上げたのか——彼の瞳に憐憫の光りが微かにあり、皆声をかけずそっとしておくしか無かった。

——その遺骨で作られた……。

遠い過去に、竜の身体の一部を使った防具や武器が出回っていたと話には聞いていた。

それらしき古い防具に武器も残っているが、事実はまだことしやかである。

「手に持ってみてください」

促され、恐縮しながらマインゴーシュを手取る。握る感触も重さも自分にあつらえたようにぴったりだ。

振ってみても違和感が全く出ない。使い手の次の手を感じているように馴染む。

「ヘッドドレスの方は調節が出来るようになっています」

着けてみると自然、頭の形に独りでに密着する。しかも軽い。

「軽くても強度は最高を誇るでしょう」

竜の骨ですから——と、ドレイクは付け加えた。

「これを頂けるのはありがたいが……宜しいのですか？ ドレイク殿の同族の形見では……」

「言つたでしょう？ 貴女の意味は黒竜の意思に似ていると——主人に対しての意思の強さ・思い……それはロジオンを支える時の助けとなることを望むでしょう」

ありがたくお受け取りします——アデラはドレイクから貰った剣を両手に持ち、ゆるりとお辞儀をした。それは彼に敬意を払った意味の厳かな礼の意味でもあった。

アデラのその礼は、ドレイクに僅かながらに、只人に対する溜飲が下げるものであった。

60 イル・マギア(2)

ああ、ここは夢だ——ロジオンはそう思った。
身体を起こし胡座をかく。周りは真白の世界——全く現実感が無い。

(夢だ夢だと唱えてれば目が覚めるか?)

そう思い、ぼんやりと遠くを見つめる。

(——?)

視線の先から、こちらへと向かって歩く人影が見えた。

距離感の無い夢の中で、人影はあつという間に距離が縮まる。姿形がはつきりした所で、ロジオンは息を飲む。

(魔承師……?)

長く伸ばした銀髪は腰まで届き、そよぐ。

それは昔見た、南の海の波打つ色と似ていた。

自分もよくそう例えられるが、彼女の方がずっと近い。

美しい人——彼女にその形容が一番相応しい。

イズルテがロジオンの前で止まり、笑いかけてきた。

立ち上がり、彼女を見つめる。

「良かった。心の中はとても静かで……落ち着いたのでですね」

「……ご迷惑をお掛けしました」

そうか——ここは意識の中だ。そこに彼女が入ってきたのかと、ロジオンは悟った。

「僕……周りに気をかける余裕がなくて……貴女にお怪我は?」

「大丈夫です」

そう、にこりと彼女は笑う。

「すいません……壊した箇所の修理代は僕がもちます」

「それは良いのよ……それに、謝らなければならぬのは私の方で

す……」

「……いえ」

自分が魔法によって創られた人間と言うのは、落ち着いた今でも受け入れがたい。

そのロジオンの心情を読み取ったのか

「違うのよ」

と彼女は言った。

「兄・マルティンが創ったと言うのは、『魂』と言うもの。それも自らの手で、自らの『魂』を創り上げたのです……」

「……？」

ロジオンは首を傾げる。

『魂』と言うのは、魔法定義として形が定まらない、そもそも形として存在していると言う位置付けがないものだ。

そのせいか『魂』Ⅱ『靈魂』と言う聖職の定義が世間では一般的となっている。

では――

「前・魔承師は……自分の靈魂を創ったと言うことでしょうか？…

…そもそも何故……？」

「話が長くなりますが……。ロジオン、どうか心乱さずに聞いて欲しいのです」

イゾルテは深く長い溜め息を付いた。

*

太古、この世界には生まれながらに理を知り、万物を自由に操作する者達だけの世界でした。

様々な姿を持つ多種多様な種族が息づく世界――。

――それは、突然でした――

足を出す先さえも分からない眩い光が、辺りを包みました。

その光がようやく収まった後に、その中心と思われる場所から、新しい人種が出現したのです。

――この行は聞いたことがあるでしょう？

クレサレッド教会の聖書で……。

新しい人種は、特殊した能力を何ら持ち合わせておらず、環境に順応できず、自ら命を絶つ者、狂う者、呆然としたままに他人種の僕となる者、襲われ食用となる者……。

力弱き出現者達を、姿形が似ていると言う親近感から、私達の一族が保護し、この世界に馴染み生活の基盤を作らせたのです。

彼らと肩を並べて生活してみれば特殊した能力は無いものの、特化した才を持っていました。

順応の早さと、既にある道具を更に高性能にする技術――私達は力がありました。生活するのに最低限の道具で良かった。

彼らは私達より短い寿命の中で、年老い弱っていく身体を持っていた。

だからこそ、短い人生を有意義に暮らそうと自分の知識と技術を駆使し、欲求を満たそうとする意力が湧いてくるのでしょう。

その者達から口々に言われた言葉がありました。

――『魔力』『魔法』

そして私達を

――『魔法使い』『魔導師』と呼んでおりました。

力に何の名前を付けなかった私達は、面白がった。

特に兄・マルティンは好奇心からも、色々話を聞き出していました。

マルティンは私達一族の長であり、他の種族からも一目置かれた存在で、彼の意見は他種族でも受け入れられるほどでした。

マルティンは彼らから話を聞き、多くの情報を得て、また、彼らの疑問にも、彼らの分かりやすい言葉で説明していきました。

新しい者達は、私達が接触をしたことがない異世界の住民で、『魔法』『魔力』等が無い代わり『科学』『情報』『機械』『医療』と言うものが発達した世界だったと言いました。

そして、それらに頼るあまりに最大の過ちを犯したと……。

——世界規模の戦を起こし、『科学』の力で世界が滅んだだろう——
彼らの一人がそう告げ、同じように皆が頷いていたのを覚えています。

私達の世界まで巻き込んだあの強い光は、『核兵器』と言う、人工で作られた恐ろしい武器だと——

その破壊力で空間に歪みができ、何人かは分かりませんが、こちらの世界に飛ばされた——そう私達は判断しました。

マルティンはその話を聞いた後、更に彼らに傾倒していき、時々、一人考え込むようになりました。

と言うのも、異世界からの住人がこちらにきて数十年の時が経ち、元からいた人との間に『新しい世代』が次々に生まれていたから……。

『新しい世代』は、私達より力もなく、また、成長が止まる時期にまばらで寿命が遥かに短かった。

一番私達が困惑したのは『死』を迎える時でした。

私達は死を迎える前に、著しく力が落ちる。そして『塵』となり、この世界に融け一部となる。

新しい世代を含む異世界の者達は、死しても形が残った。

そして祈りを捧げ、再び会えることを願う。

『輪廻』

『転生』

を――

*

「塵……？」

「古代より生きる者達は、身に纏う力が形代であり命であり全て。そこには魂や霊魂などは存在しません。私も亡くなれば塵となる……輪廻と言うものは存在しない。それが私達の理……」

――では。

「中の人達が言っていた『無理矢理、輪廻の輪の中に入った』と言うのは……」

「それこそがマルティンの魔法です」

『魂』と言うものを創りあげ、その中に魔力も魔法も意思も、生きてきた全てを閉じ込めた――。

（魂に個々の魔力の性質が宿ると言う説は間違っていない…と言うこと？）

いや——と、ロジオンは自分の考えを否定した。

この説を考えたのはマルティンで、自分の説に基づいて魂を創ったんだ。

だけど仮説だから——輪廻で転生はしたけど、融け合わなくて継ぎ接ぎになってしまった——魔法では魂の形成が完璧に出来なかったんだ。

「……何故、マルティンはそんなことを……？」

イゾルテは悲しげに目を伏せた。

「『ある』魔法を施行するために……その魂は創られました。今になつて分かつたの……ごめんなさい」

「イゾルテ様……」

ぱつ——と、真白の世界が変わり、辺り一体が何かの景色に変わった。

「ロジオン……」

イゾルテがある方向をゆつくりと指差す。

最初、雨雲に見えた。

真つ黒で、時々光るものは雷かと——だが、尋常でないものだとすぐに分かった。

「これは、私が見てきた過去の様子です」

「歪みだ……」

こんなにはつきりと大きく——。

「でかい……こんな空間の歪みなんて……ありま……！」

ロジオンの表情が固くなった。

「この歪みの場所は……魔導^{マジ}術統率協会……ですね？」
イゾルテは頷く。

「……もしかしたら、魔承師の本来の役割とは……」

「集めた力で結界を張り、歪みを押さえる為の形代……」

イゾルテはそう言った。

61 イル・マギア(3)

前・魔承師はマルティンだった。
そして今は妹・イゾルテが受け継ぐ。

「マルティンは、この歪みを押さえる為の魔法を……？」

イゾルテは、じつと過去の歪みの様子を見つめながら話し出した。

「最初は小さな、見えない歪みでした……。それくらいなら今までなら、自然に塞がっていたのです——だけど、核兵器と言う亡異世界が放つて出来た歪みは、全く異質のものでした」

イゾルテの見える先をロジオンも見つめて驚愕した。

「——吸い込まれて……！」

今や書物でしか見られない動物。少数になった民族。木々や建物——闇より暗い闇の歪みの中へ吸い込まれていく。

「歪みは、ある日急速に広がりました……。マルティンと私が二人がかりで、結界を張ってようやく落ち着いたので」

「二人がかりで……？ では、今はどうやって結界を？」

また、先程の真白の景色に変わったかと思うと、すぐに別の景色に変わった。

それは、空から地上を見た景色だった。

暗いグレーの建物が魔導術統率協会で、それを中心に国や街が出来ているのが確認できた。

「——巨大魔法陣です。これが個々に僅かに頂いている魔力を増幅させ、結界を張る促進をしています」

イゾルテが指し説明する。

「天にある歪みですので、天に由来し、数多く存在する星の形をま
ず模倣し、各角の頂点に国を置きました。そのうちの重点の角に教
会です。そしてエルズバーグ、ロジオン、貴方の国」

ロジオンは黙ったまま頷く。

「エルズバーグと対称にある国が海の国・バハルキマ、エルズバー
グの第二王子の婚姻先。そしてバハルキマの下の角の国、シアン。
エルズバーグの下の角の国・チュシェウ」

「四大国ですね……じゃないと……結界に必要な魔力が集まらない
……と言うことですか」

それと教会の信仰に、魔導に集う強力な魔法を持つ者達の魔力。
魔法陣の中に点在する小さな国と街に住む魔力を持つ者達

それだけのことをしないと、失ったマルティンの魔力に匹敵をし
ないと言っことだ。

「マルティンと私……二人がかりでも歪みを閉じることとは難しかっ
た。仲間達が歪みを分析し、根本的に修正しようとも、未知の理で
分析は難しく、直接触れて理解しようとした者達は帰ってきません
でした……」

一体、どれだけの仲間が、どれだけの種族が犠牲になったのだろ
うか――。

亡異世界が残した負の遺産はあまりにも大きい。

恨む者も大勢いただろう？

――貴女も恨まなかったのか？

イゾルテはロジオンの考えが分かるのか――憂いの影がある瞳で
こちらを見て、微かに口角を上げた。

「歪みを押さえる結界の安定化をはかるために、私達は巨大魔法陣を創ることにしたのです。それには力を持たない者達も『信仰』を力にし発揮する『系統樹』と言う装置を取り入れた建物を建てました——それがクレサレッド教会です」

そして——と、イゾルテは下を指す。

「その装置は魔法陣を通り、魔力と融合することで、こちらにもその装置を共有できるようにしたのです。……でないと、結界の持続が出来ない」

「……それほど強い歪み……」

「ええ……。そして、兄が倒れたのは、それから百年後のこと……」

突然でした。力の衰えも無しに。

——兄は言いました。

『あの歪みを永久に押さえる魔法を創った』
と。

背景が変わる。

横たわる青年の側に、ドレイクがいた。

青年の顔は——

「……僕？」

青年に成長した姿だが、顔立ちは自分そのものだ。

「この人が……マルティン……？」

「貴方によく似てるでしょう？」

彼はこちらを見て、何かを話していた。
イゾルテから見た情景だ。彼の視線の先はイゾルテだろう。
音声は閉じているのか、全く聞こえなかった。

マルティンの手を、白くて細い手が握りしめる。途端、彼の瞼は閉じられた。

その時、マルティンの身体の中から青白い球体が出てきた。
その球体は柔らかいのか、グニグニと凹凸を繰り返す。

——突如、えも言えぬ早さで彼方へ飛び去ってしまった。

「——あつ……！」

ロジオンは思わず声を上げ、その情景の中にいるドレイクや一族の者達と同じように啞然と見送った。

ロジオンの周囲が真白に戻っても、今見た光景が信じられず佇んでいたが、イゾルテに声を掛けられ、ようやく彼女に視線を向けた。

*

あれは魂だ。

魂と呼ぶのには相応しくないが、あれはマルティンが言う魂。
自分の身体が、中の人が告げてくる。

——あれが、自分の魂だ——と。

——だけ——

（普通の、今まで視てきた魂と似てるけど違う）

魔力を持つ者は視える。

視ようと意識すれば視える。

身体が寿命を迎え、息絶えた後に身体を支配していた源——魂。

それと似てるが違う。

だけど似ている

『無理矢理輪廻の輪の中に入った』

中の人が言っていた。

入った——だけど、異質だった。

異質ゆえに、輪廻と言う理が輪の中から追い出そうとする——その前に。

「……触れて、魂の理を知り……また、魂を創った……」

——より魂に近く、完璧に。

「そして、元の魂の中の記録を……その魂に入れた……」

——新たな『自分』の魂を逃がさないよう元の魂に取り込もうとして——

「それが……不可能だった……」

ロジオンの説明が途切れた。

長い静寂の後、再びロジオンは口を開く。

「そうして——元の魂にくっ付けて輪廻を繰り返し……同じ失敗を繰り返し……マルティンの複製品が生まれ……劣化品のマルティンはドレイクに破れ——殺された……」

イズルテの唇が震える。

何かを告げるかのように。

だが、言葉に発することなく、きつく唇は閉じられ、それは真実だとロジオンは理解した。

「謝らないで良いし……泣いたりしないで下さい……」

イゾルテに向けられたロジオンの表情は困っているが、明るいものだった。

「中の人……そう言っていますから。次の転生を早くするためだと……必然的なものなんだと——皆、理解しています」

「ロジオン……」

「記憶の全てが複製されなかった……歪みを押さえる魔法の記憶が甦らない……世界のためにも……イゾルテ様、貴女のためにも……必要な魔法だから……」

——だから、ドレイクの手に掛かった——

「……ごめんなさい」

「謝らないで下さいって……言っただじゃないですか」

「でも、ドレイクに命じたのは私……本当にごめんなさい」

だ……から！

とロジオンはイゾルテに突っかかる。

「納得してますから……！それ以上陳謝の言葉を述べたら、ドレスの裾捲りますよ！」

「——えっ？」

思わずドレスを押さえるイゾルテを見て、「うつそ」とロジオンは悪戯に舌を出した。

その仕草が可笑しくて、イゾルテも頬を染めて笑った。

一頻り笑いあった後、イゾルテはロジオンに言った。

「貴方の魂は、複製した魂ではないの……。それはもう分かっているみたいですね」

「はい」

ドレイクが分からない——そう言ったのは、複製されたはずの自分の魂が見当たらない——。

まさか、と思いつつ、はつきりとした確証が掴めなかった。

視る力の強いイゾルテに実際、視て貰うことにした。

「貴方が成長する過程で、融合を果たしたみたいですね……」

イゾルテの言葉にロジオンは、そつと胸に手を当てた。

魂も、成長を——。

何がきっかけで融け合ったのか、いつ融け合ったのか分からないけれど——。

君は私

私は君——

そう言えば——と、ロジオンは口を開く。

「マルティンが考えた魔法の名前……『マギア』は分かったんですが……前の発音が不明瞭で……よく分かりませんでした……」

何て言う名前なんですか？　そう尋ねてきたロジオンに、イゾルテは目を見開いて驚いた。

「分かったの……？　音は閉じといたのに……」

「口の動きで……古い言葉なので、あまりよく聞き取れなかったけど……『マギア』は今の言葉の『魔法』に近いから……分かりました」

そう——イゾルテは、ほつと微かに安堵の息を付き、こう言った。
「今の発音に直すなら『イル』と呼ぶ方が呼びやすいでしょう」

「『イル』……」

「『無限』『永遠』と訳します」

「『無限』の『魔法』……」

—イル・マギア—

62 ドレイクの鞭

一晩経ち、エルズバーグへ戻る支度を整えたロジオンとアデラは、イゾルテの元へ挨拶に出向いた。

イゾルテは例の謁見場にいるようで、フレンと言うドレイクと同じ竜の血を持つ青年が案内してくれた。

イゾルテとドレイクは、二人揃ってある場所にいると言う。

——ある場所とは、ロジオンが壊したバルコニーである。

「……やばっ」

ロジオンが然知ったりした顔を露骨に出し、フレンが含み笑いをしながら言った。

「大丈夫ですよ。魔承師様は優しいお方ですし、よくあることなんです」

「よく物が壊れるってこと？」

昨日イゾルテが、かなりぼんやり屋さんと知ったせいか、常日頃からよく物を壊すのかと聞いてみた。

しかし、フレンは違う意味として読んだらしい。

「しょっちゅう壊されるって、言うわけでは無いんですけど。お立場を狙う方が時々現れるんですよ。いつも穏やかな風情でいらつしやいますから、舐めている方もいるわけで……」

「頂点に立たれる方には、立たれる方のご苦労があるんですね」
アデラが同情するかのように言った。

「——まあ、大体は魔承師様に辿り着く前に、ドレイク様にえらい目にあわされますけど。逆に容赦無いですから、あの方は」

半殺しですよ、あははは——と、呑気に笑うフレンは、恐らくそ

の状況に慣れているのだろう。

飴はイゾルテ
鞭はドレイク

（ドレイクに鞭を食らうのか……）

溜め息をつくロジオンだった。

*

謁見場に着いた時、二人はステンドグラスが割れ、ひしゃげた窓枠の前にいた。

周囲には様々な方向へ飛んでいったステンドグラスが、足の踏み場も無いほどに床に散らばっている。

三人に気付いたイゾルテとドレイク。

「お二人ともよく眠れました？」

イゾルテは、にこりと優しい笑顔を向けた。

「はい……。昨晚はありがとうございます」

昨晚——と言うのは、意識の中で交わした会話のことで、ドレイクやフレンは魔承師としての彼女との付き合いで分かっていたが……。

（？ 昨晚？）

一晩付き添っていたアデラには理解できないし、ずっと見ていたのに

（昨晚？ え？ 二人で何をしていたのだ？）

と、頭を捻った。

「落ち着いていてくれて良かった。外の話が沢山聞けて楽しかったわ。また、来て話を聞かせてくださいね」

イゾルテ自体が歪みを押さえる形代となっている。ここから離れるわけにはいかなかった。

一つの塔だけでもかなりの大きさに広さだし、空中庭園や温室もあるようだが、外の空気が吸えないと言うのはつまらないものだろう。

（しかも……付き添ってるのは口の悪いドレイクだしね……）

「はい、暇を見つけてまた……。その時は……悩殺させる美脚を是非ご披露ください」

ロジオンのこの台詞にドレイクは呆れ、イゾルテは、ふふふ、と笑う。

そして

「貴方の師匠であるコンラートにも、言われたことがあります」

流石、お弟子ですね——とイゾルテに切り返され、ロジオンは亡き師匠に妙な対抗心が沸いたのだった。

「イゾルテ様、そろそろお願いしたいのですが……」

ドレイクが促す。

「そうだったわね」

イゾルテは持っていた杖をドレイクに渡すと、両腕を空に差し伸べた。

瞬間に空間が変わった。

ぴん——とした張りのある静けさ。

床に散らばったステンドグラスが、ゆっくりと宙に浮く。
瞬きもしないうちだった。

何事もなかったように、ひしゃげた窓枠は美しい形容を取り戻し、ステンドグラスは窓に戻り、昨日のように柔らかな豊穣の色を付け、日の光を受けていた。

「……失礼」

ロジオンは驚き、真っ先に窓のステンドグラスに手を付け、間近に見る。

人が手を加えたような接着の後も無い。

「『再生』だ……初めて見た……」

『物』の完全な『再生』は『治癒』同様に難しく、魔法の中でも特殊な能力を使う一つだ。

「この力は、イゾルテ様のみのお力……。あと、私が知る限りには古代から命を保つ者達」

再生――

治癒――

これは遠い過去には、魔力を持つ者は持ち合わせていた力――。
ドレイクの言わんとしていることが分ったロジオンは、何とも言えなかった。

*

塔を出るとハインが待っていた。

「勝手に帰るから……迎えに来なくても良いのに……」

ロジオンがガツカリした口調で言うが、それは迎えに来たハイン

にもガツカリさせられた台詞だ。

「ロジオン様は、大国・エルズバーグの王子なんですから！ 自覚を持ってくださいよ」

と、ハインに逆ギレされた。

「ロジオン」

ドレイクが見送りに出向いていた。

「何？」

「たまに様子を見に行きますよ」

「……心配しなくても……思い出したら、すぐに出向くよ？」

「魔承師様の命でもありますから」

それに——と、ドレイクはアデラに歩み寄り、彼女の手の甲に口付けを落とした。

驚いたのはアデラではなく、ロジオンもだった。

手の甲に口付けは、相手を敬愛する意味があるが、ドレイクが——あのドレイクが、魔力を持たない人の女性に、このような態度を取るのを見たのは初めてだったからだ。

驚いて、ぱくぱくと言葉に出ないアデラとロジオンに気にせず
ドレイクは

「アデラ殿にも会いに行きます……。魔承師様も貴女に興味がお有りな様ですし」

と告げた。

「わ、わ、私に？」

はい、と返事すると、ドレイクは今までに見せたことが無いほどの笑顔を向ける。

無表情と言うより仏頂面に近い、いつもの彼がみせる笑顔は、女性には効果てき面に間違いはない。

案の定、アデラは全身真っ赤にし俯いてしまい、それでも小さな声で「はい」と返事を返した。

「では……」

ドレイクはそれだけ言うとアデラから離れ、協会に戻ろうと踵を返し歩く。

ロジオンの横を通るその時、二人の視線が絡み、ドレイクが笑う。

意地の悪い笑みで――。

「……！」

わざとだ。ロジオンは口角を下げた。

「性根の悪い……」

そう呟いた。

ドレイクの鞭を、こんな形で食らうなんて――ムカムカと胸元がざわつくロジオンだった。

62 ドレイクの鞭（後書き）

今週末から来週の末まで、私用で更新が止まります。

ブログには既に書いておきましたが、この二章が終わったら題名を変更しますのでよろしくお願いします。

63 黒竜の役目（前書き）

せつなく、すこしだけ、ラブ。

63 黒竜の役目

イゾルテは直したバルコニーで縫い物をしていた。

共に直した白塗りの椅子に座り、円卓には裁縫道具が置いてある。

「ドレイク」

後ろから近付いてくるドレイクに声をかけた。

針を掴む手は動いたままだ。

「いけないわ……。ロジオンを叱るのに、身近な女性を使うのは……」

……

「彼女は聡い。分かるかと思いますが」

「どんなに聴くても敏感でも、あんな風にされれば勘違いしてしまいます。貴方が、普段からあんなら平気ですけど……」

針の動く手が止まった。隣に立つドレイクを睨むイゾルテの瞳には、批難の光がありありと照らされる。

「好きになった人に使うのではなく、あのような時に使うのはやり方が間違っていますよ？」

「……今度、会う時にお詫びします」

「必ずですよ」

そう言うといゾルテはまた、せっせと針を動かし始めた。

普段の彼女はいつも穏やかで、怒ることはほとんど無い。

自分の命を狙う輩にも慈悲を与えてしまう。

だから、たまにこのように怒りの眼差しを受けると迫力がある。

——ドレイクが素直に考え直すほどに。

ドレイクは柵に腰を掛け、しばらくイゾルテの様子を見ていた。

彼女は縫い物に集中しているようだ。話しかけづらい。

ここで声を掛けたら、また注意を受けるだろうか？

黙っていた方が良いのだろうか？

滅多にされないお叱りを受けて、小さな子供のように萎縮してしまふ。

それは仕方がないことだ。

ドレイクにとってイゾルテは主人でもあるが、その前に自分を育ててくれた養母でもあり、姉でもある。

——彼女と共に自分の人生がある——

よく人が言う、男女の愛とは違うものだと思っている。

自分は誰も、仲間とも人とも愛し合うことはないだろう。

それはイゾルテに対しての恩義でもあり、誓いでもあった。

「ドレイク」

いつのまにか針仕事を終えたイゾルテがいた。

裁縫道具を片付けながらドレイクに言う。

「私のことは気にしなくて良いのですよ……？　好きな方が出来たら、お付き合いなさい」

自分の決意を見透かす台詞を、この方はたまに吐き出す。

「いえ……。共にいたいと思うのはイゾルテ様お一人です」

ふう、と溜め息のような息を付き、イゾルテは立ち上がる。

広げられた縫い物を見て、それが何だか分かったドレイクは顎を擦った。

裾を上げたドレスだ——しかも切る時適当だったのか、左右長さが違うし縫い目が吊っている。

「……お針子に依頼しましょう」

「……そうしてくれるかしら」

くるくると畳んだドレスを裁縫道具の上に置く。

「裁縫も長くやっているけど、未だに鈕付け位しか上手く出来ないわね……」

「最初は針の穴に糸を通すことさえ出来なかったのですから、上達していますよ」

ドレイクの励ましの言葉にイゾルテは微笑むと、ドレイクの頬に手が伸びた。

すっ——と身体を寄せ、ドレイクの頬を自分の頬に寄せる。

「私の事は良いから、貴方は貴方らしく生きなさい」

「私らしく生きております……イゾルテ様は、私の本来の黒竜としての生き方を下さいました」

黒竜は、他の竜達の騎士的役割を持つ竜。

単体、あるいは団体の他の竜に忠誠を誓い、守るために戦い続ける。

それが生きる原動力であり命。

——それ故に、主人である竜の命が尽きると——
忠誠を誓った黒竜も、生涯を閉じる……。

遠い過去、魔力を持たない者達の迷信で竜達が殺され、絶滅と囁かれた同じ時期に、獰猛と言われた黒竜も姿を消した理由であった。成人した黒竜は、主人を見つけなければ原動力がなく、自然に命が流れていく。

ドレイクは、自分を育ててくれたイゾルテを選んだのだ。

「イゾルテ様」

「何？」

「ロジオンに、最後まで話さなかったのですね……」

「……聞いていたの？ 盗み聞きは良くないわ……」

「私は貴女に忠誠を誓った日から、精神が繋がっております。話す

のが躊躇う内容があったのは分かりました」

「……」

触れた頬から、彼女の悲しみが流れてきてドレイクは彼女を抱き寄せる。

「昨日のこと以上のこと起きそうで……話せなかった……」

「あの子は勘が鋭い。勘付いているかも知れませんか……？」

「どうしたら良いの……？ 兄は何を考えて、このような魔法を考えたのかしら……？」

「目覚めを……待ちましょう……きっと、ロジオンの代で起きましようから……」

目を覚まさないで――

イゾルテのロジオンを思う心の声と葛藤が聞こえ、ドレイクは哀れで抱き寄せた主人の額に口付けを落とした。

彼女の決定は時に残酷だ。

冷静に与えられた仕事をこなしているが、特にマルティンの魔法に関しての事がドレイクにとって堪えることだった。

だが――

自分に命を下す度に、彼女の心が壊れそうになるのを知っている――それを必死に抑えていることも。

当たり前だ。マルティンは彼女の兄であり対だから。

『魔法を使う者達を統治する』である時代の魔承師だったなら、イゾルテは相応しかった。

――魔承師と言う意味合いが変わってしまった今――

それでも必死にその役割を成し、心を保ち、柱となっている。

疲れてる——この繰り返しに——分かつてる
疲れているのは自分だけじゃない。

待つのが、もう嫌なのは自分だけじゃない。

分かっていたのに——ロジオンを見て苛立った。

分かっていたのに——イゾルテに反抗し、ロジオンを導くと言っ
てしまった。

彼女の心の葛藤がまだ聞こえる。

きつと、自分の迷いも後悔も彼女には聞こえている。

——だから

どんなに永い時でも、私は貴女の側にいます。

孤独にはさせませんから——

この、自分の心の声も聞こえることを願って……。

64 街へ行こうか(1)

ドレイクが去った後のロジオンは、不機嫌だった。

敏感なハインはすぐに分かった。

不機嫌になった理由は、社交辞令に頬を赤く染めたアデラだ。

(ほんと、免疫が付いてない人だ……)

普段、絶対やらない相手からだから余計にブーツとしてしまったのだろうけど。

(こっちとしてはもう、怖くて怖くて……)

——ロジオン王子が……

その、ロジオンの冷たい視線がアデラに向けられたと同時に、辛辣な台詞が出た。

「社交辞令に、いつまで頬を染めてんの……？ 十三、四の子供じゃないんだからさ……」

はた、と夢から覚めたようなアデラにロジオンは更に続ける。

「そのマインゴーシュとヘッドドレスだって……君が気に入ったから譲ったものじゃないよ……」

「——こ、これは！ その、そう言う意味ではないこと位、知っていますし。私の心情に共感して譲って頂いたものだ——」

「ふうん……良かったね。ドレイクにしては思い切って品を譲ったよね……」

「ロジオン様をお守りする手だてにするようにと、おっしゃりました」

ロジオンの片眉が不快そうに上がった。

「ドレイクと二人で……何勝手に決めてんの？ 僕を守れって……ドレイクが？ どうするかは僕が決めることじゃない？ こそこそ

と二人で内密に話し合ったみたいだけど……それだけで彼と他人より仲良くなったような錯覚を……起こさない方が良くないじゃない？」

アダラは、何本も釘を刺された気分だった。

——別に

アダラは思う。

別にドレイクに期待とかしていないし。

——それに、私は……。

「無いし……」

ぼそぼそとロジオンに言い返す。

「今まで生きてきて……男女のお付き合いとか恋愛とか縁がありませんから……。誘われたこともないし、告白されたこともないし……。だから、ああ言うことに慣れていないのは認めます。舞い上がるな、と、おっしゃることも真摯に取りますけど……」

喋りながら段々俯いて行くアダラに、ロジオンは自分がきつい台詞を吐き出したことを、心底悪かったと思った。

しばらく沈黙があり、アダラはまたボソボソと言った。

「どーせ、エルズバーグの美女定義から外れてるし、粗野で乱暴だしすぐに暴力入るし、女に見られたこと無いし——男には魅力ありませんよ。イゾルテ様は女の私から見ても素敵な方でしたしね。あの方をずっと見ているドレイク殿には、私はその辺りに転がってる石ころですよ」

「あ……アダラ……」

やばい——

それはロジオンだけでなくハインも思った。
アダラの肩が震えている。

（泣かした……！）

「アデラ……！ あの子……！」

「ロジオン様だってイゾルテ様としか、知らない話をされたんじゃないですか。別に構いませんけど。私、只人だし。魔法も使えないし、体力だけが取り柄だし、気に入らないなら、この剣とヘッドドレスも返してきますから」

俯いたままヘッドドレスを脱いで、腰に付けていたマインゴージュをベルトごと外す。

踵を返し魔導術統率協会に向かうアデラを、ロジオンとハインは「待った！」慌てて引き止めた。

「アデラ、返すのはもう少し考えてからで……」

「そうですよ！ 実戦で使ってみてからでも」

「そうそう……！」

「でも」とアデラは能面になった顔で、ヘッドドレスとマインゴージュを見つめた。

「使ってからお返しするのは、やはり失礼ですから」

と、歩き出すアデラをまた二人は引き止める。

「……そうだ、アデラ。今日から休暇をあげる！ 感謝祭に話したよね？ 魔導の謁見が終わったら……ゆっくり休みをとって」

「言いましたね」

「ずっと休みを取っていないし……今日から三日間で……どうかな？ その三日間で……ドレイクから貰った物をどうするか決めよう」
「分かりました」

ロジオンはアデラからヘッドドレスとマインゴージュを受けとると、ハインに渡した。

「君の手で保管しといて」

「はい」

じゃあ、行こうか——とロジオンはアデラの左手を握った。

「今から休暇なら、ここから自分で家に戻ります」

アデラの台詞に、二人は顔を見合わせた。お互い冷や汗を掻いている。

周囲は開墾されていない。ある道と言えば獣道。

アデラなら徒歩でも乗り切りそうな気がしなくてもないが……

「……無理……だよ」

ロジオンはアデラの気を障らないよう諭す。

「アデラ殿……徒歩だと、エルズバーグに着くまでに休暇が過ぎてしまいますよ……」

ハインも応戦する。

「そうですか……」

能面のままのアデラが溜め息を付くと

「——では、ハイン殿と……」

と、ロジオンが繋いだ手を離そうと引つ込めようとしたが、ロジオンは慌てて握りしめる。

同時、ハインを睨み付けた。

「——あ！ アデラ殿、申し訳ない！ 私、荷物の運搬しか経験なくて……人を方陣で移動できるかあ……ちょっと自信が……」

意図が分かったハインは、それらしい言い訳をする。

「ちゃんと送るから……大丈夫」

ね、とロジオンは、場を和ませようとアデラに、にこりと笑って見せる。

固い表情を崩そうとしないアデラは、主から顔をそらしたままだ。

「ハイン……！ 今夜父とディリオンの兄に話があるから……時間空けといってくれるよう言付けを頼むよ！」

「はい！」

「城の閉門前に戻るから……よろしくね！」

ロジオンは、珍しく早口でハインに告げると方陣で移動してしまった。

二人がいた場所は、冬に変わりゆく風景だけが残った。

ハインは、預かった武器と防具を抱え、やれやれと苦笑いをする。彼の繰り出す魔法は凄いいし、大人の世界にいたせいか落ち着いている。

だが、先程の必死なやり取りを見ると、やはり相応年頃なんだと思っただ。

「色事の噂が絶えないコンラート師の愛弟子なのに、気のある女性の相手にはやっかんだり、ご機嫌を取ったりと可愛いことだ」

ハインはそう呟くと、エルズバークの城に向かう為の方陣を踏んだ。

*

様々な出で立ちの、行き交う人々。

色彩豊かなテントの下には、国中から集められた食材に織物、家具、食器、小物。

勿論、建物の中にも店舗があり、既製品の服や靴、飲食が所狭しと並び。

——「うう……」。

見覚えのある風景。

馴染みのある、エルズバークの城下街の買い物市場だ。

アデラは自分の主を睨み付ける。

当の主人であるロジオンは、周囲の賑やかさに浮き足だっているのか、頬を紅潮させて落ち着かない。

「送ってくれるのではなかったのですか？」

じろり、とアデラに睨まれたが、ロジオンはまあまあとはぐらかす。

「マッサージしてくれたお礼に……ソフトクリームを奢るって言ったの覚えてる？」

「……そうでしたね」

「ソフトクリームの美味しいお店……知ってる？」

アデラは少し考えた後に

「アイスの好評な店なら存じてますが……ソフトクリームはあるかどうか……？」

と、困ったように言った。

「良いよ、そこで」

案内して、とアデラの手を引っ張って行こうとするロジオンを、彼女は慌てて止める。

「いけませんよ、ロジオン様」

「何で……？」

「ロジオン様の服装はまだしも、髪の色が目立ちます。感謝祭のお披露目が済んで、まだ日が経っていないのですから、正体がばれたら大騒ぎですよ？」

アデラの最もな心配だ。

だが、ロジオンは気にしていないようで「大丈夫」と言い切る。

「多民族国家のエルズバーグだよ？ しかも……お洒落に気を使って髪の毛を染めている人も多いじゃない」

アデラは街を歩き交う人を見る。

……確かに。

赤や緑に紫に、ロジオンと同じ銀髪なんてのもいる。

「それに気にするなら……アデラの格好の方だよ？」

ロジオンに言われ、アデラは自分の姿をまじまじと見た。

エルズバーグの深緑色の仕官服に帯剣。

こんな姿でロジオンの側にいたら、彼が王族の関係者だとばれられた。

「……やはり、私はここで失礼を――」

「僕……エルズバーグの城下街……歩いたことないんだけど……」

「――え？」

「この国に入ってすぐに宮廷に入って……そのまま王子としての教育と作法……その間に師匠が倒れて、あの離れに住んで……だから必要なものは言えば……宮廷が揃えてくれるし」

「そうでした……ね」

――だから、ね？

切なそうな顔で主人にお願いされては、断れないアデラだった。

65 街へ行くつか(2)

「よくお似合いですよ」

「うん」

服飾店の売り子もロジオンも、アデラの格好を見て満足そうに頷いた。

服を着替えよう——そう言われ、主に言われるがままの服に着替えてみれば……。

深い葡萄色が下地の、大柄が入った天鵝絨のワンピースに、アンゴラの毛を使ったロングのカーディガンは共布の紐で腰を絞るように作られている。

靴は膝上のピッタリとした皮のロングブーツ。

「しかし……」

アデラは心持ち寒そうにワンピースの裾を押さえる。

ワンピースは膝上のもので、

しかもアデラは背が高めなので、更に短くなる。

「長いがあります?」

「あら、お似合いですのに」

「お世辞抜きで似合うよ」

ロジオンと売り子の応戦。

褒められると悪い気はしないが

「私の趣味ではないので……」

と、選び直したのが——。

先程の同じタイプのロングワンピースに、モヘアのボレロ。それとショートブーツだった。

これもよく似合うが、足が隠れて見えなくなってしまった。

ロジオン的には少々残念に思う組み合わせだ。

(……でも、まあ……)

機嫌が直り、鏡の前で嬉しそうに身だしなみを整えているアデラを見て、ひと安心した。

「お客様お召しになっていた物は如何しますか？」

「速達で送って貰える？　——アデラ……実家の住所は？」

「あ、はい」

仕官服を実家に送る手続きをし、お金を払う。

ロジオンが腰のポーチから、お金を出すのを見たアデラは驚いた。

「ロジオン様、お金を持ち歩いているのですか？」

「うん」

それがどうしたの、と言いたげな顔をアデラに向ける。

「ロジオン様のお金は、勝手に持ち出しが出来ないのでよ。——

こうやって」

と、アデラは新たに買おうとしていたポーチの中から、羊皮紙の片方を留めてある書籍のような物を出した。

開くと、一枚一枚王家の紋章の透かしが入った物で、横にはロジオンの身分を証明する薔薇杉の実を型どった印章が押されている。

「領収書です。ここに取引先の方に買った物と代金、責任者の名前や店名を書いてもらい、管轄の担当者に渡すんです。月にまとめて相手にお支払します。基本、ロジオン様はお金を持ち歩いてはいけません」

領収書に記入してもらったため売り子に渡そうとしたアデラを、ロジオンは

「待った」

と止めた。

アデラの手から領収書を取り「良いんだ」と、彼女のポーチに入

れる。

「このお金は、エルズバーク^{エルズ}に来るまでに貯めたお小遣いだから」
「——えっ？」

きょとんとしているアデラを尻目に、会計を済まして店を出た。

「さっ。アイス、アイス！ アデラ……案内頼むよ」

*

物珍しいそうに、忙しくあちらこちらの出店を覗いている主人の後をアデラは付いていく。

彼はのんびりで余所見をしているのに、この人混みの中で他人にぶつかること無く、歩いていつている。

——お金の件についてはぐらかされた。きちんと話を聞かなければ——

その焦りもあるせいか、それとも、着なれない服のせいか付いていくのがやつとだ。

「お待ちください、ロジオン様」

アデラが長いスカートの裾に苦戦しながら歩いているのに気付き、ロジオンは彼女の歩調に合わせる。

「あまり……着なれないようだね」

裾が捲れていないか気にしながら歩いている彼女を見て、ロジオンはつい苦笑する。

「中がスースーするものは……どうにも苦手なのです」

「よく似合ってるよ……色々着てみたら？アデラは綺麗な体型しているんだし」

「……そ、そうでしょうか……？」

日頃から、容姿で誉められると言うことに慣れていないアデラは、ポツと頬を染める。アデラだとて女だ。

だが、ほのぼのしている場合ではない——はっと気付きアデラはロジオンに詰め寄る。

「ロジオン様、お金って——」

ああ、と頷き歩きながら話す。

「師匠と各国渡り歩いている時に、頼まれて師匠の代わりに薬とか調合したり、暇潰しに建築の手伝いしたり……とかで貯めたお金」

「——はあ？」

すっ頓狂な声を上げ急に止まったせいで、アデラの後ろを歩いていた女性がぶつかってしまった。

すいません——睨む女性に申し訳なく頭を下げながら、再度歩き出す。

「え？ え？ 日雇い労働をしていたのですか？」

たまにだよ、とロジオンは笑う。

「小さい頃は目が離せないから、いつでも側にいてくれていたけど

……ある程度大きくなると、半日とか離れる時が結構あったんだ。

与えられた課題とか家事とか済ましちゃうと……やること無くて暇なわけ。城仕えの時は書庫があるし……同じ歳くらいの良い出の子達もいて退屈はしなかったけど……庶民の子って小さい頃から働いていること多いでしょ？……だから、そういう子達と一緒に働くわけ」

当時を思い出しているのか、主の眼差しは遠い。

「面白かったよ。特に城造りとか……綿密な計算をして切った石を、どれだけ積みめば城が出来るとか……。港が近い場所へいけば造船もしたし……」

「もしか、風呂造りも？」

「建築関係は一通りやった」

——土木王子——

アデラの頭の中にまた、彼の異名が浮かんだ。

「城に入った今より、随分と精力的に身体を動かしてらっしゃったのですね」

アデラの毒のある言葉にロジオンの眉が下がる。

耳の後ろを掻きながら、軽い笑いを見せた。

「そう言うわけで、お金はあるんだ……出来れば民の税金は使いたくないし……」

王家の資産は、各自の直轄領から納められた税金だ。

年単位で納められた税金の何%かが、各王女・王子の資産になる。それは各自の国への貢献度によって毎年見直される。

ロジオンの場合、帰ってきた翌年から資産が入ってきている。

それまでは、ロジオンが受け継ぐ領地を管理する家令が資産を受け取り、領地を運営していた。

請け負った家令が善人で優秀だったのが幸いして、主の領地は寒冷地でありながら、裕福な方であると聞いている。

だが、ロジオンが受け継ぐ領地は、年の半分は雪で閉ざされる土地。ほんの少しいつもより雪が多く降ったら、たちまち経済が困難になる。

「……自分が資産を受けとることによって……今まで受けていた支援が出来なくなって、領地や住んでいる人々が窮地に陥るようなことは……ね……」

宮廷に行けば、こちらの意思に関係なく部屋の装飾に着替え、その他諸々の自分にかかる諸経費が使われている。

それも嫌なんだよな——と、ロジオンは呟いた。

「……僕はかしくかれて育ってきてはいないから……誰かの役に立ちながら……まあまあ生活をしていた方が性に合ってる」

怪我が治るまでの間は宮廷にいて、それなりに生活に馴染んできているのかと思っていたが、主は主にりに気を使っていたのだろうか——アデラは、街中を歩くロジオンの生き生きとした足取りに、宮廷での様子と違う彼を見て感じた。

*

小綺麗な店舗が並ぶ通りは煉瓦が彩色良く道に敷き詰められ、若い女性達が多く歩いている。

へえ、とロジオンは通りすぎていく女性達や、クリーム色に統一された店舗を見ながら、アデラの後を付いていった。

「あそこです」

アデラが指をさした先の店は、数人の若い女性が並び順番を待っていた。

「数種類の味のアイスと、トッピングを選んで売り子さんが盛り付けてくれるんです。アイスの種類は豊富にあるし、コーンも、勿論アイスも——ロジオン様？」

後ろに付いているはずの主の姿はなく一瞬慌てて目をさ迷わせたが、すぐに見つかってアデラは苦笑する。

ロジオンがいる場所は、絞りたての果物の飲み物売っている小さな店だった。

そこには

『ソフトクリームあります』
の看板が取り付けてあった。

「同じのじゃなくて良いのに……」

近くの噴水広場のベンチに腰掛け、ロジオンとアデラは二人で、ソフトクリームに舌包みをうっていた。

人気のアイスを食べれば？　と言う主だったが、アデラもソフトク

リームを選んだ。

「ソフトクリームも久しぶりで、美味しいです」

と言ってアデラはバニラのソフトクリームをぱくつく。

「せっかく奢ってるんだし……」

まだ不満そうな主であつたが

「ほら、溶けちゃいますよ！ 食べたかつたのでしょ？」

と、アデラが促した。

ベロツと舌を出し、バニラとチョコのミックスを舐めたロジオンは、ニヘラとしまりの無い顔をした。

あつという間に平らげてしまい、二個目に行こうとする主をアデラは止める。

「子供じゃないんだから……」

ふてくされた口調で言う

「じゃあ、あと一つですよ」

と、アデラはやれやれと言つた様子で許すとロジオンは

「……ますます子供みたいだ……」

と、消沈しながらも追加をした。

アデラが一つ食べている間に、ロジオンが二つ食べ終わり

「奢られてばかりでは……」

と、今度はアデラが飲み物を買ってきた。

蜂蜜に檸檬の絞り汁を入れた温かい飲み物を主に渡す。

ヤスリで滑らかな肌触りになった木製のカップが、持つ手にほんのりとした温かさを伝えてくる。

噴水を囲むように設置されたベンチは日当たりが良く、ほとんどが満員御礼状態である。

後は噴水の縁に陣取っているか、その奥に広がる広場に腰を掛けているかで、思い思いに過ごしている。

よく見たら、ほとんどが男女の組み合わせで、アデラは自分の状況もそうだと気付き、頬をほんのりと染めた。

「……この国は……裕福だね……」

ロジオンが呟いた。

片腕を背もたれに寄せ足を組み、飲み物を口に運びながら周りの光景を眺めていた。

「特に城下街周辺はそうだと思います」

「他国であり見られないよ……こう言うの」

「大きい国は、このように整備されていると伺っておりますが」

「うん……でも、貧富のさがある国が多い……管理する領主の才能の差もあるしね……父はああ見えても才覚あるんだね」

こう言ったの内緒だよ——悪戯気に人差し指を立てた主に彼女は笑った。

*

老婆が空いているベンチを探しているのか、毛玉の入った籠を持ちウロウロしているのを見て、二人は場所を譲った。

そのままブラブラと広場を散歩する。

時より立ち止まり、空を仰ぐ主を不思議そうに見つめながら。

「ロジオン様、空に何か珍しい物も見えますか？」

たまらず聞いてみる。

「いや……」

そう答えたものの、何か考えるように口に手をあてる主は、自分に話したい何かがあるのだろうとアデラは分かった。

だとしたら、昨日のロジオンに告げられた内容だろうと大体察しがつく。

一晩で驚くほど落ち着きを取り戻したが、暫く荒れるだろうと覚

悟をしていたアデラには拍子抜けだ。

それに、魔承師との謎の会話のやり取りも気になる。

（ええい！こちらから尋ねてしまえ！）

恋愛うんねん以外は行動力はあるアデラ。

目的もなく歩く主の前を立ち塞ぐ。

「ロジオン様」

いきなり通せんぼをされ訝る主に、アデラはきりりと表情を引き締め尋ねた。

「昨日、魔承師様と二人つきりで話された内容を、このアデラにも教えていただけますか？」

「……ああ……」

「はい」とも「いいえ」とも取れない、気の抜けた返事が返ってきた。

アデラから目を反らし、思いに耽るよう口には拳を当てている。

話そうかどうか考えあぐねている様子だ。

「ロジオン様！」

突如、がしりと主の手首を握りしめアデラは言った。

「ドレイク殿が用事を言いつけて私をロジオン様から離れた理由は『私が短い寿命の只人』だからです。いずれ、結婚して子を産んで次の世代に繋げなければならぬから、必要以上関わるな——いや、従者を辞めると遠回しに助言されました」

アデラの告白にロジオンは驚き、大きく目を見開く。

「——でも、決めたのです。私は、貴方が私を必要としている限り、ずっとお側にお仕えすると。それでドレイク殿が理解を示し、武器と防具を譲ってくださいました」

そう言うことが——ロジオンが小さく呟く。

「私は、どんな話だろうと逃げません！ ロジオン様が恐ろしい怪物であろうと、虎であろうと牛であろうと犬であろうと猫であろうとネズミやミミズやミジンコであって、束になってロジオン様を形

成されていようと――」

「アデラ……」

「はい！」

「気持ちは伝わった」

アデラの表情がパアアツと明るくなる。

「でも……その……微妙で……素直に喜べない……」

周り――と、主に言われ、視線をさ迷わせてみれば、クスクスと口元に笑いを浮かべこちらを見ている観衆。

「えっ？ えっ？」

「こつちへ……」

おたついているアデラは、眉を下げて困った顔をしているロジオンに雑木林に引っ張られていった。

66 我尽(1)

雑木林と言っても広場の中だ。

整備されて、所々に東谷が設置されている。

ただ、季節が季節だけに、日陰となるこの場所は肌寒く人気がない。

ロジオンは、なるべく日が入る東谷を選び、アデラと座った。

「寒くない？」

アデラに尋ねると、ぽかんとしたまま「平気です」と首を振る。

自分の台詞が、周囲の笑いを誘ったことに気付いていないようだ。自分に向けられた表情は至極真剣で必死だった。

アデラの性分から言ったら、ああ言う場面でふざけたことは言わないのは、まだ短い付き合いてもロジオンは重々知っている。

(だけど、ミジンコって……)

嬉しい反面、恥ずかしいし、素直に喜べない。

——ミジンコに見えるのか？

確かに、彼女より背は低いが、そのうち伸びるだろうし——。

ぶつぶつ頭の中ではやいているロジオンにアデラは「あの」と心配そうに声をかけた。

「私、何かおかしいな発言をしましたか？」

やはり、気付いていない。

ロジオンは呆れを通り越して笑った。

一頻り笑うと、眉を潜め、複雑な表情でこちらを見ているアデラの手を握る。

先程とは打って変わった神妙な主の顔にアデラは、表情を引き締めた。

「軽々しく口に出せない内容だから……頭に直接送る……」
目を瞑って——そう言われ、アデラは瞳を閉じた……。

*

鳥の鳴く声だけが、ロジオンとアデラのいる東谷に届く。
握られた手から届く情景と話の内容に、アデラの顔色は段々悪く
なつていき、全ての告白が済んだ頃には、土気色に変化していた。

ロジオンの手がアデラから離れると同時に

「これは真実なのですか!？」

と、アデラがロジオンに詰め寄った。

「嘘はないと感じた……ただ……」

ロジオンの視線がアデラから遠い空に移る。

アデラも共に空を眺めた。

「……まだ何かを隠している気がする」

「それは……?」

「僕に関する……何か……」

二人、空を眺めていたのは長い時間のように思えたし、短い時間
のようにも思えた。

「信じられません……」

「うん?」

「こんなに澄んだ、綺麗な空なのに……」

「うん……」

地上を染める深い赤や黄の秋の彩りが、空に映っているかに錯覚
するほどに澄み切った天上。

異世界の負の遺産が、この世界を飲み込もうとしているとは思え
ない。

しかも

それを維持するために、密かに各国が協力し、遠い昔から生き続けている一人の女性が、人柱のような役目を背負っている。

「……魔法の名前は、口に出しても構わないでしょうか？」

「うん」

「ロジオン様の魂の中に眠るイル・マギアの記憶が甦れば、この世界は助かるのですね……？」

「そういうことらしいね……」

「……イル・マギアの記憶が甦ったら、ロジオン様はロジオン様のままでいられるのですか……？」

「……どうだろう……？」

アデラを見ながら首を傾けたロジオンの表情は全く無かった。

イル・マギアの記憶は、マルティンの記憶だ。

イル・マギアの呪文を思い出すと言うのは、マルティンだった自分を思い出す——と言うことだ。

マルティンが、どう育ち、どう過ごし、どう生きてきたのか——感情に想い、思考、あらゆる全てを精密に緻密に思い出すのが『無限の魔法』の記憶を甦らす手段だったら——。

「……僕と言う人格は、甦らせるまでの代理……と言うことになる……」

アデラの胸が軋んだ音をたてた。

膝の上で合わせた手が震え、それを押さえるために強く握る。

マルティン——名前だけは知っている。

魔法の元祖。魔導術統率協会の開祖。

今、知ったのが現魔承師の兄——それだけだ。

主が彼の魂と記憶を受け継いでいて、それが主に多大な影響を与えようとしてる。

主の人格を亡くしてまで――。

主だから

主だからこそ

自分は、側にいようと思ったのだ。

「……嫌です。そんなの。イル・マギアを思い出したら、いえ、思い出すのに、ロジオン様がロジオン様でなくなるのは……」
言葉が続かない。

それでもアデラは、自分の思いを伝えたくて震える声の中、吐き出した。

「……嫌！」

*

「今まで通りイゾルテ様が頑張れば良い！ 協力する国をもっと増やして！ それでももっと魔力を集えば！ ロジオン様は今のままで、自分のままでいられるじゃないですか？！ そんな不確かな、誰も知らない、マルティンしか知らない魔法が、本当に役に立つか分からないのに！」

ロジオンに対する思いが、感情を支配した。

「勝手すぎます！ イゾルテ様もドレイク殿も！ イル・マギアを思い出せないマルティンの生まれ変わりを殺してきて、それで、今だって、今度だって、ロジオン様が思い出さなきゃ同じことを繰り返すつもりなのでしょう？！」

「アデラ……」

「生きてロジオン様でなくなるのは嫌です！——でも！ 殺されてしまうのは……もつと……嫌……」

涙で視界が揺らぐ中、アデラは怒鳴るように自分の気持ちを吐き出す。

「ロジオン様は、それで良いのですか？！ コンラート師だつて、きっと知っていたから、知っていたのでしょう？ 貴方がマルティンの生まれ変わりだと！ だから貴方を利用しようとしたのでは——」

「アデラ……！」

ロジオンの鋭い制止の声にもアデラは止めなかった。

「ロジオン様はロジオン様なのに！ 誰でもない！ そんな運命なんて悲し過ぎます！」

「……悲しいなんて……思っていない」

ロジオンの静かな声が、アデラの耳に届く。

アデラはゆっくりと顔を上げ、主を窺った。

「……ロジオン様？」

隣に座っていたはずの彼が、真正面に自分の顔を覗きこむように屈んでいる。

手はアデラの顔のすぐ横の背もたれの縁を掴み、片膝だけを椅子に乗せていた。

主の瞳は、怒気も哀傷も何も無かった。波さえ立たない静かな湖畔を見ているようだ。

アデラは主の顔がすぐ側にある驚きより、妙な落ち着きを見せている方が不思議でまた、怖かった。

ロジオンは、落ち着いた口調で眈々と話し出す。

「師匠が僕が何者か知っていたのだらう……と言つのは、今になって分かる……。だけど僕を利用しようとしたかどうかは……師匠の心の中でしか分からない。でも……邪な心だけじゃ無かったと……」

ずっと一緒にいた僕が、一番良く分かっている」

「ロジオン様……」

——すみません

主の師匠に酷い言葉を投げつけてしまった——落ち着きを取り戻したアデラは、心から詫びを入れた。

ロジオンは微笑むと、涙で濡れたアデラの頬を拭ってやりながら話を続けた。

「憶測だけだね……僕はドレイクに殺されることはない……」と思ってる。例えば、イル・マギアを思い出すことはなくても……」

「——え？」

「今までと違うんだ——魂が。融合をした……マルティンのと……何時、どこで、どうやって……かは知らないけれど」

そう言いながらロジオンは、片手を自分の胸に当て、目を瞑った。

「……でも、思い出さないと……」

アデラの緑の瞳が再び揺らぐ。

「記憶が甦ってくれた方が良いのは……当然だよ。世界の為にも、イズルテ様の為にも……僕ら、魔力を扱える者達は元から、この世界の住人だった……。それらの人々から見れば、魔力の無い人々は……異世界から厄災を持ってきた忌むべき者なのに……何も知らずに平穩に暮らしている……それも勝手じゃない？」

「……ああ……」

アデラは両手で顔を塞いだ。

——そうだ。

そもそも、異世界の『核兵器』と言うのが原因だ。

魔力を持たない私達の先祖の——

その犠牲になっていたのは、魔力を持つ者達。

今は絶滅した種族、生物。

イズルテやドレイクを『勝手』などと、どの口が言うのか――。

「……勝手なのは、私達……真実を知って、必死に守っているのに……」

「君を責めたつもりはなかったんだけど……ごめん」

ロジオンの手が、アデラの形良い頭を撫でる。

パチン、と音がし、アデラの髪留めが外された。絹糸のような金髪が音もなく下りる。

ロジオンは、そのままアデラの頭を胸に抱き寄せた。

「このことを知っているのは……魔導術統率協会にいる極一部の魔導師と……各大国の支配者に司教くらいだと思う。……もう、それだけ……古の事実だから、魔力の持たない者達が知らないのは……仕方ない」

短い命の中で、懸命に生きていかなくてはならない。

果てない位に長い時を生きる者達のように、遠い未来さきを見る余裕など無いだろう。

繰り返す生死の舞台を見続け、新しい喜びと悲しみを積み重ね、過去を、過ちを、幸せの中で拒絶し、語り継ぐこと無く封印した。

――直視できない弱き者達を、どうして責めることができよう――

ロジオンの心が、そう語りかけてくる。

アデラも

魔力を持たない、短い命の弱き者――。

諦めなくては……いけないの……？

彼女は、どんな意味であれ僕を愛していてくれている。

僕も、彼女に近づく異性に嫉妬を感じている。

そして、彼女に何処か依存している。

混乱した意識の中で、アデラに助けを求めた。

アデラは躊躇いも無く僕の手を握り、抱きしめた。

あの、強烈な程の清廉な緑色の瞳には迷いなど全く無くて――

「……」

重くなる。きつと。

僕にも

彼女にも

想うあまり身動きが取れなくなる。

――なら、早いうちが良い。

彼女のすべらかな髪に頬を当てる。

「イル・マギアを思い出さなくても……僕が絶頂期を迎えて成長が止まったら……その時……マルティンの魔力と相応なら……」

マルティンが自ら造りあげた『魂』と、輪廻の中で触れて、より完璧に造りあげた『僕』が融合したから――

「二人分の……マルティンの魔力を持っている可能性もある……古は、マルティンとイゾルテ様の二人で歪みを押さえていた……今は、一人分を巨大魔法陣で補っている……。その必要が無くなるって言うこと……」

ビクッ、と抱き寄せたアデラの頭が不自然に動いた。
構わず、ロジオンは喋る。

「僕が次世代の魔承師になるのも……方法の一つ……」

67 我尽（2）

イゾルテ様もドレイクも、最初はそのつもりだったんだろう。

イル・マギアの記憶を甦らせた者に魔承師の席を譲る。

魔承師は元々、マルティンこそその名に相応しかった。

イゾルテ様は、それまでの臨時で継いでいた。

あの方は、優しすぎる。

そして弱い。

力がある分、不均等が目につく。

「多少……視間違えはあった……だけど、僕がマルティンの魂を受け継いでいるのは……違う——どうなるか、なんて、ずっと先だけど……」

抱えていたアデラの頭から腕を離し、彼女を見据えた。

じっと自分を見つめるアデラをロジオンも見つめ返す。

瞳を潤ませ、黙ってこちらを見続けるアデラが艶やかで、ロジオンは急に戸惑いを感じた。

「まだまだ、ずっと先だよ？ それに……イゾルテ様が隠している

何か」も分からないし……」

自分自身にも語りかけるよう、アデラを慰める。

アデラの口が開く。

「良いでしょうか……？」

「……え？」

アデラの手が真っ直ぐに伸び、ロジオンの両手を包んだ。

「身勝手な只人の私が、ロジオン様をお守りするだなんて……身の

程知らずだと……つくづく思い知らされました……。でも、私は貴方にお仕えしたい、側にいたいのです」

「……アデラ」

「貴方が貴方らしく生きて、共に歩いていける友が出来て……それまで」

「……」

「私の意思を尊重してくださるなら、今ここで再び忠誠の誓いをさせてください」

*

ロジオンはこちらを窺うように見上げる彼女を見つめた。

口はきつく結ばれ、強固な意思を示しているのに、反対に彼女の性格を表しているような、いつもの瞳の輝きは薄れていた。

眉を下げ、何か切望している表情に見れる。

「……早急に決めることはない……」

「今、誓いを立てたいのです」

ロジオンの台詞にアデラは首を振る。

やれやれ——と、ロジオンは息を付いた。

苦笑混じりの溜め息は、強張って怒っていた肩を下げる。

アデラに手を握られたまま、ロジオンは口を開いた。

「確かに……僕が話したことは先のこと……。憶測だから、どうなるか分からない。性急にどうしようとか……決めなくても良いかな……」

だから——と続ける。

「アデラ……君も、この休み中に考えて決めて……例えば、側から離れても、宮廷の中で顔を会わす機会もある」

アデラの瞳が揺らぐ。

ロジオンの手を包む彼女の手が強くなり、無言のまま俯いた。
「嫌です」

はつきりそう言う。

小さな子供が、自分の我儘を通す為に拗ねている——そんな仕草に見えた。

休暇の後、主の側にいらなくなる——。

アデラはそう感じていた。

彼は、きつとそうする。

親や兄弟から一線を引いたように。

穏やかで呑気な様子で何も考えていないように見せて。

遠ざけるつもりなんだ——。

「何があっても手放す気はない、とおっしゃいました。嘘だとおっしゃるんですか？ 男なら男らしく貫き通してください」

「しょうがないなあ……」

ほとほと呆れたような口調にアデラは顔を上げ、ロジオンを見た。口角を上げ、笑顔で自分を見ている。

「——確かに、言ったよね……。あの時はこんな状況になるとは……思い付かなかった。状況が変われば考えも変わるんだけど……忠誠心バリバリの……騎士精神のアデラには無理な話だね」

「頑固ですから」

小馬鹿にされたようで、むっとしながら言い返す。

「いいよ」

徐に言った主をアデラはじっと見つめた。

ロジオンは繰り返した。

「いいよ……忠誠を……」

諦めたような表情のロジオンと反対に、アデラの表情は嬉しさに溢れていた。

「ただし……」

ロジオンはそう言うと、アデラの肩を押し背もたれに付けた。そのまま背もたれの縁に手を掛け、アデラを上から見据える形を取る。

「手に口付けじゃなく……唇に誓ってよ……」

ロジオンの口角は上がり、目を面白そうに細める。

一瞬呆けたアデラだったが、意図が分かりあつという間に顔が赤くなった。

「そ……そそそんな忠誠の誓いなぞ聞いたことありません！」

「もっと西の方では有りだけど……？」

しらつと答えるロジオン。

「エエエルズバーグ式でお願いします！」

「形にこだわる必要なんて……ないじゃない？」

「いやいやいや！ 拘らせてください！」

「——じゃあ、忠誠なんて……形に拘るの止めよう？」

「……うっ」

すぐ近くにある主の顔が凝視できなく、アデラは視線を反らす。確かに最悪、形に拘らないでロジオンが嫌がろうとなんだらうとくつつき回れば良いのだろうか。

——長女気質と言うのか、何事も形式に乗っ取ってやらなければ気が済まないアデラの性格上、それは無理な行いだ。

「……りました」

「えっ？ 聞こえない」

ニヤニヤしながら尋ねてくる主にムカつきながら

「分かりました！ します！ すればいいんですね！」

と拗ねるように答えた。

——じゃあ、と主の顔がグッと近くなる。

睫毛濃いなあ、とふっと思っていたら

「目……閉じて」

と囁かれた。

——忠誠の誓いに、お互い瞳を閉じては確認できないのに——

アデラはどうにも納得できずにいた。

「あの……唇に忠誠の誓いを立てると言うのは、手の甲とはどこか違うのでしょうか？」

後少しで唇に触れ合う時に尋ねられたロジオンは、少し戸惑いながら答える。

「手の甲より、より密着出来る——そう、親近感が出て……絆が深くなる……ね」

目、閉じて——主に少々きつく言われ、ぎゅっと目を瞑る。

でも、とまた疑問が起き、ギリギリ唇が触れる前尋ねた。

「主に忠誠を誓う儀式であるなら、ロジオン様からでなく私からではないと、主従が逆ではありませんか？」

ふかーい溜め息が、ロジオンの口から漏れた。

「……往生際が悪すぎ」

「——ん」

ぽそりと呟かれた後、否応無しに唇が合わさった。
啄むように何度か重ねる。

主の、自分より薄めの唇の感触を感じる余裕が出来た頃、深い重なりが始まった。

突如、啞内の中に生暖かいもの入ってきて、それが何か分かった
アデラは慌てて主を押し戻そうとした。

——だが、簡単に引き剥がせそうなものの、根を生やした大木のように離れない。

「ん、ん、んんー！！」

唇の向きを変える為にずらした間に、アデラは必死に抵抗する。

「——これ、ちが……！！ うっん！」

流石に忠誠の誓いとは違う、騙されたと鈍いアデラだとて分かった。

いつもと違う主の強引さと力強さに、アデラは頭の中が真っ白になり、ただ何の術も持たない乙女のように肩を押し戻す。

だがそれも、ぼんやりとした思考と共に抵抗がなくなり、この、
年下の主人の口づけにされるがままになっていた。

生々しい口の中の感触に、ただぼんやりとして、小刻みに動く主の唇の動きによろやく気付いた頃には……。

*

目を開けると、見慣れた天井がアデラの視界を覆う。

「……」

ゆっくり起き上がり、周囲を見渡せば、そこは実家の自室だった。

「……ああ」

寝台から出て、自分の服装を見る。

ボレロと靴は脱いでいるが、あとはそのままだ。

窓の外を覗いてみれば、星が瞬いている。

——夜？

訳が分からずに、素足のまま部屋から出て階段を降り、台所へ向かった。

台所では、スープの匂いがし、母の得意料理の一つの豆のシチュ―だと分かった。

「あら、起きたの？」

出入り口でぼんやりと立っている娘に、母のジャンナはスープをかき混ぜていた手を止めて近付く。

アデラの額に手を当てながら

「熱はないようね。やっぱり王子の言う通り疲れていたのかしらねえ」

と言った。

「——ロジオン様が？ 来たの？ と言うか、何で私家にいるの？」

「あんた……全く覚えてないの？」

頷く娘にジャンナは呆れ顔で「座っていなさい」と言いながら台所に戻った。

埋め込み式のオーブンの蓋を開けると、焼きたてのミートパイの香ばしい匂いが食卓まで漂ってきた。

「昼にあんたをおんぶして送ってきてくれたんだよ。『気分が優れないようなのに、途中で街に寄りたいなんて我儘を言って振り回してしまった』——て、申し訳なさそうな顔して。申し訳ないのはこちらの方なのに……」

「……覚えてない、全く」

アデラは、覇気の無い様子で、いつもの自分の席に座った。

「『休みは三日と言ったけど、体調が戻るまで休むように』と言い

つかってるよ」

「うゝん……」

アデラはのろのろと返事をする、食卓に突っ伏した。

「……アデラ、部屋に戻って横になってなさい。食事は持っていて上げるから」

やはり、通常の状態ではない娘にジャンナは心配になり、居間にいるアデラの父のヤナムを呼んだ。

のそのそとヤナムが入ってきて、その後ろからアデラの弟のト二ノが付いてきた。

「姉ちゃんが珍しい！」

「腹空かせて夕飯には起きてきたのは当たり前だな」

男二人の呑気なやりとりに、ジャンナは

「薬師か医師を呼んできて頂戴！」

と厳しく叱る。

「お母さん、いい。大丈夫だから……後でサンザシ酒頂戴……」

と、ゆっくりと起き上がり、緩慢な動作で階段を上がるアデラを見送る家族三人。

アデラの部屋の扉が閉まる音を確認すると、三人顔を見合わせた。

「……宮廷勤めが辛いのかしらねえ」

「だが、今まではこんなこと無かっただろう？」

「——ほら、アデラがお付きとして就いている王子よ。クセの強いお方だって噂よ？」

「今日、姉ちゃんを送ってきてくれた人だろ？　銀髪以外普通だったけど？」

あっち行ってなさい、と手で追い払われ、ぶすりとしたまま居間に戻っていくト二ノを尻目に、父と母は擦り付ける程顔を近付け話す。

「魔法使い……なんだよな？　まあ、でも、大概は世間ずれしてる

よ、ああいう職人は」

「だけど……今日のあの子の服装見た？」

「ああ！ やっぱ美人だよ、流石俺の娘だ！」

——そう言う意味じゃない！と、ジャンナはお玉でヤナムの尻を叩く。

叩かれた部分を擦るヤナムにジャンナは、同性同士の鋭い指摘をした。

「いつものあの子なら、あんな格好しないはず。うちにいる時は、レギンスかパンツでしょ？ しかも、花柄なんて小さい時以来だわ」
「だから、それが何なんだ？」

鈍いわね〜とジャンナは、思いつき溜め息をつく。

「あの服装、思うにロジオン王子の趣味にかなう格好なのよ。五番目だと言え王子だよ？ その王子が、自分の好みの服を買って、アデラに着させて街で振り回していたの！」

「うん、それで？」

丸つきり分かっていないヤナムに、妻と言う前に女として苛立っている中

「普通の男だったら、下心なきや買わないよなあ」

と、居間でト二ノがぼそりと呟いた。

67 我尽（2）（後書き）

サンザシは気付けの効能があるそうです。

68 放棄

宮廷に戻ったその日は、父と兄との面会は叶わなかった。

（じゃあ、朝かな……）

宮廷にいる間ロジオンは、朝食は母である第二王妃と共に同母兄弟達と取ることになっていた。

そこに一日おきに父である陛下が、一緒に朝食を取るのだ。明日は、自分達と食べる番だ。

気合いを入れて早起きし朝食を取る小居間に行ってみれば、今朝は早くから会議が入り一緒には取れないとのことだった。

溜息混じりにハムをつつく。

「ロジオン、聞いていて？」

「……え？」

第二王妃である母に話しかけられていたのに、気付かなかったらしい。

「すみません。考え事をしていました」

しょうがないわねえ、と言う風に肩を揺らす自分の母にロジオンは視線を移した。

「今日は昼までリーリアと二人で、ダンスとピアノの稽古をなさいね」

「母上……ちょっと待ってください。ダンスとピアノ？」

「聖燭の月の終わりから初雪の月の初めまで、十日程祝祭があるでしょう？ その時に二日ほど夜を徹しての舞踏会があるのは知ってるわね？」

「……はい」

この時点の段階でロジオンとリーリアは、二人して肩を落としてフォークを置いた。

もう、話の先は分かっている。

その二日間と言うのは、エルズバーク内の数ある有力者達や、各国の代表達が新年の挨拶にやってくる日だ。

有力者達は、独身のまだ結婚先の決まっていない息子や娘を連れてやってくる。

何せ、四大祭の中で最も大きな祭りで、春の復活祭や秋の感謝祭のように区域ごとに分かれて行わない。

数多くの有力者達が集う日は、結婚相手を見つける絶好の機会なのだ。

各自でいちいち見合いの場を設ける必要も少なくなるし、行き帰りの交通費だけ負担すれば滞在費全ては王家が持つ。

より豊かで有力で、出来れば美男美女の結婚相手が欲しい。

自分達が見合いの席の駒だと簡単に想像できた。

——華やかな中で、熾烈な争奪戦の中に放り込まれるのか……。

「今から特訓を？　まだ先の話ですよ？」

「それに私より先に、ユリオン兄様が先じゃない!？」

「ユリオンは、そう言うことには長けているから良いのよ」

ユリオンは新しい詩を思い付いたのか、パンを片手に執筆して聞いていない。

「……まあ、ユリオンは今回は保留として。問題はあなた達。リアは馬術や剣術に夢中で、淑女としての勉強は怠っているし、ロジオンは流石に話上手ですけど、上流社会の趣味は持ち合わせていないでしょう？　楽器の一つ位は出来るようにしないと」

「オカリナは吹けますよ……後、草笛と口笛」

「お兄様、口笛って？」

一番下のイレインが尋ねてきたので、ロジオンはその場ですぐに吹いて見せる。

ピーッ

と高い音が口から鳴り、イレインとアラベラは大喜びだ。

「ロジオン兄様すごーい！」

「もつとやって下さい」

調子に乗ってリズムを付けて口を鳴らしていたら

「お黙んなさい。まだ話は途中です」

と母王妃からお叱りを受けてしまった。

「王子や王女達を束縛せずに好きなことをやらせて、その道に進ませると言うのが家訓のようなものですが、今までの王子や王女達は自分達の役割はきちんとこなしながら、自分の好きな道に進んでいたのだから——母の言っていることが分かりますね？」

「……はい」

ロジオンとリーリア二人、神妙な態度で返事をした。

「あ、それからロジオン」

「なんでしよう？」

「陛下が昼過ぎなら、お前との時間が取れるそうですよ。昼食の後はお部屋にいなさい、秘書が迎えに来るそうですから」

「はい！」

今度のロジオンの返事は明瞭爽快なものだった。

吹くのが得意らしいと感じた母妃は、ロジオンにピアノではなくフルートの稽古に変更させた。

それから渋々ながら妹・リーリアとダンスの稽古を済ますと、簡単な昼食を取る。

丁度食べ終わる頃に迎えに来た司書と護衛と共に、父陛下の待つ執務室へと向かった。

司書に続いて中へ入ると、以外な人物がいてロジオンは凝視した。ディリオン殿下と補佐役のアリオンがいるのは分かる。長椅子に座り、優雅に微笑んでいる母妃がそこにいた。

こちらが何を言おうとしているのか見当が付いている配軍だ。

四対一

説得する気満々のロジオン劣勢の配置。

だけど話さなくてはならないし、理解してもらはないといけない。これはこの国の先行きにかかることなのだから。

ロジオンは一つ深い呼吸をすると、自分を待つ者達の元へ歩いていった。

*

父陛下は正面の一際広い執務机に両肘をかけ、手を合わせロジオンを見つめていた。

相変わらず穏やかな好好爺の風情だ。

息子から申し出た相談事が嬉しいのか、ニコニコと笑みを絶やさない。

反対に両脇を占める二人の異母兄は、厳格な様子で異母弟を見つめていた。

ロジオンが執務機のすぐ前で止まると、父陛下は口を開いた。

「待たせたね、ロジオン。やきもきしたろう？」

「父上はご政務で忙しいのは存じていますから……」

うん、と父陛下は一つ頷き、ロジオンに尋ねる。

「それを知っていても、私に相談したいことがあるということは、とても重大な内容なのだね？」

「はい」

「言いなさい。その助けになる知恵を貸してくれるかも知れぬ者をここに呼んだのだ」

(と、言うか……反対されて説得に回るような気が……)

とは言え、こうまで言われ「人払いを」なんて願えでない。

ロジオンは一斉非難の嵐を覚悟に口を開いた。

「廃嫡をお願いしたく参りました」

*

長い沈黙が起きた。

四人の反応は落ち着いて静かなところを見るに、想定内のものだったのだろう。

最初に口を開いたのはデイリオンだった。

「分かって言っているんだろうね？」

「はい」

アリオンが念を押すように尋ねた。

「廃太子なんだぞ？ 王子としての権利どころか領地も離れも、宮廷にあるお前の私物も没収だし、イエレⅡエクロースⅡエルズバークも名乗ることは許されん。それどころか、父と母と呼ぶことも否、兄弟とも今までのように接することは出来なくなるんだぞ？」

「承知しています」

親不孝者が！——ディリオンが顔を歪ませ吐き捨てるような表情が分かっていても、ロジオンの胸に突き刺さる。

母の方に視線を移せなかった。

異母兄さえこうなのだ。目を合わせたらどんな言葉を吐きつかれるか、どんな顔で見つめられるか分かっている——決意が揺らいでしまう。

黙って聞いていた父陛下が、静かな口調でロジオンに問う。

「一般のエルズバークの民になったとしよう。——お前はどのような気なのだね？」

「魔導術統率協会に行くか……民に混じって生活します。まあ……

宮廷の魔法管轄処に席を置かせて貰えれば幸いです」

父陛下とディリオン、アリオンの視線が絡む。

そのまま、三人の視線は母妃に向けられた。

それが合図のように——。

「なりません、ロジオン」

母妃の厳しい口調が凜と執務室に響いた。

「母上……」

厳しい口調と同じく、厳しい眼差しの母妃にロジオンは向かい合う。

反対されるのは想定済み——だが、泣かれると思っていたのにそうではなかったのは、ロジオンには以外であった。

たおやかな風情が一変して、立ち上がり王妃としての風格を見せ

る。

「貴方はエクロースの領地を継がなければなりません」

『エクロース領』

エルズバーグの北よりに位置する、ロジオンが生誕した時に受け継いだ領地である。

それは

ロジオンⅡイエレⅡエクロースⅡエルズバーグ。

エクロース領とイエレ領を継ぐエルズバーグ王の子のロジオン、
と言っ意味である。

エクロースは母の故郷である。

『白種族』または『青銀種族』と呼ばれ、全体的に色素の薄い一族で——閉鎖的な領地のせい、血族婚を繰り返してきた結果だとも言われている。

特にエクロースは、同じエルズバーグの人間でもなかなか受け入れようとしなかった。

結果

人口の減少に歯止めが掛からず、区内の経済状況が悪化の一途を辿った。

エクロースがそこまで閉鎖的であったのは、理由があった。

そこがエクロースだけでなく、エルズバーグにとっても——いや、世界にとっても重大な場所の一つだからだ。

このままでは寂れるどころではなく——領主は重い腰を上げた。

他の領地から人を受け入れ、開かれた領地とする。

その策の一つが

エルズバーグ国王陛下に、自分の娘を嫁入りさせることであつた。これはエクロースにとって、過去の辛酸と屈辱を思い浮かべることであつた。

——何故なら

エルズバーグは、元はエクロースが支配していた国だからだ。戦で入れ替わり又は滅んでいく多くの国々の歴史が、ここまで頑なにエクロースを閉鎖的にさせたのだ。

しかし己らの矜持より古からの使命を優先し、恥を忍んで当時のエルズバーグ国王——ロジオンの父に相談を持ちかけたのだつた。

エクロースの領地の重大性を歴代の王達は知っていた。故に吸収してもなお、その領地は弄らずにいたのだ。

父陛下はエクロースの領主である母妃の父の勇気ある行動を称え、領地の発展に協力を惜しまないこと。

娘を大切にすることを約束し、第二王妃として迎えたのだ。

そしてロジオンが生誕時に、エクロースと隣のイエレを継ぐ事を約束された。

「何の為にに私が、親ほども違う陛下の元に嫁いだと思っているのです？ 全てはエクロース——いえ、エルズバーグや世界の為です」

「母上……」

「まだうら若き、まさしくオルヒデーヤ（蘭）と言う名に恥じない美しさと言われた私が、親父と結婚しなきゃいけなかったのか——貴方は考えたことがあつたのですか？」

「……母上」

「妃よ……」

父陛下の眉尻が淋しそうに下がった。

自分の失言に母妃は、こほん、と一つ咳払いをし

「まあ……自分の運命を呪いながら陛下の元へ行きましたが……思いの外、陛下は若々しく洗練されていて、マメで大変優しい方だったし、第一王妃様も気さくな方で、私を妹のように接してくださいました。今では陛下の側にいることが私の幸せですから」と頬を染めながらのろけた。

「妃よ……」

父陛下が涙ぐみ、母妃は染まった頬を冷ますかのように自分の甲を当てる。

——のろけ、ごちそうさまでした——

三人の息子は同時、頭の中でそう感想を吐き出した。

こほん、と母妃はまた一つ咳払い、話を戻す。

「——そう、それをあのコンラートとか言う、ちょっとばかり顔が良い魔導師がお前を連れ去って、ようやく帰ってきたかと思えば、今度は王子を辞めます？——我儘も大概になさい！」

ビシリ、とたたんだ扇をロジオンに向け怒りを露にした。

それに対してロジオンは「んー」と気難しそうな声を上げ、頭の後ろを搔く。

「それって……ユリオンが継げば良い話では……？」

「お前でなくては駄目なのです」

「それは、何故ですか？」

母妃とディリオン、アリオンは一斉に父陛下に視線を向けた。

父もロジオンの問いに驚いたようで、目を瞬く。

「ロジオン、お前はまだ魔導術統率協会から話を聞いていないのかね？」

「……何の話です？」

ロジオンの眉尻が怪訝そうに上がった。

イゾルテの話から恐らく各国の統一者には話が伝わっていて、機密となっているのは当然の事。

そして、母妃の話からするにエクロースにそれに関する重大な物があつて——その為にいずれ自分が行かなければならないことは分かった。

「どこまで聞いておる？」

父陛下に尋ねられ、ロジオンは大まかに話した。

自分の魂うんねんはややくしくなるし、直接関係がなさそうなので省いて。

「そうか……エルズバークエルズバークに関しては詳しく話していないか」

父陛下は隣にいるアリオンに「あれを」と告げた。

立ち上がり、アリオンは壁掛けの絵画を外し、そこに出現した引き戸を鍵で開ける。

その奥にはレバーが設置されており、それを下げた。

突然、音も無く父陛下の後ろを覆っていた本棚が動き出し、ロジオンは目を見張った。

滑るように脇の壁に入っていく。

完全に壁に入った時に、ガタンと言う音をたて止まった。

「——凄いな……これ！　ありがちな地響きもなかったし……入った後も、こんなに綺麗だ。どんな造りにしてるんです！」

「変なところでツボるな」

速攻に近付き興奮して弄くるロジオンを、アリオンは襟首を引っ

張り壁に現れた地図を見せた。

「これが何処の地図か分かるかね？」

「エルズバーグです」

ロジオンの答えに、うん、と父陛下が頷く。

「お前だとて、自分が受け継ぐ領地が何処なのか分かるであろう？」

「ここ……ですね」

地名や各主要拠点を書いてある地図で、エクロースにはすぐ目がいくようにか赤い字で記され、しかも特に重要な場所として宮廷の場所のように、赤い二重枠で囲われている場所がある。

「……ここは？」

「縮尺を上げるぞ」

ディリオンが地図に触れ、中央に動かすとエルズバーグだけでなく、もっと広大な地図展開となった。

大きな五つの角の星の展開の一つの角の頂点。
意味が分かり、ロジオンの眼差しが変わった。

「巨大魔法陣を形成するために必要な角の一つが……エクロースの領地内にあるんですね」

68 放棄（後書き）

後、2〜3話で二章が終わります。終わりに次第題名が変わりますのでよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5103n/>

The prince is a wizard

2011年11月6日15時38分発行